



Title	小規模の部活動における活動形成の論理：北海道の高校サッカー部での参与観察をもとに
Author(s)	魚住, 智広
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13974号
Issue Date	2020-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13974
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94669
Type	doctoral thesis
File Information	Tomohiro_Uozumi.pdf



博士学位論文

小規模の部活動における活動形成の論理
—北海道の高校サッカー部での参与観察をもとに—

2019 年度

北海道大学大学院教育学院 博士後期課程

08165002

魚住智広

目次

序章 作るものとしての部活動	1
第1節 本研究の目的	1
第2節 研究背景と問い	3
第3節 本研究の意義	5
第4節 本稿の構成	8
第1章 研究方法	12
第1節 先行研究の検討	12
第1項 部活動研究の動向	12
第2項 部活動の規模に関する研究	17
第3項 部活動研究の近年の潮流	19
第4項 本稿の視角	22
第2節 調査方法	25
第3節 調査対象	26
第1項 A 高校および周辺地区について	26
第2項 A 高校の部活動について	29
第3項 サッカー部の概要	30
第2章 部活動で獲得しうるスポーツの機会	37
第1節 高校生にとってのサッカー部	37
第2節 機会保障という観点	40
第3節 練習メニューの規定化	41
第4節 対外試合の参加をめぐる現状	48
第1項 北海道の高校サッカー界の構造	50
第2項 乗り越えなくてはならない参加条件	56
第3項 参加障壁の複合による非線形的な負担の増幅	61
第4項 対外試合のとある1日	72

第3章 生徒たちの活動形成	81
第1節 活動形成の概況	81
第2節 生徒の分極化	86
第3節 廃部がつきまとう運営	89
第4節 生徒たちの折り合い	94
 第4章 共に活動する	 108
第1節 ダブルスタンダード	108
第2節 混在を前提とした活動	111
第3節 混在のなかにある線引き	118
第4節 「同じ高校生だろ」	122
 第5章 生徒たちの活動形成が意味するもの	 134
第1節 競争の場／居場所としての部活動	134
第2節 2つの予測不可能性	138
第3節 プレイの論理	141
 終章 「活動」から部活動を考える	 153
第1節 事例から明らかになったこと	153
第2節 今後の展望と課題	155
 付表	 164
図表一覧	168
文献	170
初出一覧	182

序章 作るものとしての部活動

第1節 本研究の目的

今日、少子社会に突入した先進諸国は、少子化が比較的緩やかな緩少子化国と、状況が深刻な超少子化国に分けられ、日本は後者に属している（阿藤, 2017）。少子化の指標として主に用いられる合計特殊出生率を見ると、緩少子化国に含まれるフランスやスウェーデン、アメリカ、イギリスなどは 1.7 を超えているが（内閣府, 2019）、超少子化国の日本は 1.42 という低い数値となっている（厚生労働省, 2018: 4）。

都道府県別に合計特殊出生率を見ると、北海道は 1.27 であり、全国平均をさらに大きく下回っている。この数値は、東京都の 1.20 に次いで全国で下から 2 番目に低い（厚生労働省, 2018: 12）。この少子化に対応するため、たとえば文部科学省は 2015 年度から「少子化・人口減少社会に対応した活力ある学校教育推進事業」を開始した（文部科学省, 2019）。この事業では、小規模校の教育活動の高度化に関する取り組みを例示しているが、結局のところ教育現場の創意工夫に頼っているのが現状である。

本研究は、北海道の高校サッカー部での参与観察をもとに、小規模の部活動における生徒たちの活動形成について論じるものである。生徒数が大幅に減少し、将来的に小規模の部活動が増えていくと予想されるなかで、高校生が加入する部活動はどのような問題を抱えているのか、またそこで生徒たちはどのように活動していくのかについて約 3 年間にわたる調査より記述する。

本稿にて活動形成とは、練習や対外試合、ミーティングなど、部活動での日々の活動を参加者が形成すること、またはその過程を指す。なお、ここで形成と表現したのは、生徒たちにとって、小規模の部活動における活動が、何者かによって与えられるものではなく、自らの手で常に形成しつづけなくてはならないものだからである。

筆者が調査した高校サッカー部は、決して強豪とは言えず、大会での 1 回戦の突破が現実的な目標となるチームである。日々の活動に出席する部員数は 20 人を超えず、10 人を下回ることも珍しくない。所属する生徒たちの競技歴もさまざまであり、小学生の頃にサッカーを始めた者もいれば、高校入学と同時にサッカーを始めた者もいる。学校で授業を受けたのち、プレハブ小屋の部室でジャージに着替え、野球部と合同で使用する土のグラウンドでサッカーをして、友だちと共に下校しながら、たまにコンビニエンスストアやラ

一メン屋に寄り道をする。こうした生徒たちの何気ない日常が刻み込まれる部活動が本稿の舞台である。

本稿では調査対象として生徒たちに注目する。その理由は、上記のような部活動がいま存続の危機にあり、生徒たちが中心となる活動が求められているからである。北海道は2000年以降、もっとも急速に高校が減少、縮小化している都道府県の一つである（篠原, 2018）。この傾向は部活動にも大きな影響を与えていると考えられる¹⁾。だが学校や教員にとって、課外活動である部活動は、あらゆる手を尽くしてまで存続させるべきものとは限らない。つまり、部活動の存廃が問われるとき、チームを維持したり、日々の活動を形成したりする主体として、生徒たちが担がれる可能性がある。

このような部活動における生徒たちの活動形成について、本稿では2つの目的から論じたい。第一に、生徒たちが小規模の部活動で獲得しうるスポーツの機会の現状について把握する。これまで、小さな部活動に所属する生徒がマスメディアなどに報じられるとき、その多くは、環境の乏しさや部員不足を乗り越えてスポーツに取り組む若者というストーリーに回収されてきた²⁾。そのため、その悲劇性ばかりにスポットライトが当たり、彼らがどのようなスポーツの機会を得ることができるのか、あるいはスポーツの機会を得るためにどのような障壁を乗り越えなくてはならないのかは不透明なままである。本稿では、部活動の重要な意義の一つとされる「機会保障」の観点から³⁾、放課後の活動や対外試合の成り立ちを描き出す。

第二に、小規模の部活動であるがゆえに生じる問題を背負った生徒たちの活動形成について解明する。生徒たちが所属する部活動の様相は、彼らが生活する地域や学校に大きく依拠している。そのため、生徒たちが活動を形成するなかで向き合わなくてはならない諸問題は、規模的にも制度的にも根深いものであることが予想され、彼らがこれらを必ずしも解決できるとは限らない。本稿では、生徒たちが目前に発生しつつける問題とどのように付き合いながら活動を形成しているのか、その処理法について論じていく。

これらの目的を通じて本稿が最終的に意識するのは、本研究が取り上げるサッカー部を部活動の行く末として位置づけることである。ある調査では、すでに多くの教員が部員数の不足を実感しているという結果が示されている⁴⁾（西島, 2015）。また、生徒数が減少しても、伝統やニーズのある部活動を廃部にできず、結果として各部の部員数が少なくなる可能性も示唆されている（西島, 2017: 29）。つまり、筆者が調査したような小規模の部活動は、決して特殊な事例ではなく、むしろ部活動の将来像として提示できる。

なお近年、先行研究にて部活動の現状と課題が論じられるとき、解決策として「総量規制」が提案されてきた⁵⁾ (内田, 2017: 212)。つまり、過熱した部活動に巻き込まれる関係者の負担を軽減するため、将来的に部活動の活動量を規制していくべきだ、という論調である。一方、小規模の部活動に対してこの議論はどうしてもうまく当てはまらない。生徒たちの活動は、過熱するどころか閑散としており、規制すべき活動が存在しないからである。よって、彼らのような存在を論じるためには、これまでの議論とは異なる方向性を示す必要がある。

したがって本稿では、「部活動をどのような空間にすべきか」という従来の枠組みから距離を置き、「部活動で生徒たちが実際に何をしているのか」について記述する。これはすなわち、生徒たちにとってもはや確実に得られるとは限らない部活動での活動について、その内実を改めて分析する試みである。そして最終的には、生徒たちがどのような論理にもとづいて活動を形成してきたのかについて論じたい。これは言い換えれば、若者の数が減り、部活動の小規模化が進む将来を見据えたとき、生徒たちが小規模の部活動にてどのような実践が可能なのかを示すことである。

第2節 研究背景と問い

調査を実施したのは北海道の公立 A 高等学校（以下、「A 高校」という）である。筆者は A 高校の卒業生ではなく、縁もゆかりもない立場であった。A 高校サッカー部に初めて関心を持ったのは 2013 年である。当時大学生だった筆者は、他の高校サッカー部でコーチを務めていた。ある日、筆者は試合会場で A 高校の生徒たちを目にして驚いた。彼らはサッカーに必要な 11 人の部員を集めることができず、9 人で大会に出場していたのである。もちろん、試合結果は A 高校の大敗だった。その光景を見た筆者は、彼らの日々の活動の詳細や、起こるであろう数々の問題、またそれらの解決方法などについて強い興味と関心を抱いた。そして同時に、ある一つの漠然とした疑問を持った。生徒たちはこの部活動のなかでどのように楽しみを見いだしているのだろうか。

その後、大学院に進学した筆者は、A 高校サッカー部、もしくは同じような規模の部活動で調査をしたいと考えるようになった。そこで 2014 年 9 月 28 日、とある試合会場を訪れた。そして A 高校の試合を見終えたのち、会場から帰宅しようとしていた顧問教員の B に声をかけた。いきなり呼び止めた筆者に B は丁寧に対応してくれた。このとき筆者は A

高校で調査をしたいという希望や研究関心を伝えることはできなかった。だが、A 高校に関心を抱いた理由や高校サッカー部でのコーチの経験、そしていつか練習を見学したいという意志などを伝え、名刺を渡した。

その後、A 高校を訪れたのは、およそ 3 ヶ月半が経過した 2015 年 1 月 10 日である。初めて B と会話をしてから月日が経過していたため、A 高校では調査をできないかもしれないと考えていた。だが B から、フットサルの練習試合があるという連絡を受け、1 月 10、11 日の 2 日間にわたって見学の許可をもらった。

この日、筆者が A 高校を訪れたのは実は初めてではなかった。筆者は北海道の高校でサッカー部に所属していたため、高校生の頃に練習試合で A 高校を訪れていた。最寄りの駅から高校までの距離が遠かったことや、体育館に暖房設備がなく巨大な扇風機のような灯油ヒーターを用いていたことを思い出し、またその光景がまったく変わっていないことに驚いた。

そして、さらに驚かされたいくつかの出来事が、本研究の方向性に大きな影響を与えることになる。まず、B から指定された集合時間に、誰ひとりとして生徒や教員がいなかった。見学者が来ることで、通常より「取り繕った」活動が展開されてもおかしくないとは思ったが、2 日間を通じてそうした様子がなかったことは筆者にとって幸運とも言えた。A 高校の生徒たちよりも先に練習試合の相手が到着していたため、当時関係者でなかった筆者は対応に慌てたのを覚えている。

結局、集合時間に駆け込むように A 高校の生徒が 3 人やってきた。その後、B が到着し、挨拶をしたあと、1 時間くらいをかけてぞろぞろと 5、6 人の生徒が集まってきた。集合時間の 1 時間後となれば、当然ながら練習試合はすでに開始している。遅れてやってきた生徒の 1 人は「11 時半にバス停に着くはずのバスが雪で遅れた」と B や他の生徒に説明していた。11 時半が集合時間だと聞いていた筆者は、バス停に 11 時半に着いても学校には間に合わないのではないかと思ったが、誰ひとりとして彼の弁明について詳しく指摘する者はいなかった。このような A 高校サッカー部に流れる時間感覚を筆者は持ち合わせておらず、よそ者である自分の立場を強く実感した。

また、この日の練習試合の相手が、中学生だったことも筆者を驚かせた。A 高校の生徒たちよりも早く到着していた対戦相手の彼らは中学生だったのである。高校生としてはずいぶん小柄だとは思ったが、そこで中学生だと気がつくことができなかったのは、高校生と中学生が練習試合を行う発想を筆者が持っていなかったからだろう。その後 A 高校サッ

カー部は、中学生や専門学校生、社会人など、あらゆる対戦相手を探しながら練習試合を行っていくことになる。筆者は中学生や高校生の頃、年齢やカテゴリーの異なる相手と試合で対戦した経験がほとんどなく、この部活動にて生徒が得るスポーツの機会は、自らが経験してきたものとは大きく様相が異なるのではないかと考えるようになった。

第3節 本研究の意義

こうした経験から、当該の部活動が持つ特有の背景を理解するためには、調査者である筆者自身が部活動の内部に入り込む必要があるように思われた。第1節でも述べたように、生徒たちがマスメディアなどに取り上げられるとき、いつも彼らは、逆境のなかで言い訳をせずにスポーツに取り組む若者として記される⁶⁾。しかし、この紋切り型の語り口は、その逆境が一体どのようなものなのかを隠すだけでなく、生徒たちを調査対象の枠から弾き出してしまう。彼らを表すこの定型的な像から脱するためには、その逆境に対して彼らと共闘し、その内実を明るみに出す必要があると考えた。また、筆者が中学校や高校、大学で所属していたサッカー部はいずれも部員が30人を超える規模の部活動であった。したがって、筆者が経験してきた部活動と彼らの部活動には大きな違いがあり、またそこで成立している型にも大きな違いがあるように思われた。

このA高校サッカー部の型が成立する要因を、生徒たちの志向性や文化という大きな言葉に措定してしまう可能性には十分に配慮しなければならなかった。たとえば、調査を重ねていくと、生徒たちの発言や行動には一貫性がなく、頻繁に矛盾が生じていることに気がつく⁷⁾。またときに彼らは、スポーツをするうえで一見すると不利な状況に向かうような言動を取っているようにも思える。生徒たちが部活動よりもアルバイトや「彼女」を優先する状況について、甲斐健人は「「やつら」の文化」と呼び（甲斐, 2000: 123）、「自らの生活における居場所としての序列の中で、その他の活動も切り捨てることなく」バランスを保ちながら活動をつづけるさまを描いている⁸⁾（甲斐, 2000: 125-126）。

しかし、上記のような概念に生徒たちの言動を押し込めることは、彼らが活動を形成する過程で培ってきた具体的な知恵を隠すことになってしまうのではないだろうか。またそれは、これまで議論されてこなかった「部活動で生徒たちが実際に何をしているのか」を改めて研究者の関心から遠ざけることに加担してしまうのではないだろうか。つまり本稿では、部活動での営為を生徒たちの志向性や文化として一枚岩に描くことは、彼らが形作

る部活動の動的なメカニズムを研究対象から排除することにつながってしまうと考えている。第1節でも述べたように、部活動の存廃が問われるとき、活動を形成する一番の担い手は生徒たちである。彼らは何らかの合理性に沿って彼らなりの型を成立させていくのであり、その過程に身を寄せつづけることをなしにして、実態を見誤ることだけは避けなければならない。

調査者として初めて A 高校を訪れて以降、筆者は定期的に B とコンタクトを取った。そして、2015 年 3 月 17 日、翌 4 月から 2 ヶ月間ほど練習を見学できることが決まった。2 ヶ月間と提案したのは筆者だった。まだこの時点では、長期的な参与観察の希望を伝えるには早すぎると感じていた。

見学を始めた当初、生徒たちは筆者のことを、ただ練習を見学しに来る「大学生」、もしくは「A 高校の卒業生」だと思っていたようである⁹⁾。そこから 2 ヶ月間、筆者は「大学生」として、グラウンドを毎日訪れ、とくにインタビューをすることもなく、ボール拾いをしたり、ウォーミングアップを手伝ったりした。徐々に生徒たちとたわいもない会話もできるようになった。とにかく、生徒たちや教員が、筆者がグラウンドにいることを「普通」だと思うまで、ただ毎日通いつづけることが重要だと考えていた。また B とコンタクトを取ることができるようになってから、公益財団法人日本サッカー協会（以下、「日本サッカー協会」という）公認の指導者資格も取得した。この資格もまた、筆者が彼らと共に在ることが「普通」となるために重要であった。

2015 年 5 月、筆者は B に指導者資格を取得した旨を話した。すると B から、筆者を指導者として正式に登録することが可能だと告げられた。ここから約 3 年間にわたり、筆者は A 高校でサッカー部のコーチを務めながら調査をすることになる。実際、サッカー部での筆者の立場は「コーチ」と言うには大げさであり、時期によってはかなりフレキシブルな存在であった。調査対象におけるこの筆者の立場については、第 1 章の第 2 節で詳しく述べる。

では、この長期間にわたる部活動への参与観察を通じて、本研究はどのような研究的意義を示せるだろうか。第一に、部活動の個別具体的な背景を踏まえて論じる重要性を示す。そもそも部活動研究は、対象となる生徒の性別、競技種目、学校や地域の固有性など、あらゆる側面を度外視し、部活動を一括りにして論じてきたきらいがある。一方、本研究では、ある 1 つの部活動のなかに入り込む手法を取る。これにより、本来であれば見過ごすことのできない部活動の規模や競技界の構造といった要因が生徒たちの活動に与える影響

を捉えることができる。

第二に、部活動が存在するプロセスに関して、関係者の有無や人数を「駒」やコストとして見る論法から脱却する。先行研究では、顧問教員の不在や異動によって部活動が廃止に追い込まれた事例が扱われてきた。たとえば中澤篤史の著書『運動部活動の戦後と現在—なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』の表 5-2 は、顧問教員の存在と部活動の存廃の関係性を捉えた顕著な例である（中澤, 2014: 230）。中澤はこの表が登場した章において、部活動の存廃をすべて顧問教員の異動を出発点に検討している。そして、顧問教員が異動せずとも廃部となった部活動（JRC（青少年赤十字）部や園芸部）について「廃止された理由は、他の部活動との間での顧問配置の問題であった」としている（中澤, 2014: 241）。しかし中澤は同時に、「これらの廃止された部活動は、活動が活発というわけではなかった」と記している（中澤, 2014: 241）。これは言い換えれば、当該の部活動では活動が活発でなかったがゆえに、顧問が他の部活動へと「スライド」し（中澤, 2014: 241）、廃部になったとも言えるのではないだろうか。だとすれば、顧問教員の異動や配置よりも先に、部活動での生徒たちの活動が活発であるか、あるいはどのように活動をしているのかが重要なポイントとなってくるのではないだろうか。

顧問教員の有無は、部活動の存続にとって必要条件ではあるが、十分条件であるとはいえない。たとえば A 高校サッカー部には 2 人の顧問教員がいたが、常に廃部の危機と隣り合わせだった。また事例を先取りすれば、サッカー部として運営することを諦め、体育館でフットサルのみをしている時期もあった。つまり、関係者を駒やコストとして捉える学校経営上の見方は、人々が対峙している部活動そのものに踏み込むことができずにいるため、部活動の「形式的な」存在条件しか捉えることができていない。本研究では、部活動の「実質的な」存在条件は予想を超えて複雑なはずであるという前提のもと、その条件を生徒たちの実践から明らかにする。

なお、小規模の部活動について調査するうえで、競技として高校サッカーが適当だと考える理由は以下の 3 つである。第一に、団体競技である。個人競技とは異なり、部の存続や活動の成立に一定程度の部員数が必要であり、それにとまなう不都合が存在することが予想される。第二に、中学生年代から高校生年代へ移行する際に競技人口が大きく減少している。2018 年のデータを見ると、全国の中学生年代の選手数は 236,524 人、高校生年代の選手数は 174,177 人であり、競技人口が 25%以上減少している¹⁰⁾（日本サッカー協会, 2019a）。このデータからも、高校生にとってサッカーを継続しない、もしくはできない何

らかの理由があることが推測される。第三に、日本サッカー協会や各地方のサッカー協会などの組織によって選手登録や対外試合が制度化され、管理されている。そのため、若者のサッカーに関する多くの情報について機関誌やウェブサイト上で閲覧、収集することができる。

第4節 本稿の構成

本稿の構成は以下の通りである。第1章では研究方法について述べる。まず、部活動研究の動向を参照し、さらに小規模の部活動を論じるうえで重要になる先行研究を概観する。とくに近年の部活動研究の問題意識を確認したあと、本稿が調査対象とするような生徒たちの活動が一貫して看過されてきた理由について、先行研究が解決すべき問題として捉えた事例が発生するフェーズをもとに説明する。さらに、本研究で用いられる調査方法と、調査の対象となる高校サッカー部について解説する。

第2章、第3章、第4章は事例の記述である。第2章では、本研究の第一の目的となる、生徒たちのスポーツの機会の現状の把握を目指す。とくに部活動の重要な意義の一つとされる機会保障の観点から、彼らがどのようにスポーツに触れ、その過程でどのような障壁に直面していたのかを示す。またこの章では、ミクロなフィールドの個別性だけでなく、日本の高校サッカーをめぐる構造についても詳しく述べていく。

第3章と第4章では、本研究の第二の目的である、生徒たちの活動形成の解明を行う。まず第3章では、部員数の少ない部活動であるがゆえの問題に対して、生徒たちが重ねてきた交渉の過程について記述する。一見、生徒たちは、上昇志向やまとまりのない集団として捉えられるかもしれない。だが、この部活動の実情を踏まえたとき、彼らが成立させようとした部内のルールは理にかなったものに見えてくる。

つぎに第4章では、小規模の部活動にて「共に活動する」とはどのようなことかについて、さらに細かい事例を取り上げながら記述したい。この章でもっとも述べなければならないこと、そして本稿を通じてもっとも誤解を避けなければいけないことは、生徒たちが誰かれ構わず部員数を確保するためだけに、さまざまな人と共に活動するわけではないという点である。彼らにとって重要なのは、部員を集めること以上に、誰と、どのように、共に活動するのかであった。

第5章は、事例を踏まえた考察である。生徒たちが対峙した問題について、なぜそのよ

うな処理法をとったのか、その合理性について考察する。言い換えれば、部活動において生徒たちの活動形成がどのような論理にもとづいて営まれたのかについて描いていく。

最後に終章では、小規模の部活動での調査からわかったことを改めて整理する。そして、生徒たちの活動を出発点としたとき、小規模の部活動が持つことのできる意義やその可能性を、本稿の結びとして示す。

なお本稿で登場する生徒の名前はすべて仮名であり、教員の名前や地名も伏せて表している。学校名は、ウェブサイト上で一般公開されている資料を用いた場合のみ実名で記し、参与観察中に入手した資料を用いた場合は特定されぬよう配慮した。また、生徒の学年は事例が起きた時点のものを記している。そのため、同じ名前の生徒であっても、事例によって表記する学年が異なる場合がある。

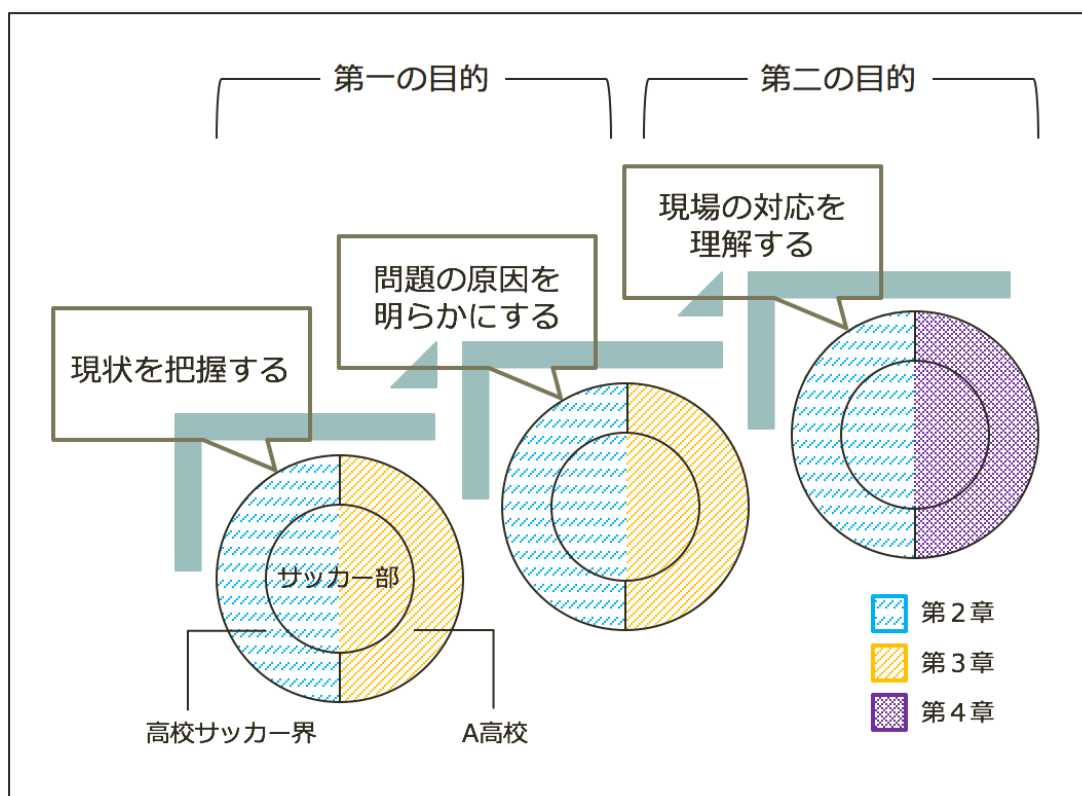


図0-1 本稿の事例の構成

- 1) 中央教育審議会は、少子化が教育に対して与える影響のひとつとして、学校行事や部活動など一定規模の集団が前提となる活動の困難性をあげている（中央教育審議会, 2000）。
- 2) 2016 年 7 月 15 日、佐賀県立太良高校野球部は、他部から「助っ人」を借りて 9 人の選手で大会に出場したものの、1 人が熱中症で病院に搬送され試合の続行が不可能になってしまった。この事例は新聞などで大きく報道された（朝日新聞, 2016 年 7 月 16 日朝刊 25 頁; 2016 年 12 月 19 日朝刊（佐賀県版）27 頁）。また、2019 年 6 月には朝日新聞にて部員不足の野球部を特集した記事が連日にわたり並んだ（朝日新聞デジタル, 2019 年 6 月 28 日「主将が骨折、部員 9 人なのに 悔しい春が過ぎ笑顔の夏に」; 2019 年 6 月 29 日「かつての甲子園、今は部員 3 人 主将が選んだ決断」）。
- 3) 内田良は、部活動のもっとも重要な存在意義として「機会保障」をあげている。なお、ここで「機会保障」とは「放課後に授業以外の活動として、付加的なかたちでスポーツや文化活動の機会が、生徒に低額で提供されること」である（内田, 2017: 67）。
- 4) 西島央が九州 3 県で実施した調査によると、全校生徒数が 90 名以下の学校では、65% 以上の教員が部員数不足について「とても困っている」、もしくは「まあ困っている」と回答している。また、全校生徒数が 91～331 名の学校でも 55%以上の教員が同様の回答をしている（西島, 2015）。
- 5) 内田によれば、「総量規制」とは「字義どおり、部活動の活動量を総合的に減らす取り組み」である（内田, 2017: 212）。くわえて内田は「総量規制」について、「一言で表すならば、「ゆとり部活動」の追求である。「ゆとり部活動」の「ゆとり」は、具体的には、「練習に充てる時間数や日数の削減」と「全国大会への不参加ならびに参加大会の精選」の 2 つの要素により達成される」と述べている（内田, 2017: 212）。なお内田の研究については、第 1 章の第 1 節で詳しく検討する。
- 6) 前出の注 2 でも扱った 2019 年 6 月 28 日の記事では、北海道のある高校野球部について以下のように記されている。

出場が決まっていた春の大会直前に、遠征先の青森でノック中にあごに返球がぶつかり骨折。全治 2～3 週間と診断された。部員は 9 人。春の大会は島外での貴重な公式戦の機会だったが、出場を辞退した。「自分のせい。申し訳なく、悔しかった」

この日の相手の函館大有斗は、春の大会で対戦するはずの相手だった。第1シードの実力校を相手に、上位打線で先制し、粘って中盤まで持ち込む戦略を立てた。四回までは完璧だったが、五回に長打を浴び、守りも乱れた。

それでもチームから笑顔が消えることはなかった。チームの合言葉は「楽笑」。敗れはしたが、最後まで声を出し、笑顔で楽しんで戦い抜いた。(朝日新聞デジタル, 2019年6月28日「主将が骨折、部員9人なのに 悔しい春が過ぎ笑顔の夏に」)

- 7) 先行研究では、「インタビュー調査はそれぞれ複数回おこない、発言内容が一貫しているかに留意し、データの信頼性を検証した」(中澤, 2014: 276-277) という立場を取る場合がある。しかしそもそも、発言内容の一貫性がなければデータとしての信頼性が損なわれるとはどのようなことなのだろうか。発言内容に一貫性のない生徒たちの言動は信頼性のないデータとして捨象されてしまうのだろうか。本研究では、対象が教員か生徒かにかかわらず、発言内容の一貫性の有無によってデータの信頼性を問うことはしない。むしろ、部活動において、矛盾した発言や一貫性のない言動がなぜ可能となるのかについて強い関心を抱いている。
- 8) 甲斐の研究については、第1章の第1節で詳しく検討する。
- 9) 1年生のなかには、入学してから約半年間、筆者のことをA高校の卒業生だと勘違いしていた生徒もいた。
- 10) ここで競技人口とは日本サッカー協会に登録された選手の総数である。多くの場合、大会に出場するにはこの選手登録が必要となる。2018年度の競技人口を年代別に見ると、小学生年代(第4種)が271,023人、中学生年代(第3種)が236,524人、高校生年代(第2種)が174,177人、大学生以上の年代(第1種)が143,918人である(日本サッカー協会, 2019a)。よって、小学生年代から中学生年代へ、もしくは高校生年代から大学生以上の年代へと移行した際の競技人口の減少率はどちらも約13%である。

第1章 研究方法

第1節 先行研究の検討

第1項 部活動研究の動向

2008、2009 年の学習指導要領の改訂にて、部活動は教育課程外の教育活動という特殊な存在として位置づけられた。その 10 年前にあたる 1998、1999 年の改訂では部活動に関する記載が削除されていたことを考えれば、今日までのわずか 20 年の間に大きな制度的変更を繰り返していることがわかる。

なぜ部活動はさまざまな変遷を経て日本で拡大したのか。この点に関して歴史的なアプローチから迫った重要な研究が、前章でも取り上げた中澤（2014）と神谷拓（2015）である。まず本節では、ほぼ同時期に刊行されたこの 2 つの著書を整理することから始めたい。

前者の中澤は、「遊戯としてのスポーツが、その遊戯の性質と相容れない学校教育に結び付けられることに、原理的な矛盾があるようにも思われてくる」（中澤, 2014: 18）という疑問を出発点に、「スポーツと学校教育の日本特殊的関係はどのようにして構築されてきたのか」（中澤, 2014: 16）について、資料分析およびフィールドワークから解き明かすことを目的とした。中澤がこの課題に取り組むうえで一貫して使用したのが「子どもの自主性」という概念である。「子どもの自主性」とは、「子どもが、他者からの干渉・介入を受けることなく、自らの意思で自らの行為を決めること」に与えられる教育的価値であり、教育する側が求める教育的思想である（中澤, 2014: 22）。そして、この理念としての「子どもの自主性」が媒介となって、部活動でスポーツと教育が結びついたのではないかという仮説のもと議論を展開していく。

中澤が示す事例のなかで興味深いのは、「子どもの自主性」のためのかかわりが「子どもの自主性」を壊すという逆説に対して教員はどのように向き合っているのか、という点である。この点について中澤は、教員にとって「子どもの自主性」の尊重は、子どもを自由に放任することと同義ではないと述べる。そして教員が、「生徒が成長するから」という理由で、「子どもの自主性」をより望ましい水準へと導くために部活動へ介入する様子を描いていく（中澤, 2014: 298）。つまり、この教員による間接的かつ代替的な「子どもの自主性」の尊重がスポーツと教育の緊張関係を緩和してきたことを明らかにした（中澤, 2014: 322）。

また中澤の研究は、部活動に消極的な顧問教員が部活動から離れることができない理由についても触れている。たとえば事例として登場する卓球部の顧問教員は、卓球の経験がないながらも「子どもだってやりたいと思ってると思う」という理由で顧問を引き受けている（中澤, 2014: 303）。つまり、部活動に消極的な教員たちもまた、学校や保護者の要望の有無にかかわらず、生徒たちが部活動を楽しみたいはずだという思いにもとづく「子どもの自主性」の尊重によって、部活動の運営に携わってきたことを明らかにした。

つぎに後者の神谷は、学校で部活動を実施する根拠がいまだ不透明であることを問題視し、「運動部活動の教育学」の体系化（神谷, 2015: 4）を目的として、戦前から現在まで移りゆく部活動の歴史をさまざまなデータにもとづきまとめている。とくに、推薦入試制度や学校選択制度など、学校教育に関する制度とのかかわりのなかで「学校教育の一環である」とは言い切れない（神谷, 2015: 2）部活動が拡大してきたプロセスを詳細に示している。

神谷は、いくつかの時代区分を用いて、部活動が2度にわたって学習指導要領から姿を消しながらも現在まで存在してきた過程や、その時代ごとに生じた混乱、課題を明らかにした。たとえば、学校における部活動の位置づけが曖昧でありつづけた理由について、部活動が「無色透明」であるがゆえに、「生徒管理」「学校のスリム化」「特色のある学校づくり」「必修クラブの関連領域」など、時代ごとの「色」に染められながら利用されてきたからだと説明している（神谷, 2015: 192）。

また神谷は、「運動部活動は何のためにあるのか」や「なぜ学校で実施するのか」を説明する論拠として「道徳教育のためにある」、「体力づくりのためにある」、「競争力を高めるためにある」といった言説が存在してきたことを示す。だが神谷は、これらの言説がどれも脆弱であるがゆえに、今日においてもなお「体罰・暴力に見られる非科学的、管理主義的な指導や、勝利至上主義、そして部活動の地域移行の歯止め」にはなりえなかったと述べる（神谷, 2015: 263）。

そして神谷は、部活動の意義として戦後初期の「レクリエーション」言説に注目しながら、「自治」に重点を置く「結社」として部活動を捉える新たな視点を提案している。なおここで「結社」とは、「なんらかの共通の目的・関心をみたすために、一定の約束のもとに、基本的には平等な資格で、自発的に加入した成員によって運営される、生計を目的としない私的な集団」を指す（神谷, 2015: 273）。神谷は、平等な成員による自治であることを重要視しながら、教員が専門性の範囲内で「自治」に関する指導のみに携わることで、「専門

外の指導という重荷」を下ろすことにもつながると述べた（神谷, 2015: 289）。

これら 2 つの研究は、部活動研究の「戦後史は不完全であり、政策以外の側面の検討が不足しているという限界」を乗り越え（中澤, 2014: 75）、部活動が拡大した理由や背景を解き明かした点で重要な役割を果たした。なお、これほどまでに大規模に行われる部活動の実態とその影響力は²⁾、海外の研究者から見ても特殊な存在として映るようである。たとえば B. McDonald らは、部活動が卒業後の生活に与える影響の大きさについて関心を示している（McDonald and Hallinan, 2005; McDonald and Sylvester, 2013）。なかでも彼らが焦点を当てるのは、部活動でエンボディメントされた精神的資本 (spiritual capital) についてである³⁾。

McDonald ら（McDonald and Hallinan, 2005）は、部員であることと卒業後の社会的地位の関係性について調査するにあたり、大学ボート部の学生に対して、部活動での経験や教訓が卒業後の仕事の役に立つと思うかと質問を投げかける。そして学生たちが、部活動で培う上下関係や自己犠牲の経験が将来に活きると答えたことに関心を寄せる。このやりとりを通じて McDonald らは、学生たちは卒業後にボートを漕ぐ機会などほとんどないにもかかわらず、部員であることが社会的地位の獲得につながると期待していることに日本の部活動の特徴を見いだす。そして、学生にとって部活動は身体的犠牲を通じた投資として重要であり、それは将来の社会的地位の獲得に有用だと信じられている精神的資本への投資だと結論づけた。

McDonald らは、他の論文においても、部活動を通じて得られる精神的資本を学生が永続的なものと捉えていることに関心を寄せる。たとえば McDonald らは、学生たちが就職後の飲み会で「適切に properly」（「適量」という意味ではない）飲酒する能力を身につける場として部活動に注目する。McDonald らによれば、派手な飲み方が高い評価を受けるだけでなく、まったくアルコールを取らない人でも飲み会への参加が飲酒資本 (drinking capital) の獲得につながるといふ。つまり、単に酔っ払うだけでなく、飲み会の参加における実践的な能力（たとえば酔っているふりをしたり、自らをさらけ出したり、飲み物を注いだりすること）が部活動の飲み会で培われる。そのため、日本の学生にとって部活動は、卒業後の生活に向けて重要な能力を身につける場であると結論づけている（McDonald and Sylvester, 2013）。

このように、生徒や学生、もしくは教員にとって、部活動は何かしら身を削りながら活動する場であるという理解は多くの研究に共通している。部活動のネガティブな影響につ

いては、運動部活動への参加と学校での逸脱傾向の関係や（岡田, 2009）、部活動に所属する生徒たちが受ける心理的ストレスが報告されている（渋谷・森, 2004; 渋谷ら, 2008）。

だが近年、部活動研究は部活動のあらゆる問題を明るみに出そうとするあまり、部活動に携わる人々をあまりにも不自由な存在として描き出そうとしてきたのではないかという批判もある。たとえば関朋昭は、前述の中澤の研究に対して、「中澤の議論は教師の負担増へ傾倒しているため、教師の生きがいについては追求しきれていない」と批判を展開している（関, 2015: 36）。そして、この「教師の生きがい」を捨象しないために、学校スポーツのマネジメントに照射し、教員の人脈形成や対外試合の交渉方法、指導者としてのキャリア形成などを考慮に入れながら、部活動が展開されてきた時代を分節している（関, 2015: 38-39）。

また下竹亮志は、「現状の生徒はその理想からほど遠い不自由な存在としてしか見なされず、彼らの実践に目が向けられることはない」と述べ、生徒に着目した数少ない研究を行っている（下竹, 2015: 227）。下竹は、「先行研究は、「子どもの自主性」を運動部活動の本質的価値として理想化し、規律訓練的な活動実態をその理念から疎外された不自由な状況として批判することによって、「生徒の自由」を担保しようとした」と整理し、「運動部活動の不自由さを可視化し、糾弾する役割を担ってきた」と評価しながらも、いまだ部活動がその理想を実現化できていないのであれば、「子どもの自主性」を運動部活動の本質的価値として理想化し、「生徒の自由」を模索する先行研究の戦略自体を批判的に検討する必要がある」と述べた（下竹, 2015: 226）。そして、「子どもの自主性」の理念が部活動の権力作用と無関係に存在するという想定は意味をなさないことを指摘したあと、「子どもの自主性」の理念と権力作用の関係について、「生徒の実践」から問う必要性を示している（下竹, 2015: 227）。具体的には、高校陸上部でフィールドワークを行い、生徒たちが自由を得るがゆえに規律訓練装置として成立する部活動の姿と、「部の権力作用を自らより望ましい形に」変えていこうとする彼らの活動の両義性を示した。

だが下竹もまた、「子どもの自主性」と権力作用の関係を注視するあまり、結局のところ生徒たちを不自由な存在として描き、自らが行った先行研究への批判を繰り返してしまっているようにも思われる。また、生徒の実践に焦点を当てることを明示しながら、分析の対象となったのは、顧問教員の交代やキャプテンの選出方法の変更、下級生に対する「シメ」といった「制度」（下竹, 2015: 231）や、他校の部員に対する「優越感」という「感情」（下竹, 2015: 233）に関する事例であり、生徒たちの日々の実践が中核的な分析対象とし

て描かれたとはいいがたい。

分析の対象を部活動だけでなく学校生活やそこでの人間関係まで押し広げることで、生徒の実践により近づこうとしたのが甲斐の研究である（甲斐, 2000）。甲斐の関心の中心は部活動を通じた社会移動にあるが、甲斐もまた「従来の「学歴社会と課外スポーツ」に関する研究は、高校運動部員を主体的に文化を獲得、創造していく存在として捉えることはなく、（中略）生徒の主体的側面は学校体制に押し潰されてしまっている」として、生徒の描かれ方について先行研究を批判している（甲斐, 2000: 18）。

甲斐は、「草の根」のスポーツを対象とする研究に倣って、部活動を「自由文化空間 (open cultural space)」、すなわち「学校制度内部における「権力の見向きもしないところ」として捉え（甲斐, 2000: 60）、文化を獲得する場としての部活動を積極的に読み取りながら、「高校運動部員と学歴社会とのかかわりについて明らかにする」ことを目的とした（甲斐, 2000: 19）。

甲斐が各章で調査対象とした部活動の特徴はそれぞれ大きく異なっており、事例に一貫性があるとはいいがたい。冒頭では、最初の事例である進学校のラグビー部員の比較対象として、その後に登場する農林高校のサッカー部員を位置づけることが明記される（甲斐, 2000: 23）。まず進学校のラグビー部員は、部活動に所属していた経歴を「戦略」的に利用しながら進学する新しい「エリート」層として描かれる（甲斐, 2000: 106）。つまり、学歴社会を受け入れながらも「受験勉強に浸りきったエリートとは異なる姿」を彼らに見いだすのである（甲斐, 2000: 106）。

一方、農林高校のサッカー部員は、部活動に専心することなく、大会成績もふるわないため、その経歴を活かすことはできない。かといって彼らは就職活動でがむしゃらになることもなく、高校へ求人が来た企業へと就職し、工場労働者としてラインに組み込まれていく。甲斐は彼らのこの姿勢について、「高校時代の部活に対する構えに相通じる」「したたかさ」と述べる（甲斐, 2000: 132）。そして、「彼らは産業社会において、より微視的レベルで、ときには無自覚に「抵抗」する」のだと示している（甲斐, 2000: 133）。

このような事例を通じて甲斐は、部活動に所属していた経歴を正統的文化資本に転換できるのは一部の生徒のみであることや、生徒たちが自らの「居場所」を優先できる文化を練り上げていたことを明らかにした（甲斐, 2000: 169-174）。そして、部活動が「居場所」となりうるためには、部員が自由な振る舞いを抑圧されかねないなかで、「自由文化空間」としての部活を保持することが重要であると結論づけている（甲斐, 2000: 173）。

第2項 部活動の規模に関する研究

下竹や甲斐は、部活動における生徒の実践に着目してきた。なお、甲斐はこの「実践」について、P. Bourdieu を引用しながら、部活動研究が「名称の単一性」(Bourdieu, 1987 = 1991: 276) と部活動のイメージを結びつけることで、スポーツ実践の多様性を覆い隠してしまう危険性を指摘している(甲斐, 2000: 116)。たしかに、同じサッカーであっても、100 名以上の部員を抱える強豪部活動でのサッカーと、数名の部員のみでの部活動でのサッカーには大きな違いがあり、部活動におけるスポーツ実践を一括りにして論じるには限界がある。

だが現状として、地域差や学校規模の差に注目した研究はほとんど存在しない。この点について西島は、将来の部活動の在り方に向けた政策を考えるうえで「近隣の学校との距離の問題、社会教育・社会体育などの施設の整備といった社会基盤上の問題、社会集団の凝集性といった地域差や学校規模の違いが抱える要因から、逆に部活動や文化・スポーツ的活動へのアクセス機会の地域差や学校規模差を生み出す危険性があることに十分考慮すべき」だと今後の課題について述べている(西島編, 2006: 172)。

部活動の規模に触れている研究の一つに、「補欠」選手に関するものがある。たとえば、大学野球部の「補欠」選手をめぐる研究では、「2015 年 5 月 11 日の時点で全日本大学野球連盟の加盟校数が 377 校であるのに対し、総部員数は 26,326 名ほどいる。1 チーム 25 名がベンチ入り出来たとしてベンチに入れる総部員数は 9,425 名である。全国で 17,000 名近くの野球部員がベンチにも入れず、補欠として部活動に参加しているというのが現状である」と説明している(種谷, 2016: 49-50)。これは、競技や年代によっては 1 つの部活動に多くの選手が在籍し、同時に多くの「補欠」選手を作り出していることを示している。

また先行研究では、試合に出場できること(「レギュラー」)が生徒の部活動継続の要因として(青木, 1989)、試合に出場できないこと(「非レギュラー」)が退部や意欲低下の要因として示されている(稲地・千駄, 1992; 横田, 2002)。そのため、大規模の部活動によって多くの「非レギュラー」の生徒が生み出されているのであれば、部活動の規模が大きくなるほど生徒がスポーツから離脱する可能性を高めていると言える。さらに、部活動が生徒の「向学校性」を高めるという結果を示す研究もある(藤田, 2001)。したがって、大きな部活動に多くの「非レギュラー」の生徒が存在し、彼らが部活動やスポーツから離脱

しやすいのであれば、結果として生徒たちの学校生活にも影響を及ぼす可能性が示唆される。

合同部活動に関する研究もまた、部活動の規模に関するものであると言える。桑野裕文は、合同部活動が大会に参加するうえで問題となりうる大会規定について議論している(桑野, 2012)。また西島らは、東京都、静岡県、新潟県の中学校の顧問教師への質問紙調査を実施し、地域によって合同部活動に関する考え方に大きな違いがあることを示している。たとえば、部員数不足の部活動が大会やコンクールへの参加を検討するにあたり「合同」、「独自」、「見送り」という選択肢があった場合⁴⁾、東京都の教員の約 55%が「独自」、約 30%が「見送り」と答えたのに対し、静岡県の教員は約 55%が「合同」と答え、「見送り」は 17%にとどまった(西島ら, 2007)。さらに興味深いのは、教員と生徒の考え方にずれが生じている点である。西島らによれば、都市や学校の規模が大きいほど生徒は合同部活動を是認する傾向にあるが、中小都市部や小規模の学校の生徒は合同部活動を否認する傾向にあるという(西島ら, 2001)。

学校経営上の観点から捉えた研究のなかには、合同部活動以外の方法で解決策を提示しようとするものもある。たとえば地域との連携に関する調査では、「近年、少子化による学校規模の縮小や生徒数の減少によって、学校部活動が休部や廃部に追い込まれるケースが目立ち、深刻な問題となっている」と前置きしたうえで、部活動と地域が連携もしくは融合するために必要な条件について検討している(大竹・上田, 2001)。なかでも総合型地域スポーツクラブと連携した事例が報告されているが(夏秋, 2003; 高村・高橋, 2006)、財政的基盤の整備も含め、現実化にはいくつもの課題が残されている(大竹・上田, 2001: 273-276)。

本研究の関心や調査対象に近い研究としては西島(2015)がある。西島は地域や学校の固有性に触れてこなかった部活動研究のこれまでの課題を述べたうえで、「部活動をめぐる経営的な課題を抽出し、その課題の改善に取り組むことが求められる」と述べ、学校経営上の観点から、人口規模や学校規模によって部活動の抱える課題にどのような違いがあるのかについて論じている。鹿児島県、宮崎県、長崎県の公立中学校への質問紙調査にもとづくこの論文⁵⁾のなかで本研究にとって重要だと考えられる結果は以下の 2 つである。

第一に、生徒数が 30 名を下回る学校では 70%以上、31 名から 90 名以下の学校では 65%以上、91～331 名の学校でも 55%以上の教員が部活動を運営するうえで部員数が不足していると感じている。第二に、人口の少ない地域の教員ほど、大会やコンクールへの移動時

間や費用を負担だと感じている。これらの結果は、人口規模や学校規模が小さいほど、部活動の運営が困難であることを端的に示している。また同論文では、将来的な部活動改革についても調査を実施し、「部活動は学校教育活動から切り離して、社会教育・社会体育に移行するが、活動場所として学校の施設・設備を提供する」という部活動改革に賛成する教員が多いことに対し、「教員たちが現在の部活動に生徒たちの放課後の居場所機能もあると捉えているからではないだろうか」と結論づけている（西島, 2015: 153）。

なお、運動部活動に関する研究ではないが、学校経営上の観点以外から行われた稀有な研究として、中学校の小編成の吹奏楽部に関する研究が示唆に富む（岡田・井上, 2006）。この研究によれば、部員数の減少を受け、吹奏楽のコンクールでは新たに小編成の部が設けられはじめたが、選曲や編曲、演奏表現において不自然な点が多く見られるという。そこでこの研究では、小編成に特化した指導法や演奏曲が未開発であったことを指摘しながら、小編成であることを活かした編曲の可能性について検討している。論文の内容は音楽に関して専門性の高いものだが、部活動で行われる競技の固有性や人数などを看過することなく、部活動での生徒たちの実践に着目した研究として、本稿の関心に近いものと言える。

第3項 部活動研究の近年の潮流

以上のように、部活動の規模に関する研究は少ないものの、そのほとんどは学校経営上の観点から行われてきた。これらの研究は、教育現場でとくに教員が課題と感じていることを洗い出した点で重要である。しかし、部活動研究が学校経営上の視点からばかり行われてきたことについては批判もある。たとえば少子化と部活動の関係について論じる必要性を述べる作野誠一は、「もちろんこうした取り組み（合同部活動や拠点校方式）は子どもの運動の場と機会を保障するものとして今後とも検討しなければならない課題である。しかし一方でそれは少子化によってもたらされた現象に対する対症療法であり、必ずしも根本的な対応とはいえないようにも思われる」と、他のアプローチの必要性について言及している（作野, 2013: 49）。

作野が言うように、先行研究では部活動の規模を維持するための経営上の課題やそれに対する「対症療法」が論じられてきた。だが近年になって、部活動研究は新たな動向を見せていると言える。とくに 2010 年代から白熱しはじめたのが、部活動という制度そのも

のの根本的な限界を指摘する議論である。

だがまず部活動の制度的課題については、部活動が必修クラブ活動として運営されていた 1980 年代から指摘されつづけていることを述べなければならない。たとえば、教育学、スポーツ医科学、法学という 3 つの領域から論じた研究では、父母の同意および教員の顧問担当を運動部活動の第一原則とすることの当否、学校教育としての合理的制約と発達保障のバランス、他の教育活動との調整や教員の支持の必要性などについて議論している（今橋ら編, 1987）。また体育学領域からは、学校教育における部活動の役割や活動方針、用具の管理や生徒が怪我をした際の対応の仕方まで、より教育現場に即した提言が行われている（森川・遠藤編, 1989）。こうした研究が行われる背景には、この時期に始まったクラブ活動の必修化によって教育現場に大きな混乱がもたらされたことがあげられている（森川・遠藤編, 1989: 14）。

部活動の制度的限界に関する議論が再燃した契機として考えられるのは、2012 年に大阪市立桜宮高校で起きた痛ましい事件である。バスケットボール部の顧問を務める教員が生徒に体罰を行い、体罰を受けた生徒が自殺をした。この事件は連日マスメディアで大きく報道され、部活動の閉鎖性や横行する体罰、悪しき風習とも言える日本のスポーツ観などが強く批判された。また、この事件を機に、長らく存在してきた部活動の問題が、いまだに解決していないことを改めて認識することになった⁶⁾。

事件当初は部活動の問題を野放しにしてきたとして学校や教員が批判的となることが少なくなかった。またこの時期には体罰をめぐる興味深い研究が蓄積されている。たとえば事件に先立って行われた研究では、部活動における被体罰経験者ほど体罰を肯定的に捉える傾向があることが示された（冨江, 2008; 2009）。また、この研究を引用しながら、多くの被調査者が体罰を「好ましくない」と答えているにもかかわらず前述の結果が示されたことにもとづき、「意識が変わりさえすれば体罰は解決できる」という立場からではなく、部活動という空間が体罰を再生産する装置になる可能性に注目する必要性を論じた研究もある（坂本, 2011; 2013）。さらに McDonald らは、桜宮高校の事件や同年に起きた女子柔道の強化選手への暴力やハラスメントを引用しながら、日本の部活動における体罰の正当化とその慣行化について指摘している（McDonald and Kawai, 2017）。

だが徐々に、学校や教員、生徒も含めた関係者もまた、部活動という制度に巻き込まれた存在なのではないか、という論調が強くなってくる。つまり、問題が山積する部活動という制度そのものに批判がシフトしていったのである⁷⁾。

今日、部活動は学校で行われる教育課程外の教育活動という特殊な位置づけにある。そして部活動は、この位置づけと結びつくように、「子どもの自主性」という理念のもとに実施されてきた（中澤, 2014）。つまり、教員にとっても生徒にとっても部活動は「自主的な活動」であるはずだった。

この「自主的な活動」であるはずの部活動が、実際には強制のもとに実施され、過熱し、関係者を苦しめているのではないか、というのが近年の先行研究の主な問題意識である。社会問題として部活動を議論する火付け役ともなった内田は、生徒の部活動加入や教員の顧問担当を義務づける学校の多さをあげながら、部活動が教育課程外の教育活動という「グレーゾーンだからこそ、学校教育の一環であることを理由にして生徒にも教員にも「強制」がはたらく」こと、そして「グレーゾーンだからこそ、活動に対する管理が行き届かず、に、「過熱」が止まらない」ことを指摘した（内田, 2017: 30）。

では、このような問題を持つ部活動の将来的な在り方についてどのように考えることができるだろうか。内田の議論をもう少し詳しく見ていこう。内田は部活動の現状と課題のほかに、部活動を通じた「評価」についても論じている。彼によれば、1990年頃から、従来の学力試験とは異なる子どもの能力＝個性が新たな評価軸として据えられることになった。実際、この時期には多様な能力による入学を可能とする推薦入試の規模も拡大している（神谷, 2015: 170-174）。その際、真っ先に部活動が新たな評価の対象になったという（内田, 2017: 49-53）。部活動と評価、進路、社会移動に関する研究はこれまでも多くの蓄積があり（甲斐, 2000; 神谷, 2015: 93-132; 栗山, 2017）、部活動の評価を通じた進路形成の存在は十分に理解できる。

そして、この部活動を通じた評価の存在が部活動の過熱化の要因になっているというのが内田の主張である。内田は「部活動が「評価」の対象になったことが、生徒にもたらした影響はきわめて大きい。部活動で競争に勝ち抜くことが、学校生活において重要な意味をもつようになり、さらにそれが入試を通じて、自分の人生を大きく左右する。これが、部活動を過熱の一途へと導いたのである」と断言する（内田, 2017: 52）。

自主的な活動であるがゆえに過熱した部活動だが、本来であればどのような意義のもとに運営されるべきなのだろうか。内田は部活動のもっとも重要な存在意義は「機会保障」と述べる。ここで機会保障とは、「放課後に授業以外の活動として、付加的なかたちでスポーツや文化活動の機会が、生徒に低額で提供されること」である（内田, 2017: 67）。部活動の過熱化は、部活動が必要以上の機会を提供していると置き換えることもできるだろ

う。つまり、部活動は供給過多に陥っており、供給を支える教員や必要以上に機会を与えられる生徒に大きな負担を与えているという指摘である。

内田はこのような状況を脱却するために、「競争の論理」ではなく「居場所の論理」で部活動を運営するべきだと述べる⁸⁾。内田によれば競争の論理にもとづく部活動は、「強化選手の育成や試合に勝つことの優先度が高い」という（内田, 2017: 68）。一方、居場所の論理は、「最低限の機会を保障することに目的がある」ため、「全員が参加を義務づけられるものではない」し、「連日にわたって練習や試合がおこなわれるということもない」（内田, 2017: 68）。

この2つの論理を対比させる内田が示した解決策は、競争の論理のもと機会の供給過多になっている部活動の「総量規制」を行うことである。「総量規制」とは、「字義どおり、部活動の活動量を総合的に減らす取り組み」である（内田, 2017: 212）。具体例として「練習に充てる時間数や日数の削減」と「全国大会への不参加ならびに参加大会への精選」があげられ、「ゆとり部活動」へと転換すべきだと述べている。さらに、「部活動の活動総量を小さくするということは、それを別の主体が担える可能性を高めることになる」と述べ、地域主体の部活動運営に可能性を示しながら部活動の将来的展望を記している（内田, 2017: 207-221）。

第4項 本稿の視角

以上が、内田の議論に沿った、近年の部活動に関する研究の主な問題意識である。内田の研究のインパクトは大きく、部活動が頻繁に社会問題として取り上げられるようになった。2018年にはスポーツ庁が「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を発表した。法的な拘束力はないものの、1日の活動時間や休養日について具体的に数字で示されたことは、過熱する部活動に苦しむ関係者にとって大きな前進であった。

しかしこの議論は、果たして下竹や甲斐、西島が提示してきた部活動研究の課題を乗り越えることができているのだろうか。つまり、地域差や学校規模差が拡大し、部活動を一括りにして論じる限界が見え、それぞれの部活動が抱える背景を読み取る必要性が提示されたにもかかわらず、部活動で営まれる個々の実践から目を背ける論法に逆戻りしているのではないだろうか。その結果、代表的な部活動像を安易に想定したまま議論が進んでいるのではないだろうか。

また、部活動が抱える具体的なバックグラウンドを看過した結果、内田は部活動に所属する生徒たちが問題に直面するフェーズを1つスキップして議論をスタートしていることを指摘したい。改めて内田の議論をさかのぼろう。内田は、部活動の問題を、「強制」や「過熱」だと述べている。言い換えれば、本来であれば自主的な部活動が、自主的であるがゆえに過熱し、強制的に巻き込まれる関係者を苦しめてきたことを問題視している（内田, 2017: 30）。この点は間違いなく解決すべきものだし、本稿においてもまったく異論はない。ただ明確にしなくてはならないのは、内田の議論は、部活動における活動がすでに成立しているという前提のもと、成立した活動の内容に関する問題点について論じている、ということである。

一方、本稿で調査したような部活動の生徒たちは、それ以前のフェーズ、つまり活動が成立するか否かの時点で大きな問題を抱えている。すなわち、内田が議論の前提とした、活動がすでに成立しているフェーズへと入ることができていない。事例を先取りすれば、調査した部活動は過熱するどころか非常に閑散としており、問題となっているのは言わば「過冷」であった。すると当然ながら、このような部活動では内田が解決策としてあげる「総量規制」はうまくあてはまらない。生徒たちの部活動には、規制すべき活動が存在しないからである。

つまり内田は、彼自身が部活動の重要な意義としてあげる「機会保障」が成立しているという前提のもと議論を進めている。そして、部活動の意義は「機会保障」であるにもかかわらず、生徒に必要以上に機会が与えられているという問題について検討している。一方、小規模の部活動では、この「機会保障」がうまく機能していない場合がある。つまり、内田自身が部活動にとってもっとも重要だと述べたその意義を喪失している状態である。もしこのような事態に部活動が陥っているのであれば、部活動の存在意義の欠落を意味し、この問題こそ真っ先に検討すべきなのではないだろうか。

また、部活動によってスポーツや文化活動の機会が保障されないとき、居場所としての部活動は成立するのだろうか。部活動によって機会が保障されなくとも部活動が居場所となりうるのであれば、それは放課後の教室や他の場所でも代替できるのではないだろうか。内田もまた、「居場所の論理とは、まずもって私が部活動のもっとも重要な存在意義であるとする「機会保障」を意識した言葉である」と定義しており（内田, 2017: 67）、機会保障を担保することと部活動が居場所でありうることは密接に結びついていると考えられる。

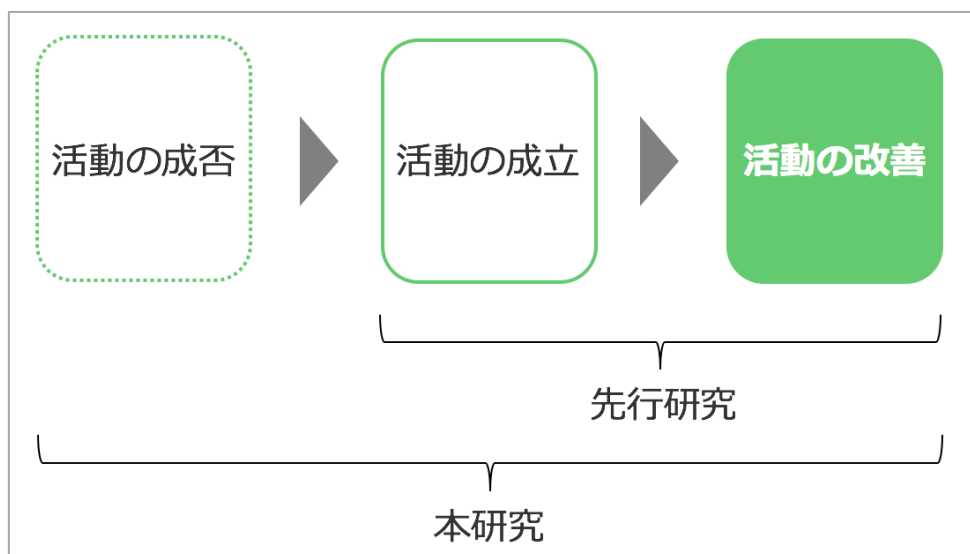


図1-1 先行研究と本研究が扱う事例が発生するフェーズの違い

くわえて、これまで述べてきたような活動の成否のフェーズで生じる問題を被るのは生徒たちだが、そもそも生徒の視点から描かれた部活動研究は非常に少ない。これは、先行研究が学校経営という観点から部活動を論じてきたこと、さらに近年の部活動研究の問題意識が部活動の「過熱」や「強制」にあり、救いを求める学校や教員の声を出発点としていることによると考えられる。下竹が、「現状の生徒はその理想からほど遠い不自由な存在としてしか見なされず、彼らの実践に目が向けられることはない」と指摘したことは先にも引用したが（下竹, 2015: 227）、この指摘は部活動研究における調査対象の偏りを明確に表した点でも重要である。

以上をまとめると、先行研究と本研究が検討するフェーズの違いは、図1-1の通りである。先行研究では「活動の成立」から「活動の改善」について議論してきたため、活動が成立する以前の事例については扱ってこなかった。

だが、小規模の部活動の生徒たちは「活動の成否」のフェーズで問題に直面しがちである。彼らは「過熱」するどころか「過冷」状態の部活動に苦心しており、規制する活動は存在しない。そのため、先行研究が示したような解決策は、彼らが抱える問題を射程に含まない。

また、先行研究は部活動の重要な意義である機会保障や、その先に存在する居場所としての部活動について論じてきた。だが、「活動の成否」が危ぶまれるような小規模の部活動にとって、機会保障や居場所としての部活動は決して不断の存在ではない。そのため、ま

ずは生徒たちが部活動からどのようなスポーツの機会を保障されているのか、その現状について把握しなければならない。この点については第2章で明らかにしていこう。

よって本稿では、先行研究の議論と小規模の部活動の生徒たちの間に起きたこれらの齟齬を解消するために⁹⁾、以下の2点に十分に留意しながら議論を開始する。第一に、部活動での活動や機会保障、居場所としての部活動を前提化して議論をはじめめるのではなく、活動が成立する以前までフェーズを巻き戻し、その時点で発生する問題も射程に入れる。これにより、先行研究が見過ごしてきた小規模の部活動が背負う問題を議論の俎上に載せる。第二に、生徒の視点から部活動の事例について描いていく。先行研究のなかで3年間にわたって高校生の部活動を追った研究を見つけることはできない。過熱する部活動に負担を感じていた生徒がいる一方で、小規模の部活動の生徒たちは、卒業までの期間的制約のなかで、どのように活動を形成していったのか、そのリアリティに迫りたい。

第2節 調査方法

本研究は、主に2つの調査方法にもとづいている。メインとなるのは、北海道の公立A高校サッカー部での参与観察、また調査中に実施された生徒や教員への聞き取りである。2015年1月から調査を開始し、同年5月から2018年5月まで3年間にわたってコーチを務めた。本稿で登場する事例は、調査中につけたフィールドノートを参考に記述している。日々の活動は教員や生徒たちが中心となって進行したため、筆者は事例の多くをその場でフィールドノートに記すことができた。

筆者は、外部指導者（部活動指導員）として学校に雇用されたわけではない。そのため筆者が会計管理や引率を担当することはなかった。また、練習メニューの設定や試合に出場するメンバーの決定も顧問教員が担当してきた。

筆者の役割は、主に日々の活動のサポートである。放課後のグラウンドを訪れ、ボール拾いやウォーミングアップの補助、もしくはトレーニングの準備や後片づけを生徒たちと共に行うのが日課となった。また、対外試合ではスタッフとしてベンチ入りし、控え選手のウォーミングアップの補助などを担当したほか、練習試合や遠征に帯同した際には審判を務めたこともあった。

したがって、サッカー部での筆者の立場をコーチと表すのは仰々しく思える。とくに2017年4月からは競技指導のできる顧問教員が2人となり、筆者の役割はより軽く、柔

軟なものになった。もっとも時間を過ごしたのは、コーチと選手の間のような立場としてであった。トレーニングには選手として積極的に参加し、部員が不足しているときには練習試合に出場することもあった。

生徒たちにとっても、筆者はコーチとはまた違うカテゴリーの存在だったように思える。たとえば、約3年間にわたる調査期間中、生徒は誰ひとり筆者のことを「コーチ」とは呼ばなかったし、新入生にはA高校の卒業生でないことをよく驚かれた。生徒にとって筆者は、教員でないのはもちろん、コーチというほど権限はないが、自分たちと同じ立場でもないという認識だったのだ。この「宙ぶらりん」なポジションに位置することは、生徒たちとの円滑なコミュニケーションを成立させるために非常に有用であったし、教員たちがこのポジションにいる筆者を重宝してくれたことがなによりの幸運であった。

このような筆者の立場もあり、学校やグラウンドはもちろん、ときには学校の近くにある銭湯やコンビニエンスストアが聞き取りの場となった。生徒たちと牛丼屋やラーメン屋に寄り道をすることもあったし、駅やバス停で会えば一緒に部活動に向かい、サッカーや学校生活のことを話しながら歩いた。対外試合があれば、可能なかぎり自転車や公共交通機関を使い、彼らと同じ方法で会場に向かった。

生徒や教員に対する聞き取りは、部活動の前後の空き時間などに行い、場合によってはICレコーダーで録音した。だがデータの多くは、日々の活動のなかで生じたインフォーマルな聞き取りや会話をメモし、文章化したものである。なお、基礎的なデータの収集を目的として、生徒たちに簡単な質問紙に答えてもらったこともある。

また2つ目の調査方法として、サッカー協会が公開しているデータや、参与観察中に入手した大会プログラムなどを用いた資料分析を行った。データは、日本サッカー協会や北海道サッカー協会、また各地方のサッカー協会などがウェブサイト上で公開しているものを用いている。また、筆者が日本サッカー協会公認の指導者資格を取得した際に配布された教本なども資料に含んだ。

第3節 調査対象

第1項 A高校および周辺地区について

A高校は、終戦直後に農業科昼間定時制学校として誕生した。その後、1970年代に農業

科を閉科し、全日制普通科へと移行。創立 30 周年を機に校舎を現在の所在地へと移転した。1980 年代に入ると高校の規模はピークを迎え、1 学年が 10 学級以上で運営された時期もあった。

A 高校は、北海道の都市圏郊外に位置する。この地域は、隣接する都市のベッドタウンとして栄えた。北海道のなかでは決して人口が少ない地域ではないが、2000 年代中盤をピークに人口は減りつづけている。2018 年の年代別の人口を見ると、65～69 歳の人口がもっとも多く、65 歳以上の人口も 29.8%にのぼる。一方、15～19 歳の人口は、全体の約 5%にとどまっている。

この地域は大きく 3 つの地区に分けることができ（ここではそれぞれ E、F、G 地区とする）、それぞれの地区に 1 つずつ公立高校がある。A 高校のある F 地区は、他の 2 つの地区に挟まれるように位置する。F 地区の中心を国道が通り、国道沿いは繁華街になっている。飲食店が散見され、大型スーパーマーケットやカラオケ店は高校生の溜まり場になっている。またこの飲食店などは、生徒たちが高校生活中にアルバイトとして勤めることも多い。

一方、駅前から 10 分ほど歩くと、そこは一戸建てが多くを占める静かな住宅街となる。コンビニエンスストアや個人商店がぼつぼつと並び、小、中学校や郵便局などがある。昼間は閑静としており、帰宅する生徒たちの話し声とのコントラストが印象的である。

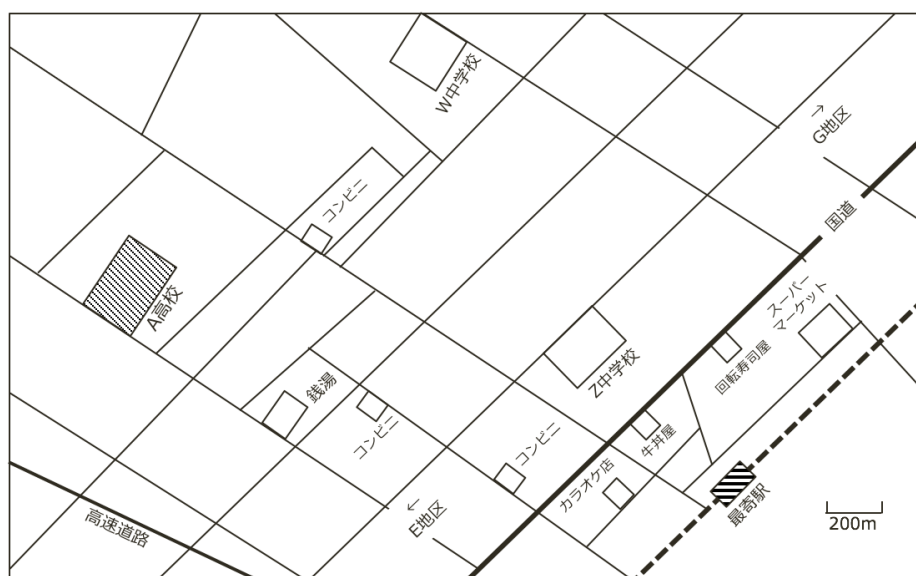


図 1-2 A 高校の周辺地区の地図

F 地区が繁華街としての役割を持っているのに対し、E 地区や G 地区には行政施設や住宅が集まっている。そのため、地域の機能が分散し、住民の生活の中心地が定まらないことが問題となっていた。この機能分散や人口減少に対する解決策として、行政は F 地区の再開発に着手し始めた。駅は 2011 年に改装工事を終え、この地域でもっとも利便性のあるものとなった。一方、2000 年代中盤から開始した再開発はいまだ終わりの目処が立っておらず、土地区画整理事業の大幅な遅れがマスメディアからも指摘されている。

行政が駅周辺の再開発を進めてきた一方で、都市部から A 高校へのアクセスは改善されぬままである。現在、都市部からの電車は急行列車、特急列車全便が F 地区の駅で停車しない。また、高校から最寄り駅までは徒歩で 30 分ほどかかるにもかかわらず、高校とこの駅を結ぶバスは運行されていない。そのため、多くの生徒たちは自転車で通学するが、北海道では積雪があるため、冬季は徒歩で通学するしかない。くわえて、都市部から駅までの交通費は往復で 700 円、定期券でも半年間で 40,000 円以上かかるなど、他の地域から通う生徒にとって大きな負担となっている。

そのため、A 高校に入学する生徒はこの地域出身の生徒が多く、都市部から通学する生徒は一部にとどまっている。サッカー部の顧問教員によれば、他の市区町村から通学している生徒は全体の 4 割以下にとどまっている。また後に示すが、この傾向はサッカー部にも共通しており、ほぼすべての部員がいわゆる地元の生徒たちである。

また重要な点として、A 高校の急激な規模縮小をあげなくてはならない。上記のように地元の若者たちの進学先という役割を果たしてきた A 高校だが、少子化および若者の人口減少の影響を受け、近年は生徒の募集人数を大幅に削減している。ここ数年は募集人数の定員を満たすことができず、募集終了後に学級数の削減が決定した年度もある。さらに 2018、2019 年度には A 高校のある管内で最低の入試倍率を記録している。その結果、2019 年度は 1 学年 4 学級となり、ピークから約 30 年で学級数が半数以下にまで減少することになった。筆者が調査を開始した 2015 年には 1 学年 7 学級だったことを踏まえても、わずか数年で学校の縮小化が急速に進んだことが理解できる。

なお、サッカー部の顧問教員に聞くとところによると、この急激な規模縮小によって教員のなかでも学校の統廃合の噂が出ていたという¹⁰⁾。A 高校の校舎は老朽化が進んでおり、統廃合の可能性によっては予定されていた改修工事が頓挫する可能性もあったというが、2017 年度から校舎の大規模な改修が始まり、トイレの洋式化や外壁の改修が完了した。

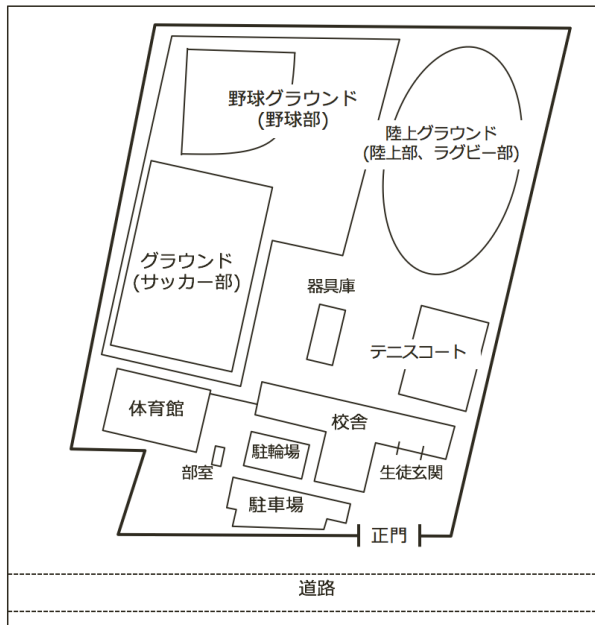


図 1-3 A 高校の校舎の見取図

第 2 項 A 高校の部活動について

では急激な縮小化の進む A 高校において、部活動はどのように運営されているのだろうか。まず、A 高校の部活動は決して盛んとは言えない状況にあることを説明したい。サッカー部の顧問教員によれば、2017 年度の全校生徒における部活動の加入率は 17%にとどまっている。

2019 年度、A 高校の部活動は表 1-1 の通りである¹¹⁾。部活動が盛んではない A 高校において、近年の生徒数減少は部活動の存続に大きな影響を与えている。とくに影響を受けているのは団体競技を行う運動部活動である。たとえば女子バレー部は、部員が足りず他校とチームを組んできたが、現在は廃部となっている。また、バスケットボール部やテニス部などは男子部に限られており、女子部は活動できていない。

A 高校では部活動を運営するために必要な部員数は定められていない。そのため、調査期間中に卓球部が 2 名で活動している時期があった。また 2019 年現在、ラグビー部の部員は 1 名である。さらに A 高校では、他部の生徒が「助っ人」として大会に参加する場合がある。たとえば、サッカー部の生徒が、ラグビー部や陸上部に「助っ人」として参加しないかと勧誘され、実際に 1 人がラグビー部の試合に出場したことがあった。また野球部は部員数を確保できず、他の高校との合同部活動にて大会に出場している。

表 1-1 A 高校で活動している部活動の状況（2019 年度）

体育系の部活動	文化系の部活動・局
男子バスケットボール部	科学部
男子バドミントン部	茶道部
陸上部	書道部
女子バドミントン部	美術部
卓球部	囲碁将棋部
剣道部	写真部
男子テニス部	演劇部
野球部	調理部
ラグビー部	吹奏楽部
サッカー部	放送局
	図書局
	漫画アニメ部
	ボランティア部
	コンピューター部

大会結果を見ると、強豪と呼べるような部活動は無く、学校から強化指定を受けるような部活動もない。ときおり、陸上部や剣道部など、個人競技で好成績を残す生徒はいるが、団体競技はどの部もレベルが高いとは言えない状況にある。また、スポーツ推薦入試はなく、A 高校への入学理由として部活動を選ぶとは考えにくい。

なお、スポーツ庁の「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」の制定を受け、北海道教育委員会は 2019 年 1 月に「道立学校に係る部活動の方針」を示した（北海道教育委員会, 2019）。これにより、A 高校も「北海道 A 高校における部活動の方針」を学校のホームページに示している。この方針の内容は概ね道が示す方針に沿ったものである。

第 3 項 サッカー部の概要

例に漏れず、サッカー部もまた小規模の部活動である。いくつかの変遷はあるものの、10 人から 15 人ほどの生徒で構成されてきた。サッカーは 11 人の選手を必要とする競技であり、生徒たちは部員数の確保という問題に常に向き合ってきた。たとえば、2016 年 5 月に行われたある大会のなかで、A 高校より登録選手の少ないチームは 62 校中わずか 2 校だった。また、2017 年に行われた大会では、出場した 58 チームのなかで最も登録選手

数が少なかった¹²⁾。このことから、地域においてもとりわけ小さな部活動であることが理解できる。さらに、もっとも部員数が少ない時期には、競技に必要な 11 人を下回り、7 人まで減少したこともあった¹³⁾。

表 1-2 は筆者がコーチとして調査を開始した時点で、A 高校サッカー部に所属していた生徒の一覧である¹⁴⁾。注目したいのは生徒たちの出身中学校である。出身中学校に多くの重複があり、とくに U、W、X 中学校からは多くの生徒がサッカー部に入部していることがわかる。これらの中学校はすべて、A 高校のある地域の中学校である。また調査期間中、この表の生徒たちを含め 40 人を超える生徒がサッカー部に所属してきたが、A 高校のある地域外から通っていた生徒はわずか 6 人であった。つまり A 高校の特徴と同じく、サッカー部もまた地元の生徒たちで構成されてきた。

表 1-2 A 高校サッカー部の生徒一覧（調査開始時）

名前	出身中学校	入学年度
ケント	W中学校	2013年度
イツキ	X	
アキヒロ	W	
ヤマト	W	
ツバサ	S	
ミツル	U	
ヤスシ	Y	2014年度
ユウキ	Z	
リョウタ	X	
タスク	W	
ダイチ	W	
キョウスケ	W	
ジロウ	X	2015年度
ヒロ	U	
マサシ	U	
カズキ	V	
テツ	W	
ユウジ	U	
ショウゴ	W	
ユキヒロ	X	
サトシ	W	
ショウタ	U	
ケン	U	
ケイタ	T	

なかでも W 中学校出身の生徒たちが、チームの中心となっていく。W 中学校は、A 高校にもっとも近い中学校の一つである（図 1-2 参照）。また、この中学校の重要な特徴として、全国大会に出場歴のある強豪のサッカー部がある。そのため、W 中学校で中心となって活躍した選手は強豪サッカー部のある私立高校へと進学し、全国大会に出場するほど強豪ではなかった世代の選手か、試合になかなか出場できなかった選手が A 高校でサッカー部に入部することが多い。

また各学年の部員数が表 1-2 で示されるほど所属しているのであれば、サッカー部が小規模だと記すことに違和感を覚えるかもしれない。しかし、この部ではさまざまな理由で同時期に所属する部員数が非常に少なく、常に大会参加の断念と隣り合わせの活動をつづけてきた。この点については、章を改めて詳細を述べる。

調査期間中、顧問を務めた教員は 3 人である。なかでも指導者資格や審判資格を有する B がサッカー部の監督を担った。数学教員の B は、他校で 6 年間勤務したあと、2008 年度より A 高校に赴任。同年度より長らくサッカー部の顧問教員を務めてきた。練習のスケジュールやメニュー、試合に出場するメンバーなどの決定も B がイニシアチブを取った。英語教員の C はサッカーが専門ではなく柔道の経験者である。2016 年度末に他校に異動するまで顧問教員を務め B が不在の際の引率などを担当したが、放課後の部活動に顔を出すことはほとんどなかった。保健体育教員の D は、再任用で 2017 年度のみ A 高校に務めた。D にとって A 高校は 5 校目であり、1 校目、2 校目ではバスケットボール部の顧問教員を務めた。その後、3 校目でサッカー部の顧問を務めたのを機にサッカーの指導について学び、その後はサッカー部の顧問教員を務めてきた。したがって、2017 年度はサッカーの指導ができる顧問教員が B および D の 2 人となり、調査期間中にもっともサッカー部が精力的に活動していた時期となった。筆者が「宙ぶらりん」の立場としてサッカー部に参与できたと前述したのは、D が異動してきた影響が大きい。

表 1-3 A 高校サッカー部の顧問教員 ¹⁵⁾

名前	性別	年齢	競技経験	指導者資格	審判資格	顧問教員を務めた期間
教員 B	男	40代	あり	あり	あり	2008年度～
C	男	40代	なし	なし	なし	～2016年度
D	男	60代	なし	なし	あり（失効）	2017年度のみ

また人数の変遷はあるものの、マネージャーが所属した時期があった。調査期間中に在籍したマネージャーは全員が女子生徒であった。部員数の少ないサッカー部にとって、彼女たちのサポートは活動の成立にとって重要なものだったが、いわゆる「引退」まで部活動に所属しつづけたマネージャーはおらず、ほぼすべてのマネージャーが1年ほどで活動を終えた¹⁶⁾。

活動する日数は週によって異なるが、およそ週4日である。月曜日は休養日になることが多く、その他の休養日は試合の日程などによって変わった。Bいわく、サッカー部はA高校のなかでもっとも定期的に活動している部活動であった。放課後、教室の掃除などを終わると、徐々に部室へと生徒たちが集まり準備をする。15時30分から16時ごろにかけて活動を開始し、おおよそ18時30分ごろトレーニングを終える。グラウンドには照明施設が無いため、日没の時間帯が早くなる秋季には、周囲が暗くなってボールが見えなくなると自動的にトレーニングが終了した。また他の部活動が盛んではないため体育館の利用状況に余裕があり、冬季を中心に体育館でフットサルを頻繁に行った。

最後に、A高校サッカー部が参加したことがある高円宮杯U-18サッカーリーグ(以下、「高円宮杯」という)という大会の構成をもとに、高校サッカー界における彼らの位置づけについて言及したい。高円宮杯とは、全国の部活動と民間クラブチームが参加する年間を通じたリーグ戦方式の大会である。つまり、高校生年代のすべてのチームが参加できる大会である。

この大会の大きな特徴の一つは、リーグの昇降格が制度化されていることである。したがって、Jリーグのように前年度に好成績をあげたチームは次年度に上位のリーグに昇格し、成績がふるわなかったチームは下位のリーグに降格する。そのため、リーグの構造が大きなピラミッドのようになり、全国の高校におけるチームの位置づけがこの大会を通じてはっきりとわかる。

2015年度の高円宮杯においてA高校サッカー部は最下層に位置するリーグに属していた。最上層のプレミアリーグを1層目とすれば、A高校の位置していたリーグは10層目にあたる。このピラミッドが47都道府県分あると考えると、とても大きなピラミッド構造のなかで高校サッカーが運営されていることがわかる。

A高校は前年度の2014年度にこの大会に参加していないため、最下層のリーグから参加するのは大会規定に定められた通りである。ここで重要なのは、この最下層のリーグにおいてA高校サッカー部は12試合でわずか1勝しかできなかったという点だ。言い換え

れば、全国の高校サッカー部が参加する大会のもっとも競技力の低いリーグのなかで、ほとんど勝つことができなかったのである。また生徒たちが戦った 12 試合の得失点差はマイナス 45 であった。つまり、平均して 1 試合で 3.75 点の差をつけられていたことになる。

こうしたサッカー部の実力や位置づけを、生徒たちは入学してから知るわけではない。序章でも述べたように、A 高校サッカー部は地域の中学校と頻繁に練習試合を行う。そのため、地元出身の彼らは中学生の頃から部の実情を知っている。自らが在籍していた中学校サッカー部と「互角の」勝負をするような高校サッカー部の実力は、否が応でも把握できてしまうだろう。生徒たちのサッカー部の評価は当然ながら高いとは言えず、「ここ（A 高校）でサッカーするなんて思ってなかった」「高校でサッカーをつづけようと思ってなかった」と語る生徒は少なくない。それでも結果として、地元の生徒たちが中心となって A 高校サッカー部は運営されつづけている。

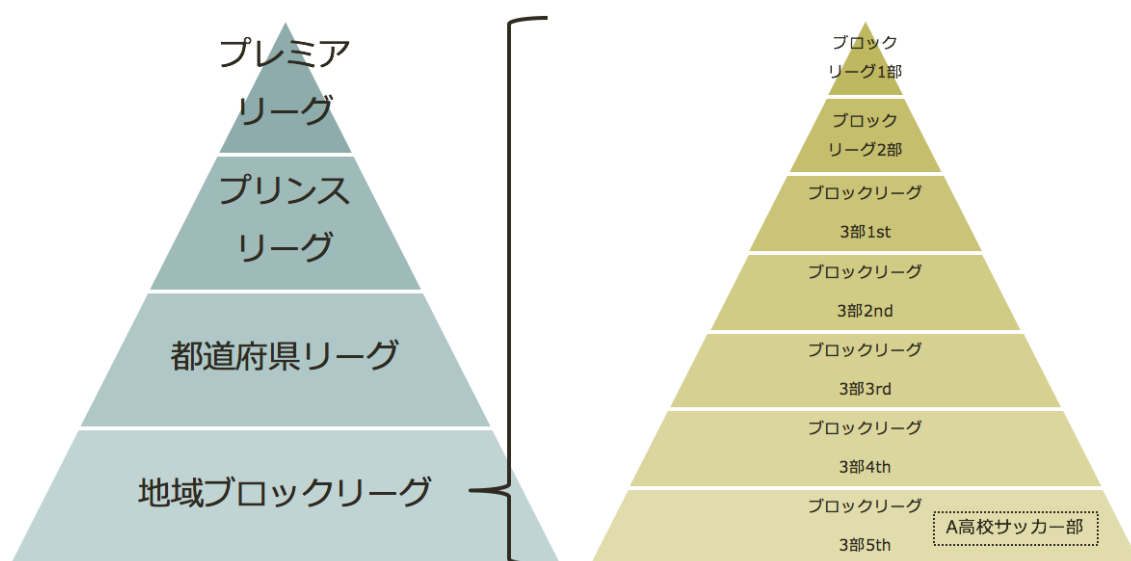


図 1-4 高円宮杯 U-18 サッカーリーグにおける A 高校サッカー部の位置づけ

- 1) 1989 年の学習指導要領の改訂にて、部活動への参加をもって当時必修だったクラブ活動の履修と替えることができる「部活代替措置」が設けられた。だが、1998、1999 年の改訂によって必修クラブ活動および上記の措置が廃止となった。なお、2018、2019 年の改訂では大きな変更は見られないものの、「持続可能な運営体制が整えられるようにするものとする」という一文が追加されている。
- 2) 東アジアや北米でもスクールスポーツは盛んであるという指摘は想定できるが、歴史的にも制度的にも部活動と他国のスクールスポーツが同様のものであるとは言いがたい。たとえばアメリカでは大学スポーツが盛んであり、巨額の富を動かすスポーツ産業として成立している（宮田, 2017）。また文化系の部活動が、運動部活動と同様に活発に活動していることも大きな特徴である（関, 2017）。
- 3) 日本の部活動における「精神」については他の海外の研究者からも注目されてきた。たとえば、部活動での精神教育 (spiritual education) や正統的周辺参加 (Lave and Wenger, 1991=1993) にも似たモデルが、就職後の生活に求められる上下関係（先輩 (senpai) 後輩 (kohai) 関係）の習得を支えていることを指摘する研究がある (Cave, 2004)。
- 4) 「合同」とは「他の中学校で、同じ部活動をやっている人たちと一つのチームを作って参加するように指導する」こと、「独自」とは「自分の中学校で、違う部活動をやっている人たちに加わってもらって参加するよう指導する」こと、「見送り」とは「大会やコンクールの参加を見送るように指導する」ことを指している（西島ら, 2007: 124）。
- 5) この論文では、学校規模を①「1～30 人」、②「31～90 人」、③「91～331 人」、④「332～823 人」という 4 つに分けて論じている。
- 6) 1990 年代後半の部活動について論じた内海和雄は、当時の部活動が抱える問題として、すでに体罰、勝利至上主義、管理主義などをあげていた。また、学校と教員は部活動に過剰に介入するべきではなく、「生徒主体の民主的な部活動」をつくるべきだと提言している（内海, 1998）。
- 7) 関は、部活動が時代ごとにどのような存在であったかという区分を行う際、2011 年以降を「第 5 の時代」と位置づけ、部活動が規制緩和に向かう可能性について示していた（関, 2015: 36-41）。だが、彼の著作が発刊された 2015 年には、すでに部活動を再び規制しようとする流れが強くなっており、関の時代区分は再考の必要があると言わざるを得る。

えない。

- 8) 内田は、この競争の論理と居場所の論理の対比について、「競技の論理」と「教育の論理」という 2 つの論理を用いた主張（友添編, 2016）を踏襲したことを示している（内田, 2017: 67）。なお、部活動を競争の場、もしくは居場所として捉えてきた他の先行研究については、第 5 章のなかで詳しく触れることとする。
- 9) 内田（2017）は、そもそも本研究の調査対象となるような部活動を射程に含んでいないのではないかという指摘もあるだろう。だが、先行研究が部活動での機会保障や居場所性が重要であると結論づけた以上、小規模の部活動がそれらを喪失してもよいとはならないはずだ。つまり、先行研究は意図的に過熱する部活動のみを研究対象としたのではなく、無自覚に都市の部活動や大規模の部活動を想定しているのであり、そもそも機会保障や居場所性を喪失するような部活動の存在を想定できていないのではないだろうか。
- 10) 2016 年 8 月 11 日の調査より。
- 11) 「体育系」、「文化系」、部活動名、部と局の使い分けなどは、すべて A 高校ホームページ上で使用されている表現をそのまま用いている。
- 12) 同大会では、登録選手数が 22 人（紅白戦を行うために必要な人数）を下回るチームが、A 高校のほかに 14 チームあり、この数は全体のおよそ 25%にのぼった。この点からも、A 高校サッカー部のみが小規模の部活動なのではなく、多くの部活動が同様の状況にあることが理解できる。
- 13) 詳しい部員数の変遷については巻末の付表-2 を参照されたい。
- 14) その他の部員については、付表-1 を参照されたい。
- 15) 年齢は 2016 年度末時点。
- 16) 教員 B いわく、A 高校サッカー部の顧問教員を務めた 11 年間のなかで、3 年間にわたり部活動をつづけたマネージャーは 1 人のみだったという（2016 年 9 月 20 日の調査より）。

第2章 部活動で獲得しうるスポーツの機会

第2章から第4章では、約3年間にわたる参与観察にもとづいた事例を取り上げる。まず本章では、本研究の第一の目的として、生徒たちが小規模の部活動で獲得しうるスポーツの機会の現状を把握し、整理していく。またこの章では、フィールドの個別性を超えて、部活動を取り巻く高校サッカー界の構造にも踏み込みたい。なぜなら、小規模の部活動が、決して地理的にだけでなく、構造的に周縁化されるプロセスがあり、そのプロセスを見過ごすことはできないからである。

第1節 高校生にとってのサッカー部

本研究では、「部活動をどのような空間にすべきか」という議論から距離を置くことを序章にて宣言した。一方で、部活動が生徒にとってどのような空間であったか、という現状の把握は正確に行わなくてはならない。

端的に表せば、部活動は生徒たちにとってサッカーを行うことのできる唯一の空間だったと言えるだろう。調査中に以下のような事例があった。

一部の生徒たちがサッカー部を退部し、地元の先輩や他の学校の生徒たちと社会人のサッカーリーグに参入しようとした。部員数の少なさは深刻だったため、できることなら部に残ってほしいと思ったが、他の生徒たちは彼らを積極的に引き止めるような行為をしなかったため、筆者もまたこの事例について静観することにした。だが結果として、退部した生徒たちは社会人リーグへの参入を諦め、何人かの生徒はサッカー部に復帰することになった。

参入を諦めた理由はいくつかあった。まず、高校生には費用の工面が追いつかなかった。たとえば彼らが新規参入しようとした社会人リーグは、チーム登録料のみで206,000円を必要とした（札幌社会人サッカー連盟, 2016a）。また、地区のサッカー協会などが主催する公式なリーグ戦であるため、ユニフォームの事前準備や審判資格の取得などが必要だった。さらに、選手が集まらず不戦試合となった場合は懲戒金を支払わなくてはならないという大会規定まであった（札幌社会人サッカー連盟, 2016b）。つまり、高校生が勢いに任せて参加することのできる大会ではなかったのである。

そもそも、日本サッカー界の構造では、高校生が社会人リーグへ参入することは事実上

不可能だと言える。日本サッカー協会は、選手の年齢によって登録できるチームを分類している。種別は大きく分けて4つあり、年齢制限のない第1種、主に高校生が対象の第2種、中学生を指す第3種、小学生を指す第4種である。第1種は本来であれば年齢制限のないカテゴリーを表すが、実際には大学生や専門学校生、社会人など19歳以上の選手が対象となっている。

この年齢別選手登録制度により、高校生は第2種以外の大会への参加が非常に難しい。たとえば、生徒たちが参加しようとした社会人リーグでは、高校生の参加を1チームあたり3人までに限定している（札幌社会人サッカー連盟, 2016b）。つまり、高校生のみで組まれたチームが社会人リーグに参入することはそもそも不可能である。したがって、日本のサッカー界の構造を踏まえると、高校生が公式な大会に参加したいときには、原則として第2種の部活動もしくは民間クラブチームに加入しなくてはならない。

第1章でも述べたように、部活動に関する研究はこのような競技の固有性をあまりにも軽視しながら議論を進めてきた。現在、日本の若者のスポーツは厳密に制度化、構造化されはじめている。その影響はグラスルーツ（草の根）レベルのスポーツにまで及び、協会へのチーム登録や審判資格の取得ができなければスポーツの機会が奪われてしまう可能性は十分にある。笠野英弘は、日本サッカー界について、日本サッカー協会を長とする「制度的秩序」とそれが生み出すスポーツ実施者の不安について重要な指摘をしている。笠野によれば、日本の多くのスポーツ実施者は、部活動からスポーツを始めるため、学校や教員を通じて半自動的にスポーツ協会や競技団体に登録し、自覚を持たないまま脱退している。そのため、選手登録や大会に出場する手続きの方法を知らない人も多く、部活動やクラブチームから放り出されたスポーツ実施者は不安を抱いているという（笠野, 2012）。だが、学校経営上の観点から部活動について論じてきた研究のなかには、笠野の言う「制度的秩序」や、当該競技においてどのような経路で若者にスポーツの機会が提供されているのかを考慮したものは見当たらない。

いずれにせよ、高校生がサッカーの大会に出たい場合、第2種の部活動もしくはクラブチームに加入する必要がある。では、日本の高校生が部活動以外、つまり民間クラブチームでサッカーをすることは現実的なのだろうか。近年で増加傾向にあるとされるクラブチームの現状を、その歴史とともに見ていきたい。

松尾哲矢によれば、サッカークラブが最初に誕生したのは1965年である。神戸少年サッカー学校というクラブが小学生と中学生を対象として開設された。また、全国組織

化の発端となったのは1978年の全国サッカークラブユース連合の設立である(松尾, 2015: 56-58)。その後 1979 年には、先述した年齢別選手登録制度が他の競技団体に先駆けて導入された(日本サッカー協会, 2019b)。

クラブチームの数は、時代とともに増加傾向にある。1986 年、第 3 種のクラブチームは全国で約 100 チームだったが、2016 年には 1390 チームが日本クラブユースサッカー連盟に加盟している。一方、第 2 種のクラブチーム数は、第 3 種と比較すると大きく減少する。2016 年、日本クラブユースサッカー連盟に加盟したチーム数は 118 チームであり、チーム数は第 3 種の 10 分の 1 以下である(日本クラブユース連盟, 2016)。1980 年代には第 2 種のクラブチーム数が全国で 20 チーム以下だったことを踏まえればチーム数は確実に増えているが(松尾, 2015: 59)、日本の高校生がサッカーをする場はいまだ部活動に大きく依存していることがわかる。

第 2 種のクラブチームの位置づけをさらに詳しく見ていこう。2017 年 10 月にイングランドで 17 歳以下のワールドカップが行われた。この大会に参加した日本代表に選ばれた 21 人の選手はすべてクラブチームに所属しており、部活動(高体連)に所属している選手は 1 人も選ばれなかった(日本サッカー協会, 2017)。これは、日本代表が当大会に参加するようになってから初めての出来事である。つまり、第 2 種のクラブチームは部活動と比べて圧倒的に少数だが、近年ではプロになることを囑望されるようなトップレベルの選手たちが活動する場所として位置づいている。

では、調査地となった北海道のクラブチームの現状はどうなっているのだろうか。2019 年、北海道における第 3 種のクラブチームは 60 チームある。一方、第 2 種を対象としたクラブチームは、2018 年現在、プロサッカークラブの育成組織にあたる北海道コンサドーレ札幌 U-18 のみとなっている¹⁾(北海道クラブユースサッカー連盟, 2019)。つまり、今日のほぼすべての北海道の高校生が、部活動でサッカーを行い、それ以外の選択肢は持ち合わせていない。これは言い換えれば、高校生にとってサッカー部の廃部は、16 歳から 18 歳までのあいだにサッカーをする機会を失うことを意味している。

なお、大会や競技のレベルにこだわらなければ草サッカーでもよいのではないかと、という指摘もあるだろう。だが、若者が自動的に集まる学校でさえ 1 チーム分の選手も集まらないような地域において、自力で 22 人以上のサッカー選手を集めることが現実的な解決策だと言えるだろうか。また先に引用した日本サッカー界の「制度的秩序」を踏まえても(笠野, 2012)、日本サッカー協会や高体連の管理外でスポーツの機会を得ることは高校生

にとって難しいと言える。

第2節 機会保障という観点

以上の高校サッカー界の前提を踏まえて、本章では小規模の部活動に所属する生徒たちが得ることができるスポーツの機会について洗い出していく。また本章では、彼らが部活動でスポーツの機会を得ようとするプロセスにおいて対峙しなくてはならない障壁についても検討していく。なお、これらについて論じる理由は以下の2点である。第一に、前節でも示したように、高校生はサッカーの機会を部活動に全面的に依存している。第二に、前章でも説明した通り、先行研究は機会保障を部活動のもっとも重要な意義であると示してきた。

部活動の意義として機会保障がもっとも重要であるという先行研究の主張を改めて詳しく参照しよう。内田は、部活動の機会保障に関して、教員の不払い労働によって成立している部分があることを懸念しつつも、「生徒が学校の授業以外のところで、こうした公共サービスを受けられるということ自体は、とても意義深い。世界的にもここまで、放課後のスポーツや文化活動の機会保障が進んでいる国は珍しい」と述べる（内田, 2017: 67-68）。なお地域や学校によっては、部活動の「教育的意義」に期待し、積極的に部活動への参加を推奨してきた。たとえば、中澤らによれば、岩手県の中学校では約99%の中学校が、静岡県と香川県では50%を超える中学校が部活動への加入を義務づけていた（中澤ら, 2008）。また日本では、保健体育が教科化されているため、グラウンドや体育館が学校に備わっている点は重要である。欧米では都市公園やスポーツコートが街中に散見されスポーツ環境が充実している印象があるが、学校の数だけグラウンドと体育館があるという点で日本のスポーツ環境は十分なキャパシティを持っている²⁾。

なお内田の議論は、「部活動のもっとも重要な意義は機会保障であるにもかかわらず、必要以上に機会が提供されており、その提供に巻き込まれる関係者の負担が大きい」という問題意識に沿って進められてきた。他方、本稿では「そもそも部活動の機会保障は成立しているのか」という前提の疑問視から始めたい。

部活動の機会保障について論じるにあたり、本章では以下の2つの機会について考える。第一に、主に平日の放課後に行われる日々の活動についてである。部の内部で成立するはずの活動について、生徒たちはどのような問題を抱えているのだろうか。第二に、土日や

長期休暇中に行われる対外試合である。先行研究では、部活動の機会保障について、「放課後に」提供される活動と定義している（内田, 2017: 67）。学校によって提供する機会であることを踏まえれば、「週に 3 日もあれば十分に思える」（内田, 2017: 70）という意見には賛同するが、本稿では以下の 3 つの理由から機会保障の定義を慎重に拡張したい。

第一に、本章では、小規模の部活動に所属する生徒たちがスポーツの機会を求める過程でぶつかる問題の所在を明らかにすることも狙いとしている。そのため、部活動が土日に活動すべきかどうかという「べき論」ではなく、対外試合の参加をめぐる生徒たちの活動のなかにどのような障壁があるのかについて把握したい。

第二に、本稿ではすべての高校が参加資格を持つ地区大会を調査対象とし、都道府県大会や全国大会は対象から除く。内田もまた、部活動が参加する大会規模は地区大会にとどめ、それ以上の規模の大会はクラブチームが参加するものに移行すべきだと論じている（内田, 2017: 208）。したがって、大会構造のなかでもっとも下位層にあたる地区大会は部活動が関与するスポーツの機会として十分に考えうる範疇である。

第三に、A 高校サッカー部の顧問教員を務め、対外試合の引率を主に担当した B と D は、サッカーの技術的な指導の経験があり、部活動にも積極的な教員であった。そのため先行研究が問題視してきた「強制」が教員に対して働くことはなかった。この点は、多くの大会が学校や教員のサポートによって成り立っていることを踏まえると非常に重要である。

以上を踏まえて、本稿では部活動から生徒たちが提供されうる機会について、対外試合の参加をめぐる現状について全体像の把握を目指していく。とくに、全国規模で行われるリーグ戦方式の大会のなかでもっとも下位層にあたる地区大会に参加するプロセスを整理する。

第 3 節 練習メニューの規定化

サッカーは 1 チーム 11 人で行われる。バスケットボールは 5 人、バレーボールは 6 人、野球は 9 人であることを考えれば、競技を成立させるのに必要な選手数は多い。対戦相手も含めれば 22 人の選手が必要となる。サッカーができる高校生を 22 人集めることは、決して簡単にできることではない。



図 2-1 A 高校サッカー部の放課後の活動の様子

しかし、それを筆者は当たり前のように感じていた。筆者が中学校、高校、大学で所属したサッカー部はすべて 1 学年に 10 人以上の部員がいた。もちろん、人数不足が部活動に影響を与えたことは一度たりともなかった。部員が少なければ、レギュラーを争うライバルが少ない分、むしろラッキーだ感じていた。A 高校で参与観察を始めてすぐに、筆者が経験してきたスポーツ環境との違いを痛感した。調査期間中、今日はサッカーが成立しないのではないかと思ったことは一度や二度ではなかった。

図 2-1 はグラウンドで行われたある日の放課後の活動の写真である。芝のピッチではなく土のグラウンドを使用することは、公立高校のサッカー部では珍しいことではない。もちろん、サッカー部専用のグラウンドではなく、野球部と共用である。この写真が撮影された日、サッカー部は 8 人の部員で活動を行っていた。グラウンドの 10 分の 1 ほどを使ってウォーミングアップをする彼らを見ると、グラウンドがとても広く感じる。ゴールをグラウンドの端から中央付近まで動かし、ミニゲームをひたすら行う生徒たちの姿を、筆者は毎日のように目にした。

新人戦までの日程(確認用)

2015.9.3 (木) 配布

日付	曜日	内容	場所	時間	備考
9月5日	土	GAME	グラウンド	7:30集合	10:00VS [] 30分×3
9月6日	日	OFF	—	—	—
9月7日	月	OFF	—	—	—
9月8日	火	OFF	—	—	前期期末考査①
9月9日	水	OFF	—	—	前期期末考査②
9月10日	木	OFF	—	—	前期期末考査③
9月11日	金	TTR	グラウンド	未定	前期期末考査④、草むしり 2時間
9月12日	土	TTR	グラウンド	未定	草むしり
9月13日	日	ブロックリーグ	[]	8:30集合	10:00VS [] 12:00審判R・A1 ([]), 試合見学
9月14日	月	草むしり	グラウンド	15:30	—
9月15日	火	TTR	グラウンド	15:30	草むしり
9月16日	水	TTR	グラウンド	15:30	草むしり
9月17日	木	TTR	グラウンド	15:30	草むしり
9月18日	金	TTR	グラウンド	15:30	草むしり・グラウンド作り
9月19日	土	ブロックリーグ	A 高校	7:30集合	10:00審判R・A1 ([]), 13:00VS [] 会場運営
9月20日	日	OFF	—	—	—
9月21日	月	ブロックリーグ	[]	9:30集合	10:00審判A2・4th [] 13:00VS [] 試合見学
9月22日	火	未定	—	—	—
9月23日	水	地区リーグ	[]	8:30集合	10:00キックオフ 80分+60分
9月24日	木	TTR	グラウンド	15:30	—
9月25日	金	TTR	グラウンド	15:30	—
9月26日	土	U-17市民大会	[]	9:00集合	9:30審判A2 ([]), 10:45VS [], 12:00審判R・A1 ([]), 14:30VS [] 試合見学
9月27日	日	U-17市民大会	[]	9:00集合	9:30審判R・A1 ([]), 12:00VS [], 13:15審判A2 ([]), 14:30VS [] 試合見学
9月28日	月	OFF	—	—	前期成績会議
9月29日	火	走る&TTR	グラウンド	15:30	補習開始(午前授業)
9月30日	水	走る&TTR	グラウンド	15:30	前期終業式(午前授業)
10月1日	木	未定	—	—	学期間休業①
10月2日	金	未定	—	—	学期間休業②
10月3日	土	未定	—	—	U-17市民大会決勝トーナメント
10月4日	日	未定	—	—	U-18市民大会決勝トーナメント
10月5日	月	未定	—	—	後期始業式
10月6日	火	走る&TTR	グラウンド	15:30	—

図2-2 A高校で行われる試合の前週につづく「草むしり」のスケジュール

調査をするなかで筆者が驚いたことの一つに、グラウンドに生えつづける雑草がある。もちろん地質的に雑草が生えやすいグラウンドだった可能性もあるだろう。だが、雑草が生える理由は、単純にグラウンドを使用しないからだ。図2-1が示すように、部員数が少なすぎるためグラウンドの全体を使うことが滅多にない。スパイクで走ったり踏んだりすることがないため整備をすることもない。他部と共有のグラウンドであるにもかかわらず、どの部も人数が少ないため一部しかグラウンドを使わない。すると、使用していない箇所から雑草がぼうぼうと生い茂りはじめる。雪が溶け³⁾、春が終わると、夏頃にはグラウンドの4分の1ほどが雑草でいっぱいになる。

教員 B は除草剤を撒くことも考えたが、A 高校のある地域では周囲の農家に配慮しなければならず断念した。生徒たちは雑草が生えないよう、日によってグラウンドの使用部分を変えながら活動をつづけたが、それでも雑草は生えつづけた。A 高校が試合会場となる日が近づくと、プレイの妨げになる雑草は抜かなくてはならない。そのため、練習前に集まって部員全員で雑草を抜かなくてはならなかった。

このような思わぬトラブルに向き合わなくてはならないほど小規模の部活動では、実行したいメニューの内容よりも、その日の活動に出席している人数を優先的に配慮しなくてはならない。つまり、部員が不足しているため、生徒たちが実行できるメニューが極端に限られてしまうのである。本稿では、「練習メニューによって人数を規定するのではなく、人数によって練習メニューが規定される状態」を練習メニューの規定化と示したい。

練習メニューの規定化が持つ影響の大きさの例としてもっとも理解しやすいのは、部内で紅白戦ができないことである。3 年以上にわたる調査期間のなかで、20 人以上の部員がグラウンドに集まったことは一度もなかった。そのため、筆者と教員 B を足しても、紅白戦を行うために必要な 22 人以上を自力で集めることはできなかった。すると、紅白戦のような実戦形式のトレーニングの機会は、自らの手で生み出すことはできず練習試合などに頼らなくてはならない。この対外試合の役割の重みについては次節以降で詳しく触れることにする。

選手が足りないということは、余剰人数がいらないということである。なおここで「余剰」とは、「余分である」「補欠選手である」という意味ではなく、最低限度を超えて人数が活動場所に存在することを指す。図 2-1 からわかるように、日々の活動に参加している部員は非常に少ない。何をするにも人は足りず、ゴールを運ぶのも一苦勞である。練習のサポートは可能な限り顧問教員や筆者が担当するが、それでも追いつかない部分は山ほどある。

たとえば、8 人の選手を 2 つに分け、4 人でボール回し（「鳥かご」⁴⁾をするとしよう（図 2-3 参照）。3 人がボールを回して、1 人が守備をする。まず、トレーニングを始める前にボールをできるかぎり各グリッド（区画）の近くに 1 箇所集める。余剰人数がいないので、顧問教員と筆者がボール出しを務めるが、ボール拾いまでは手が回らない。強度が増せば、ボールが遠くへと飛んでいくこともある。すると開始前に集めていたボールは、すぐにすべて飛んでいってしまい、練習がたびたび中断してしまう。

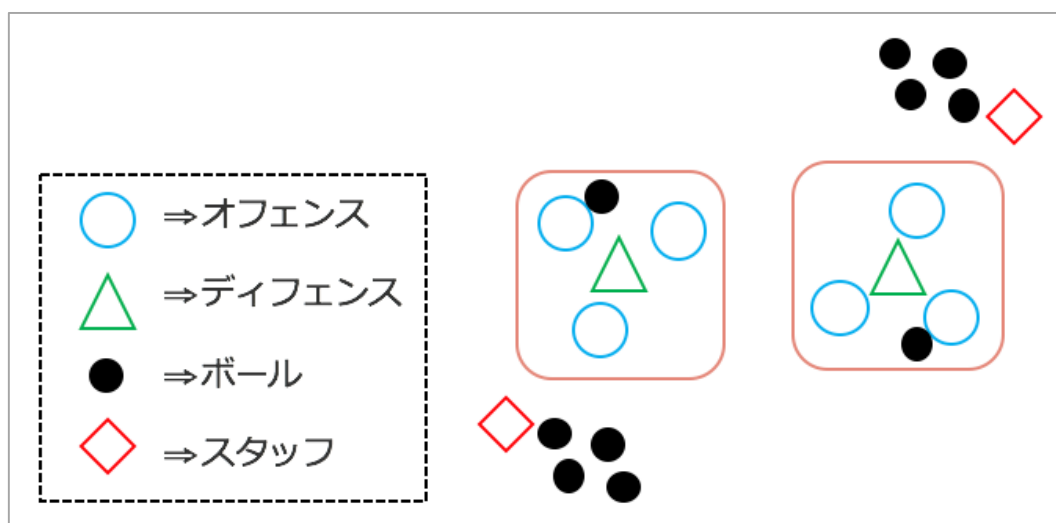


図2-3 4人1組のグリッドを2つ用いたトレーニング

こうした出来事が毎日のように起き、筆者は余剰人数がいない部活動での活動の難しさを切に感じていた。たとえば、筆者が高校生や大学生のときに所属していたサッカー部でも、トレーニングの前にボールをあらかじめ集め、練習がスムーズに進むよう配慮していた。だが、筆者がこれまで所属してきたサッカー部には多くの部員がいた。そのため、当然ながらグラウンドには多くの人が存在していた。つまり、もしボールが遠くに飛んでいったとしても、ボールが飛んだいった先では誰かが練習していて、意識せずともボールはこちらへと返ってきていたのである。筆者が所属していたのは公立の高校、大学のサッカー部であり、決して部活動のレベルが高いというわけではない。ただ飛んできたボールを元の場所へと蹴っていただけである。だが、A高校サッカー部ではそのようなことは起きない。ボールが飛んでいった先には部員もマネージャーもいない。ただ必要以上に広さを感じるグラウンドをボールが転々とするだけである。そして返ってこないボールを拾いに行くたびに、部員が足りない、余剰人数がいない、ということを強く実感するのである。

「鳥かご」の例のように、グリッドが増えるほど練習メニューをこなすのは難しい。グリッドが増えれば、その分だけサポート役の「手足」や「目」が必要になるからだ。そのため、選手をできるだけ少ない箇所に集めることのできるメニューが自然と増えていく。もっともシンプルな解決方法はグリッドを1つにすることだ。全員が一箇所に集まってメニューをすれば、サポート側は役割分担ができる。たとえば顧問教員がボール出しを務め、休憩している生徒や筆者でボール拾いをするという具合である。

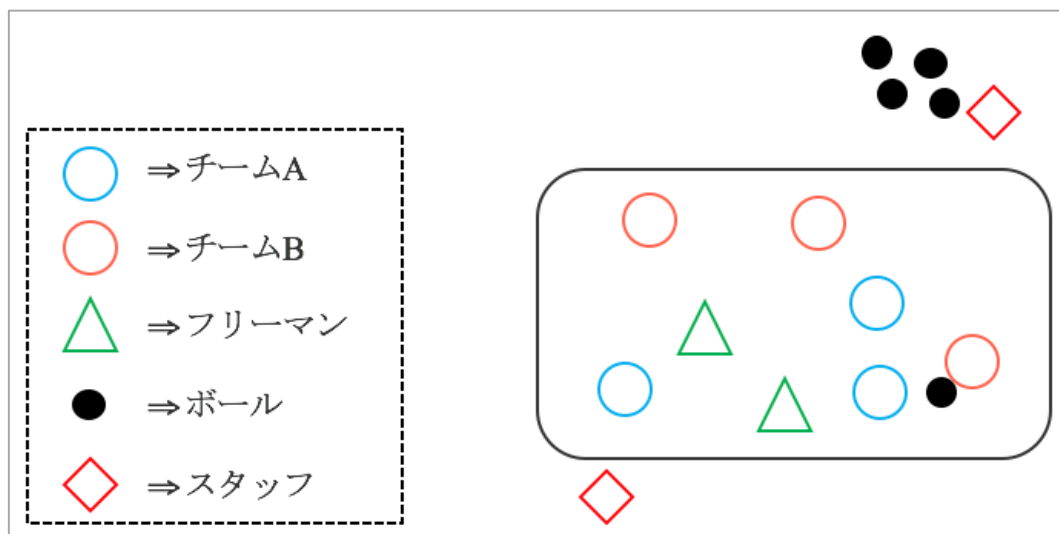


図2-4 8人1組のグリッドを1つ用いたトレーニング

では、8人の選手を1箇所に集めボール回しをしよう(図2-4参照)。3人、3人、2人にチームを分け、ボール回しをする。2人のチームはフリーマンと呼ばれ、守備をせずに両チームのパス回しに参加する。そのためボール回しは常に5対3で行われることになる。1分30秒から2分を目安にボールを回し、5人がボールを持っているとき、残りの3人は守備をする。今日のサッカーは、攻撃から守備(もしくは守備から攻撃)への移行(トランジション)が非常に重要であるとされ、ボールを奪ったとき、もしくは奪われたときの切り替えのスピードを厳しく要求される。数分の練習メニューであってもその強度は高い。

ここに、もし16人の選手がいれば8人ごとに交代することができる。周りで休憩している選手はボールを拾うこともできるし、ボール出しを務めることもできる。しかし、A高校サッカー部では16人の部員が練習に来ている時期などほとんど存在しない。そのため、インターバルを入れるとしても数人ごとに交代するしかなく、残りの選手は連続してプレイしつづけなくてはならない。

もちろん8人しか選手がいなくても休憩を入れることはできる。1回のメニューが終わるとインターバルを入れ、次の2分へと入る。つまり、全員が同時にプレイをして、同時に休憩をする。自分が休憩している間に他の選手がプレイしていることはない。

この「誰もプレイしていない時間」の存在は、生徒たちの活動に大きく影響する。まず、

「誰もプレイしていない時間」は、自分の休憩中にトレーニングが行われていないことを意味する。つまり、他人のプレイを見て学んだり、自分のプレイと比較して振り返ったりすることができない。選手は常にピッチでプレイし、ピッチ上でインターバルを迎え、ふたたびピッチでプレイする。彼らの視線は常にピッチ上にあり、客観的にピッチの外から内省する機会を喪失している。

また、「誰もプレイしていない時間」は、全員の体力が同じような変遷をたどることを意味する。自分が疲れているときは他人も疲れていて、自分がピッチ上でプレイしているときは他人もプレイしている。この体力の同時的な変遷は、活動の雰囲気づくりを単調にする。つまり、誰かが疲れていたり、プレイが雑になったり、ミスをしたりしたとき、他の選手も同時に疲労困憊の状態である。そのため、アドバイスをしたり、声を出したり、盛り上げたりする役目を務める選手が自然と減ってしまう。

さらに、その日の活動に出席した人数が奇数だった場合、練習メニューの規定化の影響は極めて大きいものとなる。たとえばゲーム形式の練習を行う場合、対戦する2チームの人数を揃えることができない。余剰人数もいないため、人数が不足しているチームを補うこともできない。つまり、3人対4人というように、いびつな形でゲームを進めることになる。

また、奇数人数による練習メニューの規定化は、もっともシンプルな2人1組でのウォーミングアップにさえ影響を及ぼす。2人1組でボールを蹴るウォーミングアップは、他の競技でいえばキャッチボールのようなものであり想定しやすいだろう。もし余剰人数がいる部活動であれば、何らかの理由によって人数が奇数になったとしても欠員を埋めることができる。しかし、もし8人のみの部活動で1人が欠席し、人数が奇数（7人）になった場合、彼らは2人1組をつくることさえできず、2人、2人、3人に分かれなければならない。すると、3人組のトレーニングは、強度が3分の1になったり、ボールに触れる機会が3分の1になったりする。ウォーミングアップの過不足は、怪我やコンディション不良にもつながり、指導者としてはできるだけ避けたいものである。そこで、トレーニングの強度の低下を防ぐために、3人組を基準としてトレーニングをしてみる。すると今度は、3人、3人、1人、もしくは結局のところ3人、2人、2人、の組み合わせになる。つまり、人数が少なく、余剰人数もいないため、均等の強度をかけながらメニューを成立させることが非常に難しいのである。

以上より、練習メニューの規定化が及ぼす影響を具体例にもとづき概観してきた。だが、

生徒たちが経験できないスポーツの機会は多様な練習メニューにとどまらない。たとえば、「レギュラー争い」はその一つである。生徒たちには、部員を多く抱える強豪の部活動に存在する熾烈なレギュラー争いや、部内にひしひしと伝播するような緊張感を体験する機会はほぼなかった。この点については、生徒たちも危機感を持っていた。たとえば2016年度入学のトシミチは、「みんな（生徒たちが）仲が良い」という筆者の発言に対し、「でも先生（教員 B）に「お前らは勝負の世界にいないからゆるいんだ」って言われました」と述べ、レギュラー争いを部内にどうにか作ることではできないかと悩んでいた。

調査期間中、一度だけ11人対11人で実戦形式の練習を行うことができた。卒業生たちが連絡を取り合ってグラウンドを訪れてくれたからである。Bや筆者がピッチに入り、選手数はなんとか22人に届いた。滅多にできない多人数でのゲームを皆が楽しんでいたように思える。「11人（対11人）でゲームやるなんて久しぶりですね」という当時2年生のタクヤの言葉と表情が強く印象に残っている。彼の表情には、紅白戦ができた喜びと同時に、理想の活動とはほど遠い現実を受け入れてきた日々の苦悩が滲んでいたように思う。小規模の部活動では、活動の希薄さや単調さを実感する場面がいたるところに散りばめられており、活動がうまくいったときでさえ、その一過性によって、理想の活動との終わりのなき乖離を感じざるをえないのである。

第4節 対外試合の参加をめぐる現状

つぎに、主に土日や長期休暇中に行われる対外試合に関して、生徒たちが小規模の部活動からスポーツの機会を保障されているのかについて見ていこう。そもそも、中学生や高校生が参加できる対外試合は、その規模や回数、開催期間、主催など、あらゆる側面から多様化してきた（関, 1997: 89-93, 110-115, 147-154; 中澤, 2014: 107-123; 神谷, 2015: 36-40, 100, 200-203）。現在、生徒たちは、年齢や学年以外にも、地域、性別、競技のレベルなどによって細分化され、自身が対象となる大会を探して参加している。こうした現状や、先行研究が示す部活動の将来的展望を踏まえ（内田, 2017: 208）、この節ではすべての部活動が参加資格を持ち、参加のために予選を勝ち抜く必要がない地区大会に調査対象を絞ることとする。

部活動が生徒たちにスポーツの機会を提供するならば、対外試合は部活動に所属する生徒たちに「試合出場機会」を提供すると言える。現在、競技や種目によって、この試合出

場機会の適度な提供は非常に重要であると考えられている。たとえば、日本サッカー協会は、定期的な試合出場機会の提供が、日頃のトレーニングの目標設定やモチベーションの維持を促進するとして、M・T・M (Match・Training・Match) というメソッドを打ち出している⁵⁾ (日本サッカー協会, 2012a: 29)。この M・T・M に即して新設された大会は、トーナメント戦方式ではなく、年間を通じたリーグ戦方式で実施されている⁶⁾。つまり、従来の「負ければ終わり」のトーナメント戦方式では定期的に試合出場機会を提供できないことを問題視し、「負けても次がある」リーグ戦方式を推奨している。

このような大会方式の見直しの重要性は、先行研究のなかでも論じられてきた。たとえば神谷は、「自治と勝利の同時追求」のために、従来のトーナメント戦から「小規模のリーグ戦」への変更を提案している。彼によれば、「部員が立ち上がっていく余地を残す」ことができるリーグ戦によって「子どもの自治が育まれ、それは教師の多忙化の解消にもつながっていく」という (神谷, 2015: 304)。また神谷は同著のなかで、大会の具体的な在り方として「シーズン制」の導入を提案している。彼はシーズン制に関してアメリカを例としながら「大会の規模や回数を拡大しなくても (活動期間を限定しても) 一流の選手は育っている」と述べている (神谷, 2015: 40)。

だが、今日実施されているリーグ戦方式の大会は、果たして神谷が推奨するような優位性のある大会として成立しているのだろうか。そもそも、トーナメント戦における 1 回戦敗退と比較すれば、「負けても次がある」リーグ戦は試合数が多い。つまり、リーグ戦の推奨自体が試合数の増加を意味しており、大会規模の拡大を抑制しなければ生徒や顧問教員の負担増加につながりかねない。またリーグ戦方式であっても、多くの大会では順位を争っていく。そのため、部活動の過熱化から逃れる方策として有用であるかは慎重な議論が必要である⁷⁾。

対外試合の現状を詳細に分析した研究はほとんど蓄積されていない。当事者による対外試合の意味づけについては、保護者が監督やスタッフを務める野球少年団で調査が行われている (藤田, 1995)。この少年団では、対外試合での勝利は指導者を務める保護者の活動を正当化しチームの凝縮性を高める一方で、敗北は保護者としての役割と自覚、家族同士のつながりのなかでスポーツの「教育的意義」を確認する契機として心情的に処理されたという。つまり、指導者としての保護者が「親という役割をもっていること、そして、それぞれの父母らは平等関係にあるという事実が過度の勝利至上主義への歯止めとして機能している」事例を示した (藤田, 1995: 56)。

大会の実施方法に関する事例報告としては、中塚義実が取り上げた「DUO リーグ」がある（中塚, 2006）。このリーグは当該地域の高校サッカー部などが独自の理念のもとに運営するサッカーリーグであり、当事者が組織した対外試合の事例として示唆に富む⁸⁾。また大会方式を議論する際には、桑野の合同部活動に関する論考のように、大会規定が特定の立場に置かれた人々から試合出場機会を奪っていないか十分に考慮する必要があるだろう（桑野, 2012）。よって本節では、まず対外試合がどのような学校の生徒にどれほど試合出場機会を提供しているかについて整理したい。その後、参与観察のデータにもとづいて、A 高校サッカー部の生徒たちが対外試合の参加をめぐるどのような障壁に直面していたのか、その詳細に迫っていく。

第1項 北海道の高校サッカー界の構造

対象とするのは、札幌市や北海道の高校サッカー部が参加資格を持つ6つの対外試合である。表2-1は6つの大会の概要を示したものである⁹⁾。当該地域におけるすべての高校サッカー部は、これらの大会に対して参加資格を持っている。つまり、参加するために予選を勝ち抜く必要がないもっとも下位層の大会である。なおA高校は札幌市の高校ではないが、地理的要因からこの6つの大会に参加していく。

②高体連（インターハイ）と③選手権は、それぞれ「全国高等学校総合体育大会」と「全国高等学校サッカー選手権大会」という2大全国大会の予選にあたり、全国すべての高校サッカー部が参加できる。また札幌地区では、①春季大会で勝ち上がった上位チームが②のシード権を獲得できるため、北海道大会や全国大会への進出を狙うチームにとって重要な大会となりうる。④新人戦は、1、2年生のみが参加できる大会のため、このような略称で呼ばれている。なお、⑥フットサル大会はサッカーを行う大会ではないが、積雪の影響でフットサルが盛んな北海道では実質的にサッカー部が参加する大会となっているため分析対象に含むこととする。

以上①②③④⑥の大会は、トーナメント戦方式、もしくは予選リーグ戦と決勝トーナメント戦の併用で実施され、大会期間は2日間から5日間程度である。他方、これらの大会と一線を画した方式で行われるのが、2011年度に新設された⑤高円宮杯である。正式名称は「高円宮杯 JFA U-18 サッカーリーグ」であり、②や③とならぶ全国規模の大会である。この大会の概要については第1章の第3節でも触れたが、より詳細に見ていこう。

表 2 - 1 選手対象となる6つの大会

大会名	略称	主催(記載順は開催要項に従う)	期日(すべて2017年度)
札幌支部高等学校サッカー春季大会	①「春季大会」	・札幌地区サッカー協会 ・千歳地区サッカー協会 ・北海道高等学校体育連盟札幌支部	[予選ラウンド]5月4日(木・祝)、5月5日(金・祝) [決勝トーナメント]5月7日(日)
札幌支部高等学校サッカー選手権大会 兼 北海道高等学校サッカー選手権大会札幌支部予選会	②「高体連」	・北海道高等学校体育連盟札幌支部 ・千歳地区サッカー協会 ・札幌地区サッカー協会	1回戦 5月22日(月)、2回戦 5月23日(火)、3回 戦 5月24日(水)、準々決勝 5月25日(木)、準決 勝・決勝・第7代表決定戦 5月26日(金)
全国高校サッカー選手権大会 札幌地区予選会	③「選手権」	・北海道高等学校体育連盟札幌支部 ・札幌地区サッカー協会	1回戦 8月20日(日)、2回戦 8月26日(土)、3回 戦 8月27日(日)、代表決定戦 9月2日(土)、順 位決定戦・第5代表決定戦 9月3日(日)
札幌地区高校ユース(U-17)サッカー選手権大会	④「新人戦」	・札幌地区サッカー協会	[予選ラウンド]9月30日(土)、10月1日(日) [決勝トーナメント]10月7日(土)、10月8日(日)
高円宮杯U-18サッカーリーグ 北海道札幌ブロックリーグ	⑤「高円宮杯」	・北海道サッカー協会	[1次ラウンド]第1節 4月16日(日)、第2節 4月 23日(日)、第3節 4月29日(土)、第4節 5月13日 (土)、第5節 6月3日(土)、第6節 6月24日(土)、 第7節 6月25日(日) [2次ラウンド]第1節 7月2日(日)、第2節 7月9 日(日)、第3節 7月23日(日)、第4節 9月10日 (日)、第5節 9月16日(土)、第6節 9月18日(月)、 第7節 9月24日(日)
全道ユース(U-18)フットサル選手権大会 札幌地区予選 兼 全日本ユース(U-18)フットサル大会 札幌地区予選	⑥「フットサル大会」	・北海道サッカー協会 ・北海道フットサル連盟	[予選ラウンド]12月9日(土) [決勝トーナメント]12月16日(土)

札幌地区サッカー協会 (2017a, c, e, h, l, m) をもとに作成

表 2-2 各大会の参加率（2017 年度）

大会名略称	参加校数	参加免除校数	参加率
①春季大会	50	3	98.1%
②高体連	54		100.0%
③選手権	50	3	98.1%
④新人戦	52		96.3%
⑤高円宮杯	28		51.9%
⑥フットサル大会	12		22.2%

北海道サッカー協会(2017)、札幌地区サッカー協会
(2017b, d, f, i, j, k, l, n)をもとに作成

この大会の重要な特徴は、昇降格を制度化したリーグ戦方式で行うことである（図 1-4 参照）。最上位を「プレミアリーグ」、以下「プリンスリーグ（地域リーグ）」「都道府県リーグ」「地区リーグ（ブロックリーグ）」とし、年間を通じて実施する¹⁰⁾。そのため、表 2-1 からわかるように、⑤の開催期間はもっとも長く、試合数も非常に多くなっている。また⑤には、部活動だけでなくプロサッカークラブの育成組織や、クラブチームも参加できる。よって、部活動のみが参加する②や③とは異なり、「高校年代の真の日本一」を決める大会という表現が用いられる¹¹⁾。

しかし、札幌地区において⑤⑥の大会に参加した高校数は、①②③④と比較すると非常に少ないのが現状である。表 2-2 は、2017 年度に札幌地区に属した 54 校の各大会への参加率である¹²⁾。もっとも参加率の高い②を 100%としたとき、①③④にはほぼすべての高校が参加しているにもかかわらず、⑤⑥の参加率は極端に低い。⑥はサッカーではなくフットサルを行う大会であるため、部の方針によって参加しない高校があることは十分に理解できる。一方、⑤の参加率が 50%程度にとどまっていることは重要である。なぜならこの大会は、前述したように、定期的な試合出場機会の提供を目的として新設されたリーグ戦方式の大会だからである¹³⁾。

表 2-3 は、確認できた過去 4 年間の⑤への参加校数の変遷を示したものである。2015 年度の参加校は 32 校（約 59%）であり、その後 2017 年度まで微減をつづけたものの、2018 年度に微増している。また参加率は 50%から 60%を推移しており、大きな変化はないと言える。

表 2-3 高円宮杯への参加校数の変遷（全 54 校）

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
参加校数	32	31	28	30
複数チーム擁立校数	6	8	10	13

北海道サッカー協会(2015, 2016, 2017, 2018)、札幌地区サッカー協会(2015, 2016, 2017j, k, l, 2018b, c, d)をもとに作成

一方、変化が見られるのは「複数チーム擁立校数」である。この数は、1 つのサッカー部から 1st チーム（A チーム）、2nd チーム、3rd チームと複数のチームを編成し⑤に参加している高校数を表している。先にも触れてきた通り、この大会は定期的な試合出場機会の提供を目的としているため、複数チームを擁立しての参加が認められている。つまり、試合に出場する機会の少ない控え選手にも試合出場機会を与えるため、2nd 以下のチームを編成する高校が増えているのである。表 2-3 を見ると、複数チームを擁立している高校数は、2015 年度にはわずか 6 校だったものの、2018 年度には 2 倍以上の 13 校となっており、参加校数の 3 分の 1 を超える値となっている。

表 2-4 は、2018 年度の⑤に参加した 30 校および複数チーム擁立校を一覧に示したものである。この表から、とくに上位リーグに所属する強豪サッカー部が複数チームを編成しながら参加していることがわかる。なかには(1)札幌大谷のように、5 つのチームを編成し、⑤に参加している高校もある。また、複数チームを擁立している高校はほぼ私立高校であり、公立高校は(25)札幌工業のみとなっている。公立高校にとって、選手数はもちろん、複数の試合会場へと引率するための教員やスタッフの数を確保することは非常に困難だからだと考えられる。くわえて、(9)札幌東を除き、上位リーグに所属している高校はすべて私立高校である。では、各高校の 2nd 以下のチームは、どのようにリーグ構成に組み込まれているのだろうか。

表 2-5 は、都道府県リーグにあたるプリンスリーグを除いた、札幌地区で行われるリーグ戦の構成を示している。網掛け部分は、各高校の 2nd 以下のチームを表している。表 2-4 にて複数チームを擁立している高校はほぼすべて私立高校であることは触れたが、この表 2-5 で示したいのは、いくつかの私立高校の 2nd チーム、もしくは 3rd チームもまた、ほぼすべての公立高校より上位のリーグに属しているということである。さらに、網

掛け部分にあたる 2nd 以下のチームは、北海道コンサドーレ札幌の育成組織を含めて計 24 チームとなり、表 5 に示された 51 チームの約半数にあたる。このことから、このリーグ戦方式の大会による試合出場機会の分配は、一部の高校の生徒に偏って行われていることが理解できる。

表 2-4 高円宮杯の参加校における複数チーム擁立校一覧（2018 年度）

1stチーム所属リーグ		高校名	公立／私立	1st	2nd	3rd	4th	5th
プリンスリーグ (都道府県リーグ)	1	札幌大谷	私立	○	○	○	○	○
	2	東海大札幌高	私立	○	○	○	○	
	3	札幌創成	私立	○	○	○	○	
札幌地区リーグ1部	4	北海	私立	○	○	○		
	5	札幌第一	私立	○	○			
	6	札幌光星	私立	○	○			
	7	北星学園大付属	私立	○	○			
札幌地区リーグ2部	8	札幌新陽	私立	○	○			
	9	札幌東	公立	○				
	10	北海道科学大高	私立	○	○	○		
	11	とわの森三愛	私立	○	○	○		
札幌地区リーグ3部	12	札幌山の手	私立	○	○			
	13	札幌清田	公立	○				
	14	立命館慶祥	私立	○				
	15	北海道文教大明清	私立	○				
	16	札幌あすかぜ	公立	○				
	17	札幌新川	公立	○				
	18	札幌啓成	公立	○				
	19	札幌旭丘	公立	○				
	20	石狩翔陽	公立	○				
	21	札幌西	公立	○				
	22	札幌南	公立	○				
	23	札幌白石	公立	○				
	24	札幌丘珠	公立	○				
	25	札幌工業	公立	○	○			
	26	札幌平岡	公立	○				
	27	札幌稲雲	公立	○				
	28	札幌龍谷学園	私立	○	○			
	29	札幌東陵	公立	○				
	30	大麻	公立	○				

北海道サッカー協会(2018)、札幌地区サッカー協会(2018b, c, d)をもとに作成

表 2-5 高円宮杯のリーグ構成（札幌地区: 2018 年度）

リーグ名	学校名	リーグ名	学校名
札幌地区リーグ1部 (8チーム)	北海 1st	札幌地区リーグ3部 (7チーム×5ブロック)	札幌山の手 1st
	札幌大谷 2nd		札幌清田
	札幌第一 1st		東海大札幌 4th
	コンサドーレU-18 2nd		とわの森三愛 2nd
	札幌光星 1st		立命館慶祥
	東海大札幌 2nd		北海道文教大明
	札幌創成 2nd		札幌あすかぜ
	北星学園大附属 1st		札幌新川
札幌地区リーグ2部 (8チーム)	札幌新陽 1st		北星学園大付属 2nd
	札幌東		札幌啓成
	札幌第一 2nd		札幌旭丘
	北海道科学大高 1st		石狩翔陽
	札幌大谷 3rd		とわの森三愛 3rd
	東海大札幌 3rd		札幌創成 4th
	北海 2nd		札幌西
	とわの森三愛 1st		札幌南
			北海 3rd
			北海道科学大高 3rd
			札幌山の手 2nd
			札幌工業 2nd
			札幌龍谷学園 2nd
			北海道科学大高 2nd
			札幌大谷 4th
			札幌白石
			札幌丘珠
			札幌工業 1st
			札幌光星 2nd
			札幌平岡
			札幌稲雲
			札幌龍谷学園 1st
			札幌創成 3rd
			札幌新陽 2nd
			札幌東陵
			大麻
			札幌大谷 5th

札幌地区サッカー協会(2018b, c, d)をもとに作成

一方、⑤への不参加校の多くは公立高校である。表 2-6 は、2018 年度の⑤に参加していない札幌地区の 24 校を示している。(1)～(4)の 4 校を除くと他の 20 校は公立高校となっている。また、(5)札幌月寒、(6)札幌東豊のように、前年の 2017 年度に⑤に参加しながら、2018 年度の⑤には参加していない高校もある。

表 2-6 高円宮杯の不参加校一覧（2018 年度）

	学校名	公立／私立		学校名	公立／私立
1	北海学園札幌	私立	13	札幌北陵	公立
2	札幌北斗	私立	14	札幌平岸	公立
3	札幌静修	私立	15	札幌西陵	公立
4	北嶺	私立	16	札幌開成	公立
5	札幌月寒	公立	17	江別	公立
6	札幌東豊	公立	18	当別	公立
7	札幌英藍	公立	19	札幌厚別	公立
8	札幌琴似工業	公立	20	札幌藻岩	公立
9	野幌	公立	21	札幌手稲	公立
10	石狩南	公立	22	札幌白陵	公立
11	札幌北	公立	23	札幌南陵	公立
12	札幌国際情報	公立	24	札幌啓北商業	公立

北海道サッカー協会(2018)、
札幌地区サッカー協会(2018a, b, c, d)をもとに作成

以上より、札幌近郊の高校サッカー部が参加できる 6 つの大会の概要と、その実態をいくつかの表によって示してきた。小括として、札幌地区の高校サッカー大会について検討を進めるうえで重要視する点は以下の 2 つである。第一に、⑤高円宮杯、⑥フットサル大会は何らかの理由によって、多くの高校サッカー部が不参加であること。第二に、⑤に関して各高校は、[1] 複数チームを擁立する高校 [2] 1 チームのみで参加する高校 [3] 不参加の高校の 3 通りに場合分けできること、である。これらを踏まえて、[3] に該当する A 高校サッカー部の事例を通じて、次項より対外試合への参加をめぐる問題点について検討したい。

第 2 項 乗り越えなくてはならない参加条件

まずは、高校サッカー部が対外試合に参加するための具体的なプロセスから見ていこう。高校サッカー部が各大会に参加するには、大会の開催要項に記された「参加申込」欄に沿って申し込みを行う必要がある。たとえば 2017 年度②高体連の開催要項（札幌地区サッカー協会, 2017）の「参加申込」欄にはこのように記されている。

参加校は、次の各項の申し込み手続きを行うこと。

- (1)「参加申込書」「プログラム作成用エントリー表」の Excel ファイルを 5 月 8 日(月)15:00 までに当番校宛てにメール送信すること。
- (2)押印済みの「参加申込書」を 5 月 8 日(月)15:00 までに当番校宛てに FAX 送信すること。
- (3)押印済みの「参加申込書」の原本を 5 月 9 日(火)まで当番校に到着するように郵送するか、5 月 10 日(水)の監督主将会議の受付時に提出すること。

ここにある「参加申込書」などの Excel ファイルは、各地区サッカー協会のウェブサイト上でダウンロードできる。また他の大会もほぼ同様の手順で大会への申し込みが可能であり、デジタル環境が整う教育現場において、この手続きが各校や顧問教員にとって大会への参加障壁になるとは考えにくい。

では、実際に申し込み手続きを行うなかで想定される各大会への参加障壁について整理したい。用いるのは 2017 年度に行われた各大会の開催要項である。とくに本稿が注目すべきだと考える項目は、「参加料」「会場」「参加資格」「審判割り当て」の 4 点である。

表 2-7 は以上の 4 点についてまとめたものである。まず「参加料」を比較すると、⑤高円宮杯を除いた 5 つの大会の参加料は 10,000 円から 15,000 円程度である。⑤の参加料は他の大会と比較すると高額だが、リーグ戦方式で行われるため複数の試合が確約されている。たとえば、2017 年度の札幌地区リーグ 3 部では年間で 14 試合が行われ、1 試合当たりで換算すると 5000 円弱となる。つまり、トーナメント戦方式の大会にて 1 回戦で敗退するよりも割安だと考えることができる。ただし、試合数が多いほど交通費は増えるため、参加者にとって 1 試合当たりの参加料は実質的に 5000 円を超えると言えるだろう。

つぎに「会場」欄を見ると、参加校に会場担当が割り当たる大会は、⑤のみである。札幌地区において①春季大会と④新人戦は、事実上いくつかの高校が交代しながら会場を担当している。これは、顧問教員が当番校を担当できる人物であること、スタッフを担当する部員数が確保できること、グラウンドが規格を十分に満たしていること、などを考慮した際、札幌地区で該当する高校が 10 校程度に限られるからだと考えられる。

「参加資格」は、各大会の特徴を明確に示している。全国の高校が参加する②と③選手権に主な特記事項はなく、高い参加率を持つことが理解できる。①は、例年 4 月下旬から

5月上旬にかけて行われるため、参加申し込みの手続きを4月中に行わなくてはならない点は重要である。これは言い換えれば、4月に入学する高校1年生の入部を待たずして、2年生と3年生のみで11人以上の部員を確保できることが参加条件となりうるということである¹⁴⁾。同様に④も、3年生が出場できない大会のため、1年生と2年生のみで11人以上の部員が必要となる。また、④⑤⑥フットサル大会においては、「参加資格」欄に「連日の試合に耐えうる健康体であること」という記載がある。とりわけ⑤は試合数が多く、参加すれば他の大会とあわせて定期的に試合出場機会が提供されるため、このような記載があると考えられる。

最後に「審判割り当て」である。特記すべきは、⑤と⑥である。⑤はリーグ戦方式で行われ、他の大会と比較すると試合数が特段に多くなっている。そのため、大会を成立させるために、参加する高校は審判資格所有者を2名以上用意しなくてはならない。たとえば、審判資格を持つ顧問教員が1名の場合、最低1名の生徒、もしくは異なる顧問教員が日本サッカー協会公認の審判資格を取得する必要がある。この規定は、本章の第1節で紹介した社会人リーグにも存在するため、リーグ戦方式の大会への参加と審判資格の取得はセットになりつつあると言えるだろう。また⑥は、フットサル審判という特殊な資格を必要とするため、不帯同審判料を支払うという救済措置が用意されている。

以上の大会開催要項を整理すると、⑤および⑥の参加率を低下させていると考えられる事項は、(1)参加料、交通費による経済的負担(2)審判および会場スタッフ業務による実務的負担(3)連日の試合による日程的および身体的負担、の3点であることが推測された。また参加率の高い①および④の参加に関しても、(4)2学年のみでの十分な部員数の確保、が重要であることが把握できた。そのため、これらの4つの項目を大会への「参加障壁」、これらの参加障壁をクリアすることを「参加条件」と定義して、A高校サッカー部がいかにして参加条件を満たしていくかについて論じていきたい。

なお、A高校の事例に入る前に、A高校以外の小規模のサッカー部の大会参加状況を概観したい。ここで特に着目するのは、前述した(3)と(4)の関係である。このリーグ戦の実施期間と部員数の関係について論じるにあたり、参与観察中に入手した④新人戦の大会プログラムを用いながら参加率の低い⑤高円宮杯に関して分析を行う。なお、④のプログラムを用いて⑤を分析するという一見いびつな方法を用いる理由は、1、2年生のみが参加できるという④の特徴を利用し、3年生を除いた各チームの選手数を把握するためである。

表 2-7 各大会の開催要項の特記事項一覧（2017 年度）

	①春季大会	②高体連	③選手権	④新人戦	⑤高円宮杯	⑥フットサル大会
参加料	10,000円	登録選手1名につき500円(最大20名で10,000円)	13,000円	15,000円	73,000円(1部) 73,000円(2部) 68,000円(3部)	11,880円 +フットサル登録料4,500円
会場	会場校が担当できる高校の協力により実施	該当する年度の当番校および周辺の高校	②高体連の上位進出校	会場校が担当できる高校の協力により実施	参加各チームグラウンド	区民体育館
参加資格	参加申し込みの締め切りが4月中旬	特記事項なし	特記事項なし	高1、高2のみ 「連日の試合に耐えうる健康体であること」	「連日の試合に耐えうる健康体であること」	「連日の試合に耐えうる健康体であること」
審判割り当て	最低1名	1名	1名	最低1名	2名 「各参加チームに割り当てる」	フットサル審判1名。帯同できない場合、不帯同審判料4,320円

札幌地区サッカー協会(2017a, c, e, h, j, k, l, m)をもとに作成

多くの高校3年生にとって、②や③は、高校生活最後の大会として位置づいている。そのため、3年生はこれらの大会の敗退後、部活動を「引退」し、1、2年生は④と⑤の残りの試合に向けて活動を再開することになる。④は大会規定上、1、2年生のみで参加する唯一の大会である。しかしここで注目すべきは、表2-8にも示される通り、⑤もまた、③が終了し3年生が部活動を終えて以降、1、2年生のみで参加しなくてはならない時期を含む大会だということである。この9月から10月上旬は、③④⑤の3つの大会が重なるため、生徒たちの身体的負担が大きくなる時期である。つまり、2学年の生徒のみでこの時期の連戦に耐えうるほどの部員数を確保しているという確信があつてはじめて、大会が開始する4月時点で⑤にエントリーできると言える¹⁵⁾。

表 2-8 各大会の開催期間（網掛け部分: 2017 年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
①春季大会							
②高体連							
③選手権							
④新人戦							
⑤高円宮杯							

札幌地区サッカー協会(2017a, c, e, h, l)をもとに作成

表 2-9 新人戦の登録選手数と高円宮杯の参加／不参加校一覧（2017 年度）

⑤参加校		⑤不参加校	
あ 高校	39	ア 高校	17
い	19	イ	21
う	27	ウ	16
え	34	エ	16
お	49	オ	19
か	60	カ	11
き	22	キ	31
く	52	ク	27
け	36	ケ	33
こ	19	コ	21
さ	42	サ	31
し	29	シ	25
す	20	ス	21
せ	22	セ	23
そ	45	ソ	28
た	44	タ	25
ち	56	チ	18
つ	21	ツ	30
て	30	テ	15
と	32	ト	16
な	25	ナ	19
に	49	ニ	32
ぬ	54	ヌ	23
ね	30	ネ	33
の	28	[3]平均 23 (人)	
は	36		
ひ	36		
め	48		

[1]平均 44 (人)

[2]平均 30 (人)

北海道サッカー協会(2017)、札幌地区サッカー協会(2017g, j, k, l)をもとに作成

表 2-9 は、2017 年度④に参加した 52 校の登録選手数（高 1、2 年生の選手数）を、同

じく 2017 年度⑤の参加／不参加に分けて示したものである。なお網掛けの部分は、複数チーム擁立校を示した。⑤について各校は、〔1〕複数チームを擁立する高校〔2〕1チームのみで参加する高校〔3〕不参加の高校の3通りに場合分けできることは先に述べた。

この表を見ると、④への登録選手の平均人数は、それぞれ〔1〕44人〔2〕30人〔3〕23人となり¹⁶⁾、2学年の選手数が⑤の参加に大きな影響を及ぼすことが示唆された。なお、この人数は④への登録選手数であり、当時の怪我人などによって実際の部員数との変動はありうる。だが、この表2-9を用いる目的は、9月から10月にかけてプレイ可能な各校の選手数を把握するためであり、この値の変動に問題はないと考える。また、「か高校」の登録選手数は60人となっているが、これは④の大会プログラムに記載される登録選手数の上限が60人であったためであり、「か高校」の1、2年生の実際の部員数はさらに多いことも想定される。その場合、〔1〕と〔2〕〔3〕の部員数の差はより拡大することになる。

以上より、各大会の参加条件について、とくに参加率の低い⑤に焦点を当てながら検討してきた。その結果、（1）参加料、交通費による経済的負担（2）審判および会場スタッフ業務による実務的負担（3）連日の試合による日程的および身体的負担の3項目をクリアすることが大会への参加条件となっており、これらが参加障壁となった場合、参加を見送る高校が存在する可能性が推測された。また、①や④だけでなく、⑤においても、（4）2学年のみでの十分な部員数の確保、が大会への参加障壁となりうることが示唆された。これは、⑤が年間を通じて行う大会であり、高校3年生が部活動を終えて以降、2学年の生徒のみで連戦に臨まなくてはならない時期を含むからである。

第3項 参加障壁の複合による非線形的な負担の増幅

ここまで、主に資料分析をもとに、参加率の低い⑤高円宮杯を中心として、各大会の参加障壁について整理してきた。また、この⑤においては、〔1〕複数チームを擁立する高校〔2〕1チームのみで参加する高校〔3〕不参加の高校と3通りの高校があり、それぞれの部員数には大きな差があることを示した。

本項では、〔3〕不参加の高校にあたるA高校サッカー部での事例をもとに、前項で示した大会への参加障壁が実際にどのような影響を及ぼしていたかについて検討する。まず、参与観察中にA高校サッカー部が唯一⑤に参加した2015年度のデータをもとに、小規模

の部活動の生徒たちが（２）審判および会場スタッフ業務による実務的負担（３）連日の試合による日程的および身体的負担、をどのように強いられていたかを述べる。つぎに、（１）参加料、交通費による経済的負担（３）（４）２学年のみでの十分な部員数の確保、などを抱えながら、小規模の部活動の生徒たちが長期的な見通しを持って活動することの困難性について記述する。そして最後に、これまで詳細に記述することのできなかった⑥フットサル大会について、生徒たちの活動をもとに言及する。

調査期間中、A 高校サッカー部が⑤高円宮杯に参加したのは 2015 年度のみであり、2016、2017、2018 年度は、それぞれ前年度の時点で不参加を決めている。そして、A 高校サッカー部が 2016 年度以降⑤への参加を断念したのは、2015 年度の経験が大きく影響していると言える。

まず 2015 年度の⑤に関して、教員 B は前年度の 1 月時点で参加するかどうか決めかねていた。当時はまだコーチではなかった筆者が 2015 年度の予定について質問した際、彼は、「この年代（当時の 1、2 年生）の選手たちは技術的にもしっかりしてるんですよね。ブロックリーグ（⑤）にも出られそうだな」と語りながらも、⑤という大会そのものについては、「上に上がる（昇格制度のある）リーグはもう、強豪校のものですから」と述べ¹⁷⁾、⑤がすでに彼らのような公立高校サッカー部の生徒にとって敷居の高い大会となり、参加することが困難になりつつあると考えていた。

だが結果として、A 高校サッカー部は、2 年ぶりに⑤に参加することを決めた。その際、まず必要となったのは審判資格を取得する生徒を決めることだった。当時の A 高校サッカー部で審判資格を所有していたのは B のみだったため、2 名の審判が必要となる⑤に参加するためには、もう 1 名の審判資格所有者が必要だった。審判資格の取得には、札幌市内で行われる講習会に出席する必要がある、合計で 5 人の生徒がこの講習会を受講し、資格を取得した。

表 2-10 A 高校サッカー部の大会参加状況

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
①春季大会	○	○	○	○
②高体連	○	○	○	○
③選手権	○	○	○	○
④新人戦	○	×	○	○
⑤高円宮杯	○	×	×	×
⑥フットサル大会	○	○	○	×

大会参加のために審判資格の取得が必要な生徒数は最低 1 名であり、当時 12 人しか部員がいなかったサッカー部から 5 人もの生徒が講習会を受講する必要があるのかどうか筆者は疑問に感じていた。だが実際に⑤に参加するにつれ、複数名の審判資格所有者を用意する意味が十分に理解できた。先に述べたように、当時のサッカー部の部員数は 12 人だった。つまり、サッカーという競技を行うにあたり最低限度にほぼ等しい人数であり、当時のサッカー部は、部員全員がスターティングメンバーとして試合に出場する可能性を十分に持っていた。通常、部員が十分に足りている高校であれば、試合に出場しない選手が審判を務めることができるため、試合に出場することの少ない下級生や、マネージャーを務める生徒などから何人か審判資格を取得しておけば問題となることはない。だが、少人数で構成された A 高校サッカー部では、そもそも試合に出場しない選手はほぼ存在しないし、出場時間の短い選手が誰になるのか目処を立てることもできない。そのため、誰が審判業務を務めることになっても良いように余裕を持って審判資格を取る必要があったのである。

結果として、4 月から入部してきた新 1 年生よりも審判資格を取得した上級生のほうが技術的に優れていたため、上級生は試合に出場しながら同日に審判を務めなくてはならなかった。だが、日によっては A 高校の試合の次試合に審判業務が割り当てられており、生徒は 90 分の試合を走り終えた直後に¹⁸⁾、急いで審判服に着替え、審判を務める必要があった¹⁹⁾。A 高校は強豪チームとは言えないため、ただでさえ試合中は守備に走らされる時間が長く、生徒たちの疲労も激しい。にもかかわらず、自身が出場する試合の直前や直後に審判として 90 分間走らなくてはならない姿は、翌年度以降の⑤の不参加を決意するのに十分な理由だった。

なお、表 2-7 にもあるように、⑤の開催要項の「審判割り当て」欄には「各参加チームに割り当てる」とのみ書いており、このような試合間隔は参加して初めて体感できるものである。大会の日程や試合間隔は、試合に出場した選手が審判を務めなくてはならないような少人数のサッカー部を想定して作成されていない。そのため、多くの部にとってはまったく問題として浮かび上がらない部分が、少人数のサッカー部の生徒たちにとっては深刻な身体的負担となって課され、のちの大会への参加障壁として表出化していたことになる。

このような経験を経て、A 高校は 2015 年度に⑤高円宮杯に参加したものの、2016 年度

以降は再び不参加をつづけている。この大会に参加している高校について、Bは「ブロックリーグ出てるチームはどこもタフですよ。あそこで現実をわかっている」と述べ²⁰⁾、厳しい戦いのなかで揉まれることの重要性をあげつつ、⑤に参加する難しさや参加を決める基準については、「やっぱり試合に穴は開けられないので、『ああ、良いチームになりそうだな』っていうのは3年に1回くらいですかね」と述べている²¹⁾。

ここで、「穴を開ける」とは、試合に必要な選手数を満たすことができず、不戦試合とになってしまうことを指している。一部のチームにとってはまったく心配する必要のない事態だと思われるが、小規模のA高校サッカー部にとって、11人以上の生徒が部活動に参加できない事例は頻繁に起こりうる。実際、練習試合に11人の選手を揃えることができず急遽卒業生に協力を依頼したり、筆者が出場したりする事例が頻繁に起きていた²²⁾。なお、こうした部員以外のプレイヤーの援助を必要とする活動形態については第4章で詳しく述べることにする。

11人以上の選手が揃わない理由の一つとしては、交通費の問題がある。第1章の第3節でも示したように、A高校は郊外に位置しており、都市部や他の市区町村に移動するには電車を使わなくてはならない。たとえばA高校の最寄り駅から、2015年度の⑤の会場としてもっとも生徒たちが使用したグラウンドへは片道860円かかり、試合のたびにかかる交通費が生徒たちにとって大きな負担となっていた。2015年度の⑤を例にすれば、A高校を会場とした1日を除き、残りの12試合はすべてA高校のある地域以外で行われている。そのため、交通費の捻出を理由に試合を欠席する生徒も多く存在した。

また、「穴を開ける」ことについて⑤の開催要項の「その他」欄には、「参加申し込み後の棄権は一切認めない。やむをえない事情で参加不可能になった場合は、直ちに本大会事務局を通じて（公財）北海道サッカー協会に通知するとともに、文書にて理由書を提出する。理由書にもとづき審議の上で処置するが、最低次年度の本大会には出場できない」と明記されている。そのため、部活動に積極的な生徒が11人以上揃う見込みが確実にあった2015年度を除き、A高校サッカー部は⑤への参加を見送ってきた。

さらに、A高校サッカー部にとって⑤の参加を踏みとどまらせる理由の一つとして、参加申し込みを行う時期の問題がある。まず繰り返し述べてきたように、この大会は年間を通して行われ、3年生が部活動を終えて以降もつづく長期間にわたる大会である。よって、前項でも言及した通り、1年間を通じて11人以上の選手がいることに確証がない限り、大会が開始する4月時点で参加を決断することは非常に難しい。そして、とくにA高校サッ

カー部では、春季の段階で、同年の秋季に何人の部員が所属しているかを予測することは困難を極めていた。たとえば 2015 年度から 2017 年度に入部した部員数は、それぞれ 12 人（うち 7 人退部）、8 人（うち 1 人退部）、6 人（うち 4 人退部）であり、部員数が多いとは言えないなかで、さらに途中退部者も多いという状況にある。このような部の特徴を踏まえると、4 月時点での部員数は秋季の状況を予測するための参考にはまったくならず、年間を通じて 11 人以上の部員を確保できるかは不透明なまま、⑤への参加を断念せざるをえなかったのである。

くわえて、A 高校の生徒たちは⑤だけでなく、2016 年度の④新人戦にも参加していない。これは、2 年生の宿泊研修と④の日程が重なり、1 年生のみで 11 人の選手を揃えることができなかったからである。なかには、苦もなく 1 学年 11 人以上の選手を揃えることができる高校サッカー部も多くあるだろう。そうした高校は、各校が土日に行う授業や模試、学校行事などの影響を受けることなく大会に参加できる。だが、A 高校のように 1 学年 11 人以上の選手を揃えることのできない高校は、土日に組み込まれる学校行事の影響をも大きく受けることになる。つまり、ある学年が何らかの理由によって部活動に参加できない日程を考慮した場合、生徒たちは大会への参加断念を受け入れざるをえないのである。

このように、生徒たちは試合出場機会を獲得できるはずの⑤に参加できず、その恩恵を受けることはなかった。こうしたなか、生徒たちが活路を見いだしたのがフットサルである。フットサルは競技に必要な選手数が 5 人と少ない。また A 高校は部活動が盛んではないことから体育館のスケジュールに余裕があり、活動場所をグラウンドから移行する際に不都合なことはなかった。

このフットサル活動の最終的な目標の一つとして、生徒たちが参加してきたのが⑥フットサル大会である。私立高校の強豪サッカー部とは異なり、A 高校では、高い技術を持った選手が 11 人揃うことは非常に難しい。一方、フットサルは競技に必要な選手数が少なく、他校との戦力差が縮まる傾向にある。そのため、生徒たちの言葉を借りれば、他の大会と比べて「ワンチャン（もしかしたら勝てる可能性が）ある」大会として意味づけられていた。実際、調査期間中にも、この大会で決勝トーナメント戦への進出を果たしたり、②高体連や③選手権で全国大会出場歴のある高校に対して 1 点差で惜敗したりするなど、他の大会と比較して好成績を残してきた。

このように生徒たちにとって重要な大会として位置づく⑥は、フットサルという競技自

体の普及により、ここ数年で大会の規模が拡大してきた。なかでも開催要項に大きな変更が見られたのは 2013 年度である。表 2-1 1 は、2012 年度から 2013 年度にかけて行われた⑥の開催要項の変更を示したものである。下線部は、大きな変更点について筆者が加えたものである。まず表 2-1 1 の「主旨」欄や「全国大会への出場権付与」欄からもわかるように、2013 年度以降、⑥は全国規模で行われる大会となった。そのため札幌地区の大会は北海道大会の予選へ、北海道大会は全国大会の予選へと位置づくことになった。しかし、「全国大会への出場権付与」欄からもわかるように、⑥の全国大会は、翌年度の夏に行われる。これは言い換えれば、高校 3 年生が⑥に参加し、もし勝ち進んだとしても、翌年度にはすでに高校を卒業しているため全国大会に参加できない、ということである。

この問題の解決策として採用されたのは、3 年生の参加を実質的に制限する（各チーム 3 人までにする）という規定の変更であった（表 2-1 1 「参加資格」欄参照）。つまり、冬季に行われる⑥は、④新人戦と同様に、主に 1、2 年生が参加する大会に事実上書き換えられたのである。こうした規定の変更により、各校の 3 年生は、⑥に出場する機会を喪失することになった。

だがここで重要なのは、A 高校サッカー部のような小規模のチームにとってこの大会規定の変更は、単なる 3 年生の試合出場機会の喪失にとどまらず、下級生の身体的負担の蓄積や練習メニューの規定化につながるということである。A 高校サッカー部は部員が少ないため、3 年生が部活動を「引退」したあともたびたび練習や練習試合に参加し活動の成立を支援するという、ある種の伝統のもとに活動してきた。そのため、下級生や顧問教員は、3 年生のサポートを大いに必要とし、それを前提としながら部を運営してきた。だが 3 年生にとっても⑥に出場できないのであれば、受験や就職活動を控えるこの時期に、部活動に参加する動機は薄れてしまう。実際、2017 年度の⑥には 5 人の 3 年生のうち、テツ、ユキヒロ、サトシの 3 人のみが選手として登録された。そのため、この 3 人は部活動に継続的に参加していたものの、登録されなかったジロウとショウゴはこの時期の活動にほぼ顔を出さなかった。

そして、日々の活動に出席する人数が 2 人増えるかどうかは、A 高校サッカー部にとって非常に重要な問題である。なぜなら、小規模のサッカー部における活動人数の増減は、日々行うことのできる練習メニューの種類や練習試合における交代選手の数に直結するからである。つまり、⑥における 3 年生の選手登録数の変更は、結果として下級生の疲労の蓄積や練習メニューの規定化につながり、小規模のサッカー部の日々の活動に大きな影響

を及ぼしていたのである。

小規模のサッカー部にとってフットサル活動は活路とも言える存在であった。だが、大会の規模拡大化とそれにとまなう規定の変更は、直接的に参加を制限された上級生の活動だけでなく、彼らの協力を受けながら活動してきた下級生の活動にも制限を課した。対外試合の構造の再編は、思わぬ形で、もっとも周縁に位置する参加者が行う日々の活動にまで影響を及ぼしているのである。

表 2-1 1 フットサル大会の大会規定の変更

	2012年度	2013年度
1.主旨	北海道のフットサルの普及・振興のため、高校生年代のフットサル大会を開催し、併せてフットサル技術の向上と健康な心身の育成を図ることを目的として、本大会を実施する。	北海道のフットサルの普及・振興のため、高校生年代のフットサル大会を開催し、併せてフットサル技術の向上と健康な心身の育成を図ることを目的として、本大会を実施する。 <u>併せて、第1回全日本ユース(U-18)フットサル大会(仮称)北海道予選を兼ねる。</u>
8.参加資格	2012年度、公益財団法人日本サッカー協会のフットサル個人登録を行った、16歳以上で18歳未満(ただし、高等学校在学中の選手にはこの年齢制限を適用しない。)の選手により構成されたチームであること。	2013年度、(公財)日本サッカー協会のフットサル個人登録を行った、1996年4月2日以降、1998年4月1日以前に生まれた選手及び3名を上限に高校3年生(18歳)の選手により構成されたチームであること。
21.全国大会への出場権付与		<u>優勝・準優勝チームには、2014年8月28日(木)～31日(日)駒沢オリンピック公園体育館他で開催される第1回全日本ユース(U-18)フットサル大会(仮称)の参加を義務づける。</u> ※大会参加条件 ①2014年度(公財)日本サッカー協会に加盟登録(フットサル第2種(U-18))を条件とする。(サッカーチームおよび準加盟チームを含む。) ②大会参加人員は1チーム当り24名(選手20名、役員4名)を上限とし、その選手はU-18北海道予選に登録した者とする。 <u>ただし、3名を上限に開催要項8.参加資格を満たした選手を変更(追加)することができる。</u>

北海道サッカー協会(2012, 2013)をもとに作成

以上より、北海道の高校サッカー部が参加資格を持つ6つの大会の参加率に大きな差異があることを出発点に、各大会の参加障壁および参加条件を資料分析と参与観察にもとづいたデータより考察してきた。最後に、それぞれの方法によって導かれた結果を重ね合わせながら、生徒たちが小規模の部活動から保障されうる対外試合に関する問題についてまとめたい。

すでに述べたように、調査対象とした6つの大会には、その参加率に大きな差異があった。具体的には、年間を通じたリーグ戦方式で行う⑤高円宮杯の参加率が50%程度にとどまっていることが把握できた。一方で、⑤の特性を活かし、控え選手にも試合出場機会を与えている高校も存在した。そのため、この大会に関して〔1〕複数チームを擁立する高校〔2〕1チームのみで参加する高校〔3〕不参加の高校と3通りの高校に場合分けし、分析を進めた。

なお〔3〕のサッカー部の部員数は、〔1〕〔2〕と比較すると少ないことが示された。そのため、(1)参加料、交通費による経済的負担(2)審判および会場スタッフ業務による実務的負担(3)連日の試合による日程的および身体的負担(4)2学年のみでの十分な部員数の確保の4つの参加障壁をクリアしうるかどうかが各校にとって参加条件となり、これらが障壁となる場合、対外試合への参加が困難になりうるということが推測された。

そして、本節の分析からわかったことは、これら4つの参加障壁の一つひとつをクリアしようとしても、複数の障壁が組み合わさることで生じる参加者への負担が非常に大きく、大会参加を断念せざるをえない場合があるということである。つまり、小規模の部活動に所属する生徒たちの対外試合への参加条件は、開催要項から読み取ることのできる参加障壁を単にクリアすることではなく、いくつかの参加障壁が複合することで生じる非線形的に増幅した負担に耐えうるか否かであることが明らかになった。

たとえば(2)と(3)について、控え選手のいないA高校サッカー部の生徒たちは、試合間隔の配慮の欠如によって、試合に出場する選手が自身の試合の直前もしくは直後に審判業務を行わなくてはならなかった。そのため、生徒たちはわざわざ審判資格を取得したものの、翌年度以降の大会参加につなげることはできなかった。また(1)(3)(4)に関しては、度重なる遠方の会場への交通費の捻出を苦にする生徒の欠席や、年間を通じて所属する部員数を予測できない状況が重なり、長期間にわたる⑤への参加をより困難にさせていた。とりわけ(3)は、他の参加障壁と複合することで大きな負担として生徒たちにのしかかっており、長期間を通じて行われる今日のリーグ戦方式の大会への参加率が

低い状態でとどまっている要因が理解できた。

この結果を踏まえると、この節の冒頭でも取り上げた **M・T・M** メソッドや長期間を通じて行われるリーグ戦方式の大会は、小規模の部活動には適しているとはいいがたい。なお、日本サッカー協会公認の指導者資格を取得する講習で配布される教本には以下のように記されている。

リーグ戦では、たとえ試合に負けても、大会は続きます。従ってその試合の結果はその後のリーグでの順位に影響しリセットができません、それに対してノックアウト方式では何点差であっても負ければ大会は終わります。これまでの課題克服への取り組みなどがリセットされてしまいがちです。一つの試合でも、シーズンを通してでも、ゲームでのさまざまな流れを子どもたち自身が考えて闘って行くことがリーグ戦では求められます。勝ち星や勝ち点を意識し、負けるにしても少しでもベターな（点差等）負けを追求しなければならないのです。リーグを年間通して最後まで闘いぬくことから得られる豊かな経験が子どもを育てるのです。（日本サッカー協会, 2012a: 29）

ゲームで課題を見つけ、トレーニングで次のゲームに向けて準備をし、より良いゲームをめざし、それをゲームの中で積極的にトライ&エラーを重ねて行く中で、身につけていくことになります。この経験をコンスタントに積み重ねていくことが大切です。トライ&エラーが積極的にできるような雰囲気や環境が子どもたちを育てます。

そのサイクルを別の表現をすると、「**M・T・M**」となります。マッチ、トレーニング、マッチの略です。試合とそれに基づくトレーニングとでうまくなっていく。ゲームからトレーニングすべきことが見える。ゲームが最良の先生なのです。（日本サッカー協会, 2012a: 29）

日本サッカー協会は、若者がサッカーをする最適な環境について、「シーズンを通して」「リーグを年間通して」「トライ&エラーを重ねて」「経験をコンスタントに積み重ねていく」などの言葉を用いて表現している。つまり日本サッカー協会は、**M・T・M** メソッドやリーグ戦方式の大会を通じて、長期的な目標に向かって「築き上げる」活動を理想としている。だが、「築き上げる」活動は、小規模の部活動において経験することは非常に難しい。なぜなら、本章で記してきたように、小規模の部活動で生徒たちが得ることのできるスポ

ーツの機会は限られているからである。では、小規模の部活動ではどのような活動が可能なのだろうか。この点については次章以降で詳しく検討していきたい。

なお、本節の最後に、高校サッカー部の生徒たちが参加する対外試合の参加条件について、想定されるいくつかの指摘と、それに対する筆者の見解を示したい。第一に、⑤高円宮杯は 2011 年度に新設された大会であり、不参加の高校が既存の大会から排除されたわけではない、という指摘である。たしかに⑤に不参加のほぼすべての高校は、他の大会に引き続き参加できており、彼らは排除の対象になったわけではない。しかし本章は、すべてのサッカー部の生徒たちが提供されうるスポーツの機会の現状について改めて整理することを目的としている。そのため、たとえ⑤が新設の大会であったとしても、参加資格を持つ部活動の生徒たちが、⑤に参加するか否かを選択したのではなく、そもそも選択肢を持つことができていないという事例については論じる必要性が十分にあると考える。

第二に、⑤に参加できない生徒たちに対する救済措置として、練習試合の設定を補助する制度はないのか、という指摘である。たしかに、いくつかのサッカー部の顧問教員たちの協力のもと、⑤に参加できないサッカー部同士が練習試合を行う「地区リーグ」と呼ばれる制度がある。この制度は、大会参加に際して審判資格を必要とせず、また日程や試合時間を対戦相手と調整できるため、とくに公立高校にとって有用な制度となっている。だが第一の指摘に対する筆者の見解にもあるように、本章はすべての部活動が生徒たちに提供しうるスポーツの機会および対外試合をめぐる問題について論じている。そのため、多くの高校サッカー部の生徒たちが、⑤と「地区リーグ」のどちらにも参加できる選択肢を持つ段階に至っていないという現状は論じるべきだと考えている²³⁾。また、すべての高校が⑤に参加できるのであれば、そもそも⑤と「地区リーグ」のように対外試合の種類を増やす必要がない。大会の数が増えれば、それを支援する教員や関係者の負担が増加する可能性は十分にあり、既存の大会にすべての高校が参加できるようにすることがもっとも負担の少ない運営の形であると考ええる。

第三に、⑤は試合出場機会の提供を目的としているが、そもそも強豪チームを対象とした大会として新設されたのではないか、という指摘である。この点に関しては、本節で述べてきた参加条件によって参加チームがふるい分けられ、強豪チームのみが参加できる大会として事後的に存在意義が変容し、Bのように「(⑤は) 強豪校のものですから」と認識せざるをえない状況が作り上げられていると強く言及したい。

またこの B の発言からもわかるように、A 高校サッカー部では⑤が他の大会と比較して

レベルの高い大会であることは十分に理解されている。たとえば B は、「普段の練習では起きない「エラー」が相手のレベルが高くなることによって経験できる」として、⑤の有用性について述べている²⁴⁾。また⑤のような公式大会では、普段プレイする土のグラウンドではなく、芝のピッチでプレイできる機会を得ることができ、生徒たちには貴重な機会となる²⁵⁾。こうした恵まれた環境が用意された大会に参加する資格を有しているがゆえに、参加できない教員や生徒たちは、彼らが理想とする活動とのギャップを強く実感するのである。

第四に、高等学校体育連盟が主催として関与していない⑤のような対外試合を分析対象として含む必要はあるのか、という指摘である。たしかに、⑤はこれまでの研究において積極的に扱われてきたタイプの事例であるとは言いがたい。だが本稿では、今日の部活動で提供されるスポーツの機会は、部活動や学校、あるいは高等学校体育連盟との関係のなかではもはや完結するものではないことを指摘するために、むしろ積極的に取り上げてみたい。表 2-1 からわかるように、すでに多くの対外試合は高等学校体育連盟のみが主催となって実施されるのではなく、スポーツ協会が多分に関与しながら開催されている。むしろ本稿が調査対象としたすべての大会にサッカー協会やフットサル連盟がかかわっており、若者のスポーツの機会とスポーツ協会、あるいはスポーツ界との関係性について避けて議論するほうが不自然である。

また誤解を恐れずに言えば、生徒たちにとって、主催が高等学校体育連盟であるかスポーツ協会であるかは些細な違いである。彼らにとっては、どの団体が主催だとしても、貴重な対外試合の機会であることに変わりはないし、そもそも大会に参加するにあたり主催の団体を把握している高校生などほばいないのではないだろうか。生徒の視点から部活動を描く本稿では、「対外試合」についてというよりも「生徒たちにとっての対外試合」について描くことを狙いとしており、主催団体を理由に特定の対外試合を分析対象から省くことはしない。

くわえて、本稿が示した結果は、過熱する部活動の温床として批判されるトーナメント戦方式の代替案として無批判によいものとされてきたリーグ戦方式の大会の評価の再考を迫る。前述したように、日本サッカー協会はリーグ戦方式の大会の導入に積極的な姿勢を見せてきた（貝瀬・横田, 2005）。だが、本項でも述べてきたように、リーグ戦方式に特有の（3）連日の試合による日程的および身体的負担は生徒たちに重くのしかかっている。もし、若者のスポーツの過熱化や勝利至上主義を解決したいのであれば、リーグ戦かトー

ナメント戦かといった形式的な問題ではなく、「教育評価に堪えうる教育目標を具体的に示し、それを実現できるような制度設計をしていくこと」（神谷, 2015: 307）が重要なのではないだろうか。

さらに、⑤に参加できないことによる部活動への将来的な影響についても触れなくてはならない。高校生年代のスポーツの機会の多くを部活動に依存しているこの国において、部活動が進路に及ぼす影響は大きい（神谷, 2010; 園田, 2016）。言い換えれば、進路選択において大きな大会である⑤に参加できないサッカー部を避ける中学生の存在は十分に想定できる。現在、各地区のサッカー協会のウェブサイトを見れば、各チームが⑤に参加できているかどうかは誰しもが確認できる（表 2-6 参照）。もし、対外試合における試合出場機会の分配の偏りが地方の部活動の価値を相対的に低下させるとすれば、結果として、部員数の確保や部活動の存続を困難にさせ、最終的に生徒たちのスポーツの機会を奪ってしまう可能性は否定できないのではないだろうか。

第4項 対外試合のとある1日

本章の最後に、生徒たちが⑤高円宮杯に参加した 2015 年度のある 1 日について記したい。この日は、A 高校が会場校を担当した 2015 年 9 月 19 日である。生徒たちはこの日、〈1〉会場の準備・設営、〈2〉ウォーミングアップ、〈3〉他校同士の試合の審判やボールボーイ、〈4〉ウォーミングアップ、〈5〉ミーティング、〈6〉試合、〈7〉クールダウン、〈8〉会場の後片づけ、という流れをたどることになる。なお、ここでウォーミングアップを 2 度行う予定だったのは、すべてのスケジュールを少人数で担うため、1 度のウォーミングアップでは時間を十分に取ることができないと想定されたからである。

この日の集合時間は 7 時 30 分という非常に早い時間であった。A 高校はアクセスが悪く、公共交通機関を使ってこの時間に到着する方法はない²⁶⁾。そのため、たとえば都市圏から通うカズキは保護者に送迎してもらっていた。また他の生徒は自転車に来ていたが、集合時間に遅刻してくる生徒もいた。土日の練習は午前 9 時から始まることが多く、いつもより早い集合時間に生徒たちも眠たそうな様子だった。

生徒たちがぞろぞろと集まってくるが、何人かの 1 年生がいつまで経っても姿を見せない。1 年生のサトシとユウジに聞くと、「マサシはなんか熱出たって言ってました。まあサボりっすね」「呼びに行く？あいつ家すぐそこですからね」と答えた。次章で詳しく記述す

るが、この時期の生徒たちの「サボリ」は活動の成否を危ぶませる大きな問題となっていた。この日は4人の1年生が欠席し、欠席すると連絡があったのはテツのみだった。また、②高体連の敗退後に「引退」した3年生のアキヒロが人数不足を補うように練習試合に参加した。なお教員Cは不在だった。

なお前日まで、生徒たちは練習の合間を縫って草むしりをつづけてきた(図2-2参照)。これは前節で述べたように、グラウンドの全面を使用して練習をする機会がないため、使用していない部分から雑草が大量に生えてくるからである。この日の前日も、練習後の雑草の処理に時間がかかり、事前に会場の準備をしておく余裕はなかった。

〈1〉会場の準備・設営は、全員で行うことになる。多くの部員がいる部活動では、試合に出場しない生徒や下級生がこうした準備を担う場合もあるだろう。だが少人数のA高校サッカー部では、学年や試合の出場予定によって、誰かが作業を免れることはない。

この準備は主にピッチ設営とグラウンド整備の2つに分かれる。とくに教員や主将からの指示はなく、それとなく2つに分かれていったが、この日は数人の2年生と教員Bがピッチ設営を担当し、残りの2年生と1年生、筆者がグラウンド整備を担当した。1年生のユウジはグラウンド整備をやらなくてはならないことに明らかに不服そうな態度を示していた。日々の活動と代わり映えのない作業は人気がなく、下級生がやらざるをえなかったとも言える。

ピッチ設営の主な作業はラインパウダー(石灰)を使ってグラウンドにラインを引くことである。3人1組となり、2人が長尺のメジャーを用いて目安を作る。その目安の上で残りの1人がラインカーを用いてラインを引いていく。もともとグラウンドにはスズランテープが巻かれたペグが刺さっており、そのペグを結ぶようにメジャーで目安を作るが、滅多に試合会場とならないA高校ではペグがなかなか見当たらない。ペグを見つけることができなかった場合は、他のラインを先に引き、最後に点と点を結ぶようにラインカーでラインを引いていく。

その他のピッチ設営には、ベンチの設営、コーナーフラッグの設置、自分たちがウォーミングアップや試合中に飲むドリンクの作成などがある。ベンチは、パイプ椅子を並べた即席のもので、屋根として使用するタープはない。またこの日はA高校を含めて4つの高校が集まるため、普段はラグビー部が使用しているグラウンドを借りてウォーミングアップゾーンとして開放し、マーカーコーンでグリッドを作った。グラウンド整備をする生徒たちは、ラインを引く生徒たちの作業に間に合うように、とんぼを用いてグラウンドを均

す。だが、ほぼ半数の生徒をピッチ設営に割いているため、ボロボロのとんぼを持った数人の生徒たちが何往復もしなくてはならない。

早朝からの作業ということも相まってなかなか作業のエンジンがかからない。結局、〈1〉会場の準備・設営に2時間以上かかり、10時に開始予定の他校同士の試合直前まで作業をしなくてはならなかった。そのため、1試合目に出場する他校のウォーミングアップがすぐに始まり、〈2〉ウォーミングアップをする時間はほとんどなく、グラウンドを何往復かランニングするにとどまった。

10時になり、生徒たちは〈3〉他校同士の試合の審判やボールボーイをしなくてはならない。主審は教員Bが担当し、副審を2年生のユウキが担当した。グラウンドを囲むボールボーイは1年生が担当した。1試合目が強豪校の試合であったことから、他校のウォーミングアップが始まるにつれグラウンドにはピリピリとした雰囲気の流れており、ユウキはその後の自らの試合よりも、ミスなく副審を担当できるかを心配していた。他の2年生は朝から始まった〈1〉に目処が立ちリラックスしている様子だった。多くの生徒はスマートフォンを使ってゲームをしているが、なかには早めの昼食をとっている生徒もいる。するとハーフタイムに教員Bから2年生に対して、早めに昼食をとって1試合目の後半は1年生とボールボーイを代わるようにという指示があった。

1試合目は片方の高校が大きくリードする展開だったため、ユウキが心配するような些細なミスも許されない試合展開とはならなかった。だが、高円宮杯は試合時間が90分であるため、レギュラー選手のユウキは審判として90分走ったあと、自身の試合のために90分走らなくてはならなかった。フォワードであるユウキは、他のポジションと比べると運動量も多く、本来であればチームとして少しでもコンディションを万全にして出場してほしいが、少人数の部活動ではどうすることもできない。

12時に1試合目が終わり、13時の試合開始までは〈4〉ウォーミングアップとなる。2時間ほど余裕があったにもかかわらず、ユニフォームに着替えていない生徒がいて始まるのに時間がかかる。〈2〉ウォーミングアップではほとんど体を動かすことができなかったため、ボールを使ったウォーミングアップを行う。生徒たちは誰に言われるわけでもなく、近くにいる生徒たちとボールを蹴りはじめる。審判をしていたユウキが審判服からユニフォームに急いで着替えている。全員が揃うと生徒たちは1年生／2年生とアキヒロに分かれて「鳥かご」を始めた。6人の1年生は4対2、8人の2、3年生は5対3でボールを回した。その後、2人1組となってしばらくボールを蹴る。つぎに3人1組となり、1人が

投げたボールを2人で競り合ってヘディングをする。A高校にはヘディングが苦手な選手が多く、ウォーミングアップにヘディングのメニューが組み込まれることが多かった。最後にゴールを使ってシュート練習をした。ゴールキーパーのタスクは筆者とキャッチボールなどゴールキーパー用のウォーミングアップをしたあと、シュート練習にゴールキーパーとして入った。筆者はゴールのなかに入って、シュートが決まったボールを生徒たちに蹴り返す。

試合の約15分前になると、ウォーミングアップを終える。ジャージを着ていた選手のなかにはこのタイミングでユニフォームに着替える者もいる。また、レガース(すね当て)やドリンクを部室に取りにいく生徒や、校内のトイレに行く生徒もいる。この日出席していた生徒は14人だが、カズキは累積警告による出場停止のため、試合に出場できるのは13人だった。3年生のアキヒロが参加してくれていても最低限度の人数である。

試合直前の〈5〉ミーティングではBからスターティングメンバーが発表される。フォーメーションはオーソドックスな4-4-2で、ゴールキーパーはタスク、ディフェンダーは左からユウジ、リョウタ、ダイチ、アキヒロ、ミッドフィルダーは左からキョウスケ、ヤスシ、ユキヒロ、ショウタ、フォワードはユウキとサトシ。ベンチに座る控え選手はシュウトとショウゴの2人のみで、出場停止のカズキはベンチ入りすることができずに外からグラウンドを眺めている。13人しか選手がいない状態では、だいたいどのようなフォーメーションになるかは想像がつく。

この練習試合があった9月中旬は、8月末の③選手権を終え、次の④新人戦へと向かう時期である。チームでは、新人戦を見据えて、フォワードだったダイチがディフェンダーに、ディフェンダーだったユキヒロがミッドフィルダーにコンバートされた直後だった。ミーティングでBから特別な指示はなかったが、ポジションが変わった選手に対してポジション取りの指示があった。また「練習でやってきたことを出そう。ただそれを意識しすぎて原理原則を忘れないように」という指示があった²⁷⁾。

集合時間から5時間30分が経った13時、ようやく〈6〉試合が始まった。前半は15分ごろまで均衡状態がつづいたが、前半17分にDFラインのビルドアップのミスが2つ連続したところを相手にかっさらわれ先制点を取られてしまう。さらに前半20分には、ゴールキーパーのタスクがペナルティエリアでキャッチしたように見えたが、エリアの外でキャッチしたという厳しい判定を受けフリーキックを献上。そのフリーキックをクイックリスタートされ、2失点目を許してしまう。相次ぐ失点にこれまで張っていた緊張の糸

が切れてしまったのか、前半でさらに 2 失点を喫する苦しい展開。なんとか 1 点を返すものの、1 対 4 という厳しい前半となった。

普段はレギュラーとして試合に出場しているテツやカズキがいないとはいえ、もっとも下位のリーグにおいて（図 1-3 参照）前半で 4 失点という結果は相当にシビアである。筆者から見れば、それほど相手校と実力差があるとは思えない。だが、生徒たちがミスや不運な判定をきっかけにバタバタと失点を繰り返してしまうのはよくある試合展開だとも言えた。おそらく B も、自滅のようなこの展開に納得がいていなかったのだろう。ハーフタイムには、とくに 2 失点目のリスタートやセットプレーの対応について指示があった。なお、後半は 2 対 2 と互角だったものの前半に許したリードを取り返すことはできず、3 対 6 という大味な試合で敗れた。

試合が終わると長丁場の 1 日にさすがに疲れたのか、生徒たちもぐったりとした様子だった。本来であれば〈7〉クールダウンをする必要があったが、生徒たちはなかなか動き出せずにいる。これを見て B は、さきに〈8〉会場の後片づけをするように指示した。

〈8〉会場の後片づけは、用具撤収とグラウンド整備に分かれる。疲れきった生徒たちは、とくにグラウンドを再び何往復もしなくてはならないとんぼ掛けを明らかに敬遠している。そのため、2 つを同時進行することなく、全員で用具撤収から取りかかりはじめる。しかし、A 高校のとんぼは破損がひどく、全員分のとんぼが用意できない。そのため全員がいったんグラウンド整備をしようとしても、手持ち無沙汰の生徒が出てきてしまう。結局、さきに 1 年生がとんぼをかけているあいだに 2 年生がユニフォームを着替え、その後 2 年生がとんぼをかけているあいだに 1 年生が着替えていた。

最後に他校が使用していたトイレ前のスリッパを片づけ、職員玄関前に B と生徒たちが集まった。試合についての B からの講評は、お世辞にも良いとは言えない試合内容からすれば筆者には優しく聞こえた。だが、疲労でいっぱいの子供たちはすでに上の空のようだった。B は最後に、今日のような運営によって大会が成り立っていることを理解してほしいと生徒たちに伝えながら、この人数で慣れていない会場設営はみんなには大変だっただろうと生徒たちをねぎらいミーティングを締めた。生徒たちが自転車でそれぞれ帰路に着くころには、時計は 17 時を回っていた。

第2章／注

- 1) 北海道クラブユースサッカー連盟のホームページには、北海道コンサドーレ札幌の育成組織のほかに2チームが加盟チームとして記されている。だが、この2チームは2018年より活動を休止している。その結果、2018年度のクラブユース選手権 U-18 という大会では北海道予選が行われず、北海道コンサドーレ札幌 U-18 が全国大会へと自動的に進出した。なお育成組織とは、プロサッカークラブが運営することを義務づけられた、若手選手の育成を目的とするチームのことである。
- 2) 「学校体育・スポーツ施設」は、日本の体育・スポーツ施設の60%以上を占めている(永田, 2017: 42-43)。
- 3) 積雪のある北海道では、冬季から春季まで、グラウンドでのサッカーはほぼ不可能だと言える。A 高校では、サッカー部や野球部といった屋外競技の部活動が活動場所を体育館に移すため、夏季と冬季で体育館の割り当てが変わる。なお、「雪かき」や「雪中サッカー」が部のスケジュールとして組み込まれることもある。
- 4) 「鳥かご」とは攻守に分かれたボール回しのことである。周りでボールを回す選手を追いかける守備の選手がかごの中にいる鳥のように見えるため、このような呼称になったと言われている。ロンドと呼ばれることもある。
- 5) 日本サッカー協会は、M・T・M メソッドについて以下のように解説している。

M・T・M は、例えば1週間といったサイクル、あるいは1シーズンといった長期のサイクルでも考えていくことができます。あるいは、1日のトレーニングの中で、最初のゲーム(課題やテーマの気づき)→トレーニング→最後のゲーム(より良いゲーム)という考え方で適用することもあります。これは、子どもがサッカーを学んでいくサイクルであり、また指導者の役割のサイクルそのものであり、非常に重要な考え方です。(日本サッカー協会, 2012a: 29)

- 6) 大会方式を指す「トーナメント戦」および「リーグ戦」という表記は日本語独自のものであり、英語の tournament および league は、それぞれ「大会」、「同盟、連盟」といった意味を持つ。一方、大会方式は knockout tournament や group tournament または round-robin tournament のように表すが、本稿では日本語における明快さを重視し、

「トーナメント戦」と「リーグ戦」の表記を用いる。

- 7) 高校サッカー部が参加するリーグ戦方式の大会は、所属リーグの昇降格を制度化し、順位によって翌年度に参加できる大会のレベルが決定する。つまり、高校3年生にとっては、翌年以降に後輩たちが参加する大会のレベルを懸けて大会に挑むことになる。このような制度を持つリーグ戦方式の大会が、部活動の過熱化から逃れる方策として機能しているかどうかは更なる議論が必要である。
- 8) ただし中塚が、リーグ戦を「生活圏で行われる」大会として想定していた点には注意が必要である（中塚 2006: 178）。たしかに「DUO リーグ」は、「生活圏で行われ」、「当事者による自主運営」によって成立していた。一方、今日のリーグ戦方式の大会のなかには全国規模で行われるものも少なくない。また事例を先取れば、北海道における高校サッカーのリーグ戦は、もっとも下位のリーグでさえ生活圏を離れた他の市区町村にて試合が行われた。
- 9) 以下、本節で用いられる表は、北海道サッカー協会と札幌地区サッカー協会のウェブサイト上で閲覧可能な資料をもとに筆者が作成したものである。なお表2-9は参与観察中に入手した大会プログラムを資料に含んでいる。
- 10) ただし北海道は、「東北」や「関東」のような他の都府県にまたがる地域区分を持たないため、プリンスリーグ（地域リーグ）＝都道府県リーグとして行われている。
- 11) 2017年度の⑤の決勝戦にあたる「チャンピオンシップ」のキャッチコピーにはこの文言が使用された。
- 12) 参加率は参加校と参加免除校を足した数を2017年度の各大会に参加した高校数（54）で割って求めた。また参加率は小数点以下第四位を四捨五入して百分率で表した。
- 13) ⑤は、2003年度から行われていた高円宮杯全日本ユース（U-18）サッカー選手権大会（部活動とクラブチームのなかから日本一を決める大会）の地区予選をリーグ戦方式の大会として再編し、2011年度から開始したものである（日本サッカー協会, 2019b）。また表2-1からもわかるように、主催は高等学校体育連盟ではなく、各地区のサッカー協会である。このような他の大会との違いから、⑤がすべての部活動の参加を前提として始まった大会ではない点には注意が必要である。しかし本稿では、すべての高校サッカー部が参加資格を有している現在の⑤の大会規定において、多くの部が参加できておらず、大会の提供する試合出場機会が一部の高校の生徒のみに分配されている現状は論ずるに値する事例だと考え、他の大会との比較を交えながら分析していく。

- 14) なお選手の追加登録は例年 4 月下旬まで行うことができる。第 2 種の登録料は 1 人あたり 1000 円であり、この登録によって複数チームから大会に参加することが原則的にできなくなる。また、①は出場する選手を試合ごとに選ぶことができる大会だが、②や③は試合に出場する選手を大会中に変更することはできず、協会への登録とは別に大会へのエントリー選手を決める必要がある（②は最大 20 名、③は最大 25 名）。
- 15) ③の終了後、3 年生は⑤に出場できないわけではない。たとえば⑤の上位リーグに所属し順位による昇降格が翌年度の活動に大きな影響を及ぼすチームには、⑤の終了まで活動を継続する 3 年生もいる。ただし、A 高校のように③を待たずして②の終了後に 3 年生が「引退する」学校もある。
- 16) 平均人数は小数点以下を四捨五入して表した。
- 17) 2015 年 1 月 11 日の調査より。
- 18) ⑤は開催期間だけでなく、1 試合あたりの試合時間が他の大会と比べて長いという特徴がある。他の大会の 1 回戦の試合時間はそれぞれ、①70 分、②70 分、③80 分、④60 分である。
- 19) たとえば A 高校が試合会場を務めた 2015 年 9 月 19 日には 2 試合が行われ、1 試合目は午前開始、A 高校が出場する 2 試合目は午後に行われた。生徒たちは、1 試合目が開始する前に会場設営やグラウンド整備を終える必要があったため、朝 7 時 30 分にグラウンドに集合し、会場を準備し、1 試合目の審判業務やボールボーイを 90 分間務めたのち、自らの試合に出場し、撤収作業やグラウンド整備を行う、というスケジュールをたどった（図 2-2 参照）。なお、この日については第 4 項にて詳細に記述することとする。
- 20) 2018 年 5 月 10 日の調査より。
- 21) 2015 年 1 月 11 日の調査より。
- 22) たとえば 2016 年 11 月 27 日、2018 年 4 月 8 日など。
- 23) この「地区リーグ」には、⑤に参加している高校があわせて参加することもできる。そのため、生徒に試合出場機会をできるだけ与えたいいくつかの強豪私立高校が「地区リーグ」にも参加している。この点を踏まえると、たとえ「地区リーグ」があったとしても、⑤に参加している高校と参加していない高校の間にある試合出場機会の差は埋まらないどころか、「地区リーグ」の競技レベルが⑤に近づいていく可能性も十分にある。
- 24) 2015 年 8 月 23 日の調査より。

- 25) 2015 年度のリーグ戦の 12 試合のうち、3 分の 1 にあたる 4 試合が芝のピッチで行われた。
- 26) 生徒たちは他校で行われる対外試合の際にも早朝の長距離の移動を迫られる。だが、A 高校には、大規模の部活動が使うような、全員が乗ることのできるマイクロバスはない。そのため生徒たちは各々の方法で試合会場に集まってくる。保護者が運転する車に相乗りをしてくる生徒や、自転車や公共交通機関を使う生徒などさまざまである。このような移動の困難性については次章でも触れることにする。
- 27) 試合前のミーティングで、教員たちから生徒へと伝えられることが多かったポイントは以下の 2 点である。第一に、「試合の入り方」である。A 高校はその実力から劣勢になる試合展開が多かった。また、とくにオフェンス面に大きな課題があった。そのため、試合の序盤で失点し、2 得点以上を必要とする試合展開に持ち込まれることだけは避けなければならなかった。したがって、できるだけ 0 対 0、可能であれば無失点のままリードした状態を長くキープするような試合展開が理想的だった。そのため「試合の入り方」に関しては、生徒たちだけでなく、ウォーミングアップの時点で教員たちからも繰り返し述べられた。ウォーミングアップで集中を欠いてしまうと、エンジンの掛かりが遅く、試合の立ち上がりの内容に影響が出るという共通認識がチーム内に存在したからである。第二に、「継続すること」である。試合では相手がボールを保持し、押し込まれる展開が多い。そのため、A 高校にとってトランジションや守備に関する戦術は重要だった。だがチームでは、こうした戦術を試合開始から試合終了まで遂行しつづけることができない部分が、特に教員 B から問題視されていた。そのため、戦術の内容というよりも、戦術を「継続すること」について、試合前のミーティングで念入りに確認された。また前半のあいだにすでに戦術が破綻してしまった場合には、ハーフタイムに改めてこのポイントが生徒たちに伝えられることもあった。

第3章 生徒たちの活動形成

前章では、生徒たちが小規模の部活動で得ることのできるスポーツの機会の現状について、放課後の活動と対外試合に分けて整理した。とくに大会に参加するための経済的、実務的、身体的負担や高校サッカー界の構造的な周縁化の影響は大きく、彼らは限定的な活動を迫られ、リーグ戦を通じて長期的な目標に向かう「築き上げる」活動を断念せざるをえなかった。

学校規模やサッカー協会が定めた大会規定による部活動への影響は、高校生にとってあまりにも壮大である。彼らは地域の若者の数や大会のルールを自由に変えることができるわけではない。前章で取り上げた問題は、生徒たちにとって、解決するものというよりも、いつまでも付き合っていかななくてはならないものである。

本章と次章では、このどうしようもない問題を抱えながら、生徒たちがどのように活動を形成しているのかについて描く。とくに本章で着目するのは、これまでに触れることができなかった部内で生じるトラブルと、それに対する生徒たちの交渉の過程である。大規模の部活動では見過ごされてしまうような出来事が、小規模の部活動では部の存廃にかかわる重要な事例として立ち現れる。そうしたなか、部内のトラブルを完全に解消しようとするのではなく、折り合いをつけながら進めていく生徒の活動の過程について記述したい。

第1節 活動形成の概況

サッカー部の活動は、放課後などに行う練習と対外試合の大きく2つに分けることができる。後者の事務的な参加手続きは顧問教員によって行われるが、前者については生徒たちが担う部分も大きい。そこでまず本節では、放課後の活動がどのように始まるのか、時間の流れとともに見ていきたい。

生徒たちは帰りのホームルームを終えると、徐々に部室へと集まりはじめる。時間にして15時30分ごろである。部室はいわゆるプレハブ小屋で、工事現場の休憩所や家庭の物置と同じような建物である。部室に入ると、左手側には靴箱があり、生徒たちのサッカーシューズが並べてある。その奥には、必要な用具を取り出すのに苦勞するほどボールやカラーコーンなどが雑多に積み重ねられている。右手側には折りたたみできるパイプ椅子が8、9個ほどぎゅうぎゅうに置いてあり、そこで生徒たちは着替えたり、練習が始まるまで

談笑したりしている。部室の外にはグラウンドを整地するとんぼが立て掛けられている。プレハブ小屋の横にはベンチが置いてあり、荷物置きとしてこのベンチを使う生徒もいる。

練習の開始時間が厳密に決まっていないため、制服を着たまましばらく談笑している生徒が多い。一方、グラウンドに出てボールを蹴り始める生徒もいる。グラウンドはブロック塀で囲まれているため、そこに向かってボールを蹴り、跳ね返ってきたボールをまた止めて蹴る。ブロック塀は表面の凹凸が激しく、生徒たちが使うボールはこの凹凸のせいでボロボロになっている。ゴールに向かってボールを蹴る生徒もいる。一人の生徒がゴールに立ってゴールキーパー役を務め、ゴールに入ったボールを投げ返す。

主将が集合の声をかけると、生徒たちがぞろぞろと集まってくる。練習の開始時点で教員がグラウンドにいるとは限らず、むしろ生徒たちのみで始まることが多い。とくに教員 D が赴任する以前の 2015、2016 年度は、教員がグラウンドに不在のまま練習が進む日が少なくなかった。教員が不在の場合は、上級生が教員 B から練習メニューを事前に聞いておきそれを実行するか、「自主トレ」になった。

「自主トレ」と言えば聞こえはいいが、実際には生徒たちがグラウンドに集まってから何をしようかと相談するような活動であり、段取りのよいものとは言えなかった。意見がまとまらず、個々人でボールを蹴ってすぐに帰る日もあった。筆者はコーチとしてサッカー部に受け入れられていたため、生徒たちから練習の進行を任される場合もあったが、メニューそのものを作成することはほとんどなかった。第 2 章の第 3 節で述べたような練習メニューの規定化は、筆者のような指導者資格を持つ者であっても頭を悩ます事態であり、生徒主導で活動を進める難しさは並大抵ではなかったはずだ。

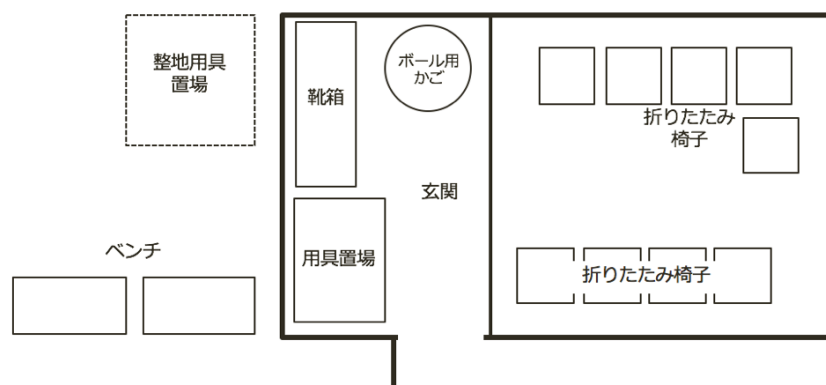


図 3-1 サッカー部の部室の見取図



図 3-2 部室に掛けられた卒業生の色紙

とくに、大会がすべて終わった 10 月頃から体育館に活動場所を移行するまでの期間は「自主トレ」が増加した。図 3-4 は、2016 年のこの時期の「自主トレ」について話し合う生徒の様子である。秋季には日没が早くなり、照明施設のないグラウンドではボールがすぐに見えなくなってしまう。そのため、従来であればその日の最後に行うゲーム形式の練習を序盤で行うよう変更するという内容が板書されている。



図 3-3 ウォーミングアップを行う生徒たち

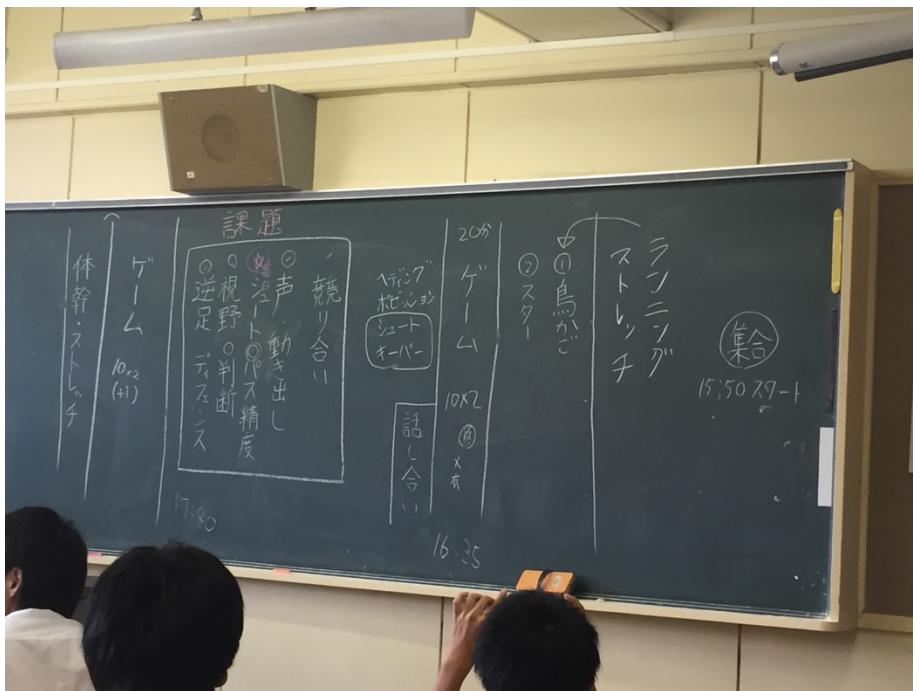


図3-4 2016年9月5日の生徒ミーティングの板書

3年間の調査期間中、「自主トレ」を除いた期間の練習メニューは主に教員Bが決定した。Bは、今日のサッカーのトレンドにも明るく、指導者講習にも積極的に参加するような教員である。Bが技術指導をするうえでとくに意識していたのが状況判断に関するスキルである。本来、「状況に応じて技術を発揮すること」は、年齢を重ねてから身につけることが非常に難しく、10～12歳のあいだに身につけるべきスキルだとされている（日本サッカー協会, 2012b: 9）。だが、サッカー部の生徒たちは、中学校入学以降にサッカーを始めた生徒も多く、この部分に明らかな弱みがあった。そのためBは、生徒たちの技術では難度の高いようなメニューも取り入れながら、この短所とも言える部分を放置するのではなく、できるだけ改善し、身につけることができるようなメニューを組んでいた。

だが、どうしてもオン・ザ・ボールでの技術¹⁾に関する指導に時間が割かれるため、とくにディフェンスに関する準備が間に合わぬまま試合に向かうことが多かった。この問題を改善したのが教員Dの赴任である。Cの異動と入れ替わる形でサッカー部の顧問教員となったDは、Bと比べると相手のゴールまでできるだけ早く到達するようなサッカーを好んだ。そこでBがオフェンス面、Dがディフェンス面の指導を担当するという役割分担が2人のなかで行われるようになった。

10月～11月の日程

2015.10.10 (土) 配布

日付	曜日	内容	場所	時間	備考
10月11日	日	練習試合	グラウンド	8:00	10:00キックオフ vs [] 30分×4
10月12日	月	OFF	—	—	体育の日
10月13日	火	自主トレ	グラウンド	15:30	
10月14日	水	自主トレ	グラウンド	15:30	
10月15日	木	自主トレ	グラウンド	15:30	
10月16日	金	自主トレ	グラウンド	15:30	
10月17日	土	自主トレ	グラウンド	9:00	※ 地区リーグ(同順位戦)の可能性あり
10月18日	日	練習試合	[] 高校	未定	[]
10月19日	月	OFF	—	—	
10月20日	火	自主トレ	グラウンド	15:30	
10月21日	水	自主トレ	グラウンド	15:30	
10月22日	木	自主トレ	グラウンド	15:30	
10月23日	金	自主トレ	グラウンド	15:30	
10月24日	土	全道大会見学	[]		
10月25日	日	全道大会見学	[]		
10月26日	月	1年部室大掃除	グラウンド	15:30	見学旅行結団式 [] 不在
10月27日	火	1年部室大掃除	グラウンド	15:30	見学旅行① [] 不在
10月28日	水	OFF	—	—	見学旅行②、宿泊研修結団式 [] 不在
10月29日	木	OFF	—	—	見学旅行③、宿泊研修① [] 不在
10月30日	金	OFF	—	—	見学旅行④、宿泊研修② [] 不在
10月31日	土	OFF	—	—	[] 不在
11月1日	日	OFF	—	—	[] 不在
11月2日	月	自主トレ	グラウンド	15:30	[] 不在
11月3日	火	自主トレ	グラウンド	9:00	文化の日 ※ OFFの可能性あり [] 不在かも
11月4日	水	自主トレ	グラウンド	15:30	[] 不在
11月5日	木	自主トレ	グラウンド	15:30	
11月6日	金	自主トレ	グラウンド	15:30	
11月7日	土	自主トレ	グラウンド	9:00	※ 地区リーグ(同順位戦)の可能性あり
11月8日	日	自主トレ	グラウンド	9:00	※ 地区リーグ(同順位戦)の可能性あり [] 不在
11月9日	月	OFF	—	—	
11月10日	火	走る&フットサル	廊下・1体後半フル	15:30	後期中間考査1週間前
11月11日	水	OFF	—	—	
11月12日	木	走る&フットサル	廊下・1体後半フル	15:30	
11月13日	金	OFF	—	—	
11月14日	土	走る&フットサル	廊下・1体③フル	12:30	
11月15日	日	U-18フットサルリーグ	[] 体育館	未定	※ 1チームのみ出場(3年含む)、残りのメンバーは体育館で練習試合
11月16日	月	OFF	—	—	後期中間考査前日

[] 高等学校サッカー部

図3-5 教員の不在や「自主トレ」がつづくスケジュール表



図3-6 体育館での筋力トレーニングの様子

また、DがA高校へと来るまではまったく手をつけることができなかった筋力トレーニングにも着手しはじめた。それまで使用していなかった校内のトレーニングルームでマシンを用いたトレーニングをするようになったほか、図3-6のように、空き時間を見つけて体育館でも筋力トレーニングを始めた。

Dが顧問教員となったあとも、スケジュールやスターティングメンバーの決定は全面的にBが担った。また、彼らが好むサッカーのスタイルに違いはあったものの、部活動そのものに対する指導方針に大きな違いがなかった点は重要である。たとえば彼らは、サッカーの指導のために活動に介入することは厭わなかったが、部活動と生徒指導を強引に結びつけるような指導はしなかった。つまり、「生活態度の悪いレギュラー選手を試合に出さないこと」(中澤, 2014: 294-299)のように、生徒指導の「手段」として部活動を用いることはなかった²⁾。

第2節 生徒の分極化

以上のような顧問教員の方針によって、指導の範囲は技術的な側面に限定され、部活動を通じた生活指導が行われたり、厳格な出席の管理が行われたりすることはなかった。そ

のため、生徒によって部活動への出席状況や姿勢はさまざまであった。そもそも A 高校サッカー部には、あらゆる競技歴や競技力を持った生徒が集まっており、それが単一化されることなく活動が進んでいったと言える。

なかでも本節で取り上げるのは、部活動へのばらばらな出席状況である。大規模の部活動では、1 人の部員の欠席が活動の成否に大きな影響を与えることはあまりないだろう。影響を及ぼしたとしても、活動の不成立や中止にまで直結するとは考えにくい。だが、小規模の部活動では、たとえ 1 人でも欠席すると、日々の活動の成立に大きなインパクトを与える。たとえば、11 人しか部員がいない時期に 1 人が無断で欠席すると対外試合が成立しなくなってしまう。対戦相手のことを考えれば、たとえ練習試合であっても不戦試合とするわけにはいかない。そのため、ときには 10 人で試合をしたり、筆者や卒業生が練習試合に出場したりして、どうにか危機を乗り越えなくてはならない。

このような瀬戸際の活動をつづけるなかで、活動の成立をさらに難しくしたのが生徒の分極化であった。ここで分極化とは、ひとつの部活動のなかに複数のグループが形成される状態を表す。分極化は小さな部活動に特有の事例ではない³⁾。ただ、この分極化もまた、彼らのような少人数の部活動ではとりわけ異なる様相を帯びる。なぜなら、小規模の部活動が分極化すると、各グループはさらに小規模の集団となり、それぞれが単一で練習や試合を成立させることが不可能になる。つまり、生徒たちは、部の存続や日々の活動を成立させるために、分極化したはずの他のグループと協力しなくてはならないと考えられるからである。

先行研究において、部内に複数の生徒グループが形成される事例として主に論じられてきたのは、部内で生徒が二分する生徒の二極化である。内海によると、生徒の二極化が大きく問題化したのは、1989 年に学習指導要領が改定された時期である。当時、部活動への参加によって、必修だったクラブ活動の履修を代替できるようになり、学校によってはすべての生徒を部活動に参加させるようになった。そのため、競技力の向上を目指す生徒とスポーツを楽しみたい生徒が部活動に入り混じるようになり、教育現場が双方の要望に答えられなくなっていった（内海, 1998: 52-75）。

内海が示したように、これまでの研究は、競技に対する志向性を基準に、生徒を類型化することで生徒の二極化を表してきた⁴⁾。またそれは、大会での勝利や競技力の向上を目指す生徒／部内の人間関係やスポーツそのものを楽しむ生徒、という構図で語られ、前者は競技志向（型）（三木, 2013; 中澤, 2003）、後者は楽しみ志向（型）（三木, 2013）や娯楽

志向（中澤, 2003）と呼ばれた。さらに先行研究は、スポーツを楽しむことを重視する生徒が希望した部活動の姿と、競技志向に傾倒する実際の部活動の姿との間に生じた齟齬を指摘してきた（中澤, 2003; 作野, 2011）。この二項対立的な構図は、部活動を運営する論理を区別するときに内田（2017）が用いた二分法にも通じている（第1章参照）。

他方、部活動での生徒の志向性に関する研究を見ると、競技志向であるか否かという二項対立的な構図ではなく、より多様な形をとりうるものとして生徒の志向性を捉えている。中澤は、顧問教員の抱える問題のひとつとして生徒の多様性をあげ、志向性の差異をもとに指導方法を使い分けることでこの問題に対処しようとする顧問教員の姿を描いている（中澤, 2014: 272-299）。また、顧問教員が遭遇する葛藤の要因として、試合に出場する選手を選抜するときに直面する生徒の多様性を示した研究や（小谷・中込, 2003; 2012）、部活動出身の生徒と民間クラブチーム出身の生徒を対象として双方の志向性の差異に関する研究も行われている（立木, 2014; 松尾, 2015）。

これらの研究は、志向性の異なる生徒が入り混じる部活動に対して教育現場が抱える問題を明らかにした点で、重要な知見を示してきた。しかし、先に述べたように、生徒の欠席や分極化は、小規模の部活動であるという実情が複雑に絡み合うからこそ大きな問題と化しているのであり、原因の個人化は生徒グループが分かれていく背景を単純化してしまう。そもそも、若者の志向性は決して一貫性のあるものではないだろう。新谷周平は、フリーターになる若者を対象とした研究のなかで、参与観察を行う理由のひとつとして、「フリーターになる者たちの志向性はそれを語る時点によって異なるばかりか、語っていることと実際の行動の不一致すらしばしばだからである」と述べている（新谷, 2002: 153）。若者の志向性が必ずしも行動に反映されるわけではないことを念頭に置く必要があるという新谷の指摘は、本章で生徒たちの様子を描く際に重要な指摘である。

この新谷の指摘を踏まえて、第1章の第1節でも取り上げた甲斐の研究を改めて参照したい。甲斐は、農林高校サッカー部で丹念な調査を行い、生徒たちの文化を読みとることを試みた（甲斐, 2000: 115-142）。その農林高校サッカー部は、全生徒の出席率が50%以下、各学年の生徒の出席率が60%以下であり、「部活動の秩序・訓練機能は彼ら（生徒たち）の営みにもみ消されてしまう」状況にあった（甲斐, 2000: 122）。甲斐によれば、生徒たちは、部活動が自らを受け入れてくれる「居場所」であることを重要視しており、「カノジョ」や友人と過ごす約束がなければ部活動に出席するという取り組み方のもとで、日々の暮らしにおける部活動とその他の活動の序列を保ちながら部に所属しつづけていた。

甲斐が描いたのは、生徒たちが部内に作り上げた文化に依拠しながら活動をつづけていく姿である。だが部活動に没入しない若者たちを捉えたこの研究においても、文化に沿った彼らの均一性が強調され、グループ間の対立や変容、もしくは個々人の部活動へのかかわり方のずれには関心が向けられてこなかった。よって本章では、甲斐が調査したような一枚岩となって部活動に専心しない生徒たちとは異なる若者について、彼らの志向性と行動が一致するとは限らないことや、グループは短期間でいかようにも変わりうることに十分に留意しながら、生徒の欠席や分極化が部内で問題化していく過程を詳細に論じたい。

第3節 廃部がつきまとう運営

小規模の部活動に所属する生徒たちにとってまず重要になるのは、どのような活動をするか、という活動の内容の次元ではなく、どのように活動を成立させるか、という活動の輪郭を形作る次元である（図1-1参照）。筆者は、調査を始めた当初、部員が全員出席しても人手が足りないようなこのサッカー部では、全員の生徒が同じ方向を向いて活動することが重要だろうと考えていた。

だが、生徒たちの部活動への出席状況には非常にばらつきがあった。このばらつきは、筆者が調査をつづけた3年間にわたって起こりつづけたものである。まず、調査を開始して3ヶ月が経った2015年7月ごろから、U中学校出身の5人の1年生（ヒロ、マサシ、ショウタ、ユウジ、ケン）がグループで行動しているのが把握できるようになった。たとえば、2人1組のウォーミングアップは、必ずユウジとヒロ、マサシとショウタが1組となって行われた⁵⁾。他の生徒はその日に出席している生徒とその場で組むことが多かったが、この組み合わせだけは崩れることはなかった。

U中学校出身の生徒たちが常に固定された組み合わせでトレーニングをできた理由は、彼らが部活動に出席する日程がほぼ同じだったからである。表3-1は、生徒たちのある1ヶ月の出席率と出身中学校を示したものである⁶⁾。この表からも、U中学校出身の生徒の出席率が軒並み低いことがわかる。彼らは、5人のうち1人が欠席しようとする、芋づる式に全員が欠席した。またユウジは、ケンの無断欠席がつづいていた時期に、「ケンがいなくなるなら俺も（サッカー部を）やめてえなあ」と退部を示唆するような発言を繰り返していた⁷⁾。

表 3-1 生徒たちの 1 ヶ月の出席率と出身中学校

名前	学年	出席率	欠席日数	出身中学校
ヒロ	1	56%	10日	U
マサシ	1	56%	10日	U
ショウタ	1	60%	9日	U
ユウジ	1	69%	7日	U
ケン	1	69%	7日	U
カズキ	1	82%	4日	V
テツ	1	86%	3日	W
ショウゴ	1	86%	3日	W
ユキヒロ	1	100%	0日	X
サトシ	1	100%	0日	W
シュウト	2	82%	4日	W
ダイチ	2	91%	2日	W
ヤスシ	2	95%	1日	Y
ユウキ	2	95%	1日	Z
タスク	2	95%	1日	W
キョウスケ	2	95%	1日	W
リョウタ	2	100%	0日	X

生徒たちの言葉を借りれば、U 中学校出身の 1 年生の欠席は「サボリ」であり⁸⁾、彼らに対する批判は上級生からだけでなく、他の 1 年生からも発せられた。とくに全国大会に出場歴のある強豪のサッカー部で活動してきた W 中学校出身の生徒たちや、クラブチームでプレイしてきたカズキは、彼らの出席状況を受け入れているとは言いがたかった⁹⁾。また、X 中学校出身の生徒は、欠席せずに継続的に部活動に来る傾向が強く、それは当時 3 年生のイツキや、翌年の 2016 年に入学してくるヒデキにも共通していた¹⁰⁾。

このように、出身中学校のサッカー部で培った部活動への出席状況を基盤としながら、1 年生は学年で単一化することなく、いくつかのグループに分かれていた。1 年生のなかには夏季休暇の活動を終えたタイミングで部活動に姿を見せなくなった生徒もいた¹¹⁾。

だがもっとも興味深いのは、「サボリ」を批判していた一部の 1 年生が、徐々に U 中学校出身の生徒と同じような出席状況へと移っていった点である。とくに W 中学校出身の 1 年生は、増加する自らの欠席について「サボリ」であると認めることを厭わなかった。彼らが中学生の頃に所属していたサッカー部は強豪であり、練習も厳しかったことから、部活動に対する自らの姿勢の変化を強く自覚し、驚きを感じてさえいた。たとえばサトシは、2015 年 8 月 5 日の練習を欠席しながら 2 日後の試合に出場したことについて「W 中のと

きは（試合の）直前に休んだやつは絶対出られませんでしたよ」と語っている。また、同じ W 中学校出身のテツや自らの「サボリ」について、「中学では 30 分前に集合してないと怒られたけどね」とも語った¹²⁾。

とくに部活動への出席状況が急激に変化し、ユウジたちと共に行動するようになったのはテツとカズキであった。テツは、この時期の部活動について、のちに行われたインタビューで「あのときはほんと何回も（部活動を）やめようとか思ってた」と語っている¹³⁾。一方、W 中学校出身のサトシやショウゴは、従来と比較すれば欠席は増えたものの、それほど目立つような変化があったわけではなかった。彼らは出席すれば手を抜かずに練習メニューに取り組んでいたため、他の生徒の心証も良かったように思う。たとえば 2 年生のタスクは、サトシの出席状況について、U 中学校出身の生徒やカズキの出席状況と比較しながら「主犯的な感じじゃない」と説明している¹⁴⁾。

欠席の一部が「サボリ」であることを隠さなかった 1 年生だが、教員や上級生に欠席理由を明確に述べることもあった。もっとも頻繁に述べられたのは、対外試合の際の送迎車の有無や交通費の捻出である。A 高校は他の地域へのアクセスが良いとは言えない。そのため、A 高校付近に住む地元の生徒たちは、対外試合に向かうにあたり保護者の車で送迎してもらるか、公共交通機関や自転車で移動していた。たとえば 2 年生は、キョウスケの保護者の車にダイチが、タスクの保護者の車にシュウトが乗り込んで移動し、ヤスシ、ユウキ、リョウタの 3 人は、主に公共交通機関や自転車で試合会場へと移動した。一方、1 年生の保護者のなかで、送迎車を常に用意できるのはサトシの保護者のみだった。そのため、他の送迎車が用意できなかった場合、乗車できない 1 年生は交通費の捻出を理由に対外試合を欠席した¹⁵⁾。

だがこの欠席理由は、2 年生にとって納得のいかないものだった。なぜなら、ヤスシら 3 人が自転車で会場へと来ていたため、交通費をかけずに会場へ来る方法を知っていたからである。そのため、交通費の捻出を理由とした 1 年生の欠席は、2 年生に「サボリ」と捉えられていた。

なかでも、生徒たちが目に見えて苦勞していたのは、多くの部員を抱える対戦相手と連戦を行う場合である。具体的に、2015 年 7 月 4 日に行われた練習試合を例としよう。この日に対戦したのは、40 人以上の部員が所属する私立高校サッカー部である。対して A 高校は、1 年生のヒロ、ショウタ、カズキ、ユキヒロの 4 人が欠席した。そのため、両チームの部員数の差がさらに広がるなかで練習試合が行われたと言える。

とくにカズキやユキヒロはレギュラー格の選手であり、この日の試合が苦しい展開になることは試合前から否でも予想できてしまった。忘れ物をした生徒も多く、試合前から雰囲気はまったく締まらない。結局レガースを忘れた生徒には筆者が持っていたものを貸すことになった。試合前のミーティングでは、相手のプレッシャーが普段の練習よりも早いことが予想されるが、苦しくてもボールをつなぐことをやめないようにと B から指示があった。

この日は 2 試合が行われ、試合時間はそれぞれ 70 分（前後半 35 分）だった。欠席者のいた A 高校は、ほぼすべての生徒が休むことなく試合に出場しなければならなかった。一方、相手チームは 35 分を目安に選手を交代し、新たな選手を次々とピッチに送りだしてくる。つまり、相手チームは多くの部員が所属しているため、試合の区切りごとに選手を総入れ替えできる。こうした場合、両チームの選手の疲労感の差は徐々に拡大していくことになる。結果として、A 高校は 2 試合目を 1 対 9 というスコアで大敗してしまった。ほぼすべての試合時間が自陣で進むという、生徒たちにとって身体的にも精神的にも疲労感が色濃く残る試合展開だった。

試合が終了し、生徒たちがベンチに戻ってきた直後、2 年生のヤスシはベンチに座っていた 1 年生のテツに「明日は絶対会場にショウタとか呼んで。絶対 LINE しておいて」と強い口調で言った。試合が終了した直後にもかかわらず、ヤスシは今日の試合内容について考えるよりも、翌日以降も設定されている練習試合を乗り切れるかどうかを憂慮していた。明白ながら、欠席した生徒は試合会場にいない。そのため、ヤスシは「みんな（出席している 1 年生）に言っても申し訳ないんだけどさ」と前置きしながら、欠席を繰り返す生徒を試合会場に呼ぶよう訴えていた。このような他の生徒の出席状況に関する干渉が起ることは非常に稀であり、2 年生がいかに部員数の足りない現状に堪えているかが見て取れた。

皆がそろって継続的に出席する 2 年生は、出席状況にばらつきのある 1 年生のなかで、とくに欠席の多い生徒たちを「いつものメンバー」や「いつものメンツ」と括るように呼びはじめ、自らとは異なる部活動への姿勢を持った者であると一線を画すようになった。一部の 1 年生の断続的な出席は日々の活動に明らかに影響を及ぼしていたため個人間で対立が生じる場合もあったが¹⁶⁾、2 年生は「1 年生（の出席状況）は予想がつかないです」と述べ、夏季休暇を終えたころにはすでに変化を求めることを諦めているようにも見えた。ある日、1 年生が遅刻をしているにもかかわらず、コンビニエンスストアに寄ってから練

習試合の会場へと来たときには、「遅刻してコンビニ行ってくて、1年生逆にすごいな」と皮肉交じりに話していたが、結局のところ彼らに向かって直接的に注意することはなかった¹⁷⁾。また生徒の分極化について教員 B は「やる気があるかっていうより、来る、来ない。状況の差、練習が成立しないですもん」と述べ、活動のなかでの意気込みよりも、出席状況の差が重要な要因となっていたと述べた¹⁸⁾。

なお、前述した事例のように、多くの部員を抱えるサッカー部を相手に練習試合を行うときは、少なくとも2試合以上が実施されることが通常である。なぜなら、相手チームは1人でも多くの選手を試合に出場させたいからである。したがって、A高校の生徒たちは、1人あたりの運動量に大きな差を感じながらも、複数の試合をこなさなくてはならない¹⁹⁾。

だが、A高校にも、練習試合を積極的に設定しなければならない理由がある。なぜなら、これまでも述べてきたように、A高校には22人以上の部員が所属していないため、日々の活動のなかで紅白戦のような実戦形式の練習ができないからである。とくに生徒たちは、公式試合での戦術やポジションが「ぶっつけ本番」になることを避けたがっていた。たとえば2016年度入学のタクヤは、以下のように語り、大会の直前になっても自分たちが適正のあるポジションで試合に出場できているのか疑問が拭えぬまま本番を迎えることに葛藤を覚えている。

あの、春季大会もそうだったんですけど、やっぱり試合展開とかパス回し、クリア、ディフェンス、色々うまくいってなくて。3年生で話し合ったときに。

とりあえず自分のことは目瞑ってほしいんですけど（笑）例えばイッセイは今左のウィングやってて、足が遅くてスルーパスに追いつけないし、上がった後に、戻るとき間に合わないとか。だから、イッセイはやっぱりバックがいいと思うとか。

この時期にポジション変更ってやっぱり厳しすぎるものがあるかなっていうか。でも（ポジションが）変わってもやることは変わらないから。自分たちが最後後悔して終わるよりは...²⁰⁾。

11人対11人の練習をする機会がない生徒たちにとって、練習試合が持つ意味は、単に公式試合に勝利するためのテストの場である以上に、公式試合を悔いなく迎えるためのリハーサルの中でもある。こうした場を自前で用意することができない生徒たちは、一部の生徒の欠席による対戦相手との一人あたりの運動量の差を経験しながらも、土日には練習

試合に積極的に挑まなくてはならないというジレンマに陥っていたと言える。

第4節 生徒たちの折り合い

以上より、当初はU中学校出身の1年生のみが断続的な出席状況を見せたものの、徐々に他の1年生の出席状況も不安定になっていった。この問題を解決しようと生徒たちが用いたのがSNS（ソーシャルメディア）である。前節のヤスシの発言にもあるように、部活動に関する生徒たちの連絡はLINEで行われていた。SNSは今日の高校生の日常生活に完全に浸透しており²¹⁾、彼らが活動を形成するにあたり非常に重要な要素となる。

生徒が主に利用していたSNSは、TwitterとLINEである。2017年3月30日時点で所属していた11人の生徒への質問紙調査の結果を見ると、Twitterを利用していた生徒は11人中7人だった。またLINEは、当時所属していた生徒だけでなく、調査期間中に所属した生徒全員が利用していた。これは同時に、すべての生徒が高校入学時点でスマートフォンを所有していたことを意味している²²⁾。

LINEは、ユーザーが作成したグループのなかで、一斉にテキストや写真を共有できる。サッカー部にもLINEグループがあり、このグループ上で連絡がなされていた。だが、生徒たちは必ず1つのグループに加入しなくてはならないわけではなかった。そのため、1年生が入学した直後はグループが乱立したり、個々人で部活動に関する連絡をしたりする生徒もいた。また、このグループに教員や筆者が入ることはなく、生徒たちのみで連絡が行われていた²³⁾。

LINEの機能は、瞬時に情報を共有できるという点で連絡網として有用だった。たとえば2017年12月26、27日、暴風雪を理由に早朝の時点で部活動を中止にせざるをえなかった。このとき、主将から生徒全員が加入しているLINEのグループへと情報を共有することで、全員が自宅を出発する前に、部活動中止の連絡を共有できた。

ただ、SNSを用いたコミュニケーションによる「デジタル・パノプティコン」(Digital panopticon, Maenpaa, 2001: 107-123; Urry, 2007=2015)のような側面は、一見すると部活動の特徴と親和性を持ちそうでもある。つまり、部活動の「封建的な運営方針」(舂本, 2001: 277)や、「子どもの自主性」(中澤, 2014)に裏づけられた生徒同士の監視化が促進する可能性である。またSNSを利用するほど友人関係や精神的健康にネガティブな影響を及ぼす「ソーシャルメディア・パラドクス」の存在も報告されている(河井, 2014)。本

節では、以上のようにポジティブな側面とネガティブな側面が想定される SNS を用いた生徒たちの対応策について、その後の成り行きとともに見ていきたい。

生徒たちにとって重要な転機となったのは、2015 年 10 月 6 日のミーティングである。このミーティングは、この年に行われるすべての公式大会が終了したタイミングで実施された。そのため当初は、冬季から春季における課題と目標について話し合う予定だった。ミーティングに先立ち、当時の主将だったヤスシから、話し合うべき個人の課題とチームの課題を考えてきてほしいという指示があった。

だが、当日になって教室に集まると、2 年生が課題を書いたルーズリーフやメモを持ってきた一方で、事前に準備をしてきた 1 年生はユキヒロのみだった。そのため、こうした 1 年生の部活動への姿勢を注意するところからミーティングが始まってしまった。そしてこの流れから、技術、戦術的な目標に関する議論ではなく、生徒たちの言葉を借りれば、「ピッチ外でのチームとしての課題」に関する議論に多くの時間が割かれた。

もちろん議論の中心となったのは、1 年生の断続的な出席についてである。そして、このミーティングで初めて、これまで放置されていた 1 年生の断続的な出席が「課題」として明文化され、共有されたことになる。だが 1 年生は、なぜ部活動を欠席するのかという 2 年生の問いかけに対し、うまく答えることができなかった。当時、1 年生のなかでアルバイトをしていたのはユウジのみであり、交通費のかかる対外試合を差し置いても、A 高校のグラウンドで行われる放課後の練習を欠席するもっともらしい理由は持ち合わせていない様子だった。そもそも、1 年生は自らの欠席が「サボリ」であることを隠しておらず、こうした問いかけによって皆が納得する欠席理由を新たに聞き出すことは難しかった。

このような理由からミーティングは非常に難航したものの、最終的に 2 年生は 2 つの結論を示した。第一に、活動の不成立は 2 年生を含めた部全体の課題であり、2 年生が完全に無遅刻、無欠席を達成するような姿勢を 1 年生に見せる必要があること。第二に、部活動を欠席する場合、前日までには LINE のグループに連絡を入れること。この第二の結論が、SNS を用いた生徒たちの解決策であり、部の新たなルールであった。

興味深いのは、2 年生が部にとって喫緊の問題であった 1 年生の欠席数そのものを減らそうとするのではなく、「無断での」欠席を減らそうとした点である。つまり、このルールによって、少なくともその日の出席者数を把握し、活動の形成に役立てようとした。これは、当時の彼らにとって解決策というよりも折衷案に近いものだったと言える。

また、このようなルールは、やはり SNS による部活動の監視化を進めそうにも思える。

たしかに、こうした2年生からの提案を受け、ミーティングを終えてから数日は、1年生の無断欠席が減り、生徒たちのLINEのグループにはおのおのの欠席の連絡やその理由が送信された。だが、この無断欠席をしてはいけないというルールはすぐに機能しなくなってしまう。10月10日にヒロが、10月14日にショウタが、10月17日にユウジがそれぞれ連絡を入れることなく部活動を欠席したのである²⁴⁾。ミーティングが10月6日に行われたことを踏まえると、ルールがあまりにも早く破綻しはじめていることがわかる。そして、1ヶ月が経たないうちに、無断欠席の減少を目指したこのルールは立ち消えになってしまった。

そして、この「前日までには」という事前報告のルールが形骸化して以降も、生徒たちのなかに「LINEを用いて遅刻や欠席の連絡を行う」という部分のみが残りつづけた点はとても興味深い。なぜなら、遅刻や欠席の「事後報告」が可能となり、部活動はSNSを通じて監視化されるどころか、いつでも「正式に」遅刻、欠席できるものへと変容していったからである。このとき、LINEを用いた連絡がルール化された経緯は完全に後景に退いていた。むしろ、SNSは遅刻や欠席を「無断ではないもの」へと引き上げるツールとなり、より部活動への自由度の高い出席を保障する存在となっていたのである。

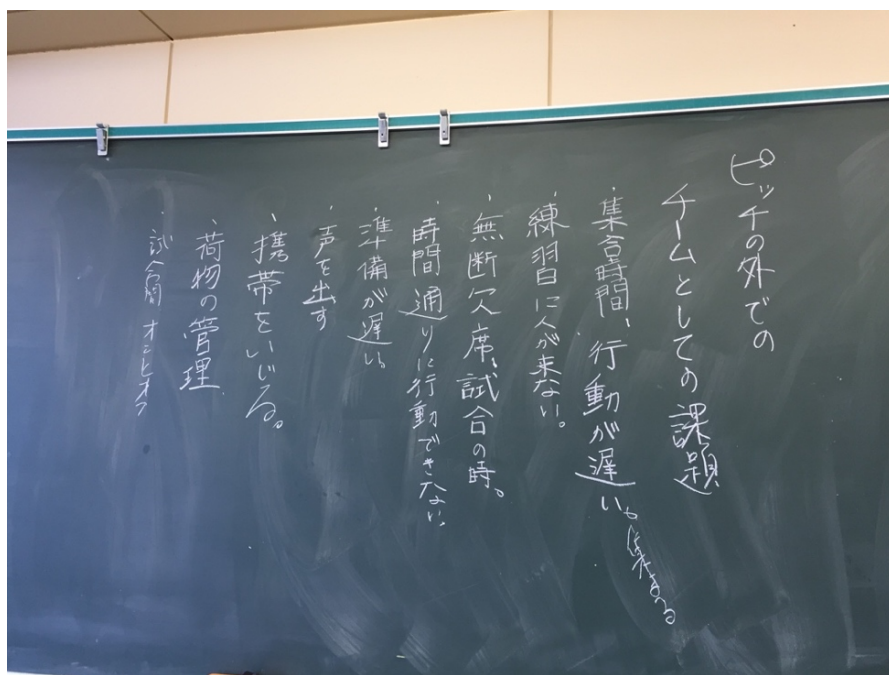


図3-7 2015年10月6日に行われたミーティングで生徒が書いた板書²⁵⁾

この SNS を用いたルールの意味の変容についてより立体的に捉えると、SNS を日常的に使いこなす生徒たちにとって、LINE での連絡は、部で設定されたルールの位相を経て、友人との日々のコミュニケーションの位相で行われるようになったように見える。当初、ルールの位相で争点となっていたのは活動の成否だった。そのため、活動の成立を支えるためにルールとして SNS の利用が提案された。その後、そのルールは立ち消えになったが、高校生の日常生活には SNS の利用が深く根づいていた。そのため、SNS を用いた連絡は止まることなく行われつづけた。ただそれは、部内の課題を解決しようとするルールにもとづく連絡ではなく、コミュニケーションの位相における報告や会話にも似た連絡であった。そのため、SNS は遅刻や欠席の事後報告を可能にするツールへと変化していった²⁶⁾。つまり、連絡の内容ではなく、コミュニケーションの有無それ自体が部内で意味を持つようになっていったのである。

SNS によるルールがその意味を変えていくなかで、2 年生から 1 年生にルールを遵守するよう指導が行われることはなかった。そして、このルールの形骸化を機に、1 年生と 2 年生はもっとも明確に 2 つのグループへと分極化し、独立した参加の仕方を見せるようになる。2 年生は、前述したミーティングで示したように、自らに強制性を付しながら、部活動に継続的に出席した。一方、1 年生の断続的な出席状況はさらに深刻さを増し、2015 年 12 月にはヒロ、マサシ、ユウジ、ケン、ユキヒロの 5 人が部活動に姿を見せなくなった。U 中学校出身のヒロ、マサシ、ユウジ、ケンの離脱はある程度予想できたものの、ユキヒロは 2 年生と同じように部活動に頻繁に出席していた生徒だったため、彼の離脱は教員や筆者を驚かせた。さらに、2016 年 1 月 23 日の活動を最後にショウタ、カズキ、テツ、サトシの 4 人が、同年 2 月 15 日からはもっとも長く活動をつづけたショウゴが部から離脱した。ショウゴは 1 年生が 1 人となってからも、1 ヶ月以上活動をつづけていたが、後期の期末テストに向けて部活動がしばらくオフになると、テストが明けてからは部活動に顔を出さなかった。

1 年生が部から離脱する理由として共通していたのはアルバイトだった。たとえば、テツは食料品店で、サトシやショウゴはコンビニエンスストアで、ユキヒロはファーストフード店で、ジロウは居酒屋やガソリンスタンドなど計 4 つの職場を移りながらアルバイトを行った。また、カズキやジロウのように、社会人のサッカーチームで競技を継続しようとした生徒もいたが、第 2 章の第 1 節で述べた理由もあり、彼らが部活動以外でサッカーをつづけることは難しかった。1 年生のなかで顧問教員に退部の意志を正式に申し出たの

は3人のみだったが、生徒たちの離脱が長期に及んでいたため、筆者は1年生が離脱するたびに退部したものだと考えていた。

一方、2年生は1年生の集団的な離脱に対して、部員数の確保を理由に彼らを引き止めることはしなかった。興味深いのは、部員数が11人を下回ったことで部の存廃問題が目前に迫りながらも、2年生は1年生の離脱について、焦って対応するような様子が見られなかったことである。たとえばケンがしばらく欠席した時期がつづいたとき、筆者が2年生にケンの欠席理由を聞くと、「4日連続でカラオケ行っただって言ってました」「もうやめるんじゃないですかね」と、平然と話していた²⁷⁾。

彼らが1年生の離脱をあまり気に留めていなかった理由は、ふたたび1年生が部に復帰するだろうと予想していたからである。1年生たちと連絡を取り合うことが多かったというユウキは、たとえば「サトシが部活に戻りたそうにしていますよ」と筆者にたびたび伝えてきた。1年生の復帰の意志を教員や筆者に伝えることは、1年生が部に戻りやすい雰囲気を作ることに重要な役割を果たしていたように思う。また2年生は、1ヶ月を超える1年生の離脱を、これまでの「サボリ」の延長として捉えていたとも言える。

そして春季が近づくと、2年生の予想通り、離脱していた数人の1年生が部への復帰を申し出た。これによりサッカー部は、新入生の入部の有無に頼ることなく11人以上の部員を有して存続していくことになる。はじめに復帰を申し出たのは、サトシとユキヒロである。生徒たちが進級した2016年4月に彼らが復帰すると、まもなく5月にはテツがBに復帰を申し出た。筆者は当初、自由奔放な彼らの離脱と復帰に対して、一部の生徒が反発するかもしれないと考えていた。しかし、彼らは反発することなく、以前と同じように復帰した生徒たちをグラウンドに迎え入れた。彼らが同じグラウンドに集まって仲良くサッカーをしている状況が筆者には不思議で仕方なかった。その後、6月にショウゴとジロウが復帰すると、4月から加入した新入生と共に、3学年の生徒が揃った新たな体制のもと、活動を再開していくことになった。

このようにA高校サッカー部は、退部と離脱の境界、もしくは所属と未所属の境界が非常に曖昧である。本節で述べた折衷案が生まれたのは2015年の出来事だが、筆者が調査をしてきた3年間は、常にさまざまな出席状況の生徒が混ざり合う状態だった。たとえば、2017年8月22日から9月30日までの約1ヶ月間（「選手権」の終了から、次の大会の「新人戦」の前日まで）、部員全員が揃った活動はわずか2日だった。

なかには部の状態に危機感を持っている生徒たちもいる。たとえば、2018年3月には、

翌4月に3年生になるトモノリとカツミが「下手したら俺ら高体連出れないじゃん」「だから俺らだけ本気出しても意味ないんだって」と部員不足や他の生徒の出席状況について話し合っていた²⁸⁾。たしかに部内ではこのような会話も見られるのだが、結局のところ生徒たちが他の生徒たちに対して何かしらのアクションを起こすことはない。

また、トモノリやカツミと同学年のヒデキはミーティングで教員Bが用意したシートに以下のように記している。

「人数が少ない」

この言葉を言い訳にせずに、練習、チームとして意識を高めていくべきだと思う。たしかに11人で、1人でも欠けたら終わりだけど、11人だとしてもやれるべきことはたくさんあると思うし、それがなにかを1人1人がつねに考えていくべきだと思う²⁹⁾。

継続的に部活動に出席している生徒たちのなかには、このような「人数が少ないこと、もしくは人数が減っていくことを言い訳してはいけない」という意識を持った生徒が少なくない。この点については教員Bからも以下のように語られたことがある。

しょうがない、しょうがないんだ。この人数だからしょうがないんだ。全部6割でやっても全部負けるだけだ。1試合目全力でやって、2試合目0対10で負けてもしょうがないんだ。全力でやってこい³⁰⁾。

この言葉は、ある大会の直前のミーティングで、生徒たちに向かって述べられた。つまり、教員や生徒たちは、環境の乏しさに言い訳せずに全力でスポーツに取り組む若者という像を作り上げ、また自ら回収されることで、部活動へのモチベーションをどうにか保っていこうという状況にもある³¹⁾。

他の生徒の出席状況を楽観視している者、危機感を持つものの解決策を見いだせない者、自ら定型的なストーリーに回収される者。さまざまな生徒がいながら、結果として断続的な部活動への出席は許容される。しばらく欠席していた生徒が、何事もなかったかのように部活動に参加し、他の生徒たちも何事もなかったかのように活動している。もちろん、本人に欠席理由を問い詰めたり、出席状況を叱責したりすることはない。ある1日の部活

動だけ見れば、誰が前日までまったく部活動に参加していなかった生徒なのかを見分けることは非常に難しいだろう。率直に言えば、毎日のように部活動に出入りしている筆者でさえ、誰がサッカー部に所属しているのかははっきりとわからない状態がつづく時期もあった。

「築き上げる」活動ができず、足並みを揃えた活動をすることも難しい。このような状況のなかでも、各グループが 11 人以下になるのだから、彼らは渋々協力する関係を結ぶのだと思っていた。だが実際には、部内は分極化したまま、解決しないという解決策によって、サッカーをプレイしたい生徒だけで部活動が運営されていく。

つまり、生徒たちの活動は無秩序に見えて完全に無秩序ではない。では、生徒たちの活動は「来るもの拒まず去るもの追わず」の仕組みによって形作られているのだろうか。生徒たちの活動には、どのような人でも参加することができるのだろうか。具体的に言えば、さまざまな選手が混ざり合う活動の結果として、生徒たちが目指していたのはどのような活動だったのだろうか。次章では、以上のような点について検討していきたい。

第3章／注

- 1) オン・ザ・ボールとは、選手がボールを保持した状態のこと。対義語はオフ・ザ・ボール。サッカーでは、90分の試合のうち80分以上はボールを持っていない状態であるため、オフ・ザ・ボールでの動きに関する技術も重要視され、指導に時間を割く必要がある。
- 2) 教員たちは、部活動が生徒たちにとって学校に来るための理由になることについては否定していない。たとえばBは、進級が危ぶまれていたユウジについて「部活もう来なくてもいいよ、とも言えるんですけど。逆効果になっちゃうから。ああいう危ういやつの場合は、むしろ部活があるから学校来てる、みたいなのところがあるし。部活来てるだけまだいいですね。その期間は大丈夫」と語っており、部活動が生徒の通学に一定の効果を持っているとの見解を示している（2015年10月11日の調査より）。だが結果としてユウジが部活動から離脱することについては干渉することなく、部活動に「抱え込んでおく」（中澤, 2014: 293-294）ようなことはしなかった。
- 3) 中澤は、部員39名で構成された東京都内の中学校サッカー部で調査を行い、外部指導者の導入を機に生徒たちが複数のグループに「分裂」し、「競技志向」に傾倒する部活動の運営形態に葛藤する「娯楽志向」の生徒たちの姿を描いた（中澤, 2003）。
- 4) 進学などのタイミングでスポーツを継続できずにやめていく子どもがいる状態を「二極化」として表し、高額の寮費や遠征費が必要となる部活動の英才教育の進行によってスポーツの機会を失う子どもの存在を指摘した研究もある（滝口, 2011）。
- 5) ケンはゴールキーパーだったため、もう1人のゴールキーパーのタスクとゴールキーパー用のウォーミングアップをしていた。
- 6) 表3-1が示した期間は、2015年9月19日から10月18日の30日間である。この期間中の活動日は23日、休養日は7日だった。また、出席率は小数点以下第二位まで求め、百分率で表した。なお、生徒たちの詳しい出席状況は以下の表3-2の通りである。
- 7) 2015年9月25日の調査より。
- 8) 生徒たちにとって「サボリ」とは、主に無断欠席および妥当性の無い理由での欠席を指す。2年生のキョウスケは、「サボリ」について、散髪や歯医者への通院のように、休養日に済ますことが可能な予定は欠席理由としてふさわしくないとして「サボリ」に該当すると述べた（2015年10月6日、ミーティング内での発言）。

表3-2 生徒たちの1ヶ月の出席状況とその詳細

1日目					10日目					
日程	9/19(土)	9/20(日)	9/21(月祝)	9/22(火祝)	9/23(水祝)	9/24(木)	9/25(金)	9/26(土)	9/27(日)	9/28(月)
予定	リーグ戦	オフ	リーグ戦	練習試合	練習試合	練習	練習	新人戦	新人戦	オフ
天気	雨		雨	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	雨	
ヤスシ/2年										
ユウキ/2年										
リョウタ/2年										ã
タスク/2年										
ダイチ/2年										
キョウスケ/2年										
シュウト/2年			×風邪					×		
ヒロ/1年	×		×	×	×				×	
マサシ/1年	×		×	×	×			×	×	
カズキ/1年					×熱中症					
テツ/1年	×風邪									
ユウジ/1年										
ショウゴ/1年										
ユキヒロ/1年										
サトシ/1年										
ショウタ/1年				×親戚宅へ	×親戚宅へ					
ケン/1年	×		×	×	×	×	△			

※×は欠席、△は遅刻、▽は早退、◇は練習に参加せず見学、を指す。

※記号に続く文字は欠席や遅刻の理由を指す。記号のみの場合は無断欠席や無断での遅刻を指す。

11日目										20日目	
日程	9/29(火)	9/30(水)	10/1(木)	10/2(金)	10/3(土)	10/4(日)	10/5(月)	10/6(火)	10/7(水)	10/8(木)	
予定	練習 (体育館)	練習 (体育館)	練習	雨天オフ	練習試合	オフ	練習	ミーティング	練習	雨天オフ	
天気	雨	雨	くもり	雨	晴れ		晴れ		晴れ	雨	
ヤスシ/2年							×歯医者				
ユウキ/2年									×歯医者		
リョウタ/2年											
タスク/2年							×整骨院				
ダイチ/2年		×整骨院									
キョウスケ/2年											
シュウト/2年							×耳鼻科				
ヒロ/1年			×		×		×道具忘れ				
マサシ/1年			×		×						
カズキ/1年					△体調不良		×道具忘れ				
テツ/1年					×		×				
ユウジ/1年	×	×	×		×			×			
ショウゴ/1年							×病院				
ユキヒロ/1年											
サトシ/1年											
ショウタ/1年		×怪我	×		×		×		◇怪我		
ケン/1年			×		△						

21日目										30日目		
日程	10/9(金)	10/10(土)	10/11(日)	10/12(月祝)	10/13(火)	10/14(水)	10/15(木)	10/16(金)	10/17(土)	10/18(日)		
予定	練習 (廊下)	練習	練習試合	オフ	雨天オフ	練習	練習	練習	練習	練習試合		
天気	雨	晴れ	雨		雨	晴れのち雨	晴れ	晴れ	晴れ	くもり		
ヤスシ/2年												
ユウキ/2年												
リョウタ/2年												
タスク/2年							◇怪我	◇怪我	◇怪我			
ダイチ/2年								×風邪				
キョウスケ/2年							×風邪					
シュウト/2年									◇怪我	×風邪		
ヒロ/1年		×							×散髪			
マサシ/1年								×風邪	×風邪			
カズキ/1年		×風邪					◇怪我		×風邪			
テツ/1年									△寝坊			
ユウジ/1年	×						▽アルバイト	▽アルバイト	×			
ショウゴ/1年		×風邪	×風邪									
ユキヒロ/1年												
サトシ/1年												
ショウウタ/1年		×怪我				×				×整形外科		
ケン/1年									◇怪我			

- 9) 2015 年 8 月 4 日、1 年生のテツは、この日欠席した U 中学校出身のヒロやケンに対して、「もっと（サッカーを）うまくなろうと思わないのかよ」と発言し、怒りをあらわにしていた。だがまもなく、テツは U 中学校出身の 1 年生と行動を共にし、部活動を頻繁に欠席するようになる。この事例からも、生徒の一時期の志向性を基準として、生徒の部活動への姿勢や振る舞いを分類することは非常に難しい作業だと言える。
- 10) ただし、表 3-1 が示す期間より前に、同じく X 中学校出身のジロウが退部しているため、出身中学校で生徒たちを括りきれるとも言いがたい。イツキは X 中学校の後輩であるリョウタ、ユキヒロと比較しながら、部活動を欠席しがちだったジロウの出席状況について、「あの 2 人（リョウタとユキヒロ）は真面目なのに（X 中学校出身の生徒としてジロウの出席状況は珍しい）」と述べていた（2015 年 8 月 11 日の調査より）。
- 11) T 中学校出身のケイタが 7 月頃から部活動に出席しなくなった。また、X 中学校出身のジロウが 8 月末をもってサッカー部から退部した。ジロウは顧問教員に退部の意志を明確に伝えたほか、他の生徒にも退部の挨拶をするという部では珍しいパターンだった。
- 12) 2015 年 8 月 16 日の調査より。
- 13) 2017 年 7 月 27 日の聞き取り調査より。なお、テツへの聞き取りについては次章で詳しく触れる。
- 14) 2016 年 5 月 7 日の調査より。
- 15) たとえば、A 高校の最寄り駅から、調査期間中にもっとも多く訪れた試合会場までの交通費は片道 860 円であり、生徒たちにとって重い負担となっていた。教員 B は、交通費の捻出を理由に欠席する生徒について、「家庭の事情が複雑な子もここ数年増えているので」と理解を示すとともに（2015 年 7 月 4 日、他校で行われた練習試合前の会話より）、自転車で試合会場に来るように指導することもなかった。
- 16) たとえば、2015 年 8 月 27 日、1 年生のユウジが練習開始の直前まで弁当を食べ、練習開始の直後に腹痛を理由に見学すると言ったことに対し、2 年生のダイチがユウジの怠慢さに怒り、ダイチに反抗したユウジが練習中に帰宅するという事例があった。
- 17) 2015 年 8 月 7 日の調査より。
- 18) 2018 年 1 月 21 日の調査より。
- 19) 対戦校との部員数の差が大きい場合には、A 高校の生徒たちの体力を見ながら試合数を減らす可能性があることに対して対戦校に了解を得る場合もあった。
- 20) 2018 年 5 月 6 日の調査より。イッセイは中学生の頃からサイドバックをポジションと

してきたが、チームの得点力不足を解消するためにポジションを前線に移していた。

21) たとえば 10 代の LINE の利用状況は、2012 年には 38.8%だったにもかかわらず（情報通信政策研究所, 2013: 61）、2017 年には 86.3%まで上昇した（情報通信政策研究所, 2018: 67）。

22) 生徒たちのスマートフォンの利用状況は興味深い。2017 年 3 月 30 日、当時所属していた 11 人の生徒を対象として質問紙調査を実施したところ、1 日あたりの利用時間を 2 時間未満と答えた生徒はおらず、2 時間が 1 人、4 時間が 3 人、5 時間が 1 人、6 時間が 3 人、7 時間が 2 人、8 時間が 1 人だった。彼らの 1 日におけるスマートフォンの平均利用時間は 5 時間を超え、多くの時間を割いていることがわかる。また、この結果からも示唆されるように、生徒のスマートフォンの利用は授業時間帯にも及んでいる。この状況を憂慮した A 高校は、2016 年度より、朝のホームルームから帰りのホームルームまでの携帯電話の使用を全面的に禁止する新たな校則を定めた。つまり生徒は、授業間の休憩時間を含め、放課後まで携帯電話の使用を禁じられている。このような背景から、生徒たちが校則から解放される放課後から部活動の開始直前まで、スマートフォンを熱心に使用する様子が頻繁に見られた。

23) 筆者は、部活動のスケジュールの共有などを目的として、部長を務めた生徒とのみ個人間で LINE を用いて連絡を取っていた。



図 3-8 校内に貼られた携帯電話使用禁止を表すポスター

- 24) 10月9日にユウジが無断で欠席しているが、ユウジはミーティング自体に出席しておらず、本人がこのルールが存在を知らなかったと述べたため、ここには記載しなかった。だが、この新しいルールが伝達されていないこと自体も、生徒たちがいかに部活動について他人に干渉しないかを表しているとも言える。
- 25) 生徒たちが部活動の課題について述べる時、この板書に示されるように、その多くは人数不足や「サボリ」という言葉に集約されていく。だが筆者は、これらの課題をそのまま記すのと同時に、第2章の「練習メニューの規定化」や「非線形的な負担の増幅」、あるいは本章で述べた「生徒の分極化」のように、生徒たちが感じる課題が実際にはどのような部活動の運営の困難性として立ち現れているのかを描き直すことも重要だと考えており、この描出こそが本稿の役目の一つだと捉えている。
- 26) 携帯電話による通信がもたらした変化について、時間の「流動的な調整」(fluid coordination)が可能になったことで、「時間厳守」から「流動的な時間厳守」(flexible punctuality)へと移行したと指摘する研究がある (Larsen et al., 2006: 119-122)。
- 27) 2015年9月24日の調査より。
- 28) 2018年3月13日の調査より。
- 29) 2016年9月2日のミーティングにて。当時は部員が11人だった。
- 30) 2017年9月30日の調査より。
- 31) 序章では、マスメディアがこの定型的な生徒像でしか彼らを取り上げないことを指摘した。だが実際には、部内で当事者によってこの像が作り上げられ、マスメディアが当事者の声に耳を傾けたときこそ、このストーリーが繰り返される可能性が示唆される。

第4章 共に活動する

前章では、生徒たちが部内で生じた分極化を無理に解消することなく、折り合いをつけようと交渉しながら活動する過程を見てきた。つづいて本章では、「築き上げる」活動を断念した生徒たちが、どのような活動を実現するために、誰と「共に活動する」のかという観点から事例を見ていく。これは言い換えれば、他の生徒と「共に活動する」ことが安寧である部活動を対象とした研究が扱ってこなかった事例について踏み込むことである。

第1節 ダブルスタンダード

前章で扱った一部の生徒たちの断続的な出席は、日々の活動の成否を脅かすだけでなく、部の存廃を左右する大きな問題としてのしかかっていた。だが他の生徒たちは、自らと出席状況が異なる生徒に干渉しないことで、さまざまな生徒が部活動に出席できる状態を作り出し、結果として活動の成立や部そのものを成り立たせてきた。

注目すべきは、継続的に部活動に出席していた生徒たちが、ある程度の強制性を自らにのみ付しながら部活動に所属しつづけたことである。彼らは自らも含めたすべての遅刻や欠席を許容する方向性に向かうこともできたはずだろう。だが生徒たちは、部内の強制性をすべて排除することなく継続的に出席しつづけた。なかには、ヤスシとタスクのように、自らが欠席しないようルールをさらに追加する生徒もいた¹⁾。

このダブルスタンダード（二重規範）的な自律性は、部の存続に非常に重要な役割を果たした。前章で取り上げた1年生の離脱が起きたのち、部員がもっとも少ない時期には7人になった。部活動が盛んではないA高校の実情を考慮すれば、新入生の入部の有無に部活動の行く末を任せるのはあまりにもハイリスクである。だが、部活動をつづけていた生徒たちは数ヶ月後には始まってしまう春の大会に対して焦ることもなく、あっけらかんとしていた。むしろ全員の出席状況が似たようなものになったことで、活動しやすくなったと感じているようだった。「ダブルスタンダード」という言葉が用いられるとき、その多くは、ルールを都合よく解釈した者が作り上げた「自分に優しく他人に厳しい」状態を批判する場合である。だが、彼らが作り上げたのは、相手方にとって都合良くルールを可変する「自分に厳しく他人に優しい」ダブルスタンダードだった。

それでも、部員が足りないことには変わりはない。そこで、生徒たちが活路としたのが、

第2章でも取り上げたフットサルだった。出席する人数が1桁になった2015年11月から活動場所を体育館に完全に移行し、筆者とBを含めてフットサルをする日々が始まった。部の規模は極端に小さくなったが、たしかにこの時期の活動は非常に充実していたし、生徒たちの様子も楽しそうに見えた。当時2年生のキョウスケは、新年度から新入部員が入らなかった場合、「フットサル部として活動していくのも悪くはないかな」と語った²⁾。また同学年のヨシキは、卒業後に聞き取りを実施した際、この時期のフットサル活動が一番印象に残っていると語った。

もし、継続的な出席をつづける生徒たちがすべてのルールを部内から取り払っていたら、サッカー部は廃部へと向かっていたかもしれない。だが生徒たちは、部の規模が縮小したり、フットサル部として活動したりする将来に柔軟な発想を持ち、同時に復帰する生徒たちを受け入れる体制を取りながら、自らは積極的に部活動に出席してきた³⁾。最終的にはフットサル大会にも出場し、結果は1点差の惜敗だったものの、全国大会に出場歴のある強豪サッカー部と決勝トーナメント進出を争うまでになった。第2章にて、小規模のサッカー部では、日本サッカー協会が理想として掲げる「築き上げる」活動が困難であることを示した。くわえて、このフットサルへの柔軟な移行から理解できることは、彼らが獲得できそうなスポーツの機会に「沿って進む」活動へと向かうことで、部活動から機会を保障されるのを待つのではなく、自らの手でスポーツの機会を獲得しようと努めていたということである。

さらにこの事例を通じて、「ゆとり部活動」(内田, 2017)を作ることはまったく容易ではないと言及できるだろう。A高校サッカー部は、継続的に部に出席する生徒たちによる粘り強い交渉と柔軟な発想があったからこそ、さまざまな活動状況の共存が可能となり、結果として部を存続させてきた。スポーツの機会を完全に失う可能性が十分にあったなかで活動しつづけた彼らには、調査者という立場を超えて尊敬の念を抱くほどだった。だが先行研究では、「ゆとり部活動」への移行は非常に楽観的に考えられている。内田は、「現在の部活動の活動総量を維持するとしたら」(内田, 2017: 214) 予算や人材が不足してしまうものの、「週3日の活動量であれば」(内田, 2017: 215) 「部活動の運営に必要なコストが半分で済むから」「その効果は計り知れない」(内田, 2017: 214) という。ここでは、まるで活動を週3日にすれば、すべてがうまくいくかのように記されている。なぜか。ここでは部活動の問題が、すべてコストの問題でしか語られていないからだ。

A高校サッカー部では、そもそも週6、7日活動しているわけではないし、休養日を設

けることなく活動しているわけでもない。また顧問教員はサッカーを専門としており、積極的に部活動の運営に携わることができた。それでも、もともと資源が圧倒的に不足している小規模の部活動では、自ずと活動は週 3、4 日になる。だが、活動日数が少ないからといって、生徒たちにとって部活動の運営は容易になるわけではなかった。部活動が抱える問題は、コストの問題だけではないからだ。

そもそも、集団の活動に「ゆとり」があることと、その集団を維持することが「ゆとり」のあるものであるかはまったく別の問題であり、切り離して考えなくてはならない。生徒たちが作り上げた部活動のように、ゆとりのある集団を維持するプロセスは非常に複雑である。もちろん、過熱した部活動に強制的に巻き込まれる人を減らしたいという内田の主張は十分に理解できるし、積極的に同意したい。ただ、活動日数を減らし、コストを削減すれば、ゆとりのある部活動が誕生するかといえ、それは同意できない。少なくとも、小規模の部活動の実情はそれほど単純とは言えないからだ。

では部活動という集団が「ゆとり」を持つことは難しいのだろうか。興味深いのは、生徒たちが、クラブチームと比較しながら、部活動であったからこそ柔軟な対応を取ることができたと考えている点である。

たとえばタクヤは、「クラブチーム（出身）のやつはさ、ミスったら『死ね』みたいになるのに、（ゴールを）決めても『当たり前でしょ』みたいになんのマジでない」と、その印象について語る⁴⁾。つまり彼は、クラブチームが合理的に技術の習得を目指す集団であるがゆえに、チームメイトに対してドライな選手が所属していると述べている。

このタクヤが持つイメージは、先行研究が示した部活動／民間クラブチームの対比と一部分でしか合致していない。松尾は部活動とクラブチームを比較しながら、クラブチームは「合理的」であり、「ライト」で「やわらかい」対人関係を生むというイメージを持っていると示した（松尾, 2015: 227）。だが A 高校の生徒たちは、クラブチームが合理的であるがゆえに、高圧的で形式的な対人関係を生んでいると考えていたのである。

先行研究によれば、「トラディショナル」な部活動こそが、「高圧的」で「形式的」なイメージを持たれているという（松尾, 2015: 227）。だが、A 高校サッカー部は、トラディショナルな部活動のイメージとはかけ離れた集団である。そして生徒たちは、A 高校サッカー部が技術の習得や大会での勝利に合理的であるとは言えないという点にこそ、彼らの部活動が柔軟でありうる可能性を見いだしたのである。

第2節 混在を前提とした活動

活動の基盤となったダブルスタンダード的な自律性は、部内でさまざまな出席状況が混ざり合うことを可能にした。これは言い換えれば、部活動に関して自らとは異なる姿勢を持つ生徒に対して、同質化を求める振る舞いを控えるような部内の規範が成立していたことになる。

もちろん、欠席しがちな生徒に対する不満が消えることはなかった。たとえばカツミは、欠席理由を「家の用事」と伝えてきた下級生に対して、『家の用事』ってやめてほしいんだけど。もっと『はい』理由言ってほしい」と口にしていた⁵⁾。遅刻や欠席についてとやかく追求していないのだから、嘘でもせめてもっともらしい理由を伝えてほしいというカツミの言い分はあまりにもリアルである。だが、遅刻や欠席の理由について直接的に問いただすような場面は調査期間を通じてほぼ見られなかった。また、「あんまり厳しくしちゃうと、(新入部員が)入ってもやめちゃうから」と、春先の活動を減らそうと提案した生徒が、自らの提案を笠に着て部活動にまったく来なくなってしまうこともあった。ただこのような事例があっても、部活動のルールを厳格化しようという方向性に向かうことはなかった。

そもそもサッカー部はさまざまな生徒が混在しながら存続してきた。ここで部活動における混在とは、参加者が所属や経歴を問われることなく活動に参加できる状態を指す⁶⁾。たとえばA高校サッカー部にはさまざまな競技歴を持った生徒が混在している。2013年度入学のツバサやミノル、2015年度入学のケン、高校からサッカーを始めた。また、2014年度入学のタスクや2017年度入学のマナブは中学生の頃に一度サッカーをやめ、高校入学と同時にサッカーを改めて始めている。もちろん、小学生の頃からサッカーを始めた生徒も多い。先に述べた通り、W中学校のような強豪サッカー部でサッカーをつづけてきた生徒もいる。つまり、サッカーを始めたばかりの生徒と、10年以上サッカーをつづけている生徒が共に活動しているのである。

すると、サッカー選手としての実力にも大きな差が生じる。たとえばW中学校出身のケントやキョウスケは、その競技力を活かしてスポーツ系の専門学校に進学した。ケントはこの専門学校のサッカー部で主将を務め、チームはのちに全国大会に出場している。また、2014年度入学のヤスシは、筆者が調査した期間のなかでもっとも実力のある選手だった。彼は、2年生までサッカー部で活動したあと、3年生からはフットサル版のJリーグとも

言える F リーグのエスポラーダ北海道のサテライトチームへと移籍した。高校生が在学中にチームを移籍することは珍しいが、ヤスシには上のカテゴリーで活躍してほしいという他の生徒たちの思いのもと実現した円満移籍だったと言える。こうした実力のある生徒たちが、サッカーを始めて間もない生徒と同じチームに所属している。そのため、生徒たちが A 高校サッカー部で活動をつづけていくためには、さまざまな生徒と共に活動していくことを前提として受け入れる必要があった。

また、生徒たちが共に活動をするのは、実力差のある生徒だけではない。たとえば部活動を「引退」した 3 年生である。そもそも A 高校サッカー部には、部活動からの明確な「引退」が存在しなかったとも言える。多くの高校サッカー部では、高体連、選手権、高円宮杯など、全国規模で開催される大会が終わったタイミングで 3 年生が部活動を終え、彼らは受験や就職活動に向けて準備しはじめると考えられる。だが、A 高校では高体連を終えたあと一度「引退」するが、結局のところ選手が足りず、多くの生徒が選手権やフットサル大会を前に復帰していた。

そして、高校卒業までつづくこの 3 年生の援助的な参加を下級生は大いに必要としていた。たとえば、2017 年 12 月 9、16 日に行われたフットサルの大会では、卒業間近の 3 年生がメンバーとして登録された。また、2018 年 1 月 27 日に行われたフットサルの試合では、1 年生がインフルエンザによる学年閉鎖のため試合に出場できず、部活動を「引退」した 3 年生に急遽協力をあおいだ。

日々の練習や練習試合には、卒業生たちも重要な役割を果たした。たとえば新 1 年生の入学前の春季休暇中に行われた 2018 年 4 月 1 日の練習試合には、部員が足りないことを事前に想定し、3 月の時点から卒業生に協力を依頼していた。2014 年度入学のユウキや 2015 年度入学のサトシは、後輩たちから協力の依頼を受けることが多かったという。また、ケントとキョウスケが進学したスポーツ系の専門学校のサッカー部とは積極的に練習試合を行った。在校生と卒業生の継続的なつながりは、練習試合の対戦相手を見つけることが困難なサッカー部にとって、活動の幅を広げる大きな要因になった。

他の年齢カテゴリーとの練習試合という観点から見れば、A 高校に多くの生徒が入学してくる W 中学校とも頻繁に練習試合を行った。W 中学校サッカー部が全国大会に出場歴のある強豪であったことから、練習試合を積極的に設定したい A 高校と、年齢という枠にとらわれずにできるだけ強い相手と練習試合を組みたい W 中学校の利害関係が一致した結果であった。

表 4-1 2016 年 3 月の生徒たちの出席状況と混在を前提とした活動⁷⁾

日程	3月1日	3月2日	3月3日	3月4日	3月5日	3月6日	3月7日	3月8日	3月9日	3月10日
予定	オフ	練習	練習	練習試合	練習試合	オフ	オフ	オフ	オフ	練習
ユキヒロ/2年										
サトシ/2年										
テツ/2年										×
ショウゴ/2年										
ジロウ/2年		×	×	×	×					×
タクヤ/1年					×					
カツミ/1年										
ヒデキ/1年										
トシミチ/1年										
イツセイ/1年										
トモノリ/1年										
その他										

※×は欠席、△は遅刻、▽は早退、◇は練習に参加せず見学、を指す。

※記号に続く文字は欠席や遅刻の理由を指す。記号のみの場合は無断欠席や無断での遅刻を指す。

※3月28、30日を除き、活動場所はすべて体育館である。

日程	3月11日	3月12日	3月13日	3月14日	3月15日	3月16日	3月17日	3月18日	3月19日	3月20日
予定	オフ	練習	オフ	練習	練習	練習	練習	練習試合	練習試合	練習試合
ユキヒロ/2年		×体調不良				◇怪我				
サトシ/2年				◇怪我	◇怪我	◇怪我	◇怪我	×	×	×
テツ/2年						×				
シヨウゴ/2年										
ジロウ/2年						×アルバイト		×	◇怪我	
タクヤ/1年										
カツミ/1年										
ヒデキ/1年				△生徒会	△生徒会					
トシミチ/1年										
イツセイ/1年										
トモノリ/1年							×			
その他				キミノブ(中3)	カズキ(2年) ユウキ(3年) ヨシキ(3年)	ユウキ(3年) ヨシキ(3年)	ユウキ(3年)		キミノブ(中3)	

日程	3月21日	3月22日	3月23日	3月24日	3月25日	3月26日	3月27日	3月28日	3月29日	3月30日	3月31日
予定	オフ	練習	練習	オフ	練習	練習試合	オフ	練習	オフ	練習試合	オフ
ユキヒロ/2年											
サトシ/2年											
テツ/2年		×体調不良	×体調不良								
ショウゴ/2年											
ジロウ/2年			×空手		×空手						
タクヤ/1年											
カツミ/1年											
ヒデキ/1年											
トシミチ/1年						×歯医者					
イツセイ/1年											
トモノリ/1年		×病院			×旅行	×旅行					
その他			トオル(1年)			ユウキ(3年)、 対戦相手として				キミノブ(中3) リョウタ(3年) ユウキ(3年)	

表4-1は、11人の部員で活動していた2016年3月の生徒たちの出席状況を示している。活動した19日間のなかで、部員以外の生徒が参加した日数は8日にのぼる。ユウキ、ヨシキ、リョウタは「引退」した3年生だが、部員ではない1年生のトオルや翌4月から入部することになる中学3年生のキミノブも参加している。また、3月26日は、ユウキが地元の友人を連れ、練習試合の対戦相手として参加している。さらに、3月30日に他校で行われた対外試合には、卒業した直後の3人の3年生が人数不足を補うために参加している。

このように、サッカー部が活動をつづけていくためには、年齢やカテゴリーに固執することなく、さまざまなプレイヤーと混在しながら、共に活動する必要があった。練習試合を行うかどうか最終決定をするのは教員Bだったものの、たびたび生徒たちのコネクションによって対戦相手が見つかり、ときに生徒から教員へ練習試合が提案されることもあった。たとえ相手がA高校よりもはるかに強豪と言える専門学校生であったとしても、フィジカルに劣る中学生であったとしても、サッカーという媒介があれば、これまで述べてきたような混在は十分に可能だった。

一方、サッカーやスポーツという媒介が外れたとき、彼らにはコントロールしがたい混在もあった。それは、A高校という学校のなかで部活動に所属していない生徒との混在や彼らからの視線である。

たとえば部活動に入っていない生徒たちにとって、サッカー部の生徒は野次や冷やかしの対象になる。教員Bいわく、サッカー部は、A高校のなかでも熱心に活動をする部活動のひとつである。そのため、サッカー部の生徒たちは、A高校のなかで物珍しい存在であると言える。

A高校のグラウンドは、校舎をつなぐ渡り廊下から一望できるようになっている。渡り廊下の窓から顔を出すと、グラウンドにいる者と会話ができる。ある日、以下のような事例があった。

渡り廊下から顔を出した生徒がグラウンドの部員たちに声をかけてきた。

「キョウスケ！キョウスケ！」

「タスク！ちゃんとやれよー！声聞こえないぞー！」

Bが渡り廊下を見る。声をかけた生徒はBの存在や視線に気づいている。だが顔を

窓から出したまま、また声をかけるぞ、という勢いでタスクの方を向いている。Bのことは見て見ぬふりをしている。

キョウスケは生徒に向かって大きく手を振り返した。これは正解だった。キョウスケの明るいキャラクターから違和感がないから。声をかけてきた生徒とのやりとりをさっさと終える。

タスクはどうしたらいいかわからない。声をかけてきた生徒は明らかに自分を茶化しているから。真剣に練習しているグラウンドにはふさわしくないトーンの声。グラウンドには教員がいるし、茶化しに反応すれば自分が部活に集中していないと思われるのを嫌がっていそう。

「タスク！タスク！」

タスクが反応しないから、渡り廊下から声をかけられつづける。タスクは気まずそう。誰か渡り廊下の生徒を黙らせてほしいというような顔。他の部員は無視している。

渡り廊下の生徒が、タスクが自分を無視したことをつまらなそうに窓を閉める。茶化されたタスクにとっては、反応してもダメ、反応しなくてもダメ、のデットロックだった。(2015年9月3日、フィールドノートより)

この事例からわかることは、部活動が盛んではない学校において、生徒たちが混在を求められるのは、決してピッチの上だけではないということだ。彼らの生活には、一緒にサッカーをするチームメイトや対戦相手だけでなく、同じ学校のなかでまったく異なる生活をしている生徒がいる。そして、グラウンドにいるときでさえ、そうした生徒たちとの付き合いを求められている⁸⁾。

部活動が盛んではないというA高校の特徴はこれまでも述べてきた。それは、サッカー部の生徒たちも入部前から把握している。地元出身の生徒のなかには、中学校でサッカー部に所属していながらも、A高校進学後にサッカー部に入らず競技をやめてしまう生徒もいる⁹⁾。一方、彼らのなかには、入学前からA高校サッカー部の存在を知り、練習に参加していた者もいる。たとえばタクヤとカツミは、同じ中学校出身で2学年上のヤスシに誘われ、高校入学前の3月からA高校サッカー部の練習に参加していた。

部活動に入らない生徒の多くは熱心にアルバイトをする。サッカー部の生徒たちもアルバイトを経験しているため、彼らが部活動に入らない生徒たちを批判することはない。だが、アルバイトで貯めた金の使い方や金銭感覚によっては、アルバイトにのめり込む生徒

は批判の対象となる。たとえば、A 高校の生徒のなかには、アルバイトで貯めた金を使って遊ぶために、地元の生徒でありながら都市部への定期券を買う生徒がいるという。こうした行為は、部活動に所属する生徒たちにとって度が過ぎるエピソードとなる¹⁰⁾。

S. F. Nielsen らは、スポーツへの参加が、学校の支配的な文化に入っていく障壁となりうることを示している (Nielsen and Thing, 2017)。また他の論文では、スポーツに興味を持つことが学校の確立されたアイデンティティと異なった場合、スポーツに参加する生徒は自らをアウトサイダーであると定義する傾向にあることを示している (Nielsen et al., 2016)。A 高校サッカー部の生徒たちもまた、スポーツをしない生徒やアルバイトに勤しむ生徒が作り上げる文化に支配されながら、校内における少数派としてスポーツをつづけることになるのである。

第3節 混在のなかにある線引き

以上のように、生徒たちはさまざまな人々と混ざり合いながらサッカーをつづけてきた。彼らが混在するのは、サッカーを共にプレイする人だけでなく、サッカーとはまったく関係のない生徒たちでもあった。

つづいてこの節では、生徒たちがもっとも誤解されやすい部分について記述していきたい。それは、サッカー部の生徒たちが、サッカーをつづけるためだけに、また部の存続に必要な人数を集めるためだけに、見境なくさまざまな人と混在しているわけではないという点である。

これまでの事例を用いても、この点については否定することができる。たとえば、生徒たちが部から離脱していく者を無理に引き止めなかったのはすでに述べた通りである。また、生徒たちは部員が 11 人を下回ったとき、サッカー部の外部から新たな部員を集めることもなかった。他の部活動では、いわゆる「助っ人」として試合の際だけ部活動に参加する生徒を募集することもあったが、サッカー部の生徒たちはそのような方針を取らなかった。

では、生徒たちはどのような人たちと共に活動していくのだろうか。2017 年 4 月 28 日の興味深い事例から、この点について検討したい。この日は金曜日であり、放課後にグラウンドで練習が行われた。次週から始まるゴールデンウィークには、この年の初めての公式試合となる春季大会が行われる。

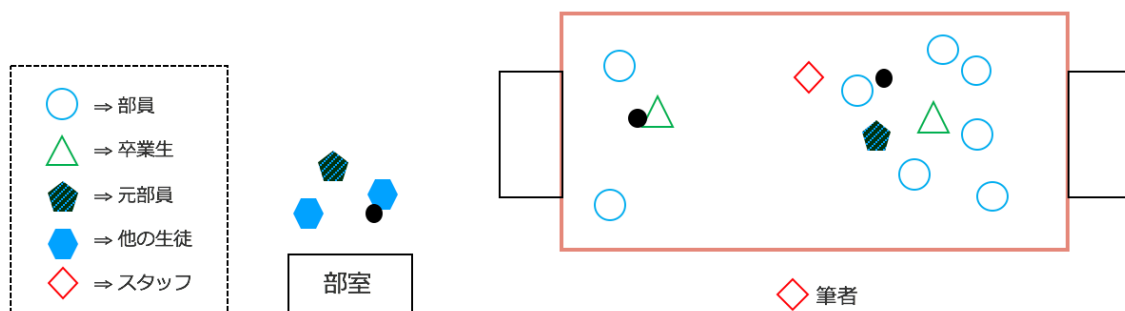


図 4-1 2017 年 4 月 28 日のグラウンドの様子

この日、筆者はグラウンドへ少し遅れて到着した。すると、部室の前で 3 人の生徒がボールを蹴っていた。見慣れない顔でありサッカー部には関係のない生徒がボールを蹴っているのかと思ったが、うち 1 人は 1 年生の頃だけサッカー部に所属していたショウタであった。ショウタと会うのは、彼がサッカー部に最後に参加した日以来だったように思う。残りの 2 人はサッカー部にかかわったことがなく、見たことのない生徒であった。

ジャージに着替えてグラウンドに向かうと、今度はグラウンドの手前でユウジがボールを蹴っている。ユウジは、当時の 3 年生と同じ年に入学したものの、2 年生に進級する時点で退学し就職したため、ここでは卒業生として括ることにする。ユウジは A 高校から離れたあと、もっとも頻繁に部活動に参加していた卒業生だった。ユウジの横では、怪我を理由にこの日の練習に参加できなかったサトシがいる。ユウジはサトシと軽くウォーミングアップを終えると全体トレーニングに合流した。ユウジとサトシ、そして前述のショウタは同じ年に A 高校に入学している。また、グラウンドの隅ではこの 2017 年度に入学した 1 年生のアツシが怪我のため見学していた。

グラウンドではすでに教員 B のもとトレーニングが始まっていた。トレーニングには部員のほかに元サッカー部員のカズキと卒業生のヨシキが参加していた。カズキもまた、サトシやユウジと同じ年に入学した生徒であるが、1 年生のときに退部している。A 高校サッカー部のなかでは珍しく、教員にその意志を明確に伝えた退部だった。ヨシキは彼らより 1 学年上の出身であり、卒業後は専門学校に進学していたが、この日は専門学校の授業が午前中のみだったため部活動に参加したという。

以上のような参加者の説明だけでも、さまざまなプレイヤーがグラウンドに存在していることがわかる。このようにさまざまな参加者が混在した活動は、この部活動にとってまったく珍しい光景ではない。調査をはじめて間もない頃は、教員も生徒もこの混在に触れ

ぬまま活動を進めることに非常に驚いた。だが何年も調査をつづけていくと、どのような生徒がいても、どのような卒業生がいても、まったく見たことがない者がいても、筆者は驚かなくなっていた。

この日の活動が生徒たちの活動形成とその方針を端的に表していると考え理由は、全員がグラウンドでプレイするのではなく、ショウタを含めた3人はグラウンドに入ることなく、部室の前でボールを蹴っていたという点である。なぜ彼ら3人は、部員である生徒たちやユウジ、カズキたちと共にグラウンドでプレイすることはなかったのだろうか。

部員である生徒たちはさまざまな線引きができたはずだ。もっともわかりやすいのは「部員のみ」が部活動に参加できるという線引きである。だがサッカー部の活動が、そうしたものではないことはすでに述べた。

他には、「在校生のみ」「部員・元部員のみ」などの線引きが考えられる。しかし、前者であれば卒業生であるヨシキは参加できないし、後者であれば部室前でボールを蹴っていたショウタは参加できたはずだ。

では、なぜユウジやカズキ、ヨシキはグラウンドで共にプレイし、ショウタがグラウンドに入ることにはなかったのか。それは、部員である生徒たちの線引きが「サッカーを共にプレイできる者」というものだったからだと考えることはできないだろうか。ショウタは元部員であり、サッカー経験者である。だが、彼はサッカー部から離れて以降、部活動に顔を出したことはほぼない。大会直前であるこの時期に、部員たちとショウタが持つ熱量にはあまりにも大きな違いがあり、元部員であるという彼の肩書きはすでに意味を失っていた。

一方、カズキは退部後も部活動に参加することがあり、この年の1月からはより頻繁に部活動で顔を見るようになった。カズキは地元の生徒ではなく、都市部から通学している数少ない生徒である。小学生、中学生の頃はクラブチームに所属し、フィジカルに強さはないものの、同学年の生徒と比較すると技術力の高い選手の一人だった。1年生の冬に退部し、その後は居酒屋でアルバイトをしていた。

練習後、なぜ今日の部活動に参加したのかをカズキに聞いた。カズキは筆者の質問に対して「コーチのような気持ち」で練習に参加していると答えた。だが、彼はサッカー部への復帰の意志はないことを明確に示した。筆者は、カズキがテツやサトシと同じように部員として復帰したいのではないかと考えていたため、その反応が意外だった。

カズキは、高校3年生の公式大会の直前になって、1年以上も前に退部したサッカー部

に都合よく復帰できるとは考えていないという。だからこそ、翌週に迫る春季大会と1ヶ月後に来たる高体連に向けて練習する同級生のために部活動に参加したと述べた。カズキは、筆者が尋ねる前に、復帰の意志はないので安心してください、と言わんばかりに淡々と話していた。

カズキの意志が本意であるかは率直に言ってわからないままである。ただ、カズキと教員Bの関係が良好ではなかったことは確かである。Bは部活動に参加する生徒について、生徒同士が認めるのであれば誰が参加しても構わないという立場を示していた。そのため、Bでさえ名前のわからない生徒がいたとしても、練習にいれば名前も確かめずにそのまま参加させたりしていた。またそれは、部への復帰に関しても同様である¹¹⁾。サトシやユキヒロが部へ復帰したいと申し出たときには、Bは「まず3年生に話つけてこいって。それでその3年生がまあ良いいって言うから」と語り、基本的には教員が干渉する問題ではないという立場を取っていた¹²⁾。

だが、カズキに関してBは、2015年1月に起きた1年生の集団的な離脱の引き金になったという見解を示していた¹³⁾。そのため、この日Bはカズキがグラウンドにいることを見つけた時点で、ユキヒロとタクヤを呼び出し、カズキがそのまま練習に参加していいのかどうか確認したという。この点についてトシミチは、「あの2人（ユキヒロとタクヤ）ならいいよって言いそうですけどね」と述べ、生徒たちはカズキの参加に問題を感じていなかったと述べている。結局、そのまま練習は続行し、Bもカズキの参加を拒否することはなかった。

このように、教員の裁量に委ねられることなく、生徒たちが共に活動するプレイヤーの基準を作り上げていく。グラウンドでボールを蹴ることのなかったショウタは、明確に拒否されたわけではないし、同級生とも仲が良い。むしろカズキとBの関係を考慮すれば、ショウタのほうが参加しやすかったように見える。それでも、スポーツを媒介にして参加できる生徒の基準が作り上げられ、誰もが部活動に参加できるわけではないという空気感が醸成されていた。そしてその空気感は、部活動が盛んではないA高校だからこそはっきりと表れ、部員ではない生徒へと敏感に伝わっていた。ショウタにもインタビューをしようとする、もうショウタはすでにグラウンドから姿を消していた。

一方、見たこともない者が部活動に参加していることもある。卒業生が進学先の大学や専門学校のサッカー部のチームメイトを連れて部活動に参加することがあるからである。彼らは、生徒たちとも初対面であり、「在校生」でも「元部員」でも「卒業生」でもない。

だが彼らは、生徒たちが活動を成立させるうえでたびたび援助を受けてきた卒業生が連れてくる「サッカーを共にプレイできる者」である。そのため彼らが持つ熱量は、ときに在校生や元部員のそれを超えており、所属や経歴に左右されずに、プレイヤーとしてグラウンドに立つことをむしろ歓迎されるのである。

第4節 「同じ高校生だろ」

以上のように、生徒たちがさまざまな人と共に活動するということは、誰もが部活動に参加できることと同義ではなく、決してシンプルなものではない。生徒たちは、さまざまな経歴や競技力を持った部員と混在するだけでなく、部活動が盛んではないA高校のなかで、ときに部活動に入っていない生徒とも混ざり合いながら活動を形成していく。また、部活動に参加するのは、卒業生や中学生、社会人にまで及び、その範囲は非常に広い。グラウンドに向かうと、教員や筆者であっても、初対面の若者がいる場合がある。それでも生徒たちにとって「サッカーをプレイできる者」であれば、彼らはグラウンドで共にボールを蹴る。

こうした活動を通じて、生徒たちが大会に参加することは目標の一つである。小規模の部活動の生徒たちにとって大会参加が容易ではないことは第2章でも説明してきた。ただ生徒たちにとっては、大会への参加だけが目標ではない。スポーツには必ず勝ち負けがつきまとうからだ。本章の最後となるこの節では、これまで触れることのできなかった、この勝負としてのスポーツが生徒たちの活動形成に与える影響という側面から事例を記述したい。

若者がスポーツの大会に参加するうえで、試合での勝利を目指すことはごく自然のことだと思われる。だが、部活動と勝ち負けという要素が結びつくとき、筆者はこの要素がアンタッチャブルなものとして扱われているように思えてならない。

たとえば、部活動と勝ち負けが結びついたとき、「勝利至上主義」というキーワードが想起される場合がある。勝利至上主義は、英語で **win at all costs** と表される。訳せば「いかなる犠牲を払ってでも勝つ」となるだろう。ただ関（2015）によれば、日本と他国では勝利至上主義の成立背景に違いがあり、その意味づけにも差異があるという。たとえば、アメリカのスクールスポーツにおける「勝利」とは、「スポーツの試合での「勝利」のみへ帰結するものではなく、むしろ、地位、名誉、褒賞など随伴する経済合理的価値をすべて綜

合した統合的な勝利」を意味する（関, 2015: 12）。一方、日本の部活動における勝利至上主義には、「全寮制、猛練習、勤勉」などの意味合いが含まれているという（関, 2015: 20-24）。

だが生徒たちの活動は、これらの勝利至上主義に結びつく要素とはかけ離れたものである。彼らは勝利至上主義とは無縁だが、大会に出れば勝利を目指してスポーツをする。むしろ彼らの活動のなかで、勝ち負けの要素は重要な位置を占めていると言える。これは、彼らが「いかなる犠牲を払ってでも勝つ」ために部活動をしていることをまったく意味しない。

生徒たちは試合会場に着いたその瞬間から、勝負の世界に勝手に巻き込まれていく。なぜなら、生徒たちはもっとも小規模の部活動として、場合によってはどのチームよりも試合会場で注目を浴びるからである。そのため、彼らは日々の活動のなかで感じる以上に、試合会場で相対的な小規模性を明確に感じることになる。

テツ 俺らとは何が違うんだろうね

サトシ 練習量、質

テツ 施設じゃね

サトシ 人数、人数

テツ 人数はでかいわ（2017年12月16日、フットサル試合会場にて）

生徒たちは、試合会場で対戦相手を見ながらこうした会話を自嘲気味に繰り返す。自分たちより何倍もの部員がいるサッカー部を目前にすれば、否が応でも部活動の規模の違いを感じざるをえない。

生徒たちがチームの小規模性を実感するという点で、筆者にとってもっとも印象的だったシーンの一つとして、2015年8月末に行われた選手権がある。筆者にとっては、コーチとしてサッカー部にかかわることができるようになってから初めての大きな大会だった。1回戦の対戦相手は、この大会で北海道大会に進出する強豪の私立高校だった。

対戦校のサッカー部が専用バスで会場に到着すると、50人は優に超えるであろう大所帯が専用のマイクロバスから降りてくる。2年生のダイチは、「交代できるメンバーがいてうらやましいな。うちは何本やっても同じ（メンバー）なのに」と愚痴っぽく言った。一方のA高校は、何人かの1年生が乗るべきバスを間違えて遅刻し、教員Cがバス停まで様

子を見に行っていた。

この日、筆者は小規模の部活動で活動することの意味を初めて体感したように思う。試合前のウォーミングアップスペースで、A 高校の生徒たちはいつものように 2 人 1 組でボールを蹴る。かたや対戦相手は、ベンチに入ることのできない選手たちがウォーミングアップの時点から応援団として盛り上げている。応援団が周りを囲むせいで、こちらのウォーミングアップスペースが狭くなっていると感じるほど、A 高校サッカー部と対戦相手の規模の差は対照的だった。相手のウォーミングアップや応援団の様子が気になって自らのウォーミングアップがおぼつかない、そんな浮ついた生徒たちの様子を鮮明に覚えている。

試合前、当時のキャプテンだったケントは、筆者に「試合に負けても涙出ないかもしれない」と苦笑しながら言った。この大会は 3 年生にとって高校生活最後の大会である。彼らにとってはそれほど重要な試合でありながら、もし試合があまりにも大敗だったら、もしくは惜しいとさえ思えなかったら、負けても泣けないかもしれないと言うのである。生徒たちは試合前から、部活動の規模の差や実力差を十分に知っていた。それは、試合前から弱気であるという意味ではなく、その差を十分に理解せざるをえないのである。

試合は前半から圧倒的な劣勢だった。序盤はなんとか耐えていたものの、先制点を許したのを機に一気に失点を重ねてしまう。前半の結果は 0 対 4 だった。4 失点もしてしまったというより、4 失点で済んだという方が適しているほどの押し込まれっぷりだった。

そしてハーフタイムに入り、教員 B から生徒たちに檄を飛ばす意味を込めて「同じ高校生だろ、びびるなよ」という言葉がかけられた。

だがこのとき筆者は、A 高校と相手校が「同じ」ではないからこそ、生徒たちは「同じ高校生だろ」と発破をかけられたのだと感じてしまった。部活動の規模も施設も人数も、A 高校と対戦相手は何もかも違うことは試合前から目にしてきた。そしていま、生徒たちは窮地に立たされていて、立ち向かわなくてはならない相手は自分たちより恵まれた環境を持つ強者である。試合の状況は思わしくなく、チームとしては完全に腰が引けてしまっていた。だからこそ B は、いくら相手が強くても、いくら相手が恵まれた環境でスポーツをしていても、「同じ高校生だろ」と声をかけたのだ。だがそのとき、筆者は同時に、生徒たちと対戦相手は「同じではない」ということを実感してしまったのだ。

実際にピッチに立つ生徒たちは、「同じではない」高校生と身をもって凌ぎ合うなかで、筆者とは比べるまでもないほど相手との違いを実感してきたはずだ。そしてそのたびに、A 高校で行うサッカーとは何なのか、ということを経々自らに問いかけてきたことだろう。

出場メンバーエントリー票

チーム名				大会名	
ポジション				競技日	
番号	選手氏名	学年	会場	相手	チーム名
GK	17	2			
DF・MF・FW	7	2			
DF・MF・FW	6	2			
DF・MF・FW	3	3			
DF・MF・FW	5	3			
DF・MF・FW	12	3			
DF・MF・FW	8	2			
DF・MF・FW	11	2			
DF・MF・FW	23	1			
DF・MF・FW	14	2			
DF・MF・FW	9	3			

※主将には、番号に○印をつける。

交代要員			
ポジション	番号	選手名	学年
GK・DF・MF・FW	18		1
GK・DF・MF・FW	18		1
GK・DF・MF・FW	19		1
GK・DF・MF・FW	13		3
GK・DF・MF・FW	16		2
GK・DF・MF・FW			
GK・DF・MF・FW			
GK・DF・MF・FW			
GK・DF・MF・FW			

チームスタッフ	
役職	スタッフ氏名
監督	
部長	
コーチ	魚住智広
マネージャー	
レ	
ク	

ユニフォームの色			
	シャツ	ショーツ	ソックス
F	正		
P	副		
G	正		
K	副		

サッカークラブ

本部提出

図4-2 20人中16人しか埋まらないメンバー票

さらに、A 高校でのサッカーの特殊性は、他の高校と比べられたときだけでなく、彼らが過去に経験してきたサッカーと相対化されたときに浮き彫りになる。この点について、テツへの聞き取り調査から記述したい。

テツへの聞き取り調査は、2017 年 7 月 27 日に放課後のグラウンドで行われた。テツは、A 高校のある地元出身の生徒である。小学 3 年生の頃、地元のサッカー少年団でサッカーを始めた。この少年団は北海道大会に出場するような強豪チームだったという。その後、A 高校にも多くの生徒が進学する W 中学校に進学する。W 中学校サッカー部では、2 学年上にケント、1 学年上にキョウスケやダイチ、同学年にはサトシやショウゴが在籍した。

また、テツの 1 学年下の世代は全国大会に出場している。その後、A 高校に進学すると、サッカーをつづけたいという理由のほかに、先輩のキョウスケに誘われたことや、同学年でもっとも仲のよかったサトシが入部したこともありサッカー部に入った。

高校入学後は、サトシやユキヒロとともに 1 年生の頃からレギュラーとして出場するようになる。サッカー部にはすでに多くの知り合いがいたことから、部にも早くから馴染んでいるように見えた。だが、第 3 章でも触れたように、徐々に部活動への出席が断続的になりはじめると、1 年生の冬には部活動から約半年間にわたって離脱した。その後は部に復帰したものの、2 年生の冬から 3 年生になるまで再び出席状況が断続的になる。3 年生になったあとは高体連まで継続的に部活動に参加した。高体連の終了後は、いつまで部活動に参加するか相当悩んでおり、部活動への出席は頻繁ではなかったものの、この聞き取りが行われた数日前から部活動に本格的に復帰していた。

この聞き取り調査は構造化されたものではなく、20 分弱にわたって 3 年間の部活動を振り返る形で行われた。

筆者 ちょっと昔話になるけど、あのとき（1 年生の頃）はなんでパツって抜けたりしたのかなって。

テツ いやもう、全部言ったら、自分の性格上、めっちゃ負けず嫌いだから。試合とかでも気に入くないから、自分自身が。そのときに自分の性格上、もうそういうことやってた誰にも相談とかしないから。あのときはほんと何回もやめようとか思ってたし。うん、そうっすね……。なんか、なんて言えばいいんだろう……。うん、みんなと一緒にんだけど、違うみたいな。

筆者 そのみんなっていうのは同級生の話？

テツ 同級生です。なんか違うのかな、って。

筆者 それはなんかこう、サッカーに関する考えとか？それともなんかもうちょっとこう……。

テツ 色々あるんすけど、けっこうあの（同級生と）仲いいんすけど（笑）。思ってたのは、俺……。小学、中学って強いチームにいたんすよ。

筆者 うん、中学は W 中だよね？小学校は？

テツ 小学校は H 小学校で、全道大会とかも行ってる。A 高校来たときに、負けたじゃないですか。

筆者 うん、最初辛い、けっこうね。

テツ W 中のときに、ケントくん……先輩だったんですけど、めちゃめちゃ強かったのに、なんでケントくんたちでも無理なんだろうな、ってずっと思ってた。いや、いつかは、俺らも力になんないって、チームの力にならないといけないって思ってた。なのに周りは、なんか (笑)。考え方、甘いな、みたいな。

筆者 まあ 1 年生、けっこういろんなキャラいたしね。

テツ そうですね (笑) メンバー豊富だったんですけど。1 年の頃から、勝ち……にこだわる人がいなくて。ユキヒロもユキヒロで、勝ちじゃなくて、なんかまとまりを大事にしてて。同じタイプの人がいなくて。一時期はこう 1 人になりたい……ときがちよくちよくあつて。

テツの語りは、自らの過去や A 高校での経験が混ざり合っており、直感的に理解することは難しい。彼は、A 高校の入学前に自らが経験してきたサッカーの経験と A 高校でのサッカーの経験を対比しながら、サッカー部から離脱した理由を大きく分けて 2 つあげている。1 つ目は、中学校の先輩であり、テツにとって雲の上の存在とも言えたケントのような選手がいながらまったく勝てない A 高校サッカー部の実力について。2 つ目は、そうしたチームの実力にもかかわらず、同級生のサッカーに対する姿勢が自らと一致しなかったことについてである。そしてこの 2 つの理由は共通して、サッカーと勝ち負けに関して語られている。

またテツの語りからは、彼が居場所としての部活動を求めたがゆえに、上級生が継続的に出席していた部活動から離脱したのではないことがわかる。むしろテツが求めていたのは、勝負にこだわるチームである。部活動から離脱していった彼こそ、当時の同級生に同質化を求めていたのである。

筆者 そのあと (離脱後) はバイトやったりしたの？

テツ いや、もうそのバイトは、外サッカー全力捧げようと思っててやめたんすよ
14)。

テツは、勝負としてのサッカーにこだわっていた。勝ちにこだわらない同級生に不満もあった。だが同級生と仲も良く、部活動への出席状況は同級生と大きな違いはなかった。

むしろ長期的な離脱の回数を考えると、テツはもっともサッカー部から離れていた部員の一人である。アルバイトに熱心になった時期も長い。では、彼の高校生活は、ただそのときにやりたいことをやっていた表れなのだろうか。テツにとって3度目の離脱とも言える3年生の高体連後について、彼は以下のように語る。

テツ　高体連負けたのに、これで悔しくないのかな、みたいな。まあ勝手に1人で思ってたから。それで、まあ、またこのままいったら負けるんだろうな、とかいろいろ考えて。

テツが部から離脱した理由を語るとき、それは必ずといっていいほど敗戦にまつわるものである。彼は、自分だけが勝負にこだわっているのではないかという周囲とのギャップや、このままでは再び負けてしまうのではないかという敗北への不安を感じている。テツが歩んできた3年間の部活動は敗戦の記録でもある。彼が1年生のとき、A高校は高円宮杯に参加し、1年間を通じたリーグ戦のなかで1勝しかできなかったというシビアな結果を体験している。高体連と選手権では、ともに2桁以上の点差をつけられ敗戦した。

「きつくてもやった分結果になると思うし強い相手にも負けないようになりたい」

「目標は春の大会までにどれだけ強くなるか。負けない。負けたくない」

これは、2016年9月2日、当時2年生だったテツが、ミーティングのなかで記した文章である。彼は、「勝ちたい」という勝利への欲求ではなく、「負けたくない」という敗北への回避について重ねて書いている。上述したような結果を踏まえると、ケントやテツが試合前から敗戦を予測できてしまうのは、何ら不思議なことではない。

先行研究は、個人的な目標に向けて具体的な計画を立てることのできる生徒や、試合での勝利を目標にして部活動に取り組む生徒は部活動に対する満足度が高いという結果を示している（深見・岡澤, 2016）。この結果からも示唆されるように、テツの離脱の大きな要因となったのは、勝利できないことではなく、勝利という目標を立てることができないことだったのではないだろうか¹⁵⁾。

教員Dは、生徒たちが試合前から敗戦という結果を予測できてしまうような状況について、「勝ち癖」をつけることが重要であると述べていた。ここでDが求める勝ち癖とは、

決して勝利のみを追求する姿勢ではない。端的に言えば「自分たちのチームが勝つことができることを知ること」であった。たしかに、サッカー部にとって勝利は非常に貴重な経験だった。DがA高校へと赴任してきた2017年、サッカー部は1勝するどころか公式戦で9連敗を喫し、かつ1得点もあげることができていなかった。つまり、この年に入学した1年生は練習試合も含めて勝利をほぼ経験したことがない状態だった。

以下は、2017年の夏、複数の高校で4日間にかけて行われた合同練習試合にて、勝負としてのスポーツが生徒たちに強く意識づけされた事例について取り上げる。この合同練習試合は、2017年8月8～11日に、4日間にかけて行われた。ある高校の顧問教員が主催となり、練習試合を組むことが難しい公立高校に向けて毎年開催され、A高校もつづけて参加してきた。この年の練習試合には計14チームが参加し、参加を申し込んだ日程に応じて試合が設定された。A高校は4日間すべてに参加し、60分の試合を1日2試合こなした。タイトなスケジュールではあったが、練習試合を組むことが難しいA高校にとっては貴重な機会だった。

この合同練習試合のなかで、教員Dは4日間を通じた1つの目標を生徒たちに設定した。1日2試合、計8試合が行われるなかで「4勝」という具体的な目標を示したのだ。Dは、4日間を通じて、勝利にこだわってプレイすることを生徒たちに繰り返し求めた。勝利数が具体的に目標として設定されたことは3年間にわたる調査のなかで後にも先にもこの事例のみであった。またこの4勝という目標は非常にハードルが高いと思われた。D自身も目標達成は難しいと感じていたと後に語っている。

E. A. Locke と G. P. Latham は、スポーツにおける目標設定の重要な要素として、明確な目標であること、短期的な目標であること、達成のために努力が必要なこと、フィードバックがあること、目標を受け入れられること、などをあげている (Locke and Latham, 1985)。この要素を踏まえると、Dが設定した「4勝」という目標は生徒たちにとって絶妙なラインを突いていたように思う。だが、このような目標を設定したからといって、生徒の競技力やチームの実力が急に伸びるわけではない。そのため、4日間を通じて2つの戦術的な目標を設定し¹⁶⁾、それをチームとして徹底しつづけることを求めた。

すると、生徒たちは良い意味で予想を裏切ることになる。最初の2日間を2勝1敗1分という結果で終えることができたのである。1、2日目でそれぞれ1勝ずつあげ、生徒たちはまさに勝つことができるということを徐々に知っていった。そして3日目。1試合目は敗れたものの、2試合目を勝利し、A高校は3勝目をあげた。1日1勝という、理想的な

ペースだった。

この3日間の様子を、Dは嬉しそうに語った。

最初は勝っただけで手叩いて喜んでたのに、2試合目(2勝目)になったら首かしげてベンチ帰ってくる。それで今日(3勝目)になったら試合後に話し合ってる。短期間でこれだけ変わるんだと思ったよ。

スポーツでは、結果と内容を対比して語ることがある。「結果だけは良かった」や「試合に勝って勝負に負けた」といった常套句は、スポーツにおいて内容と結果が必ずしも一致しないことを示している。だがこの数日間、生徒たちは結果に引っ張られる形で、徐々に内容を改善しようとしていた。「首をかしげる」「試合後に話し合う」という様子はまさに、結果は良かったものの内容には納得いかない生徒たちの振る舞いだと言えよう。

4日目、A高校は1勝1分という結果を残し、この合同練習試合を通じて、4勝2敗2分という好成績を収めた。もちろん、対戦相手のほとんどが公立高校だった影響は大きい。また、あくまで練習試合であり、対戦相手が勝負にこだわらずに選手を交代していたことなども試合結果を大きく左右しただろう。だが筆者やDが達成は難しいだろうと感じていた目標は結果として達成された。

なお、この合同練習試合において、もっとも精力的にチームを引っ張ったのが3年生である。そしてこの3年生とは、テツをはじめとする、断続的な部活動への参加や「サボリ」、そして長期的な離脱を繰り返した当時の1年生の2年後の姿である。

ここではもちろん、部活動に消極的だった生徒が積極的な姿勢を見せるようになったという「成功例」を披露したいわけではない。この合同練習試合の事例やテツへの聞き取り調査から述べたいのは、第3章で記述した当時の上級生と1年生の差異は、先行研究が用いるような競争の場／居場所というわかりやすい構図のなかに果たして当てはめることができるのかという点である。なぜなら、部活動に断続的にのみ参加し、「サボリ」の常習犯として他の生徒たちから見られていた当時の1年生が、2年後にはチームとして勝ち癖をつけようという部活動の方針のなかで積極的に活動しているからである。

第2章で生徒たちは日本サッカー界が理想とする「築き上げる」活動から疎外されていたことを明らかにした。そして、第3章では部内で生じる問題にも対応しなければならなかったことを示し、第4章ではその対応策として部の規模縮小やフットサルへの移行に柔

軟に対応しながら、獲得しうるスポーツの機会に「沿って進む」生徒たちの活動を見てきた。

では、この生徒たちの「沿って進む」活動とは、結局のところどのような困難を克服しようとした先に見いだされたものだったのだろうか。もしくはこの「沿って進む」活動を進めた結果として、どのような困難を克服できたのだろうか。さらに、もし部活動が生徒たちにとって競争の場でも居場所でもないとするれば、生徒たちにとって部活動はどのような意味を持つ空間だったのだろうか。そして、生徒たちはどのような論理にもとづいて活動を形成してきたのだろうか。次章では、先行研究の議論と本稿の事例を照らし合わせながら、以上の点について考察したい。



図 4-3 公式大会で勝ち点を獲得したときのスコアボード¹⁷⁾

第4章／注

- 1) 2人は2015年9月29日の練習から、1回休むごとに互いに500円を渡すというルールを作っていた。
- 2) 2016年1月30日の調査より。
- 3) この点を踏まえると、A高校サッカー部は、大学のスポーツ系サークル化したわけではないと言えるだろう。松尾は、スポーツ系サークルについて、学生の出入りが自由であるため存続の危うさを常態しているとしたうえで、「強制しないーさせない」関係性を戦略的に浸透させる学生の姿を描いた（松尾，2006）。たしかに、A高校サッカー部にも部内の強制性を排除しようとする働きかけはあったが、その適用は限定的であった。むしろ、A高校サッカー部は、一部の生徒が自らに強制性を付したがゆえに、部員数が11人を下回ったあとも存続してきたのである。
- 4) 2018年1月21日の調査より。中学校入学と同時に部活動でサッカーを始めたタクヤは、クラブチーム出身の選手について、他人のミスを厳しく叱責し、いいプレイをしても手放しで称賛しないという印象を抱いているという。
- 5) 2018年1月14日の調査より。
- 6) この「混在」は、can be mixed よりも、conviviality に近い概念を想定している。つまり、単に混ざることができるだけでなく、ヤドカリとイソギンチャクのように互いに利益を受けながら共同して存在する生態学的な symbiosis（共棲）でもなく（川本，2008: 5）、参加者への不配慮によって同質化を求められずにいることのできる「異なるものの共生であり、差異への権利と対等者としての承認要求を統合する企て」であり、「他者たる存在との対立緊張を引き受けつつ、そこから豊かな関係性を創出しようとする鋭意である」（川本，2008: 9）。
- 7) ジロウはサッカーのほかに学校の外部で空手をつづけており、全国レベルの実力者でもあった。そのため、これを理由に部活動を欠席することがあった。
- 8) 若者のスポーツ参加の要因に関する研究にて、男子は女子と比べるとスポーツの経験に関してネガティブな記憶を持っている者は少ないものの、サッカーの試合中にかかわれたり名前を呼ばれたりすることに否定的な記憶を持っている者がいることが明らかになっている（Coakley and White, 1999: 76）。
- 9) 2016年度入学のW中学校出身の生徒たちは、中学生の頃、全国大会に出場した世代で

ある。この世代の正ゴールキーパーとして活躍した選手は、A 高校に入学したものの、サッカー部に入部することはなかった。

- 10) この批判が、アルバイトと部活動を並行していたトモノリによって行われた点は興味深い。だがトモノリもまた、アルバイトを理由に部活動を欠席した際には、同級生たちから批判の対象になった。
- 11) 教員 D もまた、生徒の混在や離脱、その後の復帰に関して、生徒たちに判断を委ねるという立場を取っていた。また部員を集めることに関して躍起になる必要はないという点で、生徒たちと同じような立場にもあった。たとえば、A 高校では秋季に学校見学会があり、中学生が部活動を見学に来る機会がある。この見学会について D は「みんなは頑張ってるし、普段と違って（見学会を）張り切る必要はない。ありのままの自分を見てもらえ。俺らはお前らが誰よりも努力しているのを知ってる。そういうのをわかる奴と、一緒にできるならそれでいい」と生徒たちに向けて語っている（2017 年 10 月 9 日の調査より）。
- 12) 2016 年 5 月 7 日の調査より。
- 13) 教員 B は、カズキが中心となって 1 年生が社会人リーグに参入しようとしたものの頓挫したことについて、「なんかカズキの口車に乗せられて、自分たちでチーム作ろうぜなんて言っても、登録料十何万にユニフォーム代もかかるってわかって、じゃあやめます、部活戻りますってなめてんのかって」と語っている。（2016 年 5 月 7 日の調査より）
- 14) 「外サッカー」とは、フットサルではなく、グラウンドで行われるサッカーのこと。アルバイトをすべてやめて選手権が終わるまで部活動に専念するということを述べている。
- 15) 実際、ジロウやジュンのように、大会での 1 回戦敗退を機に部活動から離脱した生徒もいる（付表-2 参照）。
- 16) 1 つ目は、1 トップに入る選手にボールを入れることである。トップにくさびのパスを入れることのできるタイミングを見逃さないことを重要視し、たとえパスがカットされても、意図を持ったパスには教員たちから賞賛の声があがった。また 4 日間を通じて 1 トップを表す「9 番」という言葉を生徒たちからも繰り返し聞くことができた。2 つ目は、「弱いパス」を使うことである。これはパススピードを落とすという意味ではなく、受け手との距離によって適切なスピードのパスを出すという意味で用いられていた。
- 17) 2015 年 9 月 26 日の調査より。

第5章 生徒たちの活動形成が意味するもの

第2章から第4章にて、本稿の2つの目的に応じてさまざまな事例を見てきた。小規模のサッカー部の生徒たちは、日本サッカー界が理想とする「築き上げる」活動に対応できず、ときには大会参加も断念しながら、獲得しうる目の前のスポーツの機会に「沿って進む」活動をつづけてきた。

本章では、この彼らの活動を手がかりとして、以下の3点について論じていく。第一に、部活動を競争の場もしくは居場所として論じてきた先行研究を改めて整理し、生徒たちが求める部活動はいずれかに当てはまるのかについて議論する。第二に、これまで記述してきた小規模の部活動のさまざまな問題をまとめ、生徒たちがもっとも克服しなければならなかった点について考察する。そして第三に、生徒たちが部活動においてどのような論理にもとづき活動を形成してきたのかを示す。

第1節 競争の場／居場所としての部活動

第1章の第1節にて、内田は競争の論理／居場所の論理という二分法を用いながら、今日の多くの部活動は競争の論理によって運営されており、今後は居場所の論理によって部活動を運営すべきだと論じた（内田, 2017）。内田によれば、「「居場所」の論理とは、（中略）、「競争」の論理の対になる考え方」である（内田, 2017: 208）。そして、「居場所という言葉には、部活動のもっとも重要な機能である機会保障の意味が込められている」（内田, 2017: 208）。一方、競争の論理にもとづく部活動は、「強化選手の育成や試合に勝つことの優先度が高い」ため、「試合（や練習試合）をたくさんこなすこと、そのために土日まで費やすことが厭われない」（内田, 2017: 68）。

内田のように、部活動を二項対立的な構図に当てはめる研究は少なくない。典型的な例は、部活動を「競技志向型部活動」と「楽しみ志向型の部活動」のように分け、生徒たちが自らの志向性に沿った部活動に参加できるよう棲み分けるべきだと論じるものである（三木, 2013）。また部活動が上のようなどちらかの型に硬直化していることを指摘するものや（作野, 2011）、クラブチームと部活動が役割分担をする将来は否定しながらも、結果として部活動が動機づけの低いスポーツ参加者を「回収」（横田, 2003: 59）する役割を持つ可能性に言及する研究もある（横田, 2003）。なお内田は、競争の場／居場所として、ク

ラブチームと部活動を明確に役割分担すべきだという立場を取る（内田, 2017: 211-212）。

それぞれの型について触れた研究についてもう少し詳しく見ていこう。競争の場としての部活動が論じられる場合、こうした場が生じる要因として、スポーツと教育の結びつき、あるいは指導者のスタンスに触れるものが多い。たとえば、部活動の「過熱」について、批判すべきものは「その指導者の勝利追求の「度合い」の強さなのではなく、何のために勝利追求が「計画」されるのか、の判断の欠如」であると、部活動での指導者の姿勢によって競争の場が生じると述べる研究がある（久保, 2002: 488）。

そもそも内田は部活動を「競技の論理」と「教育の論理」に分けた従来の研究（友添編, 2016: 2-15）を踏襲しつつ、「教育」という名のもとに行われる「競争」の存在を指摘し、「教育の論理」という言葉を用いない理由を説明している（内田, 2017: 68）。この指摘は以下の研究を見ても十分に納得できる。たとえば松尾は、部活動と民間クラブチームを比較しながら、部活動でのスポーツを通じた生活指導の存在について教員が葛藤する姿を描いている（松尾, 2015: 198-210）。また中澤は、部活動に積極的にかかわる教員が、教師／コーチという役割間の葛藤を主観的な意味づけによって乗り越えることで部活動に積極的にかかわっていることを明らかにしている（中澤, 2014: 296）。

一方、居場所としての部活動は、大きく分けて 2 つの方向性から論じられてきた。1 つ目は、前述した内田が用いる二項対立的な構図のように、相対的に活動量が少なく、教員や生徒に負担を強いることのない部活動を指す場合である。2 つ目は、生徒文化を形成する機能や学校への適応を促進する機能を持つ部活動を指す場合である。たとえば甲斐は、部室やアルバイト、生徒たちの「彼女」、もしくは卒業後の生活にも着目している（甲斐, 2000: 115-142）。そして、生徒たちの文化（「やつら」の文化）を受け入れてくれる人間関係（「居場所」）を重要視する姿勢は、学校の論理を超えて、卒業後の生活や職場での「したたかさ」と親和性を持つことを示している（甲斐, 2000: 131-135）。また部活動と学校生活のつながりについては、部活動が学校の他の諸場面とは独立して生徒たちの「向学校性」を高める機能があることや（藤田, 2001）、学校経営戦略の観点から学校へのコミットメントの向上や進路選択の拡大のための活動として部活動が位置づく可能性について論じられている（白松, 1997）。このような居場所としての部活動を論じる研究は、グラウンドや体育館などスポーツが行われる場を超えて、部活動の外部を含めて調査の対象とする傾向にある。

では、A 高校サッカー部は、競争の場あるいは居場所として成立してきたのだろうか。

まずは少し長い引用になるが、内田の定義を改めて参照したい。

居場所の論理とは、まずもって私が部活動のもっとも重要な存在意義であると考え
る「機会保障」を意識した言葉である。「機会保障」とはすなわち、放課後に授業以外
の活動として、付加的なかたちでスポーツや文化活動の機会が、生徒に低額で提供さ
れていることを指す。(中略) 居場所の論理は、最低限の機会を保障することに目的が
ある。機会が保障されているだけであるから、全員が参加を義務づけられるものでは
ない。また連日にわたって練習や試合がおこなわれるということもない (内田, 2017:
67-68)

そして、競争の論理では、強化選手の育成や試合に勝つことの優先度が高い。居場
所の論理においても、試合やコンクールはあってもよい。競争してこそ、当のスポー
ツや文化活動をいっそう楽しめるというものだ。だが、居場所の論理ではその比重が
かなり小さい。

いっぽうで、競争の論理では、試合（や練習試合）をたくさんこなすこと、そのた
めに土日を費やすことが厭われない。ただし、競争の論理であっても週 2 日の休養は
必要だ。連日、練習を長時間やれば強くなるといった発想は時代遅れである。(内田,
2017: 68)

この定義と本稿で取り上げた事例を照らし合わせると、A 高校サッカー部が競争の論理
によって運営されていなかったことは明らかである。生徒たちはたくさん試合をこなすど
ころか、本来であれば参加できるはずの大会まで出場を見送ってきた。また彼らの活動は、
休養日を設定せずに活動するような過熱する部活動とは実態が大きく異なっている。

では、生徒たちの部活動は居場所の論理によって展開されてきたのだろうか。この点に
ついて 2 つの側面から検討したい。まず 1 つ目の争点となるのは、部活動が保障するスポ
ーツの機会の範囲についてである。ただ本稿は「部活動をどのような空間にすべきか」と
いう議論に参入しないことを繰り返し述べてきた。そのため本稿では、部活動がどのよう
なスポーツの機会を保障すべきかという区分を明確化することはない。よって本節では、
内田が示した居場所の論理にもとづく部活動の運営方法を基準に判断したい。

内田は居場所の論理にもとづいて部活動を運営するために、地区大会への参加や地域単

位の活動に専念し（内田, 2017: 208（図9-3））、「全国大会への不参加ならびに参加大会の精選」をすべきだと論じている。そして内田はこの理由として「複数の大会に学校の部活動としてエントリーすると、今度はそのために練習試合が必要となり、そのために日々の練習が不可欠になってくる」からだとしている（内田, 2017: 213）。

だが、A 高校のある地域で対外試合が行われることはほぼなく、試合に参加するには公式試合にしる練習試合にしる他の地域まで移動しなくてはならない。そのため、地域単位での活動はそもそも困難だったと言える。また生徒たちは、全国大会はもちろん、本来であれば参加できるはずの地区大会への参加も断念している。すると彼らは、内田が想定する「最低限の機会」（内田, 2017: 68）をも喪失していると考えることができる。

2 つ目の争点は、「居場所」の定義およびその所与性である。たびたび引用してきた内田の著書『ブラック部活動』では、居場所としての部活動について以下のように書いている。

居場所というのは、生徒にとってそこに居ることが強制されるものではなく、そこに居ることが選択できるものである。「そこに居なくてもいい」ということだ。（内田, 2017: 208）

筆者はこの文章に、A 高校サッカー部が居場所の論理によって運営されていない理由がもっとも鮮明に映し出されているのではないかと思う。なぜなら、生徒たちは部活動に「居たくても居ることができない」危機と常に隣り合わせだったからである。1 つ目の争点でも述べたように、生徒たちは部活動での「最低限の機会」でさえ保障されていなかったと考えることができる。また部員数が常に足りず、サッカーを諦めフットサルへと移行した時期もあった。言い換えれば、内田は居場所としての部活動を所与のものであると論じたが、生徒たちにとって部活動の存続は決して約束されておらず、「そこに居ることが選択できるもの」ではなかった¹⁾。

上記の内田の「居場所」の定義は、内田の問題意識が色濃く映し出されているように思う。内田の問題意識について、彼が事例として取り上げたプロジェクト²⁾の趣旨を参照したい。

署名の趣旨は明確である。部活動指導は、教員の本務ではなく、ボランティアな活動である。しかし現実には、すべての教員が部活動指導にあたることが慣例となって

いる。そして、平日の夕方と朝の時間を無給で指導にあたり、土日祝日も練習や大会参加のために出勤することが求められる。そこに「する・しないの選択権」はない。

「部活がブラック」という表現には、そうした実情が反映されている。

プロジェクトが文部科学省に求めることは、「学校の教師に部活動の顧問をする・しないの選択肢を与えるよう、文部科学省が日本全国のエ育委員会に指導・指示すること」である。教育課程外である部活動について、国がその扱いの細部にわたってまで決定してしまうのはハードルが高い。そこで、学校を管轄する各自治体の教育委員会に対して、文部科学省から指導・指示することを、プロジェクトは要望している。(内田, 2017: 187)

内田がもっとも危惧しているのは、部活動への関与に関して選択肢を持つべき者がその選択肢を奪われることである。その結果、彼の調査対象は自ずと、本来であれば部活動から離れるという選択肢を持つはずの教員や生徒、保護者となる。

一方、A 高校サッカー部の生徒たちにとって部活動は「そこに居ることが選択できるもの」ではなかった。たしかに生徒のなかには、部活動における交渉や折り合いのなかで、「そこに居なくてもいい」部活動を獲得してきた者もいる。だが、このような部活動に行き着いた生徒こそ、実際は部活動でのスポーツで勝負にこだわり、また理想とする部活動から乖離した状態に苦心し、ときに部活動から離脱してきた(第4章第4節参照)。競争の場としては頼りなく、居場所としてはその存続があまりにも不安定な部活動のなかで、生徒たちは活動をつづけてきたのだ。

第2節 2つの予測不可能性

では、A 高校サッカー部の生徒たちは、どのような部活動を探し求めていたのか。この点について検討するために、彼らにとって「沿って進む」活動とはどのような問題を解決しようとした先に見いだされたものなのか、あるいはなかばやむをえず「沿って進む」活動を進めた結果としてどのような困難を克服できたのかについて論じたい。

本節で言及するのは、2つの予測不可能性についてである。第一に、活動の予測不可能性である。これまでも述べてきたように、日本サッカー界は若者のサッカーに対して、試合出場機会を定期的に獲得しつづけることを求めている。2018年、日本サッカー協会が部

活動に対して用意した「手引き」には³⁾、「試合をしないと上手くなりません」「練習試合より公式試合を多くする」という文言に加えて、図5-1や図5-2が並べられてある（日本サッカー協会, 2018）。

これらが掲載された「手引き」は、2018年3月にスポーツ庁が「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を発表したことを受け、同年7月に日本サッカー協会によって作成された。つまり、日本サッカー界が用意した最新のガイドラインである。このように日本サッカー協会は、クラブチームだけでなく部活動にも、公式試合を繰り返すことを求めている。

このような日本サッカー界が求める活動方針を本稿では「築き上げる」活動と示してきた⁴⁾。一方、第2章では、小規模のサッカー部の生徒たちが試合出場機会を得る難しさについて示した。なかでも、「負けても次がある」リーグ戦方式の日程的および身体的負担や、余剰人数を前提とした大会規定が、「築き上げる」活動の肝となるリーグ戦方式の大会参加を断念させていた。さらに、1年間をかけて行われるリーグ戦方式の大会に参加するためには、3年生が「引退」した秋季以降も十分に部員を確保できる見込みがある必要があった⁵⁾。だが、A高校サッカー部の生徒たちは、もともとの人数不足に加えて、第3章以降で述べた出席状況のばらつきや分極化の影響を大きく受け、直近の活動以外の予測を立てることはできなかった。

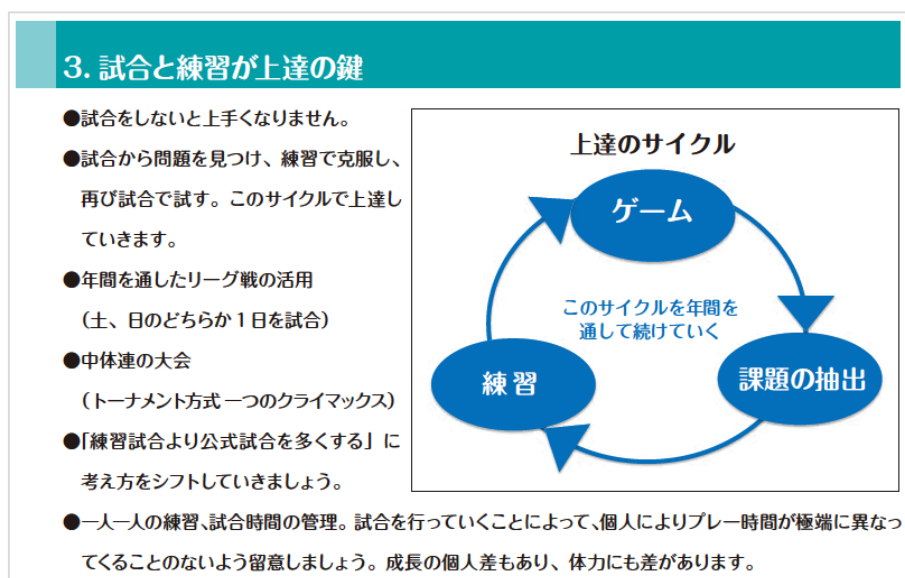


図5-1 日本サッカー協会が重要視する試合出場機会（日本サッカー協会, 2018）

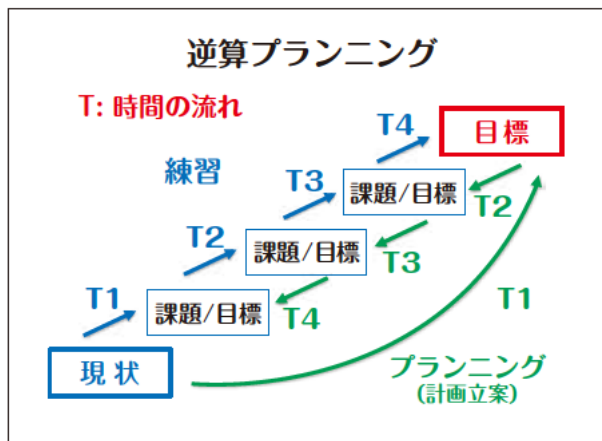


図5-2 日本サッカー協会が推奨する活動計画（日本サッカー協会, 2018）

そのため生徒たちにとっては、図5-2のように長期的な目標を見据えて「築き上げる」活動をするということは非合理的であった。なぜなら将来の大会に向けた活動を行ったとしても、その大会への参加は保障されていないからである。すると生徒たちにとっては、「築き上げる」活動ではなく、獲得できる可能性の高いスポーツの機会に「沿って進む」活動をするほうが合理的である。結果はうまくいかなかったものの SNS によって出席人数を把握するルールを作ったことや、部員数の減少によって大会に参加できそうなフットサルへと移行したこと、またそれにともない部活動に継続的に出席する生徒たちがダブルスタンダード的な自律性によって活動を成立させたことなどは、まさに「沿って進む」活動の結果として活動の予測不可能性という問題を乗り切ろうとした例である。

本稿の事例を並べると、生徒たちは、団体スポーツを営む若者たちとしてまとまりのない集団だと捉えられるかもしれない。また、彼らが作りあげたルールやその都度の判断は、生徒それぞれを不公平に扱っていると読み取ることもできるだろう。だが、生徒たちからすれば、目の前のスポーツの機会を確保することに強くプライオリティーが置かれるべきであり、その他の問題については一時的に棚上げしたほうが合理的だったと言える。

なお、小規模の部活動であれば活動の予測不可能性に苦悩することは自明であるという指摘もあるだろう。だが、日本の若者のサッカーにおいて、活動を長期的に予測して計画することをサッカー界から強く要求されているなか、生徒たちが時代に逆行する活動に向かう必要性については本稿で明記しなければならない。

第二に、勝利の予測不可能性である。ここで勝利の予測不可能性が高い状態とは、勝つことができるかわからないという意味ではなく、勝つことが難しいことがすでに試合前か

ら理解できてしまうという意味である⁶⁾。言い換えれば、敗北の予測可能性、あるいは、希望的観測すら許されない状態という意味である。

生徒たちは部活動の小規模性がゆえに紅白戦や練習試合の機会を満足に得ることができない。そのため、勝利の予測不可能性を立て直すことができないまま、いわゆる「ぶっつけ本番」で、巻き込まれるように公式試合の当日を迎えてしまうことも少なくない⁷⁾。

さらに生徒たちは自らの部活動が強豪ではないことを十分に理解している。筆者が調査した3年間のなかで、フットサル大会を除いた公式試合の成績は2勝32敗3分、勝率は約5%である。10点差以上をつけられた試合は5試合、5点以上失点を喫した試合は16試合と約半数にのぼる。この成績からも、彼らの活動がいかに試合での敗北と隣り合わせであったかが理解できる。

このような現実のなかで、競技をつづけたり⁸⁾、スポーツを楽しんだりすることは並大抵の難しさではない。さらに、勝利の予測不可能性が切迫しているにもかかわらず、日本サッカー界は試合を繰り返すことを求めてくる。こうした背景を踏まえると、生徒たちがフットサルに活路を見いだしたことは十分に理解できる。フットサルはすべての高校が取り組んでいるわけではないため、大会での競争率が低い。また、選手数が11人から5人へと少なくなるため、各チームの戦力差が大きく縮まることになる。

だが、生徒たちがサッカーの試合での勝利を度外視した活動をしていたわけではなかったことは改めて示す必要がある。なかでも、誰かれ構わず部活動に参加できるわけではないという生徒たちの活動方針は、ただその日の活動が成立すればいいというわけではなく、試合での勝敗を絶えず見据えていたことを示している。さらに、生徒たちは試合での勝利にこだわるがゆえに、現実と理想の乖離に苦心し、ときに試合での勝利を目標として設定する短期間の活動に気を吐いていたのである。

第3節 プレイの論理

このように、小規模のサッカー部の生徒たちは、日本サッカー界が求める「築き上げる」活動に対応することができず、獲得しうるスポーツの機会に「沿って進む」活動をつづけてきた。彼らは、やむをえずこの活動方針を取ったとも言えるが、活動の予測不可能性という差し迫る問題をどうにかしようとする姿勢の表れでもあり、結果としてわずかではあるが勝利の予測不可能性の克服にもつながっていた。

また第1節では、生徒たちにとって部活動は競争の場とも居場所とも言い切れない実情について述べた。これは言い換えれば、生徒たちにとって2つの予測不可能性を乗り越えるために重要だった「沿って進む」活動を支える論理が、競争の論理とも居場所の論理とも違った形で存在したということだ。

以上より本節では、これまでの事例と考察を踏まえて、生徒たちは部活動のなかでどのように楽しみを見いだしているのか、という本稿の原点ともなる問いについて検討したい。これは言い換えれば、競争の論理／居場所の論理という従来の二分法では当てはまらない、生徒たちの活動形成の基盤となる論理について検討することである。

ここで、本稿の問いから従来の部活動研究の二項対立的な構図を乗り越えるにあたり、M. Csikszentmihalyi の「フロー」概念について参照したい。なぜなら、「楽しむこと」はフローの延長線上にあり、2つの用語はときに置き換えることが可能だからである (Jackson and Csikszentmihalyi, 1999=2005: 16)。

Csikszentmihalyi によれば、彼の研究関心は、「日々の暮らしのなか、通常の経験のなかのいったいどこで我々は本当に幸福を感じるのか」「そのことから名声も富も期待できなくても、それでも人生に意味と取り組む価値を与える、それは何か」に置かれている⁹⁾ (Csikszentmihalyi, 2004)。

Csikszentmihalyi によるフローの定義は、以下の通りである。

以下、我々はこの特異でダイナミックな状態—全人的に行為に没入している時に人が感ずる包括的感觉—をフロー (flow) と呼ぶことにする。フローの状態にある時、行為は行為者の意識的な仲介が必要ないかのように、内的な論理に従って次々に進んでいく。人はそれをある瞬間から次の瞬間への統一的な流れとして経験し、その中で自分の行為を統御しており、更にそこでは自我と環境との間、刺激と反応との間、過去現在未来との間の差はほとんどない。(Csikszentmihalyi, 1975=2000: 66)

「ゾーンに入る」といった表現でも示されるこの状態は、スポーツに関する研究に重要な視座を与えた。選手やコーチにとって最高のパフォーマンスをすることは最大の目標であり、フローはまさにその目標を達成するプロセスの再現性について追求するものだからである。だが、フローは決してプロとしてスポーツに携わる人々だけが体感するものではない。フローはハイレベルのパフォーマーに限定されるものではなく、誰もが適切なレベ

ルの能力でフローを見つけることができる (Jackson and Csikszentmihalyi, 1999=2005: 13-14)。

1975 年の著書 *Beyond Boredom and Anxiety* では、フローの構成要素は(1)Action-awareness merging (2)Concentration on the task at hand (3)Loss of self-consciousness (4)Sense of control (5)Unambiguous feedback (6)Autotelic experience の 6 つに分けられた¹⁰⁾。だが、フローの概念は時代とともに常にブラッシュアップされてきた。現在では、すべての要素が並列されるのではなく、2 つ (3 つ) の要素がフローの条件 (The conditions of flow) として存在し、その条件下で感じられる主観的な経験の特徴として 6 つの要素が提示されている (Nakamura and Csikszentmihalyi, 2002)。

フローの条件となるのは、(A)Challenge-Skills balance と (B)Clear goals, Unambiguous feedback である。J. Nakamura と Csikszentmihalyi によれば、「フローになる (“in flow”) ということは、一連の目標に取り組み、進行状況に関するフィードバックを継続的に処理し、このフィードバックに基づいてアクションを調整することで、管理可能なレベルの挑戦に取り組む主観的な経験を描く方法である」 (Nakamura and Csikszentmihalyi, 2002: 90)。そしてフローの 6 つの主観的経験とは、(I)Concentration on the task at hand (II)Action-awareness merging (III)Loss of self-consciousness (IV)Sense of control (V)Transformation of time (VI) Autotelic experience であり、フローの条件とは区別して示されている (Nakamura and Csikszentmihalyi, 2002; Kawabata and Mallett, 2011)。

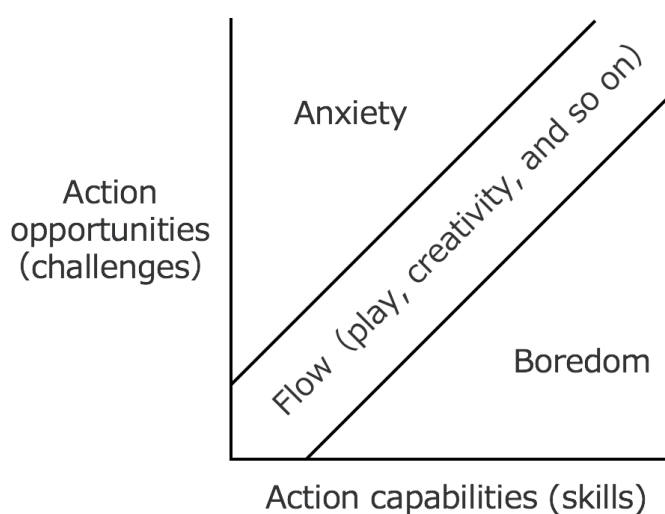


図 5-3 フロー状態のオリジナルのモデル (Csikszentmihalyi, 1975=2000: 86)

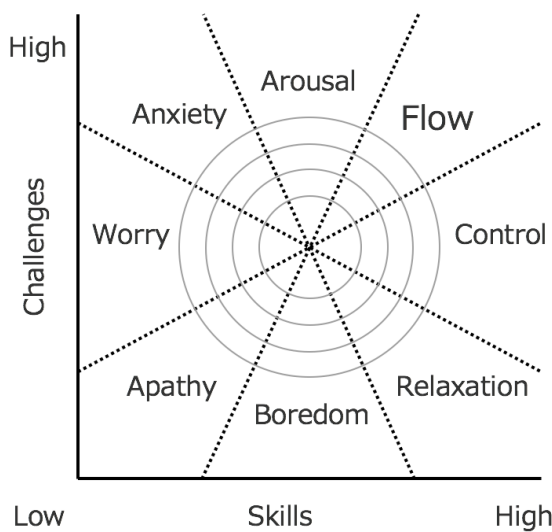


図 5-4 フロー状態の現在のモデル (Csikszentmihalyi, 1997; Nakamura and Csikszentmihalyi, 2002)

このようなフロー概念の変化にともない、フロー状態 (the flow state) を表すモデルも変わりつつある。1975 年の *Beyond Boredom and Anxiety* で示されていたのは、図 5-3 のモデルである。このモデルではフローのほかに、スキルに対して課題のレベルが低い Boredom (退屈) の領域と、課題がスキルのレベルを超えてしまう Anxiety (不安) の領域が示されている。

だが、このモデルには課題があったことを Csikszentmihalyi らはすでに認めている。たとえば、テレビの視聴などの行為では、低レベルの課題と低レベルの技能が噛み合った場合にフローにつながらず、最適ではない経験となるからである (Nakamura and Csikszentmihalyi, 2002: 94-95)。したがって、図 5-3 の 3 つの領域に加わるかたちで、第 4 の領域としてフロー状態の真逆に位置する無関心 (Apathy) の領域が存在することを明らかにした。

さらに、このマッピングをより詳細に分析したのが、新しく提示されたフロー状態のモデル (図 5-4) である。このモデルは、フローの条件である (A) Challenge-Skills balance によって作られた平面を同心円状に 8 つに分割している。これにより、フローの条件にそぐわない行為が、どのような心理的状态を示すのかが明らかになった (Csikszentmihalyi, 1997; Nakamura and Csikszentmihalyi, 2002: 95)。

さて、本節では生徒たちは部活動に「どのように」楽しみを見いだしているのかという、いわば条件について検討しようとしている¹¹⁾。よって、ここではフローの条件のなかでも

特に重要視される(A)Challenge-Skills balance（以下、「CS バランス」という）について検討したい。CS バランスは、図 5-3 や図 5-4 からわかるように、「どのようにしてフローが起こるのかを理解するために不可欠の概念である」¹²⁾（Jackson and Csikszentmihalyi, 1999=2005: 9）。

CS バランスについて S. A. Jackson と Csikszentmihalyi は以下のように説明する。

挑戦と技能—経験のこの 2 つの要素は意識の基本的な状態を表している。「挑戦」とは広範な概念をごく簡略化して表現したものであり、その概念は最大限に拡大すれば「行動する機会」もしくは「状況に応じて求められること」と呼べるかもしれない。（中略）「技能」もまたその人の行動力や状況への対応能力にまでかかわる幅広い概念である。（中略）

フローが生じるためには、挑戦と技能がほどよく均衡しているとともに、この 2 つの要素がその人にとって比較的レベルの高いものであることが必要である。挑戦と技能が個人の平均的レベルを超えると、フローが起こり始める可能性が高い。フローの出発点は挑戦水準と技能水準が個人の平均的な水準を超えるところにあるようである。（Jackson and Csikszentmihalyi, 1999=2005: 50-51）

つまりフローの条件として重要となるのは挑戦と技能の均衡が高いレベルで取れることである。サッカー部の生徒たちに置き換えれば、試合で立ち向かわなくてはならない対戦相手が強くても、自らの技術やチーム力とそぐわなければフロー体験へとつながることはない。もしくは、自らのスキルのレベルが向上したとしても、対戦相手のレベルが噛み合わなければフローにはならない。

ではフローを生み出す CS バランスを援用して、生徒たちの活動について考えてみたい。図 5-5 は、図 5-4 で示される CS バランスの縦軸（Challenges）を、前節で検討した 2 つの予測不可能性と置き換えたものである。左側の縦軸にある勝利の予測不可能性は、原則として高ければ高いほど対戦相手のチームは強くなる。すると、勝利の予測不可能性が高い（対戦相手が強い）試合や、その試合に向けた日々のトレーニングのなかでフローを経験するために必要とされる生徒たちの技能のレベルも高くなる。ここまでは従来のフロー状態のモデルと大きな違いはない¹³⁾。

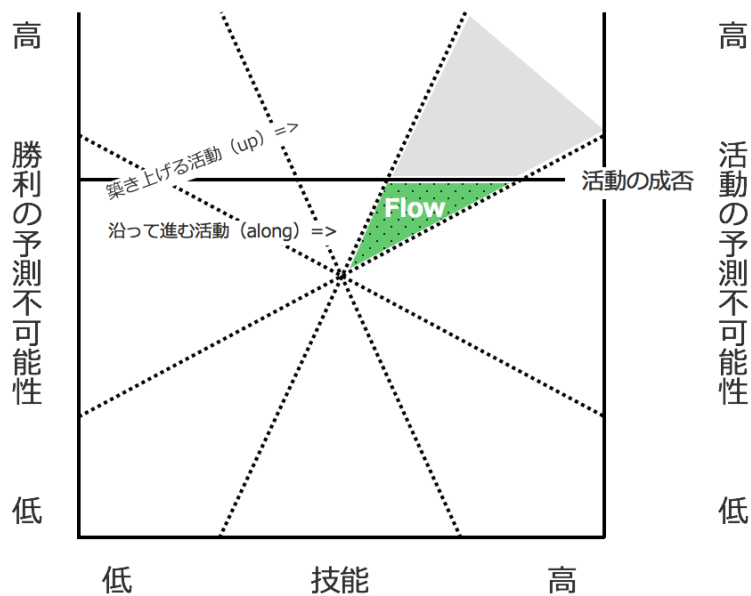


図5-5 生徒たちにとってのフロー状態のモデル

だが生徒たちは活動をしていくなかで、もう1つの予測不可能性を乗り越える必要があった。それが右側の縦軸にある活動の予測不可能性である。活動の予測不可能性とは、将来の活動について予測する難しさであった。活動の予測不可能性が高いほど、生徒たちには将来的な活動計画を立てることができず、該当するスポーツの機会を得ることが難しくなる。

小規模の部活動では、生徒たちにとってフローに該当するようなスポーツの機会があったとしても、そのスポーツの機会を得ることができるかどうかという、別軸の課題と向き合う必要がある。つまり、通常の高校生では必要のない部分での戦いを強いられることになる。そのため、生徒たちの活動は、「活動の成否」（図1-1参照）という限界値によって分断され、経験しうるフローの領域が通常の部活動よりも狭くなっている。この活動とそれにともなう楽しみの狭小化が、本稿が示すことのできる、部活動の小規模性によってもたらされる問題の根本である。

くわえて、活動の予測不可能性を左右する生徒の数や部活動の規模、大会規定といった問題は高校生にとって手の施しようがない。つまり、勝利の予測不可能性とは異なり、活動の予測不可能性を乗り越えるための明確な技能（Skills）は存在しない。だからこそ、生徒たちは「築き上げる」活動を目指すのではなく、「沿って進む」活動へと向かっていったのである¹⁴⁾。

以上より、Csikszentmihalyi のフロー概念と図 5-5 を用いて、小規模の部活動における活動の困難性と、生徒たちの活動の合理性について考察してきた。だが本稿では、以下の 2 つの理由により、この生徒たちの活動形成の論理を「フローの論理」と呼ぶことを避ける。

第一に、小規模の部活動ではフローのみを追い求めることはできない。図 5-5 でも示したように、生徒たちは勝利の予測不可能性だけでなく、活動の予測不可能性という別軸の課題を抱えている。そのため、フローへと向かうことだけを目的としても、その活動はすぐに頭打ちになってしまう。

第二に、フローの追求が「競争の論理」にもとづく部活動へと結びつくことを防ぐ必要がある。Csikszentmihalyi は、フローという経験が中毒性を持ち、「フローは危険な資源である」ことを認めている (Csikszentmihalyi, 1975=2000: 209)。そのため、フロー自体が素晴らしい経験であったとしても、フローへの依存が部活動を競争の論理へと向かわせる可能性を否定できない。

よって本稿では、生徒たちの活動形成の論理を「プレイの論理」と呼ぶことにしたい。ここでプレイの論理とは、「獲得しうるスポーツの機会に沿って進みながら、スポーツそのものから味わうことのできる楽しみを遂行しようとする論理」である。この論理は、先行研究が述べてきた「試合（や練習試合）をたくさんこなすこと、そのために土日までを費やすことが厭われない」競争の論理とも (内田, 2017: 68)、「勝つことの比重は、競争の論理よりもはるかに小さい」居場所の論理 (内田, 2017: 209) とも、異なるものである。そして、このプレイの論理は、大規模の部活動では考慮する必要もない活動の予測不可能性という別次元の戦いを一時的に忘却し、自らをスポーツそのものの世界へと引き戻すための論理である。

そもそも Csikszentmihalyi がフローについて検討するにいたる出発点は、彼が「楽しみの遂行という掬えどころのない経験を得るため、物的報酬を自ら進んで放棄する」スポーツ選手や芸術家などについて調べていくと (Csikszentmihalyi, 1975=2000: 19)、彼らの楽しみが自己目的的な (autotelic) 活動、つまり「参加者への直接的な内的報酬を極大化する行為の様式」 (Csikszentmihalyi, 1975=2000: 45) だったことによる。つまり、フローあるいは楽しみについて検討するということは、内発的にやりがいを感じる行為について検討するということである。

すると、Csikszentmihalyi が「遊びは優れてフローをもたらす経験である」

(Csikszentmihalyi, 1975=2000: 67) として、クライミングやチェス、そしてバスケットボールについて調査するのは自然であるように思われる。J. Huizinga は、従来の遊びの定義が「遊びは遊び以外の何ものかのために行われる、遊びとはある種の生物学的目的に役立っている、という前提から出発」してきたことを批判し (Huizinga, 1938=1973: 17-18)、「遊びは理性的な結びつきを基礎とし、その上に立脚したものである、とすることはできない」と宣言した (Huizinga, 1938=1973: 20)。そして遊びの形式について以下のように示している。

その外形から観察したとき、われわれは遊びを総括して、それは「本気でそうしている」のではないもの、日常生活の外にあると感じられているものだが、それにもかかわらず遊んでいる人を心の底まですっかり捉えてしまうことも可能な一つの自由な活動であると呼ぶことができる。この行為はどんな物質的利害関係とも結びつかず、それからは何の利益も齎されることはない。それは規定された時間と空間のなかで決められた規則に従い、秩序正しく進行する。またそれは、秘密に取り囲まれていることを好み、ややもすると日常世界とは異なるものである点を、変装の手段でことさら強調したりする社会集団を生み出すのである。(Huizinga, 1938=1973: 42)

Huizinga によれば、遊びは「自由な行動」(Huizinga, 1938=1973: 29) であり、生活の必要性から距離を置いた活動である (Huizinga, 1938=1973: 31)。つまり、遊びは Csikszentmihalyi の研究の出発点となった自己目的的な活動であると言える。

だが、部活動に関する研究は、部活動におけるスポーツがもはや遊びとしてのスポーツとはかけ離れた存在であると指摘してきた。たとえば中澤は、「遊戯としてのスポーツが、その遊戯の性質と相容れない学校教育に結び付けられることに、原理的な矛盾がある」にもかかわらず (中澤, 2014: 17-18)、スポーツと教育が部活動で結びつく過程について検討している¹⁵⁾。また内田は、部活動を通じた評価の存在が今日の過熱する部活動の原因であると批判している (内田, 2017: 49-53)。つまり、外発的な要因によって、部活動でのスポーツは、自己目的的な活動ではなくなっていると指摘している。

しかし、部活動がスポーツと教育を結びつけ、たとえ純粋な遊びとしてのスポーツの機会を保障できなかったとしても、部活動で楽しむことができないわけではない。なぜなら Csikszentmihalyi の功績は、遊び以外の日常にもフローや楽しみが存在していることを明

らかにしたことだからである¹⁶⁾。だとすれば、今日の部活動におけるスポーツが純粹な遊びではなくなってしまったとしても、むしろそのスポーツから楽しみを引き出すプレイの論理の重要性が改めて浮き彫りになるだろう。つまりプレイの論理は、部活動における楽しみを追求するだけでなく、競争の論理に傾倒しがちな部活動のなかで生徒たちにとって最適な経験を抽出する。そのため、プレイの論理にもとづく部活動では、活動に楽しみを見いだせそうにない生徒は部活動から一時的に離脱しても構わない。部活動に所属しつづけることは、競争の論理から見れば合理的かもしれないが、プレイの論理ではそうとは言い切れない。

また居場所の論理では、閑散とした部活動や、部活動そのものがなくなってしまう危機については考慮されてこなかった。だがプレイの論理では、部活動やそこでのスポーツの機会を自明のものとして扱わず、むしろ活動の機会を獲得するプロセスという、従来の 2 つの論理では捉えることができなかった生徒の活動について照射することができる。そのため、活動の成否のフェーズで困難を抱える部活動をないがしろにすることもない。

たしかに、A 高校サッカー部は強豪のサッカー部ではないからこそ、生徒たちは今日の部活動に携わる人々が苦しむような過熱や強制とは一線を画した活動ができたとも言えるだろう。だがこの活動は、生徒たちが、積極的にも消極的にも、日本サッカー界が求める活動とは対照的な活動に向かったことで成立した結果であった。そして恵まれた環境とは言えないなかで、競争の場／居場所という従来の部活動の姿に偏ることなく、2 つの予測不可能性を乗り越えながら、スポーツの楽しみを探求するために活動を形成してきたのである。

第5章／注

- 1) なお、若者にとって部活動が「そこに居ることが選択できるもの」ではなくなる要因として、その競技の世界やスポーツ協会が持つ影響について例示しておきたい。たとえば2019年10月10日、国際サッカー連盟（FIFA）の制裁により、高校サッカー部における留学生の公式大会への出場禁止が検討されていることが明らかになっている（千葉日報, 2019年10月10日、「＜高校サッカー＞留学生の公式戦出場禁止へ」, <https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20191010-00010001-chibatopi-socc>)。このように、部活動でのスポーツの機会は、もはや日本の学校や国内の問題ではなく全世界のスポーツのなかに取り込まれており、一瞬にして高校生のスポーツの機会が奪われてしまうことが十分にありうるのである。
- 2) 部活問題対策プロジェクト（2019年9月1日取得, <http://bukatsumondai.g2.xrea.com/>）のこと。内田もこのプロジェクトについて積極的に発信している。
- 3) タイトルは「中学校部活動サッカー部への手引き」である。中学校サッカー部を対象に作られたものだが、部活動や公式試合、リーグ戦方式の大会に対する日本サッカー協会の見解は高校サッカー部に対するものと相違ないと考える。詳しくは以下より参照できる。（2019年12月1日取得, http://www.jfa.jp/coach/physical_training_club_activity/guideline.pdf）
- 4) 学校や教員からも、部活動での「築き上げる」活動によるポジティブな効果が期待されている可能性もある。先行研究には、部活動への参加が「目標設定スキル」や「時間的展望」の獲得に影響を及ぼすとの報告もあるが（上野, 2006）、少なくともA高校サッカー部の生徒たちにとって、こうしたスキルを獲得する場として部活動は位置づいていなかったように思われる。
- 5) 小規模の部活動の生徒たちにとって3年生が「引退」したあとの活動は大きな課題である。この点についてはマスメディアでも報道されている（福井新聞, 2019年9月6日「高校野球部員5人、秋の県大会断念—丸岡高校野球部、来春向け練習励む」）。またこの高校が、合同部活動を複数の高校に打診したものの受け入れられなかったという点は、学校や地域によって合同部活動という案が非現実的な解決策であることを理解するために重要である。
- 6) これは勝利の予測不可能性が高ければ高いほどどのような状態であるかを示す定義で

あり、後に登場する図 5-5 からわかるように、勝利の予測不可能性には両面性がある。勝利の予測不可能性が低いということは、勝利の予測可能性が高いということであり、対戦相手に勝利することが容易であると試合前から予測できる状態を指す。

- 7) 「ぶっつけ本番」で公式試合を迎えてしまう事例については第 3 章の第 3 節を参照されたい。
- 8) 部の大会成績が上位であるほど生徒の部活動への参加頻度が高いことを示す先行研究もある（西島編, 2006: 28-34）。
- 9) 彼の講演の原文は以下の通りである。

In fact, you can find that the lack of basic resources, material resources, contributes to unhappiness, but the increase in material resources does not increase happiness.

So my research has been focused more on -- after finding out these things that actually corresponded to my own experience, I tried to understand: where -- in everyday life, in our normal experience -- do we feel really happy? And to start those studies about 40 years ago, I began to look at creative people -- first artists and scientists, and so forth -- trying to understand what made them feel that it was worth essentially spending their life doing things for which many of them didn't expect either fame or fortune, but which made their life meaningful and worth doing. (Csikszentmihalyi, 2004)

- 10) フローの構成要素や条件は研究によって日本語訳が異なるため、本稿では原則として英語表記で統一する。
- 11) よってここでは、各々の行為がフローに該当するかという判別を行うことはない。もし本稿の問いが、生徒たちは部活動の「何に」楽しみを見いだしているのか、であれば、当該の行為がフローであるか、あるいはフローでないとすればどの領域の経験なのか、もしくはなぜフローになりえなかったのか、などを分析する必要があるだろう。
- 12) 原文は、「CS バランスはフローにとっての黄金律である (The CS balance is a golden rule of flow)」となっている (Jackson and Csikszentmihalyi, 1999: 6)。
- 13) なお、ここで左側の縦軸が「勝利の不可能性」ではなく、「勝利の予測不可能性」であ

ることは重要である。つまり「勝利できるか」ではなく、「勝利を予測できるか」であるから、勝利のみを目標とすること（勝利至上主義）によってスポーツにおける純粋な楽しみを取り払ってしまうような行為はこの表で検討していない。また、勝利の予測不可能性であるから、試合中の行為だけでなく、試合に向けた日々の活動についても捉えることができる。さらに、「結果の予測不可能性」としないのは、対戦相手が極端に強くても極端に弱くても結果が予測可能となり、前者では必要となるスキルのレベルが高くなるが、後者では低くなるからである。

- 14) 「沿って進む」活動は、活動の予測不可能性を解決するための技能に当てはまるとは言えない。フローのモデルにおいて、技能とは行為の能力（Action capabilities）とも表され、サッカーのような対戦相手のいる競技では、Csikszentmihalyi が示したチェスの例のように、挑戦の対象は「主として相手方の技能である」ため、「挑戦の水準を下げるか、技能の水準を高めるか」によって、「ほとんど無限な組合せを通してフローに戻ることができる」（Csikszentmihalyi, 1975=2000: 89-90）。だが、活動の予測不可能性を高める部活動の規模や部員数、大会規定などは、生徒たちが何らかの技能を高めることによって解決できる問題ではない。「沿って進む」活動は、あくまでも 2 つの予測不可能性を乗り越える可能性を高めるものであり、すなわちフローの状態へと近づく可能性を高めるものではあるが、活動方針に過ぎないのであって、技能とは区別している。
- 15) 神谷は、中澤が引用した先行研究はそもそも部活動におけるスポーツを遊戯として捉えていないにもかかわらず、自らの議論の妥当性を示すために引用部分を曲解しているとして強く批判している（神谷, 2017）。
- 16) 彼によれば「自己目的的经验は、それ以外の生活が往々にして退屈であるのとは異なり、退屈ではない。同時に「通常」の生活の中では意識の中にしばしば入り込んでくる不安を生み出すことがない。退屈と不安とが相殺し合っていることから、自己目的的经验は行為者をその活動に完全に没入させてしまうものの一つとなる」（Csikszentmihalyi, 1975=2000: 65）。そのため、たとえば外科医が、複雑な手術のなかで、時間が経つのを忘れたり、看護師が出入りするのに気がつかなかったりするように（Csikszentmihalyi, 1975=2000: 185-209）、「遊びの世界と仕事の世界との間の連続性」が存在している（Csikszentmihalyi, 1975=2000: 185）。あるいはテレビを見たり、鼻歌を歌ったり、鉛筆を噛んだりするような「無益」な行動（Csikszentmihalyi, 1975=2000: 216）にも「マイクロフロー」が存在する可能性について言及している。

終章 「活動」から部活動を考える

第1節 事例から明らかになったこと

本稿は、北海道の高校サッカー部での参与観察をもとに、小規模の部活動における生徒たちの活動形成について論じてきた。具体的には、小規模の部活動にて得ることのできるスポーツの機会を確認したのち、小規模の部活動がゆえに生じる問題を背負いながら生徒たちが活動を形成するプロセスの詳細を追った。なお本稿では、「部活動をどのような空間にすべきか」という従来の議論からは距離を置き、「部活動で生徒たちが実際に何をしているのか」という観点から事例を見てきた。これは言い換えれば、「活動」から部活動を考えるという、当たり前にも見えて、先行研究が長らく看過してきた作業の集積であった。

第2章では、部活動の重要な意義である「機会保障」の観点から、小規模の部活動で獲得しうるスポーツの機会の現状を把握することを目指した。まず、生徒たちが高校生活を通じて向き合わなくてはならなかったのが練習メニューの規定化である。小規模の部活動ではメニューによって練習に参加する人数を決めるのではなく、その日の部活動に出席している人数に応じてメニューを決める必要があった。そのため、生徒たちが日々の部活動のなかで実施できる練習メニューは非常に限定されていた。

また生徒たちは、部員が少ないため紅白戦を行うことができなかった。そのため実戦形式のトレーニングは練習試合などの対外試合に頼るしかなかった。だが、彼らの高校のある地域では対外試合がほとんど行われぬ。したがって、対外試合のために都市部まで移動しなければならず、高校生にとっては経済的にも身体的にも大きな負担となった。

さらに、生徒たちは公式試合への参加も断念せざるをえなかった。今日、日本の若者のサッカーは、多くの試合出場を重ねることで、常に目標をブラッシュアップしながら活動することが推奨されている。これは **M・T・M** と呼ばれ、この方針を具現化したのがリーグ戦方式の大会である。だが実際には、多くの高校サッカー部がリーグ戦方式の大会への参加を断念していた。その理由は、単に試合数を多くこなすことによる身体的負担だけでなく、大会参加の条件となる審判業務や会場設営が小規模の部活動の生徒たちにとって大きな負担となっていたからであった。したがって生徒たちは、日本サッカー界が理想とする「築き上げる」活動を進めるにあたり不可欠なスポーツの機会から疎外されていたと言える。

第3章と第4章では、生徒たちが向き合わなくてはならない学校や部の内部で生じる問題を取り上げた。まず第3章で扱ったのは、小規模の部活動だからこそ問題となった生徒の欠席や出席状況のばらつきである。たとえば、彼らの欠席はたとえ1人であっても活動の成否に大きな影響を与えた。そこで生徒たちは、活動を成立させるために SNS を用いたルールを定め、出席する人数を事前に把握できるよう試みた。だがこのルールはすぐに形骸化してしまい、彼らは一転してあらゆる出席状況を放任しはじめた。部員数が11人を下回ることも多々あったが、生徒たちは部から離れていく生徒を無理に引き止めることはなかった。

第4章では、第3章で述べた部活動の状態のなかで、生徒たちがさまざまなプレイヤーとどのように共に活動しているのかについて事例を取り上げた。たとえば、生徒たちは「自分に厳しく他人に優しい」ダブルスタンダード的な自律性を内面化することで、部活動へのさまざまな出席状況を許容していた。部活動に積極的な生徒たちは部員の減少にあわせて活動場所を体育館へと移し、フットサル活動もしてきた。生徒たちはサッカーを断念してフットサルへと競技を変えることをも厭わず、目の前のスポーツの機会に「沿って進む」活動を重視してきた。これは日本サッカー界が理想とする「築き上げる」活動とは対照的な活動方針だった。

また彼らの活動には、競技歴、競技力、年齢、所属など、さまざまなプレイヤーが参加し、生徒たちもこの混在を必要とする関係にあった。だが生徒たちは、部活動を存続させるために、誰かれ構わずプレイヤーを必要としているわけではなかった。部活動が盛んではないA高校のなかで、サッカー部はもっとも熱心に活動している部活動の一つであった。そのためサッカー部に参加するには、部員と同じような熱量が必要となり、ときには元部員であってもグラウンドに入ることが憚られる空気感を放った。また、生徒たちはスポーツの勝負を決して度外視しておらず、むしろ勝負にこだわる部活動を欲するがゆえに、長期的な目標を設定することすらできない部活動に限界を感じているときもあった。

これらの事例を通じて、筆者はA高校サッカー部を初めて目にしたときに感じた本稿の原点とも言える問いに答えることを試みた。その問いとは、A高校サッカー部の生徒たちは部活動のなかでどのように楽しみを見いだしているのか、というものである。

第5章では、生徒たちが「築き上げる」活動ではなく、「沿って進む」活動に向かったことを出発点に上記の問いについて検討した。まず生徒たちが作り上げた部活動は、先行研究が示してきた競争の場／居場所としての部活動には当てはまらないことを述べた。

では、競争の場でも居場所でもないとするれば、生徒たちは部活動にどのような空間であることを求めたのだろうか。本稿では生徒たちが「沿って進む」活動に向かった結果、活動の予測不可能性と勝利の予測不可能性という 2 つの予測不可能性を乗り越えることができたのではないかと論じた。つまり、万全の体制で参加できるか不確かな大会について苦慮する必要もなければ、フットサルや公立高校との合同練習試合という機会で勝負にこだわったスポーツに触れることもできたからである。

そして、この 2 つの予測不可能性の克服を、Csikszentmihalyi のフローのモデルに当てはめることで、スポーツをプレイすることによる源泉的な楽しみを享受しようとする生徒たちの活動形成の論理を描くことを試み、これを「プレイの論理」と呼んだ。また、理想化される「築き上げる」活動と現実化した「沿って進む」活動をフローのモデルへと挿入することで、部活動の小規模化のもっとも大きな問題として、生徒たちがスポーツのなかで得ることのできる楽しみの領域の狭小化や、生徒たちがスポーツの楽しみを得るためにそもそもスポーツの機会を得ることができるのかという別軸の課題と向き合わなくてはならないことを示した。

第2節 今後の展望と課題

以上より、本稿ではプレイの論理にもとづき部活動で活動する生徒たちについて描いてきた。最後に、若者が減りつづける日本での部活動の行く末として位置づけることができるであろう A 高校サッカー部の事例を通じて、部活動の将来的な展望と可能性、あるいは部活動と高校サッカー界のこれからの関係性について考えてみたい。

A 高校サッカー部のような小さな部活動において、生徒たちはさまざまなプレイヤーとかわりながら部活動での活動を成立させてきた。また部員である生徒たちのなかでも、競技経験者と初心者が混ざり合い、競技歴やサッカー選手としての実力に大きな差があった。したがって「プレイの論理」と一口に言っても、生徒によって部活動の楽しみ方は多元的であったと考えられる。

すると、生徒それぞれが持つ楽しみ方とは異なる形で、多くの生徒たちを結びつけるメカニズムがあったと想定される。それが、小さな部活動では、活動を形成するという活動だったのではないだろうか。

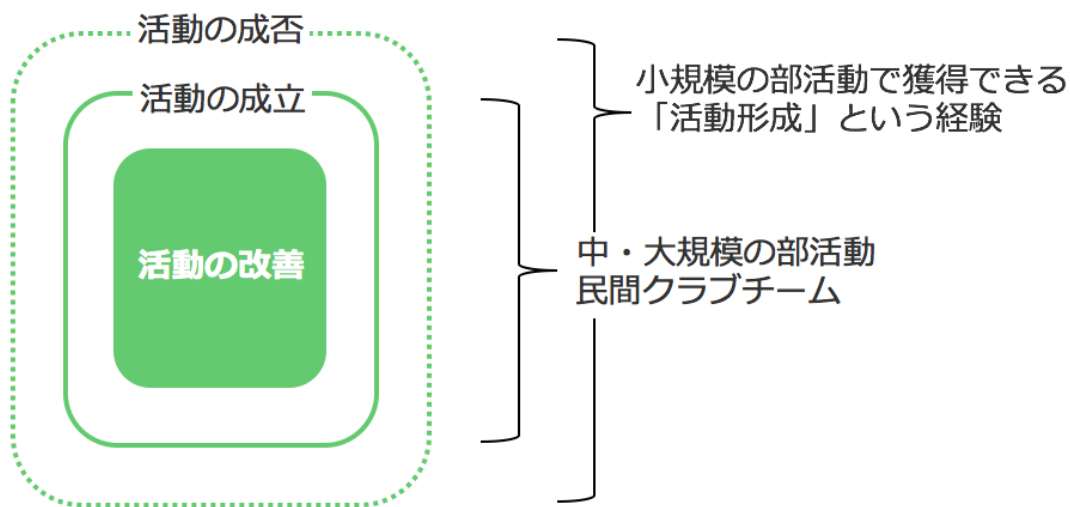


図 6-1 小規模の部活動のモデルと「活動形成」

図 6-1 は、図 1-1 で示した小規模の部活動で現れる 3 つのフェーズを重ね合わせたものである。活動の成立がすでに担保された部活動や民間クラブチームでは、活動の成否を問われることはない。本来、生徒たちにとっては、スポーツを行うために最適な環境が用意された状態で、活動の内容をいかに改善していくかというフェーズに注力できることが理想となるだろう。

だが、事例を通じて見てきたように、小さな部活動ではそうはいかない。競技経験者であっても、初心者であっても、生徒たちは共通して、活動をいかに成立させるかという問題と向き合うことになる。またときに、彼らはサッカー選手としての能力と並んで、部活動で活動を形成する技量を真っ先に問われることになる。

こうした経験が不可避であることは、スポーツ空間としての部活動の限界、あるいは今日の部活動の衰退として悲観的に捉えられがちだ。しかし、日常生活ではなかなか触れることのできない経験の獲得という観点から捉えたとき、この部分に小さな部活動の意義を積極的に見いだすことはできないだろうか。

生徒たちが置かれた環境は、強豪の部活動や民間クラブチームのように、スポーツ選手としての実力を伸ばす環境として最適であるとはいいがたい。また、卒業後の進学や就職に活かすことのできるキャリアを得ることができないわけでもない。だが彼らには、その場に存在する条件のなかで、どのようにスポーツを行うのか、そして、どのようにスポーツを楽しむのかを考える機会があらゆる場面で用意されている。実際、生徒たちはその環境

の乏しさに常に苦心してきたし、部活動の小規模性のネガティブな側面には留意しなくてはならない。けれども、活動を形成する活動という貴重な経験を通じて、スポーツをプレイすることはもちろん、部活動での活動を「経営する、管理する (manage)」だけでなく、「どうにか〜する (manage to〜)」技法を培うことのできる部活動は、とても魅力的な空間に見えてくる。

また、自らとはバックグラウンドが異なる者と活動を形成していく経験を獲得できる場としても小さな部活動は意義深い。生徒たちはスポーツ推薦入試やセレクションを通過して集まったスポーツ選手ではなく、偶然にも同じ高校に入学し、同じ部活動に参加するようになった若者たちである。高校に入学するまでの経歴や選手としての実力は一時的にフラットになり、彼らは小さな部活動に参加する1人の高校生として他の生徒たちやプレイヤーとの関係性を築く必要がある。

活動を成立させることができれば、生徒たちにとって小さな部活動はポジティブな側面も持ち合わせている。たとえば、部活動は学校を単位としているため、現状の制度ではチームを移籍することは難しい。そのため、大規模の部活動の生徒のなかには、3年間の学校生活のなかで試合に出場する機会が限られている者もいる。だが、小規模の部活動では、大会に出場することさえできれば、1年生の頃から試合に出場する機会を多く得ることができる。

このように小規模の部活動を見ていくと、部活動とクラブチーム、もしくは2種類の部活動を用いて、競技に熱心に取り組みたい生徒と、競技をただ楽しみたい生徒の棲み分けを提案する先行研究には疑問が残る (三木, 2013; 内田, 2017: 210-212)。たしかに、学校経営上の観点から見れば、そうした方策は学校や教員にとって部活動の管理を容易にするだろう。だが、さまざまな生徒が混在しながら活動するという貴重な場を学校から取り払うことにもつながりかねない。

また本稿は、部活動を「成員」で運営するものとして定義する研究 (神谷, 2015) にも新たな視座を与えるのではないだろうか。たとえば神谷は、部活動を「結社」、すなわち「なんらかの共通の目的・関心をみたすために、一定の約束のもとに、基本的には平等な資格で、自発的に加入した成員によって運営される、生計を目的としない私的な集団」として運営すべきだと説明した (神谷, 2015: 273)。神谷が部活動をこのように定義する狙いは、部活動の自治を生徒たちに一任することを強調するためである。だが、A高校サッカー部は、部員ではない生徒やプレイヤーが多分にかかわりながら部活動を存続させてきた。つ

まり、生徒たちの約束は定まっていなかったし、参加者は部活動に入部した成員のみではなかった。それでも彼らは、この部活動でしか触れることができないような経験を積んできた。部活動における「自治」は「成員」のみによって成り立つものではないはずだ。

さらに、これまで見てきたように、部活動での活動はもはや当該のスポーツ界やスポーツ協会の影響を避けては通れないものとなっている。なかでも中心に取り上げたのがリーグ戦方式の大会である。この大会はサッカー界からだけでなく、教育現場からも過熱する部活動を抑制する解決策として期待されている。しかし現状として、この方式の大会は小規模の部活動の生徒たちにとってもっとも負担の大きい対外試合となっていた。

リーグ戦方式の大会には多くの課題があるにもかかわらず、なぜ教育現場とスポーツ界の双方から期待されているのか。それは、双方の世界が、この大会のコンセプトとも言える、長期的な目標に向かってトレーニングを蓄積し能力を向上していくこと、つまり「築き上げる」活動を重要視し、価値を与え、評価している点で親和性を持つからではないだろうか。

この「築き上げる」活動は、図5-1や図5-2からもわかるように、設定された最終的な目標に向かって一直線である、あるいはエンドレスであるという性質を持つ。だが筆者は、3年間にわたる調査のなかで、目標を設定するという事は決して簡単なことではなく、目標とは環境が整って初めてクリアになるものだと思った。さらに、見えない目標に向かって、もしくは目標を立てることさえままならない状態で、終わりのない活動をつづけることこそ、若者にとって困難を極めるものだと考えるようになった。

生徒たちが歩んだ「沿って進む」活動と、それを支えたプレイの論理は、彼らにとってときに納得のいくものではなかったかもしれない。だが筆者にとって、「築き上げる」活動とは対照的なこの活動を進める彼らとの出会いは、教育やスポーツの世界で当たり前のように求められる長期的な目標の設定や一貫性をもった継続的な活動が、どのような環境でも容易に成立するわけではないことを理解する契機となった。そして同時に、学校やスポーツの世界における価値から自由になって、現存する環境のなかで最大限にスポーツを楽しむことの重要性を生徒たちから教わったのである。

部活動とサッカー界の関係性について具体的に見ていくと、現在、選手登録や指導者資格、審判資格はすべて日本サッカー協会によって一括で管理され、紐づけされている。また第2章でも述べたように、大会への参加条件として審判資格や指導者資格の取得を求めるケースが一般的になりつつある。だが、資格の正統性を振りかざし、若者のスポーツの

機会の獲得自体が危ぶまれている状態は健全であるとは言いがたい。

そもそも、部活動に所属する生徒たちが参加する対外試合の審判を資格所有者が務める必要があるのだろうか。たとえばサッカーの競技規則は、国際サッカー評議会（International Football Association Board, 以下、「IFAB」という）によって制定されているが、IFABは2016/17年に実施した重要な改正¹⁾を通じて、グラスルーツのサッカーは、大人のサッカーと同じルールで行う必要がないということを訴えている。

また、サッカーのルールそのものの変更のハードルが高くとも、大会規定を柔軟に変えることは難しくないはずだ。小規模のチームの参加条件を緩和する措置や、個々のチーム状況を踏まえた配慮は十分に可能だろう。たとえば、登録選手数の多いチームによる審判業務の担当や審判資格の任意取得制など、チーム状況に応じた配慮やチーム同士の非対称的な関係へ移行する必要性が迫っている。

なお、日本サッカー界がグラスルーツという用語を頻用するようになって数年が経とうとしている²⁾。アジアサッカー連盟は、日本のグラスルーツのサッカーについて、2003年以降の10年間の12歳以下の登録選手数の増加などを理由に、グラスルーツのサッカーに関する取り組みがアジアでもっとも成功した国の1つだと評している（Sugiyama et al., 2017）。だが実際には、2013年をピークに競技人口は減りつづけ、現在の競技人口は2003年の数値とほぼ変わらない（日本サッカー協会, 2019a）。

J. Horne と W. Manzenreiter は、グラスルーツ、コミュニティサービス、地域のルーツなどの特徴を持ったヨーロッパのサッカーが1960年代以降に多面的な問題を抱えていたにもかかわらず、日本サッカーが「心温まるイメージの‘sports for all’」とJリーグの関係を形成しながら、ドイツのモデルを模倣してきたことを指摘している。そして、日本のグラスルーツのサッカーが、本当にJリーグの商業的成功から恩恵を受けているのか調査する必要性について述べている（Horne and Manzenreiter, 2008）。

本稿ではこの点について詳細に調査することはできていないが、少なくとも本稿が調査を行った地域の高校サッカー部はこの国のトップレベルのサッカーから恩恵を受けているとは言いがたい。日本サッカー協会は、グラスルーツのサッカーへの具体的な取り組みとして、「JFA グラスルーツ推進・賛同パートナー制度」を始めているが、この制度は現状として日本サッカー協会の求めるテーマに沿った活動を自主的に取り入れているチームを紹介するにとどまっており（日本サッカー協会, 2019c）、若者のスポーツ環境に直接的に還元されるプログラムの一刻も早い成立が望まれるばかりである。

2019 年 12 月 24 日に厚生労働省が発表した人口動態統計の年間推計で、国内出生数は約 864,000 人となった（厚生労働省, 2019）。900,000 人を下回ったのは、1899 年の統計開始以降初めてとなる。少子化が進むなか、すべての部活動を従来の制度のまま維持していくのはもはや不可能だと言える。A 高校サッカー部のような小規模の部活動は刻々と増えていくはずだ。

部活動の小規模化が不可避とも言える将来を見据え、本稿は合同部活動のように部活動の規模や機能の維持を前提とする解決策は提言しない。若者が減り、部活動が小さくなることを受け入れながら、部活動がどうにか意義を大きく失うことのないような解決策へとシフトする重要性を生徒たちの活動から学ばなくてはならない。本稿が描いてきた事例と考察を通じて、全国の同じような小規模の部活動に対して、活動の再現性を少しでも提示できたとすれば、本稿は意義を持つことができたと言えるだろう。

北海道の中学校卒業生数は、1988 年の 92,222 人をピークに長らく減少をつづけている（北海道教育委員会, 2006: 62）。卒業生数がピーク時から 40%以上減少した 2006 年には、「新たな高校教育に関する指針」が策定され、「引き続く中学校卒業生数の減少により、欠員の多い高校が増加するとともに、高校の小規模校化が進み、これに伴う教員配置数の減少から、幅広い教育課程の編成が難しくなるなど、教育効果の低下や学校運営の困難化が大きな課題」となっていることが明記されるとともに（北海道教育委員会, 2006: 10）、「適正な高校配置」を進めていく必要性が示された（北海道教育委員会, 2006: 3）。だが、若者の減少はとどまるところを知らず、2018 年に新しく策定された「これからの高校づくりに関する指針」では、2025 年の中学校卒業生数がついに 40,000 人を下回るという推計が発表されている³⁾（北海道教育委員会, 2018: 2）。

こうした地域の特徴を踏まえた考察を深めることは今後の課題の一つである。本研究の関心は、地域性よりも部活動の規模やサッカーという競技の固有性に置かれていた。そのため、北海道の高校がゆえの困難性や可能性については検討しきれずにいる。上述した若者の減少だけでなく、積雪や長距離移動など、北海道の地理的な特徴が部活動に与える影響は小さい。

また、A 高校は郊外に位置していたが、都市や過疎地域の部活動と状況は大きく異なることが予想される。とくに、北海道の高校の 4 校に 1 校が 1 学年 1 学級で運営されていることを考えれば（篠原, 2018）、地方の小規模校で営まれる部活動の実態は今後明らかにしていく必要があるだろう。なぜなら、地方の部活動の生徒たちほど合同部活動による運営

を望んでいないという調査結果が出ており（西島ら、2001）、「助っ人」として出場する生徒も見当たらないほど小さな学校では、最適な解決方策を見いだすことができていないからである⁴⁾。

なお、文部科学省と全国高等学校体育連盟、日本高等学校野球連盟のデータを照らし合わせてみると⁵⁾、高校で運動部活動に所属している生徒の割合は、2005 年は 40.0%だが、2018 年は 43.0%である。したがって、この十数年間で運動部活動に携わる高校生の割合は大きく変化していない。一方、17%の生徒しか部活動に参加しない A 高校のように、部活動への参加率が全国の平均を大きく下回る学校もある。

この点を踏まえると、部活動それ自体の二極化に関する分析が今後のもう一つの課題である。つまり、100 名以上の部員を抱える部活動が存在する一方で、学校が一定の規模を保っていたとしても活発に活動できない部活動が存在する仕組みについて検討しなければならない⁶⁾。とくに、公立の学校の部活動や、クラブチームと部活動が少ないパイを奪いあうような競技に注目しながら、この二極化は拡大傾向にあるのか、あるとすればどのような要因によって生じているのか、あるいは直感に反して部活動の二極化は拡大していないのかなどについて、まずは現状の理解を目的に調査を開始する必要がある。

1) 改正の内容は以下の通りである。

2017年3月3日にロンドンで開催された第131回IFABの年次総会において、サッカーの普及発展に資するため、次のような重大な改正が承認された：

- ・どのようなことをすればそれぞれの国におけるサッカーに有益になるのかを各国協会こそが知っているとIFABは考える。それゆえ、サッカーの普及発展に資するよう、各国協会（および大陸連盟、FIFA（国際サッカー連盟））がその責任の下、“それぞれの独自の競技規則”をより弾力的に変更できるようにした（例えば、トップレベルの試合を除き、交代の最大数を5人とする）。
- ・ユース、年長者、障がい者およびグラスルーツ（最も底辺のレベル）のサッカーにおいて、警告（YC）に代わり得る一時的な退場（シンビン）を導入する。
- ・（既にグラスルーツのサッカーにおいては認められていることであるが）ユース、年長者および障がい者のサッカーにおいても、再交代を認める。

これらの重要な改正の詳細は、「競技規則の修正」に記載されている。（International Football Association Board, 2017=2017）

2) 2014年5月15日、日本サッカー協会は「グラスルーツ宣言」を発表した。この宣言の内容は以下の通りである。

日本サッカー協会は、日本のサッカー界を統括する団体として、サッカー、スポーツの持つ価値を自覚し、さらに高め、その魅力をより多くの人々へと広めることで、社会的責任を果たしていきます。

JFA グラスルーツ宣言とは、「JFA2005年宣言」の理念とビジョンに基づき、だれもが、いつでも、どこでも、サッカーを身近に心から楽しめる環境を提供し、その質の向上に努めることを宣言するものです。

この宣言を機に、日本サッカー協会は、サッカーに触れるすべての人々を支え、サッカー、そしてスポーツが生涯にわたって生活の一部となり、より豊かなスポーツ文化を育むことを目指します。（日本サッカー協会, 2014）

- 3) なお、この 2 つの「指針」では、1 学年 4～8 学級が高校として望ましい規模であること、1 学年 3 学級以下の高校は望ましい学校規模となるよう近隣の高校との再編が推奨されることが記されている（北海道教育委員会, 2006; 2018）。A 高校は現在 1 学年 4 学級で運営されており、再編が推奨される 1 学年 3 学級が目前に迫っていると言える。
- 4) 群馬県立松井田高校野球部は、部員数が足りず他校との合同部活動で大会に出場しているが、顧問教員は「一度でも連合チーム（合同部活動）になってしまうと、中学生に敬遠されてしまう」として、合同部活動として部活動を運営した際の長期的な弊害について述べている（朝日新聞デジタル, 2019 年 6 月 28 日「「連合チーム、中学生が敬遠」野球離れと 2 極化が進行中」）。
- 5) 2005 年の日本の高校生の総数は 3,605,242 人、全国高等学校体育連盟に登録した生徒数は 1,265,768 人、日本高等学校野球連盟に登録した生徒は硬式が 165,293 人、軟式が 11,575 人である。2018 年は同順に、3,226,017 人、1,225,401 人、153,184 人、8,755 人である（文部科学省, 2018a; 2018b; 全国高等学校体育連盟, 2005; 2018; 日本高等学校野球連盟, 2019a; 2019b）。部活動への加入率は、2 つの連盟に登録した生徒数を高校生の総数で割り、小数点以下第四位を四捨五入して百分率で表した。
- 6) たとえば、筆者が A 高校の以前にコーチを務めた高校サッカー部も部員が 20 人に満たないような部活動だったが、高校は 1 学年 320 人の生徒がいる男女共学の普通科高校であった。

付表

付表-1 A 高校サッカー部の生徒一覧

入学年度	名前	出身中学校	所属時期	競技を始めた時期
2013年度	ケント	W中学校	～引退	小1
	イツキ	X	～引退	中1
	アキヒロ	W	～引退	小6
	ヤマト	W	～引退	小3
	ツバサ	S	～引退	高1
	ミツル	U	～引退	高1
2014年度	ヤスシ	Y	～2年3月	4歳
	ユウキ	Z	～引退	小6
	リョウタ	X	～引退	小2
	タスク	W	～引退	小5
	ダイチ	W	～引退	小2
	キョウスケ	W	～引退	中1
	シュウト	W	2年7月～引退	中1
	ヨシキ	W	2年2月～引退	中1
2015年度	ジロウ	X	～1年8月, 2年6月～引退	中1
	ヒロ	U	～1年冬	中1
	マサシ	U	～1年冬	中1
	カズキ	V	～1年1月	小1
	テツ	W	～1年1月, 2年5月～引退	小3
	ユウジ	U	～1年冬	中1
	ショウゴ	W	～1年2月, 2年6月～引退	小5
	ユキヒロ	X	～1年冬, 2年4月～引退	中1
	サトシ	W	～1年1月, 2年4月～引退	中1
	ショウタ	U	～1年1月	中1
	ケン	U	～1年冬	高1
	ケイタ	T	～1年7月	??
2016年度	タクヤ	Y	～引退	中1
	カツミ	Y	～引退	小5
	ヒデキ	X	～引退	中1
	トシミチ	Q	～引退	中1
	ジュン	Y	～1年5月, 2年5月～引退	中1
	イッセイ	W	～引退	小5
	トモノリ	W	～引退	小1
	タカハル	R	～1年5月	小2
2017年度	マナブ	P	～1年3月	??
	キミノブ	W	～1年6月, 1年9月～	??
	コウジ	X	1年～	??
	コウヘイ	O	～1年3月	??
	ノブヒロ	W	～1年5月	??
	アツシ	N	～1年5月	??

付表-2 年表

年度	月日	事例	大会結果	入部 (復帰)	退部 (離脱)	部員数 (1年/2年/3年)
2013年度	4月20日	大会場で初めてA高校の試合を見る (p.3)	春季大会：GL敗退			9人 (~/2人/7人)
	9月28日	大会場で教員Bに面会を依頼 (p.3)	新人戦：GL敗退			??人 (??/??/??)
	1月10,11日	初めてA高校で練習試合を見学 (p.4)				12人 (6人/6人/~/)
2014年度	3月17日	翌4月から2ヶ月間、練習見学の許可を得る (p.6)				
	4月4日	練習見学開始				
	4月4日	審判資格を取得する生徒の決定 (p.62)		新1年生12人が入部		24人 (12人/6人/6人)
2015年度	4月1週目		春季大会：GL敗退			
	4月25, 29日					
	5月19日	指導者として正式に登録される (p.6)				
	5月25日		高体連：1回戦敗退		3年生が「引退」	18人 (12人/6人/~/)
	7月～	U中学校出身の生徒たちの断続的な参加 (p.89)				
	7月4日	対外試合における欠席者の増加について (p.91, p.105注15)				
	7月中旬			2年生のシチュウトが入部		19人 (12人/7人/~/)
	7月末				ケイタが離脱 (p.105注11)	18人 (11人/7人/~/)
	8月4日	「サボリ」に対する他の生徒の反応 (p.90)				
	8月7日	サトシ：W中学校とA高校サッカー部の違い (p.90) 1年生が遅刻にもかかわらずコンビニに寄る (p.92)				
	8月11日	イツキ：ジロウの出席状況について (p.105注10)				
	8月16日	サトシ・テツ：自らの「サボリ」について (p.90)				
	8月23日	教員B：高円宮杯の有用性について (p.71) 試合会場での小規模性の実感 (p.123)	選手権：1回戦敗退		ジロウが退部 (p.105注11)	17人 (10人/7人/~/)
	8月27日	ダイチとエウジが喧嘩 (p.105注16)				
	9月3日	部活動へ参加する生徒への視線 (p.116)				
	9月5日～10月6日	図2-2 (p.43)				
	9月19日	高円宮杯の会場校を担当 (p.72)				
	9月19日～10月18日	表3-1 (p.90)、表3-2 (p.102)				
	9月21日	高円宮杯の最終節で初めて勝利をあげる	高円宮杯：1勝11敗で終了			
	9月24日	ケンの「サボリ」について (p.98)				
	9月25日	エウジ：退部を匂わす発言 (p.89)				
	9月26, 27日	図4-3 (p.131)	新人戦：GL敗退			

年度	月日	事例	大会結果	入部 (復帰)	退部 (離脱)	部員数 (1年/2年/3年)
2015年度	10月6日	1年生の欠席に関するミーティング (p.95)				
	10月11日	教員B：ユウジについて (p.101注2)				
	10月13日～11月8日	図3-5：長期的な「自主トレ」期間 (p.85)				
	10月14日～	ユウジ：アルバイトで平日は水曜日のみ参加するようになる				
	11月10日	グラウンドでの練習を諦めフットサルへ移行 (p.108)				
	12月19, 23日	フットサルで強豪と接戦も1点差で敗退 (p.109)	フットサル大会：GJ敗退			
	12月末					
	12月末～1月					
	1月11日	教員B：高円宮杯に参加する難しさにについて (p.64)				
	1月23日					
	1月30日	キョウスケ：フットサル活動について (p.109)				
	2月6日	ヤスシ：移籍先のトライアウトに合格の報告				
	2月15日					
	2月下旬					
	3月	中学3年生のタクミとカツミが練習に参加 (p.117)		2年生のヨシキが入部	シヨウゴが離脱 (p.97)	7人 (---/7人/--) 8人 (---/8人/--)
2016年度	3月31日					
	4月1週目					
	4月末					
	4月30日, 5月1日			新1年生8人が入部	ヤスシが他チームへ移籍 (p.111) ユウジが退学	7人 (---/7人/--) 15人 (8人/---/7人)
	5月6日			サトシ、ユキヒロが復帰 (p.98)		17人 (8人/2人/7人)
	5月7日		春季大会：GJ敗退			
	5月23日	タクミ：サトシやシヨウゴの離脱について (p.91)				
	5月23日		高体連：1回戦敗退	テツが復帰 (p.98)	タカハルが退部	16人 (7人/2人/7人) 17人 (7人/3人/7人)
	5月下旬				3年生が「引退」	10人 (7人/3人/--)
	6月18日				ジュンが退部	9人 (6人/3人/--)
	7月24日	教員B：合同練習試合に3年生を呼ぶよう指示		シヨウゴ、シロウが復帰 (p.98)		11人 (6人/5人/--)
	8月8～11日	合同練習試合				
	8月11日	入部校の統廃合の噂 (p.28)				
	8月20日		選手権：1回戦突破			
	8月27日		選手権：2回戦敗退			
2016年度	9月2日	ヒデキ：部員不足の状況について (p.99)				
	9月5日	テツ：敗北への回避について (p.128)				
	9月5日	「自主トレ」に関するミーティング (p.84)				
	10月1, 2日	2年生の宿泊研修が重なり新人戦への参加を断念 (p.65)	新人戦：不参加			
	11月27日	選手が足りず筆者が練習試合に参加 (p.64)				
	12月10, 24日		フットサル大会：GJ敗退			
	3月14, 19, 30日	中学3年生のキミノブが練習に参加 (p.116)				
	3月26日	ユウキの友人を集めたチームと練習試合 (p.116)				
	3月30日	スマートフォンやSNSに関する質問紙調査 (p.106注22)				

年度	月日	事例	大会結果	入部（復帰）	退部（離脱）	部員数（1年/2年/3年）
2017年度	4月1週目	教員Dが高校へと赴任（p.32） 校舎の大規模改修が開始（p.28）		新1年生が6人入部		17人（6人/6人/5人）
	4月28日	混在のなかにある線引きに関する事例（p.118）				
	5月			ジュンが復帰	新1年生2人が退部	16人（4人/7人/5人）
	5月4、5日	図4-2（p.125）	春季大会：GL敗退			
	5月22日		高体連：1回戦敗退		3年生が「引退」	11人（4人/7人/--）
	6月末				キミノブが離脱	10人（3人/7人/--）
	7月27日	テツへのインタビュー（p.125）				
	8月8～11日	合同練習試合、「勝ち順」について（p.128）				
	8月20日		選手権：1回戦敗退			
	8月22日～9月30日	部員全員が揃った活動日が2日のみ（p.98）				
	9月8日			キミノブが復帰		11人（4人/7人/--）
	9月30日、10月1日	教員B：部員不足の状況について（p.99）	新人戦：GL敗退			
	10月9日	教員D：中学生の部活動見学会について（p.133注11）				
	12月9日、16日	「引退した」3年生が大会に参加（p.112）	フットサル大会：GL突破			
	12月16日	試合前から対戦相手と自らを比較（p.123）	フットサル大会：決勝T敗退			
	12月26、27日	SNSを用いた練習中止の連絡（p.94）				
	1月14日	カツミ：下級生の欠席理由について（p.111）				
2018年度	1月21日	教員B：生徒の分極化の争点について（p.93） タクヤ：クラブチームの印象について（p.110）				
	1月27日	学年閉鎖で急遽3年生に試合参加を依頼（p.112）				
	3月13日	トモノリ・カツミ：4月以降の活動について（p.98）				
	3月31日	教員D：退職			コウヘイが退学、マナブが退部	9人（2人/7人/--）
	4月1日	卒業生に他校での練習試合の参加を依頼（p.112）				
	4月1週目			新1年生が9人入部		18人（9人/2人/7人）
	4月8日	選手が足りず筆者が練習試合に参加（p.64）				
	4月28、29日		春季大会：GL敗退			
	5月6日	タクヤ：紅白戦ができないことについて（p.93）				
	5月10日	教員B：高円宮杯に参加している高校について（p.64）				
	5月11日	高体連直前の練習試合でイッセイが骨折				
	5月21日	調査終了	高体連：1回戦敗退		3年生が「引退」	11人（9人/2人）

図表一覧

図

0-1	本稿の事例の構成	9
1-1	先行研究と本研究が扱う事例が発生するフェーズの違い	24
1-2	A 高校の周辺地区の地図	27
1-3	A 高校の校舎の見取図	29
1-4	高円宮杯 U-18 サッカーリーグにおける A 高校サッカー部の位置づけ	34
2-1	A 高校サッカー部の放課後の活動の様子	42
2-2	A 高校で行われる試合の前週につづく「草むしり」のスケジュール	43
2-3	4 人 1 組のグリッドを 2 つ用いたトレーニング	45
2-4	8 人 1 組のグリッドを 1 つ用いたトレーニング	46
3-1	サッカー部の部室の見取図	82
3-2	部室に掛けられた卒業生の色紙	83
3-3	ウォーミングアップを行う生徒たち	83
3-4	2016 年 9 月 5 日の生徒ミーティングの板書	84
3-5	教員の不在や「自主トレ」がつづくスケジュール表	85
3-6	体育館での筋力トレーニングの様子	86
3-7	2015 年 10 月 6 日に行われたミーティングで生徒が書いた板書	96
3-8	校内に貼られた携帯電話使用禁止を表すポスター	106
4-1	2017 年 4 月 28 日のグラウンドの様子	119
4-2	20 人中 16 人しか埋まらないメンバー票	125
4-3	公式大会で勝ち点を獲得したときのスコアボード	131
5-1	日本サッカー協会が重要視する試合出場機会	139
5-2	日本サッカー協会が推奨する活動計画	140
5-3	フロー状態のオリジナルのモデル	143
5-4	フロー状態の現在のモデル	144
5-5	生徒たちにとってのフロー状態のモデル	146
6-1	小規模の部活動のモデルと「活動形成」	156

表

1-1	A 高校で活動している部活動の状況(2019 年度)	30
1-2	A 高校サッカー部の生徒一覧(調査開始時)	31
1-3	A 高校サッカー部の顧問教員	32
2-1	調査対象となる 6 つの大会	51
2-2	各大会の参加率(2017 年度)	52
2-3	高円宮杯への参加校数の変遷(全 54 校)	53
2-4	高円宮杯の参加校における複数チーム擁立校一覧(2018 年度)	54
2-5	高円宮杯のリーグ構成(札幌地区:2018 年度)	55
2-6	高円宮杯の不参加校一覧(2018 年度)	56
2-7	各大会の開催要項の特記事項一覧(2017 年度)	59
2-8	各大会の開催期間(網掛け部分:2017 年度)	59
2-9	新人戦の登録選手数と高円宮杯の参加／不参加校一覧(2017 年度)	60
2-10	A 高校サッカー部の大会参加状況	62
2-11	フットサル大会の大会規定の変更	67
3-1	生徒たちの 1 ヶ月の出席率と出身中学校	90
3-2	生徒たちの 1 ヶ月の出席状況とその詳細	102
4-1	2016 年 3 月の生徒たちの出席状況と混在を前提とした活動	113
付表-1	A 高校サッカー部の生徒一覧	164
付表-2	年表	165

文献

- 青木邦男, 1989, 「高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因」, 『体育学研究』34(1): 89-100
- 新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ—進路選択のプロセスと下位文化の影響力」, 『教育社会学研究』71: 151-170
- 阿藤誠, 2017, 「少子化問題を考える—少子化の人口学的メカニズムを踏まえつつ」, 『医療と社会』27(1): 5-20
- Bourdieu, P., 1987, *Choses dites*, Editions de Minuit (石崎晴己訳, 1991, 『構造と実践』, 藤原書店)
- Cave, P., 2004, “Bukatsudo: The Educational Role of Japanese School Clubs”, *The Journal of Japanese Studies*, 30(2): 383-415
- Coakley, J., and White, A., 1999, “Making Decisions: How young people become involved and stay involved in sports” in Coakley, J., and Donnelly, P. (Eds.), *Inside Sports*, Routledge
- Csikszentmihalyi, M., 1975, *Beyond Boredom and Anxiety*, Jossey Bass (今村浩明訳, 2000, 『楽しみの社会学』, 新思索社)
- , 1997, *Finding Flow*, Basic Books
- 藤田紀昭, 1995, 「スポーツ集団の運営形態に関する研究—特に子どものスポーツチームの運営に注目して」, 『スポーツ社会学研究』3: 47-59
- 藤田武志, 2001, 「中学校部活動の機能に関する社会学的考察：東京都23区の事例を通して」, 『学校教育研究』16: 186-199
- 深見英一郎・岡澤祥訓, 2016, 「運動部活動における目標設定、勝利志向性、意見の反映度の実態並びにそれらが生徒の満足度に及ぼす影響」, 『体育学研究』61(2): 781-796
- Horne, J., and Manzenreiter, W., 2008, “Football, *komyuniti* and the Japanese ideological soccer apparatus”, *Soccer & Society*, 9(3): 359-376
- Huizinga, J., 1938, *Homo Ludens*, Tjeenk Willink (高橋英夫訳, 1973, 『ホモ・ルーデンス』, 中央公論新社)
- 今橋盛勝・藤田昌士・林量俣・武藤芳照編, 1987, 『スポーツ「部活」』, 草土文化
- 稲地裕昭・千駄忠至, 1992, 「中学生の運動部活動における退部に関する研究：退部因子の

- 抽出と退部予測尺度の作成」『体育学研究』37(1): 55-68
- Jackson, S, A., and Csikszentmihalyi, M., 1999, *Flow in Sports*, Human Kinetics (今村 浩明・川端雅人・張本文昭訳, 2005, 『スポーツを楽しむ—フロー理論からのアプローチ』, 世界思想社)
- 甲斐健人, 2000, 『高校部活の文化社会学的研究—「身体資本と社会移動」研究序説』, 南窓社
- 貝瀬智洋・横田匡俊, 2005, 「学校運動部活動の現在と未来—財団法人日本サッカー協会の取り組み」『月刊トレーニング・ジャーナル』27(1): 52-56
- 神谷拓, 2010, 「「部活動を理由とする公立中学校の選択」をめぐる議論過程と現状の問題点, 『学校教育学研究紀要』3: 19-36
- , 2015, 『運動部活動の教育学入門—歴史とのダイアログ』, 大修館書店
- , 2017, 「中澤篤史著『運動部活動の戦後と現在』における引用資料の曲解—仮説設定の手続きに注目して」, 『宮城教育大学紀要』52: 191-200
- 笠野英弘, 2012, 「スポーツ実施者からみた新たなスポーツ組織論とその分析視座」, 『体育学研究』57(1): 83-101
- Kawabata, M., and Mallett, C., 2011, “Flow experience in physical activity: Examination of the internal structure of flow from a process-related perspective”, *Motivation and Emotion*, 35(4): 393-402
- 河井大介, 2014, 「ソーシャルメディア・パラドクス—ソーシャルメディア利用は友人関係を抑制し精神的健康を悪化させるか」, 『社会情報学』3(1): 31-46
- 川本隆史, 2008, 『共生から』, 岩波書店
- 小谷克彦・中込四郎, 2003, 「運動部活動において指導者が遭遇する葛藤の特徴」, 『スポーツ心理学研究』30(1): 33-46
- , 2012, 「運動部活動における指導者の葛藤対処に伴う内的体験」, 『スポーツ心理学研究』39(1): 15-29
- 久保正秋, 2002, 「「教師」か、「コーチ」か: 「運動部活動の指導」と「コーチング」の問題点」, 『体育学研究』47(5): 485-490
- 栗山靖弘, 2017, 「強豪校野球部員のスポーツ推薦入試による進学先決定のメカニズム—部活を通じた進路形成と強豪校の存立基盤」, 『スポーツ社会学研究』, 25(1): 65-80
- 桑野裕文, 2012, 「運動部合同チームの公式大会への参加規定の現状」, 『九州情報大学研

- 究論集』 15: 99-105
- Larsen, J., Urry, J., and Axhausen, K., 2016, *Mobilities, Networks, Geographies*, Routledge
- Lave, J., and Wenger, E., 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press (佐伯胖訳, 1993, 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』, 産業図書)
- Locke, E. A., and Latham, G. P., 1985, “The Application of Goal Setting to Sports”, *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 7(3): 205-222
- Maenpaa, P., 2001, “Mobile Communication as a Way of Urban Life” in Warde, A., and Gronow, J. (Eds.), *Ordinary Consumption*, Routledge
- 舛本直文, 2001, 「学校運動部論—「部活」はどのような身体文化を再生産してきた文化装置なのか」, 杉本厚夫編, 『体育教育を学ぶ人のために』, 世界思想社
- 松尾哲矢, 2006, 「乱立するスポーツ系サークルの今」, 『現代スポーツ評論』 14: 94-101
- , 2015, 『アスリートを育てる〈場〉の社会学—民間クラブがスポーツを変えた』, 青弓社
- McDonald, B., and Hallinan, C., 2005, “Seishin Habitus”, *International Review for the Sociology of Sport*, 40(2): 187-200
- McDonald, B., and Kawai, K., 2017, “Punishing Coaching: *Bukatsudo* and the Normalisation of Coach Violence”, *Japan Forum*, 29(2): 196-217
- McDonald, B., and Sylvester, K., 2013, “Learning to Get Drunk: The Importance of Drinking in Japanese University Sports Clubs”, *International Review for the Sociology of Sport*, 49(3/4): 331-345
- 三木英正, 2013, 「現場からみた運動部活動—運動部のフィールドワーク」, 『現代スポーツ評論』 28: 84-92
- 宮田由紀夫, 2017, 「アメリカの大学スポーツ NCAA から何を学ぶか」, 『現代スポーツ評論』 36: 37-52
- 森川貞夫・遠藤節昭編, 1989, 『必携スポーツ部活動ハンドブック』, 大修館書店
- 永田秀隆, 2017, 「公共スポーツ施設の整備とマネジメント」, 柳沢和雄・清水紀宏, 中西純司編, 『よくわかるスポーツマネジメント』, ミネルヴァ書房
- Nakamura, J., and Csikszentmihalyi, M., 2002, “The Concept of Flow” in C. R. Snyder.,

- and S, J, Lopez. (Eds.), *Handbook of positive psychology*. Oxford University Press.
- 中塚義実, 2006, 「DUO リーグの実践—スポーツの生活化のために」, 菊幸一ら編, 『現代スポーツのパースペクティブ』, 大修館書店
- 中澤篤史, 2003, 「変化する学校運動部活動—都内公立中学サッカー部の外部指導員導入を事例にして」, 『月刊トレーニング・ジャーナル』 25(11): 70-74
- , 2014, 『運動部活動の戦後と現在—なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』, 青弓社
- 中澤篤史・西島央・矢野博之・熊谷信司, 2008, 「中学校部活動の指導・運営の現状と次期指導要領に向けた課題に関する教育社会学的研究—八都県の公立中学校とその教員への質問紙調査をもとに」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 48: 317-337
- 夏秋英房, 2003, 「愛知県半田市の総合型地域スポーツクラブの展開と運動部活動」, 『生涯学習研究』 1: 15-24
- Nielsen, S, F., Laila, O., and Thing, L, F., 2016, “Established and Outsider Relations among Students Involved in a Health Promotion Intervention in a Danish High School”, *Historical Social Research*, 41(3): 101-119
- Nielsen, S, F., and Thing, L, F., 2017, “Trying to fit in: Upper secondary school students’ negotiation processes between sports culture and youth culture”, *International Review for the Sociology of Sport*, 54(4): 445-458
- 日本サッカー協会, 2012a, 『サッカー指導教本 2012—JFA 公認 C 級コーチ』, 日本サッカー協会
- , 2012b, 『JFA キッズ (U-8/U-10) ハンドブック』, 日本サッカー協会
- , 2018, 『中学校部活動サッカー指導の手引き』, 日本サッカー協会
- 西島央, 2015, 「人口規模・学校規模からみる中学校教員の部活動指導の実態と学校経営上の課題—鹿児島・宮崎・長崎の教員対象質問紙調査から」, 『明治大学教職課程年報』 38: 145-155
- , 2017, 「社会問題化した「部活動のあり方」に音楽教育はどう臨むのか—中学生及び中学校教員対象調査データの分析から」, 『音楽教育実践ジャーナル』, 15(0), 26-36
- 西島央編, 2006, 『部活動—その現状とこれからのあり方』, 学事出版
- 西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央, 2001, 「移行期における中学校部活動の実態と課題に関する教育社会学的考察—全国 7 都県調査の分析をもとに」, 『東京大学大学院教

育学研究科紀要』41: 155-187

西島央・矢野博之・中澤篤史, 2007, 「中学校部活動の指導・運営に関する教育社会学的研究—東京都・静岡県・新潟県の運動部活動顧問教師への質問紙調査をもとに」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』47: 101-130

岡田知也・井上智司, 2006, 「中学校における小編成の吹奏楽部活動に関する研究—編曲の実践と検証」, 『香川大学教育実践総合研究』12: 47-58

岡田有司, 2009, 「部活動への参加が中学生への心理社会的適応に与える影響—部活動のタイプ・積極性に注目して」, 『教育心理学研究』57(4): 419-431

大竹弘和・上田幸夫, 2001, 「地域スポーツとの「融合」を通じた学校運動部活動の再構成」, 『日本体育大学紀要』30(2): 269-277

坂本拓弥, 2011, 「運動部活動における身体性—体罰の継続性に着目して」, 『体育・スポーツ哲学研究』33(2): 63-73

———, 2013, 「「体育教師らしさ」を担う身体文化の形成過程—体育教師の身体論序説」, 『体育学研究』, 58(2): 505-521

作野誠一, 2011, 「学校運動部のジレンマ—スポーツクラブとの共存は可能か」, 『現代スポーツ評論』24: 63-75

———, 2013, 「少子化時代と運動部活動」, 『現代スポーツ評論』28: 48-59

関春南, 1997, 『戦後日本のスポーツ政策—その構造と展開』, 大修館書店

関朋昭, 2015, 『スポーツと勝利至上主義—日本の学校スポーツのルール』, ナカニシヤ出版

———, 2017, 「なぜ吹奏楽部は文化部なのか—運動部と文化部のダイコトミーに着目して」, 『名寄市立大学紀要』11: 7-16

渋谷崇行・森恭, 2004, 「高校運動部員の心理的ストレス過程に関する検討」, 『体育学研究』49(6): 535-545

渋谷崇行・西田保・佐々木万丈, 2008, 「高校運動部員の部活動ストレスに対する認知的評価尺度の再構成」, 『体育学研究』53(1): 147-158

下竹亮志, 2015, 「規律訓練装置としての運動部活動における「生徒の自由」を再考する—A高校陸上部を事例にして」, 『体育学研究』60: 223-238

篠原岳司, 2018, 「北海道の高校再編に見る人口減少社会の学習権保障: 「地域キャンパス校」制度の検討を中心に」, 『公教育システム研究』17: 159-171

- 白松賢, 1997, 「高等学校における部活動の効果に関する研究—学校の経営戦略の一視角」, 『日本教育経営学会紀要』 39(0): 74-88
- 園田賢太郎, 2016, 「地方都市における県立高校定員割れの要因分析」, 『熊本大学政策研究』 7: 99-108
- Sugiyama, M., Khoo, S., and Hess, R., 2017, “Grassroots Football Development in Japan”, *The International Journal of the History of Sport*, 34: 1854-1871
- 高村梨江・高橋豪仁, 2006, 「学校運動部と地域スポーツクラブとの融合—ソレステレージャ奈良 2002 を事例にして」, 『奈良教育大学紀要』 55(1): 165-175
- 滝口隆司, 2011, 「拡大する子どもの「スポーツ市場」と格差社会による二極化」, 『現代スポーツ評論』 24: 38-49
- 種谷大輝, 2016, 「大学運動部における「補欠」のアンビバレンスに関する基礎的研究」, 『コミュニティ福祉学研究科紀要』 14: 49-60
- 富江英俊, 2008, 「中学校・高等学校の運動部活動における体罰」, 『埼玉学園大学紀要』 8: 221-227
- , 2009, 「体罰に関する意識と運動部活動経験との関連—体育教師志望者を対象とした調査」, 『日本女子体育大学紀要』 39: 69-77
- 友添秀則編, 2016, 『運動部活動の理論と実践』, 大修館書店
- 立木宏樹, 2014, 「少年期スポーツにおけるクラブと学校運動部の関係性に関する社会学的研究—J ユースクラブと高校サッカー部の意識形成の比較より」, 『九州保健福祉大学研究紀要』 15: 13-22
- 内田良, 2017, 『ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う』, 東洋館出版社
- 内海和雄, 1998, 『部活動改革—生徒主体への道』, 不昧堂出版
- 上野耕平, 2006, 「運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係」, 『体育学研究』 51(1): 49-60
- Urry, J., 2007, *Mobilities, Polity* (吉原直樹・伊藤嘉高訳, 2015, 『モビリティーズ—移動の社会学』, 作品社)
- 横田匡俊, 2002, 「運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動」, 『体育学研究』 47(5): 427-437
- , 2003, 「学校運動部活動の現在と未来—スポーツ参加動機にみる学校運動部活動の将来像」, 『月刊トレーニング・ジャーナル』, 25(10): 56-59

ウェブページ

中央教育審議会, 2000, 「少子化と教育について」, 文部科学省ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309769.htm)

北海道クラブユースサッカー連盟, 2019, 「加盟チーム」, 北海道クラブユースサッカー連盟ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, <http://www.hcy.jp/team/>)

北海道教育委員会, 2006, 「新たな高校教育に関する指針」, 北海道教育委員会ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, <http://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kki/akd/H18SISIN.htm>)

———, 2018, 「これからの高校づくりに関する指針」, 北海道教育委員会ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, <http://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kki/akd/sisin/H30sisin-full.pdf>)

———, 2019, 「道立学校に係る部活動の方針」, 北海道教育委員会ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, <http://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ksi/gakkouhoushin.pdf>)

北海道サッカー協会, 2012, 「第 24 回全道ユース (U-18) フットサル選手権大会開催要項」, 北海道サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.hfa-dream.or.jp/taikai_12/fs/1217y_u-18.pdf)

———, 2013, 「第 25 回全道ユース (U-18) フットサル選手権大会兼第 1 回全日本ユース (U-18) フットサル大会 (仮称) 北海道予選開催要項」, 北海道サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.hfa-dream.or.jp/taikai_13/fs/1335y_zendou18.pdf)

———, 2015, 「高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2015 プリンスリーグ北海道開催要項」, 北海道サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.hfa-dream.or.jp/taikai_15/2/1501y_prince.pdf)

———, 2016, 「高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2016 プリンスリーグ北海道開催要項」, 北海道サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.hfa-dream.or.jp/taikai_16/2/1601y_prince.pdf)

- , 2017, 「高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2017 プリンスリーグ北海道開催要項」, 北海道サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.hfa-dream.or.jp/taikai_17/2/1701y_prince.pdf)
- , 2018, 「高円宮杯 JFAU-18 サッカープリンスリーグ 2018 北海道開催要項」, 北海道サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.hfa-dream.or.jp/taikai_18/2/1801y_prince.pdf)
- International Football Association Board, 2017, “Laws of the Game 2017/18”, (2019 年 9 月 1 日取得, <https://www.theifab.com/home>, 日本サッカー協会訳, 2017, 「サッカー競技規則 2017/18」, 日本サッカー協会ホームページ, 2019 年 9 月 1 日取得, https://www.jfa.jp/documents/pdf/soccer/lawsofthegame_201718.pdf)
- 情報通信政策研究所, 2013, 「平成 24 年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」, 総務省ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2013/01_h24mediariyou_houkokusho.pdf)
- , 2018, 「平成 29 年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」, 総務省ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.soumu.go.jp/main_content/000564530.pdf)
- 厚生労働省, 2018, 「人口動態統計」, 厚生労働省ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei18/index.html>)
- , 2019, 「人口動態統計」, 厚生労働省ホームページ, (2019 年 12 月 25 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai19/dl/2019toukeihyou.pdf>)
- 文部科学省, 2018a, 「文部科学統計要覧 (平成 30 年版)」, 文部科学省ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1403130.htm)
- , 2018b, 「高等学校学科別生徒数・学校数」, 文部科学省ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/genjyo/021201.htm)
- , 2019, 「平成 29 年度「少子化・人口減少社会に対応した活力ある学校教育推進事業」取組モデル」, 文部科学省ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/09/18/1421)

107.pdf)

内閣府, 2019, 「少子化社会対策白書」, 内閣府ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01webhopen/html/b1_s1-1-2.html)

日本高等学校野球連盟, 2019a, 「部員数統計 (硬式)」, 日本高等学校野球連盟ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, http://www.jhbf.or.jp/data/statistical/index_koushiki.html)

———, 2019b, 「部員数統計 (軟式)」, 日本高等学校野球連盟ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, http://www.jhbf.or.jp/data/statistical/index_nanshiki.html)

日本サッカー協会, 2014, 「JFA グラスルーツ宣言」, 日本サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.jfa.jp/grass_roots/declaration/)

———, 2017, 「FIFA U-17 ワールドカップインド 2017 招集メンバー」, 日本サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, https://www.jfa.jp/national_team/u17_2017/u17_worldcup2017/member.html)

———, 2019a, 「サッカー選手登録数」, 日本サッカー協会ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, https://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/player.html)

———, 2019b, 「沿革・歴史」, 日本サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.jfa.jp/about_jfa/history/)

———, 2019c, 「JFA グラスルーツ推進・賛同パートナー制度」, 日本サッカー協会ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, http://www.jfa.jp/grass_roots/partner/report.html)

日本クラブユース連盟, 2016, 「JCY について」, 日本クラブユース連盟ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.jcy.jp/?page_id=4)

札幌社会人サッカー連盟, 2016a, 「札幌社会人サッカーリーグ新規参加に関するお知らせ」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/0_2016_1g_NewTeam.html)

———, 2016b, 「札幌社会人サッカーリーグ開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/1g_2016_SSL_yo.html)

札幌地区サッカー協会, 2015, 「高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2015 北海道札幌ブロックリーグ開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/1g_2015_U18_yo.html)

//www.sfa-net.jp/taikai/2/2015_18TakaSapBlock_yo.pdf)

———, 2016, 「高田宮杯 U-18 サッカーリーグ 2016 北海道札幌ブロックリーグ開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2016_18TakaSapBlock_yo.pdf)

———, 2017a, 「平成 29 年度札幌支部高等学校サッカー春季大会開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_Syunki_yoko.pdf)

———, 2017b, 「平成 29 年度札幌支部高等学校サッカー春季大会組合せ・日程」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_Syunki_kumi-1.pdf)

———, 2017c, 「第 70 回札幌支部高等学校サッカー選手権大会兼第 70 回北海道高等学校サッカー選手権大会札幌支部予選会開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_Koutairen_yoko.pdf)

———, 2017d, 「第 70 回札幌支部高等学校サッカー選手権大会兼第 70 回北海道高等学校サッカー選手権大会札幌支部予選会組合せ・日程」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_Koutairen_kumi.pdf)

———, 2017e, 「平成 29 年度第 96 回全国高校サッカー選手権大会札幌地区予選会開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_KouSensyuken_yoko.pdf)

———, 2017f, 「平成 29 年度第 96 回全国高校サッカー選手権大会札幌地区予選会組合せ・日程」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_KouSensyuken_kumi.pdf)

———, 2017h, 「平成 29 年度第 6 回札幌地区高校ユース (U-17) サッカー選手権大会開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_U-17Sensyuken_yoko.pdf)

———, 2017i, 「平成 29 年度第 6 回札幌地区高校ユース (U-17) サッカー選手権大会組合せ・日程」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_U-17Sensyuken_kumi.pdf)

- , 2017j, 「高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2017 北海道札幌ブロックリーグ (1 部リーグ) 開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_18TakaSapBlock_yo1.pdf)
- , 2017k, 「高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2017 北海道札幌ブロックリーグ (2 部リーグ) 開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_18TakaSapBlock_yo2.pdf)
- , 2017l, 「高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2017 北海道札幌ブロックリーグ (3 部リーグ) 開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2017_18TakaSapBlock_yo3.pdf)
- , 2017m, 「第 29 回全道ユース (U-18) フットサル選手権大会札幌地区予選兼第 5 回全日本ユース (U-18) フットサル大会札幌地区予選開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/futsal/2017_Zendo18FS_yosen_yoko.pdf)
- , 2017n, 「第 29 回全道ユース (U-18) フットサル選手権大会札幌地区予選兼第 5 回全日本ユース (U-18) フットサル大会札幌地区予選組合せ・日程」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/futsal/2018_U-18FS_kumi.pdf)
- , 2018a, 「第 71 回札幌支部高等学校サッカー選手権大会兼第 71 回北海道高等学校サッカー選手権大会札幌支部予選会組合せ・日程」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2018_Koutairen_kumi.pdf)
- , 2018b, 「高円宮杯 JFAU-18 サッカー2018 北海道ブロックリーグ札幌 (1 部) 開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2018_18TakaSapBlock_yo1.pdf)
- , 2018c, 「高円宮杯 JFAU-18 サッカー2018 北海道ブロックリーグ札幌 (2 部) 開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2018_18TakaSapBlock_yo2.pdf)
- , 2018d, 「高円宮杯 JFAU-18 サッカー2018 北海道ブロックリーグ札幌 (3 部) 開催要項」, 札幌地区サッカー協会ホームページ, (2019 年 9 月 1 日取得, http://www.sfa-net.jp/taikai/2/2018_18TakaSapBlock_yo3.pdf)

全国高等学校体育連盟, 2005, 「平成 17 年度加盟登録状況」, 全国高等学校体育連盟ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, <https://www.zen-koutairen.com/pdf/reg-17nen.pdf>)

———, 2018 「平成 30 年度加盟登録状況」, 全国高等学校体育連盟ホームページ, (2019 年 12 月 1 日取得, <https://www.zen-koutairen.com/pdf/reg-30nen.pdf>)

その他の資料

大会プログラム

札幌地区サッカー協会, 2017g, 『平成 29 年度第 6 回札幌地区高校ユース (U-17) サッカー選手権大会』

講演

Csikszentmihalyi, M., 2004, *Flow, the secret to happiness*, TED2004 (2019 年 12 月 1 日取得, https://www.ted.com/talks/mihaly_csikszentmihalyi_flow_the_secret_to_happiness)

初出一覧

- 魚住智広, 2017, 「小規模の運動部活動はいかにして存続するのか—生徒の分極化に注目して」, 『スポーツ社会学研究』 25(2): 55-69
- , 2018, 「運動部活動と対外試合への参加条件に関する社会学的分析—札幌地区の高校サッカー大会を事例に」, 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』 133: 1-22